

鎌倉上遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第201集



2012

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



か　ま　く　ら　か　み

鎌倉上遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第201集

平成24年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

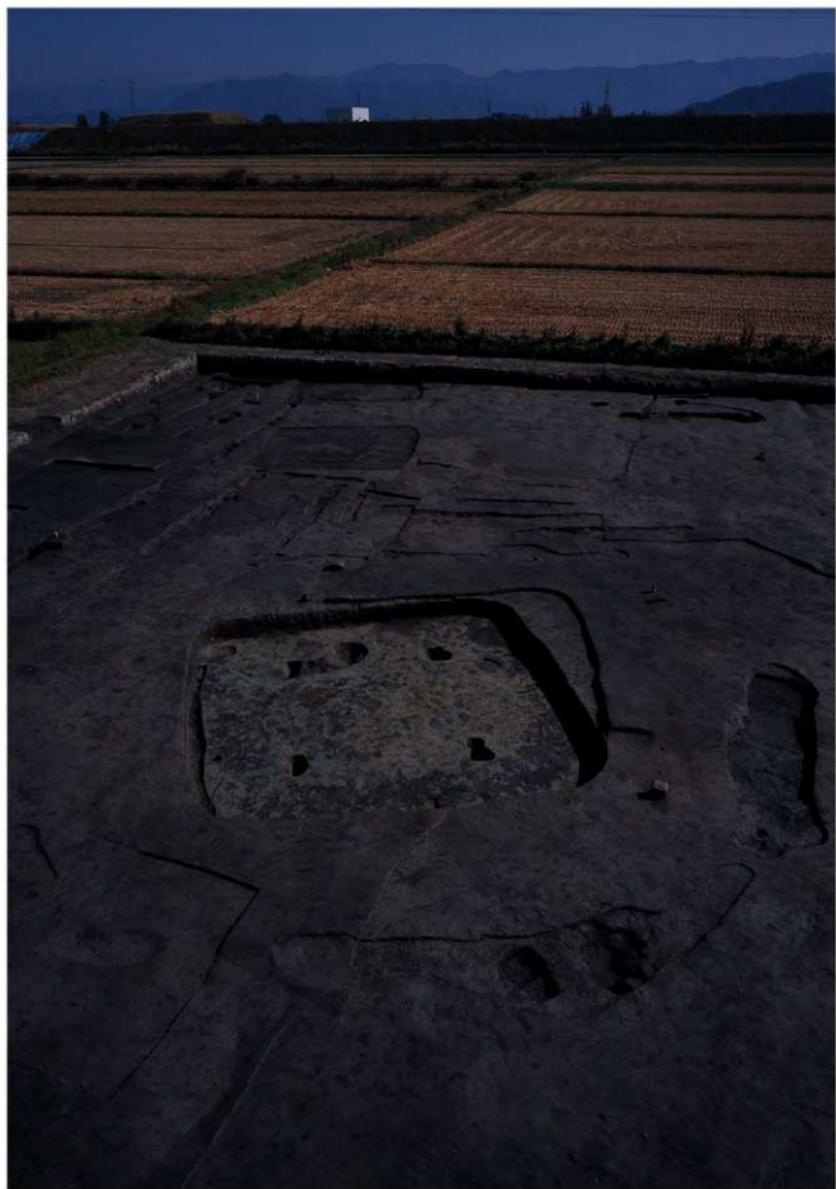




1区完掘状況全景（北から）



2区完掘状況全景（北から）



1区竪穴住居跡群全景（西から）



2区南側竪穴住居跡群（西から）



2区北側竪穴住居跡群（西から）



古墳時代前期の出土遺物



古墳時代中期の出土遺物

序

本書は、財團法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、鎌倉上遺跡の調査成果をまとめたものです。

鎌倉上遺跡は、山形県南部、置賜地方に位置する米沢市にあります。市には670か所を超える埋蔵文化財包蔵地が登録され、縄文時代から江戸時代にわたる各時代に地域の中心となるような遺跡が存在します。古墳時代は、県内でも特に古墳の分布が多く、古墳時代前期の前方後方墳である賀領塚古墳や、この地域の首長と推測される女性の人骨が発見された戸塚山古墳群などの注目される古墳が造営されています。中世では、長井氏・伊達氏の本拠として、江戸時代は上杉氏の城下町として栄えました。現在も、市内には歴史的な地名や名所が見られ、伝統を受け継ぎ、文化財を活用した整備が進められています。また、山形新幹線や高速道路の整備に伴い、県南の中核都市としての重要な役割を果たしています。

この度、山形県による一般国道287号米沢北バイパス道路改築事業（交付金・国道）に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、鎌倉上遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、古墳時代前期と中期の集落跡が確認され、前期の集落では竪穴住居跡、倉庫と考えられる掘立柱建物跡、畑の畝跡、捨場が検出されました。中期の集落では、複数の焼失住居が検出され、住居内からは使用されていた土師器や須恵器、建築部材が出土するなど、当時の生活を復元できる良好な資料を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成24年3月

財團法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 相馬周一郎

凡　例

- 1 本書は、一般国道 287 号米沢北バイパス道路改築事業（交付金・国道）に係る「鎌倉上遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県の委託により、財團法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、菅原哲文、山木巧が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、齊藤敏行、安部実、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図等に付す座標値は、平面直角座標系第 X 系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…堅穴住居跡	EL…カマド・炉跡	EP…住居内柱穴	ED…住居内周溝	EK…住居内土坑
SB…掘立柱建物跡	EB…建物跡柱穴	SK…土坑	SP…柱穴	SG…河川跡
SD…溝跡・畝状遺構	SX…性格不明遺構	RP…登録土器	RQ…登録石製品	RW…登録木製品
P…土器	S…石	W…木		
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図の配置は左から内面・外面の順に掲載した。
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基本土色帖」によった。
- 10 発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。(敬称略)

福島県会津坂下町教育文化振興班	吉田博行	阿部司
新潟県埋蔵文化財事業団	滝沢規朗	春日真実
新潟県村上市教育委員会	吉井雅勇	斎藤豊
米沢市教育委員会	手塚孝	菊地正信
東北芸術工科大学	北野博司	
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館	佐藤鐵雄	秦昭繁

- 11 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第 I 章	菅原哲文
第 II 章	山木巧
第 III 章 第 1 節	菅原哲文・山木巧
第 V 章 第 1 節	菅原哲文
第 2 節	山木巧

調査要項

遺跡名	鎌倉上遺跡	
遺跡番号	202-033	
所在地	山形県米沢市窪田町小瀬字鎌倉上	
調査委託者	山形県	
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受託期間	平成 21 年 7 月 10 日～平成 22 年 3 月 31 日 平成 22 年 5 月 6 日～平成 23 年 3 月 31 日 平成 23 年 5 月 20 日～平成 24 年 3 月 31 日	
現地調査	平成 21 年 7 月 21 日～11 月 13 日 平成 22 年 6 月 1 日～10 月 15 日	
調査担当者	平成 21 年度	調査課長 阿部明彦 課長補佐 伊藤邦弘 主任調査研究員 菅原哲文（調査主任） 調査員 山木巧
	平成 22 年度	調査課長 阿部明彦 課長補佐 伊藤邦弘 主任調査研究員 菅原哲文（調査主任） 調査員 山木巧
	平成 23 年度	整理課長 齊藤敏行 考古主幹 黒坂雅人 主任調査研究員 菅原哲文（調査主任） 調査員 山木巧
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課	
調査協力	米沢平野土地改良区 窪田コミュニティーセンター 米沢市教育委員会 山形県教育庁置賜教育事務所	
業務委託	基準点測量業 有限会社ジェックス 地形・造構測量業務（俯瞰撮影） 株式会社バスコ 理化学分析業務 株式会社加速器分析研究所 株式会社パレオ・ラボ 株式会社吉田生物研究所	
	遺物保存処理業務 株式会社吉田生物研究所	

発掘作業員	青木淳 大平昌一 齊藤功 神保好昭 平吹孝二 我妻清治	赤井正寿 大橋勝男 齊藤富男 須貝純一 藤倉真樹子 渡部惇	安達和弘 尾形貞一 坂野健二 佐藤武彦 星龍一 渡部信子	伊藤紹子 小形昇 佐藤忠明 鈴木ひろ美 丸山政義 我孫子修一	伊藤利信 川井富助 佐藤幸憲 鈴木幸憲 三浦弘 寺島利雄	岩崎清子 楠 正 佐藤利作 清水弘文 横山幸三郎 吉田敬	岩崎道雄 小浦俊英 清水弘文 長谷川洋 吉田敬 (五十音順)
整理作業員	安達久恵 庄司佳子	加藤慶則 白田光芳	関東美由樹 東海林正裕	佐藤広幸 中嶋美恵子	佐藤美恵子 萩生田裕樹子	柴田友恵 渡邊かおり	鳩田真奈美

(五十音順)

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 遺構と遺物	
1 古墳時代の遺構	9
2 古墳時代の遺物	17
3 中世・近世の遺構と遺物	26
4 その他の遺物	27
IV 理化学分析	
1 放射性炭素年代測定（1）	110
2 放射性炭素年代測定（2）	113
3 樹種同定	117
4 漆製品の塗膜構造調査	120
V 調査のまとめ	
1 古墳時代集落について	123
2 出土遺物の特色	124
報告書抄録	卷末

表

表 1 調査工程表	3	表 9 試料一覧・放射性炭素年代測定結果	110
表 2 遺跡地名表	7	表 10 历年較正結果	111
表 3 分布調査の出土遺物詳細表	77	表 11 放射性炭素年代測定分析試料一覧	113
表 4 古墳時代遺物観察表	104	表 12 历年較正年代結果	114
表 5 陶磁器・遺構外遺物観察表	108	表 13 樹種同定分析試料一覧	118
表 6 木製品観察表	109	表 14 調査資料詳細表	120
表 7 石製品・石器観察表	109	表 15 堅穴住居跡詳細表	128
表 8 金属製品観察表	109		

図 版

第 1 図 調査区概要図	3	第 7 図 2 区南・1 区北遺構配置図	31
第 2 図 地形分類図	5	第 8 図 1 区中央遺構配置図	32
第 3 図 遺跡位置図	6	第 9 図 1 区南遺構配置図	33
第 4 図 調査区全体図	28	第 10 図 調査区基本層序	34
第 5 図 2 区北遺構配置図	29	第 11 図 S T 20 穫穴住居跡・S X 19 性格不明遺構	35
第 6 図 2 区中央遺構配置図	30	第 12 図 S T 21 穫穴住居跡	36

第 13 図	S T 22 壺穴住居跡（1）	37	第 56 図	S T 22・101・102 壺穴住居跡・S D 34・35 溝跡	
第 14 図	S T 22 壺穴住居跡（2）	38		出土遺物	81
第 15 図	S T 22 壺穴住居跡（3）	39	第 57 図	S T 102・103 壺穴住居跡出土遺物	82
第 16 図	S T 100・101 壺穴住居跡	40	第 58 図	S T 103 壺穴住居跡出土遺物	83
第 17 図	S T 102 壺穴住居跡（1）	41	第 59 図	S T 103・104 壺穴住居跡出土遺物	84
第 18 図	S T 102 壺穴住居跡（2）	42	第 60 図	S T 104 壺穴住居跡出土遺物（1）	85
第 19 図	S T 102 壺穴住居跡（3）	43	第 61 図	S T 104 壺穴住居跡出土遺物（2）	86
第 20 図	S T 103 壺穴住居跡（1）	44	第 62 図	S T 105 壺穴住居跡出土遺物	87
第 21 図	S T 103 壺穴住居跡（2）	45	第 63 図	S T 105・106 壺穴住居跡出土遺物	88
第 22 図	S T 104 壺穴住居跡（1）	46	第 64 図	S T 106 壺穴住居跡出土遺物	89
第 23 図	S T 104 壺穴住居跡（2）	47	第 65 図	S T 106～108・118・125 壺穴住居跡出土遺物	90
第 24 図	S T 105 壺穴住居跡（1）	48	第 66 図	S D 14・27・40・167 溝跡・S B 79 挖立柱建物跡	
第 25 図	S T 105 壺穴住居跡（2）	49		出土遺物	91
第 26 図	S T 106 壺穴住居跡（1）	50	第 67 図	S D 172・173 溝跡・S G 1 河川跡・S X 19 性格不明	
第 27 図	S T 106 壺穴住居跡（2）	51		遺構出土遺物	92
第 28 図	S T 107 壺穴住居跡（1）	52	第 68 図	S X 50 拾場出土遺物（1）	93
第 29 図	S T 107 壺穴住居跡（2）	53	第 69 図	S X 50 拾場出土遺物（2）	94
第 30 図	S T 108 壺穴住居跡	54	第 70 図	S X 50 拾場出土遺物（3）	95
第 31 図	S T 118 壺穴住居跡	55	第 71 図	本製品（1）	96
第 32 図	S T 120 壺穴住居跡・S K 158・159 土坑	56	第 72 図	本製品（2）	97
第 33 図	S T 125 壺穴住居跡・S D 112～117 斧状遺構	57	第 73 図	本製品（3）	98
第 34 図	S B 2 挖立柱建物跡・S D 14 溝跡	58	第 74 図	本製品（4）・漆製品	99
第 35 図	S B 54 挖立柱建物跡・S D 40 溝跡	60	第 75 図	石製品（1）	100
第 36 図	S B 79 挖立柱建物跡・S D 65・66 斧状遺構	61	第 76 図	石製品（2）	101
第 37 図	S K 111・131・133・164・177 土坑	62	第 77 図	石製品（3）	102
第 38 図	1 区北側斂状遺構	63	第 78 図	S D 13・16 溝跡・遺構出土遺物	103
第 39 図	S D 56～62・70～72 斧状遺構	64	第 79 図	曆年較正年代グラフ（1）	112
第 40 図	S D 160・167・172・173 溝跡（1）	65	第 80 図	曆年較正年代グラフ（2）	115
第 41 図	S D 160・167・172・173 溝跡（2）	66	第 81 図	曆年較正年代グラフ（3）	116
第 42 図	S D 12・13・15・16 溝跡	67	第 82 図	分析木材顕微鏡写真（1）	118
第 43 図	S G 1 河川跡（1）	68	第 83 図	分析木材顕微鏡写真（2）	119
第 44 図	S G 1 河川跡（2）	69	第 84 図	堅拂模式図・塗膜分析顕微鏡写真（1）	121
第 45 図	S G 130 河川跡	70	第 85 図	塗膜分析顕微鏡写真（2）	122
第 46 図	S X 63・119 性格不明遺構	71	第 86 図	壺穴住居跡集成	127
第 47 図	S X 50 拾場出土遺物全図	72	第 87 図	壺穴住居跡カマド・規模一覧	128
第 48 図	S X 50 拾場遺物分布図（1）	73	第 88 図	遺物出土量分布図	129
第 49 図	S X 50 拾場遺物分布図（2）	74	第 89 図	古墳時代前期の出土土器集成（1）	130
第 50 図	S X 50 拾場遺物分布図（3）	75	第 90 図	古墳時代前期の出土土器集成（2）	131
第 51 図	S X 50 拾場土層断面・S X 49 集石	76	第 91 図	古墳時代中期の出土土器集成（1）	132
第 52 図	分布調査の出土遺物	77	第 92 図	古墳時代中期の出土土器集成（2）	133
第 53 図	古墳時代前期土器の器種分類	78	第 93 図	古墳時代中期の出土土器集成（3）	134
第 54 図	古墳時代中期土器の器種分類	79	第 94 図	時期別遺構配置図	135
第 55 図	S T 20・21・22 壺穴住居跡出土遺物	80			

写真図版

卷頭写真 1	1区完掘状況・2区完掘状況	写真図版 34	S D 160・167・172・173 溝跡（1）
卷頭写真 2	1区竪穴住居跡群全景	写真図版 35	S D 160・167・172・173 溝跡（2）
卷頭写真 3	2区南側竪穴住居跡群・2区北側竪穴住居跡群	写真図版 36	S D 160・167・172・173 上層出土遺物
卷頭写真 4	古墳時代前期の出土遺物・古墳時代中期の出土遺物	写真図版 37	S D 12・13・16 溝跡・竪穴建物
写真図版 1	調査区全体図・基本層序	写真図版 38	S G 1 河川跡（1）
写真図版 2	S T 20 竪穴住居跡	写真図版 39	S G 1 河川跡（2）
写真図版 3	S T 21 竪穴住居跡	写真図版 40	S G 130 河川跡
写真図版 4	S T 22 竪穴住居跡（1）	写真図版 41	S X 19 性格不明遺構
写真図版 5	S T 22 竪穴住居跡（2）	写真図版 42	S X 63・119・161 性格不明遺構
写真図版 6	S D 34・35 溝跡	写真図版 43	S X 49・50 掘場
写真図版 7	S T 100・101 竪穴住居跡	写真図版 44	S X 50 掘場
写真図版 8	S T 102 竪穴住居跡（1）	写真図版 45	竪穴住居跡出土遺物集合（1）
写真図版 9	S T 102 竪穴住居跡（2）	写真図版 46	竪穴住居跡出土遺物集合（2）
写真図版 10	S T 102 竪穴住居跡（3）	写真図版 47	S T 20・21 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 11	S T 103 竪穴住居跡（1）	写真図版 48	S T 22 竪穴住居跡・S D 34・35 溝跡出土遺物
写真図版 12	S T 103 竪穴住居跡（2）	写真図版 49	S T 101・102 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 13	S T 103 竪穴住居跡（3）	写真図版 50	S T 102・103 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 14	S T 104 竪穴住居跡（1）	写真図版 51	S T 103 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 15	S T 104 竪穴住居跡（2）	写真図版 52	S T 103・104 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 16	S T 104 竪穴住居跡（3）	写真図版 53	S T 104 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 17	S T 105 竪穴住居跡（1）	写真図版 54	S T 104 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 18	S T 105 竪穴住居跡（2）	写真図版 55	S T 105 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 19	S T 105 竪穴住居跡（3）	写真図版 56	S T 105 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 20	S T 106 竪穴住居跡（1）	写真図版 57	S T 106 竪穴住居跡出土遺物（1）
写真図版 21	S T 106 竪穴住居跡（2）	写真図版 58	S T 106 竪穴住居跡出土遺物（2）
写真図版 22	S T 107 竪穴住居跡（1）	写真図版 59	S T 107・108・118・125 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 23	S T 107 竪穴住居跡（2）	写真図版 60	S D 14・27・40 溝跡・S B 79 掘立柱建物跡・ S K 133・158 土坑出土遺物
写真図版 24	S T 108 竪穴住居跡	写真図版 61	S D 167・172・173 溝跡・S G 1 河川跡・S X 19 性格不明遺構出土遺物
写真図版 25	S T 118 竪穴住居跡	写真図版 62	S X 50 掘場出土遺物（1）
写真図版 26	S T 120・125 竪穴住居跡	写真図版 63	S X 50 掘場出土遺物（2）
写真図版 27	S B 2 掘立柱建物跡	写真図版 64	S X 50 掘場出土遺物（3）
写真図版 28	S D 14 溝跡	写真図版 65	S X 50 掘場出土遺物（4）・木製品（1）
写真図版 29	S B 54 掘立柱建物跡	写真図版 66	木製品（2）
写真図版 30	S B 79 掘立柱建物跡	写真図版 67	木製品（3）
写真図版 31	S K 111・133 土坑	写真図版 68	石製品・石器・S D 13・16 溝跡出土遺物
写真図版 32	S K 41・135・148～153 土坑		
写真図版 33	S K 158・159・164・177 土坑・S P 桂穴		

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

鎌倉上遺跡は、一般国道 287 号米沢北バイパス道路改築事業（交付金・国道）により、平成 20 年度に行われた山形県教育委員会による遺跡詳細分布調査で確認され、登録された遺跡である。平成 20 年 12 月 11・12 日に試掘調査を実施したところ、古墳時代前期を中心とする遺構・遺物が確認され、古墳時代の集落跡であることが明らかとなつた。その結果を基に関係機関との調整を図った結果、事業区内について記録保存を目的とした緊急発掘調査を行う運びとなつた。発掘調査は、財團法人山形県埋蔵文化財センターが県からの委託を受けて行つた。

2 調査の概要

A 発掘調査

第 1 次調査は、平成 21 年 7 月 21 日から開始した。調査区は、遺跡にかかる道路部分 7,000 m² が対象であり、南側を 1 区、北側を 2 区とした。第 1 次調査は、南側 3,500 m² について実施した。重機を用いて表土を除去し、面整理を行い、遺構検出を行つた。遺構は、精査・写真や平面・断面の記録作業を行い、委託業務による空中写真撮影を実施している（第 1 図）。

グリッド（地区割り）は、世界測地系をもとに平面直角座標系第 X 系：X = -227220.000, Y = -63400.000 を、原点 X = 0, Y = A とし（O - A）、南北軸（X 軸）は南から北へ、東西軸（Y 軸）は、西から東へ、5 m 毎に昇順でアルファベットと整数でグリッド番号を割り当てた（第 1 図）。遺構の登録番号は、第 1 次調査時には、1 ~ 81 まで、第 2 次調査が 100 ~ 210 とした。登録遺物番号は、第 1 次調査が 1 ~ 134、第 2 次調査が 200 ~ 405 である。

第 1 次調査では、中世の遺構と古墳時代の堅穴住居跡 3 棟を検出し、広範囲にわたる遺物包含層 S X 50 が確認された。このため、当初の調査期間では 1 区の調査を

終了するのが困難と判断し、事業側と協議した結果、当初 10 月 16 日を 11 月 13 日まで調査期間を延長し（延べ 115 日）、現地調査を実施した。

第 2 次調査は、平成 22 年 6 月 1 日から 10 月 15 日までの 137 日間で実施した。発掘調査面積は 3,500 m² である。古墳時代の堅穴住居跡 12 棟、河川跡などの遺構が検出され、当初予定よりも遺構と遺物の量が増加したが、常時排水作業や稼働日の調整により、予定した期間内で終了することができた。

B 遺跡の層序

基本層序を第 12 図に掲載する。1 区と 2 区では、堆積状況がやや異なっており、区別に基本層を設定した。

I 区の層序であるが、大別層で I ~ IV 層を設定した。I 層は、I a, I b 層に細分される。I a 層は黒褐色シルトの表土、I b 層は黒褐色～灰黃褐色シルトで、耕作の影響を受けている層である。II 層は、a・b・c・d に細分される。II a・II b は 1 区の東半部に認められ、II a 層はしまりや粘性の強い黒褐色シルト層、II b 層はより黒色が強く、古墳時代前期の土師器片を含む。II c・II d 層は、1 区西側に確認される層である。II c 層は、黒褐色の泥炭層、II d 層は黒褐色シルト層である。

III 層は、古墳時代前期の遺物を含む包含層である。1 区西壁を中心に分布する黒色シルトの III a 層、分布域が広い黒褐色粘質シルトの III b 層に細分される。

IV 層は、古墳時代の遺構検出面である。a・b に細分される。IV a 層は黄灰色粘質シルト、IV b 層は褐色粘質シルトや黄灰色シルトである。

2 区は、調査区北壁の断面を提示した。基本層は、I ~ III 層を設定している。I 層は表土であり、内容によって a~c 層に細分している。II 層は、黒色粘質シルトの a 層、褐灰色砂質シルトの b 層に細分される。概ね、1 区の II 層に対応すると考えられる。III 層は、黄灰色砂質シルトで、古墳時代の遺構検出面である。2 区の IV 層に対応する。

C 整理作業

整理作業は、平成 21 年 11 月 9 日から平成 22 年 3 月 31 日、平成 22 年 11 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日、平成 23 年 6 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日の期間で実施した。出土遺物は、洗浄作業後に注記を行った。注記は遺跡名「カマクラ上」、第 2 次調査遺物には「カマクラ上 2」、出土地点を明記し、現場で登録したものには登録番号を付した。

本製品は、洗浄後、少量の水を入れたポリエチレンチューブに遺跡名・出土地点を記したラベルと一緒に梱包した。その後、平成 22 年度と 23 年度に、大型品や特に脆弱な遺物は委託による高級アルコール法による保存処理を、小型品については糖アルコール含浸法による保存処理を施した。

修復作業は、土師器、須恵器、中世の陶磁器に分類した後、遺構ごとに接合を行い、周辺遺構やグリット出土遺物との接合を実施した。

抽出した土師器を中心とする遺物は実測図の作成を行い、拓本が必要なものは底部等の拓本を探った。遺物実測図は、デジタルトレースを行い、拓本と組み合わせて編集を行った。

遺構全体図は、各年度に業務委託を行った平面図とともに作成し、個別の遺構図は、委託平面図と手取りの断面図をデジタルトレースしたものを合成し作成した。

遺構写真は、現場で撮影したものから報告書に掲載するものを抽出した。遺物は、欠損箇所を補修した後に単体や集合の写真撮影を実施し、報告書に掲載する写真を選別した。

作成した遺構図・遺物図・遺物観察表・写真図版の編集を順次行いながら、併行して本文執筆を行った。業務委託による理化学分析は、放射性炭素年代測定、樹種同定分析を行い、結果を第 IV 章に掲載している。

D 資料比較検討・調査指導

資料比較検討および調査指導について述べる。

平成 22 年 3 月 10・11 日にかけて、鎌倉上遺跡出土の古墳時代前期に比定される土師器の検討を行った。比較する資料については、地理的な要因や遺物の特徴が近似することから、福島県の会津地域、北陸地方の新潟県の

同時期と目される遺物を対象とした。なお、資料を所蔵する福島県会津坂下町教育委員会、新潟県埋蔵文化財センターにて、鎌倉上遺跡の出土遺物を持参して、時期や技術系譜について比較・検討を行った。検討の結果、1 次遺物の大半が北陸地方の漆町編年の 8・9 群に比定されることが明らかとなった。また、北陸地方や東海地方の遺物と共通した特徴を持つ遺物が少量認められた。

平成 23 年 3 月 10 日には、鎌倉上遺跡で確認された建物跡について検討するため、新潟県村上市に所在する道端遺跡の調査資料と出土遺物を実見した。道端遺跡は、阿賀野川以北の拠点的な集落跡と考えられている。なかでも円形周溝状の遺構が伴う建物跡は、祭場の施設との見解がある。このような溝状遺構に区画される建物跡は、北陸地方で数例確認されており、「広溝式建物跡」として認識されている。鎌倉上遺跡においても、周囲に溝状遺構が見られる ST22 壁穴住居跡や、溝跡が伴う掘立柱建物跡がある。これらの溝状遺構が関連する建物跡について道端遺跡の円形周溝状遺構との比較を行った。その結果、掘立柱建物跡に隣接する溝跡から出土した遺物について、共通した土師器の器種組成がみられた。

3 月 17 日には、米沢市教育委員会が所蔵する大清水遺跡、二夕保 A 遺跡、上新田 a 遺跡出土の土師器を実見した。大清水遺跡と二夕保 A 遺跡は、当地域でも数少ない古墳時代前期に比定されている。市内に存在する古墳時代の集落跡の出土資料を検討することで、鎌倉上遺跡の主体となる時期や技術系譜について認識を深めた。

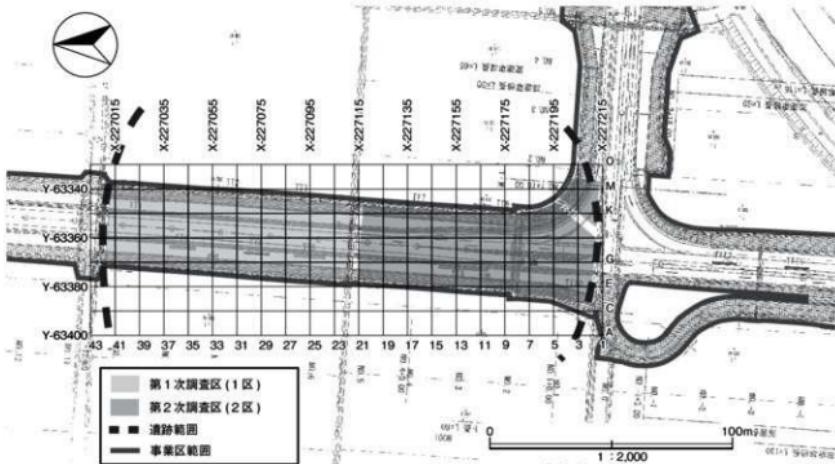
同年 9 月 27 日には、福島県会津坂下町教育委員会にて、所蔵されている中平遺跡の出土遺物の実見を行った。中平遺跡は、河川の氾濫によって短期間で埋没した古墳時代中期の集落跡である。壁穴住居跡や畝状遺構をはじめ、製鉄を行った鍛冶工房が良好な状態で確認されている。特に壁穴住居跡出土の一括資料は、古墳時代中期の遺物を検討する際の指標にもなっている。鎌倉上遺跡では、カマドを有する壁穴住居跡から古墳時代中期に属する土師器が多量に出土している。これらの出土土師器の比較を主体に検討を行った。その結果、出土した須恵器の併行時期などから、大半が古墳時代中期後半を主体とすることが明らかとなった。また、土師器の坏類においては、器形や大きさに多様な様相がみられることが両遺跡で把握された。

同年11月18日、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館の秦昭繁氏による、鎌倉上遺跡出土の石製品の石材と産地の検討を依頼した。その結果、菅玉・白玉は在地の緑色凝灰岩を使用している可能性が高いこと、紡錘車や石製模造品は、滑石や粘板岩を使用し、県外の石材を使用していることが明らかとなった。

同年10月17日に、東北芸術工科大学の北野博司准教授より、古墳時代の土器類・須恵器と、古墳時代の集落構成や遺構について調査指導をいただき、以下の御教示をいただいた。

外周に溝を巡らす堅穴系の建物は北陸に多く、沖積地への適応と考えられる。古墳時代前期の土師器では、直口壺、二重口錐壺、北陸北東部系能登壺が多い組成で、漆町福年の8・9群に相当する。須恵器の年代は5世紀後半から末に収まる。カマドは2個掛けが主体で、くびれが強い壺を含めて使い分けが明瞭でない壺も使用される（ST 105・106）。組成は、壺類は、2リットルサイズと小型の直置きに使用される2タイプと、大型の鉢、短頸壺状の鉢、壺（液体を注ぐための）、有蓋の短頸壺、須恵器模倣焼で構成される。

表1 調查工程表



第1図 調査区概要図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

鎌倉上遺跡が所在する米沢市は、山形県の最南端に位置する。市域は、東西 32.1 km、南北 28.2 km、面積 548.74 km²を測る。山地・火山地が 74.3%と構成の大半を占め、丘陵地 5.7%、台地・段丘 7.8%、低地が 12.2%となっている。東方は、豪士山・駒ヶ岳・栗子山といった奥羽山系の嶺々に限られ、磐梯朝日国立公園の一角落をなす吾妻の山塊が南を画している。東南に聳え立つ山々は福島県との境界ともなっている。米沢市はこれらの山々と西部に広がる低平な玉庭丘陵と笠野山地に囲まれた典型的な盆地である。

したがって、気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型である。年間降水量は少ないが、冬期は降雪量が多く、市街地でも積雪量が 1 m を越える豪雪地帯である。また、内陸盆地の中では平均風速が最も強い地域である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する鬼面川・松川（最上川）・墨屋川・天王川（梓川）の河川は、氾濫原を形成しつつ北流している。これら諸河川は、やがて合流し最上川となって県内を貫き、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。米沢盆地の南端から中央は、各々の河川によって形成された緩やかな扇状地で、低地の占める割合が高い。土地利用状況は、農地 10.5%・森林 77.1%・宅地 3%・その他 9.4%である。低地・台地は、藩政時代またはそれ以前から高密度の農業的利用が進められており、沖積低地や緩傾斜の扇状地面・台地は主に桑園や畠地として利用されている。

鎌倉上遺跡は、市街地から北へ約 3 km 離れた窪田地区に位置する。西側を流れる鬼面川と、東側の最上川に挟まれた谷底平野部の平地に立地し、地形分類上は鬼面川右岸の後背湿地にあたる。表層地質は未固結の礫および砂、泥からなる冲積堆積物である。耕作土壤は礫質灰色低地土に属し、非固結堆積岩を母材としている。堆積様式は水積で、30 ~ 60 cm 以内に礫層または砂層が含まれる。土質は一般的に粘質または砂礫質である。

2 歴史的環境

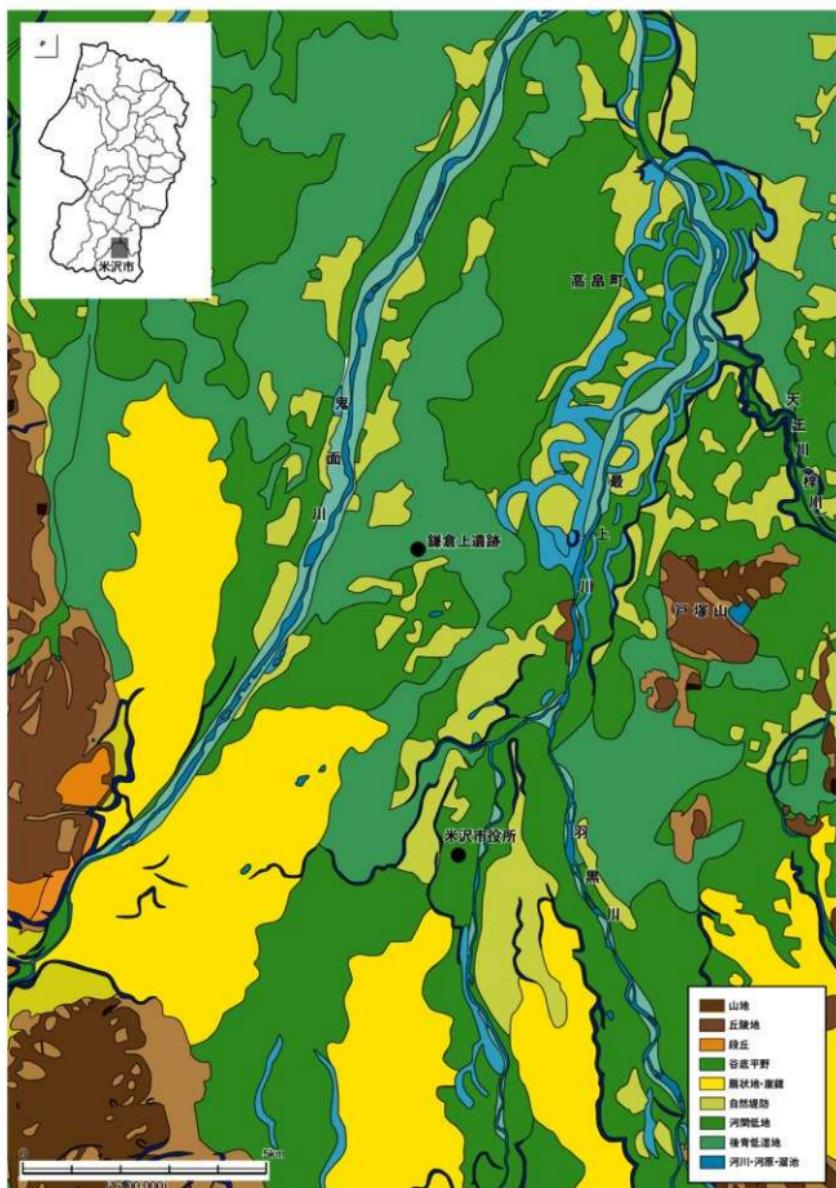
米沢市では、様々な事業に関して数多くの遺跡の調査が実施されている。その結果、現在までに 670 箇所を超える遺跡の存在が確認されている。

縄文時代の遺跡としては、国指定の史跡「一ノ坂遺跡」があげられる。市街地の西方約 2 km の笠野山西端の微高地に位置し、縄文時代前期初頭の遺跡とされている。なかでも国内最長の大型竪穴住居跡は、石器製作を専業とする石器工房跡と推定されている。

弥生時代の遺跡は極めて少なく、市内で確認されるのは 4ヶ所である。清水北 C 遺跡は、弥生時代の集団墓地跡と考えられる遺跡で、当時の墓制の一つである再葬墓が大小合わせて 25 基確認された。出土した土器には初痕が認められ、当地域で稲作が行われていたことを証明するものである。

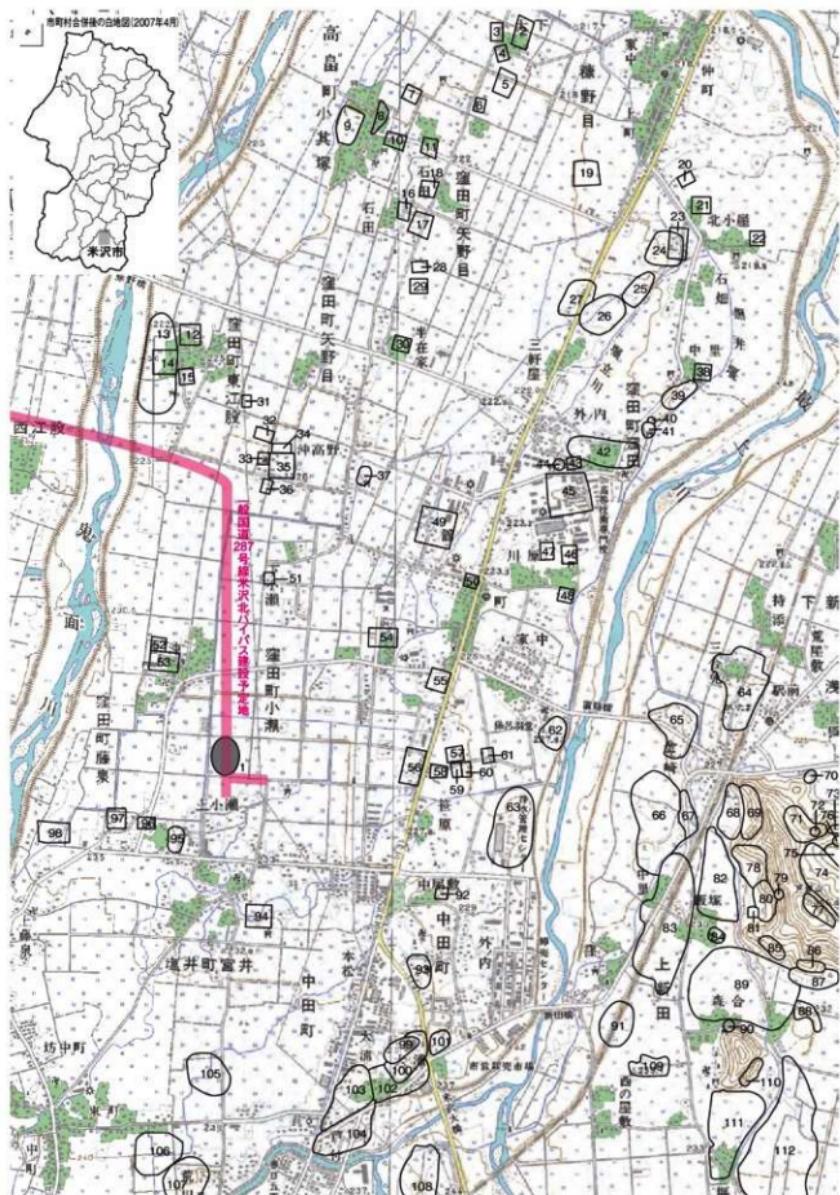
古墳時代に入ると、丘陵や山麓に大小の古墳が多く築造される。万世町の比丘尼平遺跡では、県内初出となる古墳時代前期の方形周溝墓が 3 基、近接する八幡堂遺跡においても 5 基確認されている。市街地の北東部にある戸塚山古墳群は、山頂や山麓を中心に総数 193 基の古墳が群集する古墳群である。前方後円墳や帆立貝式古墳、横穴式石室墳が各所に存在し、5 世紀後半から 8 世紀の末期古墳まで長期間にわたり造営されている。特に戸塚山 137 号墳（帆立式古墳）の箱式石棺からは、この地域の首長と推測される女性の人骨が発見されている。置賜地方では、全国的に古墳築造が終焉した 8 世紀代にも牛森古墳などの横穴式石室墳が築造され続けている。

奈良・平安時代の遺跡は、平野部の主要な河川に沿って広範囲に分布する。置賜地方は「日本書紀」持統天皇 3 (689) 年に「陸奥國優嗜曇郡」の記述が史料的に初見である。和銅 5 (712) 年には、「陸奥國の記述の中に「置賜郡」の名が見られ、陸奥國から分割して「出羽國置賜郡」になったと解釈されている。大浦遺跡では、具注唇の漆紙文書や布目瓦が出土し、8 世紀後半から 9 世紀前半まで機能していた置賜郡衙跡と推定される。また、並



第2図 地形分類図

II 遺跡の位置と環境



*国土地理院発行2万5千分の1地形図「米沢北部」を使用

表2 遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	雞食上	古墳（前期・中期）	集落跡	57	唐入田屋敷	中世	城館跡
2	大下屋敷北船	中世	城館跡	58	蓬田船野船	中世	城館跡
3	大下屋敷西船	中世	城館跡	59	谷施在家館	中世	城館跡
4	大下屋敷	中世	城館跡	60	下ノ在家館	中世	城館跡
5	沖の船	中世	城館跡	61	川原屋敷	中世	城館跡
6	外屋敷	中世	城館跡	62	保内羽彌	奈良・平安	集落跡
7	蓬田船野田船	中世	城館跡	63	豆原	弥生・奈良・平安	官衙・敷布地
8	道季屋	縄文	包蔵地	64	三号目船	中世	城館跡
9	小其家船	中世	城館跡	65	金ヶ崎 a	奈良・平安	集落跡
10	丹後船	中世	城館跡	66	中川雁舎	中世	城館跡
11	矢野日西原敷	中世	城館跡	67	中原里	奈良・平安	集落跡
12	四部石門堆塁	中世	城館跡	68	戸塚山山堆塁圓 a	縄文（前期）	集落跡
13	東江駿	縄文（晚期）	集落跡	69	金ヶ崎古墳群	古墳（終末期）	群集墳
14	古之井廻	中世	城館跡	70	小山塚	中世	塚
15	北ノ原敷	中世	城館跡	71	蓬田西塚群	中世	塚群
16	高野原廻迴船	中世	城館跡	72	戸塚山古墳	古墳（前期）	古墳
17	兵衛屋敷	中世	城館跡	73	戸塚山船	中世	城館跡
18	石田屋敷	中世	城館跡	74	蓬田東塚群	中世	塚群
19	沖の前船	中世	城館跡	75	蓬入堤	中世	寺院
20	内方船	中世	城館跡	76	上野山堤入 a 古墳群	古墳（終末期）	古墳
21	北小原屋敷	古墳	城館跡	77	山頂古墳群	古墳（中期・後期）	群集墳
22	高在家館	中世	城館跡	78	越家古墳群	古墳（終末期）	群集墳
23	田中屋敷	中世	城館跡	79	戸塚山石切跡	古墳（終末期）	石切場
24	飯塚船	中世	城館跡	80	飯塚南古墳群	古墳（終末期）	群集墳
25	堂ノ下	奈良・平安	集落跡	81	森合舎	中世	城館跡
26	南原	古墳・奈良・平安	集落跡	82	戸塚山幼稚園 b	縄文・奈良～中世	集落跡
27	船附敷	中世	城館跡	83	上舟田 b	奈良・平安・中世	集落跡
28	矢野日吉原敷	中世	城館跡	84	飯田舎	中世	城館跡
29	入生屋敷	中世	城館跡	85	森合西古墳群	古墳（終末期）	群集墳
30	半在家館	中世	城館跡	86	森合古古墳群	古墳（終末期）	群集墳
31	東江駿の内船	中世	城館跡	87	森合	縄文・奈良	集落跡
32	大隈廻船	中世	城館跡	88	栗原山古墳群	古墳（終末期）	群集墳
33	早稲田廻船	中世	城館跡	89	上野山 c	奈良・平安・中世	集落跡
34	芦戸尻船	中世	城館跡	90	森合土壇	中世	土壇
35	柳井船	中世	城館跡	91	上新田 a	縄文・古墳（後期）	集落跡・祭祀跡
36	矢野日田船	中世	城館跡	92	中船敷	中世	城館跡
37	賓須古墳	古墳（前期）	古墳	93	野ノ内船	中世	城館跡
38	中里屋敷	中世	城館跡	94	尾野中里敷	中世	城館跡
39	中里	中世	集落跡	95	大西	古墳・平安・中世	古墳・集落跡
40	蓬田古墳	古墳（後期）	古墳	96	糸之崎下船	中世	城館跡
41	外ノ内塚群	中世	土壇	97	渡北船	中世	城館跡
42	外ノ内	縄文（中期・後期）	集落跡	98	天神前中船	中世	城館跡
43	蓬田下前田船	中世	城館跡	99	大浦 d	中世	集落跡・城館跡
44	八幡塚古墳	古墳（中期）	古墳	100	大浦船	中世	城館跡
45	蓬田船	中世	城館跡	101	大浦船ノ内船	中世	城館跡
46	川原屋敷	中世	城館跡	102	大浦 e	奈良・平安・中世	官衙・集落跡・城館跡
47	小余船	中世	城館跡	103	大浦 b	奈良・中世	官衙・集落跡・城館跡
48	御行屋敷	中世	城館跡	104	大浦 a	縄文（中期）・奈良・平安	官衙・集落跡
49	蓬田船	中世	城館跡	105	西ノ内田下	奈良・平安	集落跡
50	蓬田船野弟船	中世	城館跡	106	上町	縄文（晚期）	集落跡
51	立解敷	中世	城館跡	107	荒川 2	縄文・奈良・平安・中世	城館跡・集落跡
52	蓬垂船	中世	城館跡	108	八幡橋 a	縄文・中世	集落跡
53	田中屋敷	中世	城館跡	109	西の屋敷	奈良・平安・中世	集落跡
54	蓬田新船	中世	城館跡	110	荒木神社古墳群	古墳（終末期）	群集墳
55	唐解敷	中世	城館跡	111	熊野横	奈良・平安・中世	集落跡
56	蓬田元屋敷	中世	城館跡	112	禦場	奈良・平安・中世	集落跡

原遺跡は木簡・墨書き土器や円面鏡の出土から古代置賜七郷の一つ「広瀬郷」との見解もある。11世紀摂関政治の最盛期には、米沢は成島荘として摂関家の莊園となっている。

中世に入ると、鎌倉期の武将大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、暦仁元（1238）年、米沢に居城を構えたと伝えられる。大江氏は長井氏を称し、八代約200年に及ぶ支配を受けたが、天授6（1380）年に伊達宗遠の侵攻によって長井氏は置賜を追われ、置賜は伊達領となった。以後置賜支配の中心は高畠であったが、15代伊達晴宗が当主となり米沢に入部後、その中心が移った。支配は輝宗・政宗と続いたが、天正19（1591）年に豊臣秀吉により政宗が岩出山へ移封となり、210年間にわたる伊達氏の治世は終わりを告げる。1590年の奥州仕置において米沢は蒲生氏の支配下に置かれ、農村は文禄3（1594）年検地によって年貢の村請制のもとに共同体として編成され、武家の支配する近世領知制社会の基礎とされた。このとき、村名と村域が画定し、現在は大字名として存続している。1598年、上杉氏が120万石の大名として会津に移封され、米沢は家老直江兼続の治めるところとなる。1601年閑ヶ原の敗戦で上杉氏は本拠を会津から米沢に移し、ここに米沢藩30万石が成立した。米沢藩政の基礎確立は重臣直江兼続に負うところが大きい。この時期、積極的な新田開発が行われ、寛永15・16（1638・39）年の総検地では実高約51万石を記録したとある。ところが、寛文4（1664）年、表高15万石に減封。それでも家臣の召し放ちは知取行で約1割、全体でも約2割に止まり、領知高の割に多数の家臣團を擁し続け、藩財政や家臣の生活の窮屈化に拍車がかかった。明和4（1767）年、恒常的な財政難に苦しむ米沢藩に、日向高鍋藩主秋月種美の二男が9代藩主として迎え入れられた。上杉鷹山である。鷹山による改革により、殖産興業・農村復興・借用金の完済がなされた。そして、戊辰戦争では仙台藩とともに奥羽越列藩同盟の

盟主として新政府と対立し、のち降伏。明治4（1871）年の廢藩置県にともない置賜県となり、明治9年には山形県に合併、明治22年（1889）年市制が施行され現在にいたっている。

鎌倉上遺跡の主体である古墳時代の遺跡は、市内で約40遺跡を数える。特に本遺跡が所在する崖田地区では、最上川と鬼面川によって形成された自然堤防上に墳墓などが多く存在する。

同地区内の寶領塚古墳は、墳長約70m規模と推定される東北地方でも最大級の前方後方墳であり、川西町天神森古墳、南陽市福森古墳と共に4世紀後半に属する県内最古の大型古墳である。八幡塚古墳や崖田古墳は、古墳時代中期に属する円墳である。墳丘を巡る周溝からは、同時期の遺物が多く出土している。北小屋屋敷遺跡と大西遺跡では、円形・方形状の周溝跡が數基まとまって認められている。これらは古墳時代前期に見られる方形周溝墓が、在地化して古墳時代中期にまで後続した「周溝墓」との見解もある。

一方で、これらの古墳の基盤となるべき集落跡に関しては調査例が少なく、集落全体を把握できるものは限られる。特に古墳時代前期の集落跡は極めて少なく、万世町にある大清水遺跡・二夕侯A遺跡の2か所を数えるのみである。大清水遺跡の堅穴住居跡は、住居周辺に数珠状に連続して土坑状構造が認められ、住居に伴う外周施設として機能していたと考えられている。米沢市と高畠町の境界に所在する南原遺跡は、古墳時代中期を主体とする集落跡である。弧状を呈する河川跡の両側には、堅穴住居跡が33棟確認されており、同時期の集落形成の様相を把握し得るものである。また住居内出土の一括出土遺物は、同時期の土器組成を検討するにあたって指標となる資料である。近接する中里遺跡についても、古墳時代中期から後期の堅穴住居跡が10棟以上確認されており、出土遺物の検討から福島県会津地方との類似性が指摘されている。

参考文献

- 郷土出版社 2001 「国説 置賜の歴史」
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1994 「南原遺跡・堂ノ下遺跡・飯塚館跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第2集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2000 「中里遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第75集
- 米沢市 1991 「米沢市史 原始・古代・中世編・近世編I」
- 米沢市教育委員会 1998 「米沢遺跡地図」 米沢市埋蔵文化財調査報告書第60集
- 山形県 1985 「土地分類基本調査 米沢・鶴 国土調査」

III 遺構と遺物

I 古墳時代の遺構

第4～9図に調査区の遺構配置図を示す。

主体を占める古墳時代の遺構は、古墳時代前期と中期に属する遺構に分けられる。古墳時代前期に所属する遺構は、調査区1区と2区南半域、古墳時代中期の遺構は2区北半域に分布する。以下遺構毎に詳細を述べる。

A 穴住居跡

検出された竪穴住居跡は15棟を数える。古墳時代前期の住居跡が6棟、カマドを有する古墳時代中期の住居跡が7棟、不明2棟である。

S T 20 竪穴住居跡（第11図、写真2）

1区北東隅の19-Kグリッドに位置し、住居跡の東半域が調査区外となる。周辺に存在する畝状遺構を切って構築される住居跡である。検出された住居跡は、上面部が削平を受けており、床面が僅かに確認されるのみである。西壁を基にした主軸方向はN-10°-Wを示す。（平面形）住居隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形と推測される。規模は、南北385m、東西は検出長280mを測る。（堆積土）覆土は、黒褐色と灰色を基調とするシルト質土で15cm程の層厚である。4層は床面全体にみられる貼床である。（壁面）壁高は10～15cmを測り、壁面が外傾して立ち上がる。（床面）ほぼ平坦で、貼床が確認される。（柱穴）未検出。（炉跡）住居中央部に広がる炭化物層の直下に、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。（出土遺物）住居床面から、土師器の高杯、直口壺、甕が出土する（1～4）。（時期）出土遺物や住居形態から古墳時代前期後半（4世紀後半）の住居跡と考えられる。

S T 21 竪穴住居跡（第12図、写真3）

1区北側の東寄り19-Jグリッドに位置し、周辺に存在する畝状遺構を切って構築される住居である。西壁を基にした主軸方向はN-10°-Wを示す。（平面形）四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形を呈する。規模は、南北350m、東西320m、床面積が約112m²を測る。（堆積土）覆土は黒褐色質土を基調とし、地山を塊状に含む4層が

住居の貼床にあたる。（壁面）壁高は10～15cmを測り、壁面が外傾して立ち上がる。（床面）貼床が5cm程の層厚で、床面全体に見られる。（柱穴）未検出。（炉跡）住居内中央の西寄りに広がる炭化物層の直下に、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。（出土遺物）住居北西隅に集中してみられる。土師器の器台、二重口縁壺、甕、小型甕が出土する（5～11）。（時期）出土遺物や住居形態から古墳時代前期後半（4世紀後半）の住居跡と考えられる。

S T 22 竪穴住居跡（第13～15図、写真4～6）

1区北側の中央18・19-Hグリッドに位置し、主軸方向はN-21°-Wを示す。（平面形）四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形を呈する。規模は、南北495m、東西480m、床面積が約23.8m²を測る。（堆積土）覆土は、オリーブ黒色と黒褐色を基調する2層に区別され、30cm程度の層厚を測る。炭化物層の4層では、多量の遺物と共に炭化した木材片が確認される。これらは住居構築材の一部と考えられ、本住居跡が焼失住居であることが把握される。6層は、地山質土を塊状に含む貼床にあたる。（壁面）壁高は25～35cmを測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。（壁溝）北東隅の一部を除き、壁溝が認められる。（床面）貼床が10cm程の層厚で、床面全体に見られる。（柱穴）住居跡の四隅を結ぶ対角線上には、柱穴E P 44～47の4基が位置する。柱穴間の柱心距離は、北西隅E P 44から右回りで2.40m、2.00m、2.44m、2.20mとなり、柱穴の抜き取り痕から径15～20cm程の柱材が推測される。E P 47底面では、長石が1点確認される。（炉跡）住居中央に広がる炭化物層の直下には、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。周囲には煮炊きに使用した土師器甕や、台杯甕の脚台、被熱した面がある礫石がみられる。（外周溝）溝状遺構S D 34～36は、本住居壁面から外側へ約1.00～1.40mの間隔に位置し、溝幅50～95cm、検出面からの深さは10～20cm程度を測る。削平により、北側の溝部分は確認されないが、住居を円状に囲む形を呈し、南側が開口すると推測される。これらの溝状

造構は、本住居に付随する一連の外周溝として把握される可能性がある。(出土遺物) 住居床面から、土師器の小型丸底鉢、直口壺、甕が出土する(12~18)。また、住居の構築材と思われる炭化材も確認された。(時期) 住居形態や出土遺物から古墳時代前期後半(4世紀後半)の住居跡と考えられる。

S T 100 穫穴住居跡(第16図、写真7)

2区北東隅の41-Lグリッドに位置し、住居跡の北東域が調査区域外となる。検出された住居跡の南西域は、耕作等の削平や搅乱で遺存状況が悪い。西壁を基にした主軸方向はN-23°-Wを示す。(平面形) 規模は不明であるが、方形を呈すると推測される。検出長で南北380m、東西250mを測る。(堆積土) 覆土は、黒色砂質シルトで、約7~15cmの層厚を測る。(壁面) 壁高は15cm程を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(壁溝) 床面からの深さは5cm程度で、住居跡西・南壁に部分的にみられる。(床面) ほぼ平坦で、住居内の縁辺部を中心に、黒褐色砂質シルトの貼床が確認される。(住居内造構) 柱穴やカマド等は未検出である。(出土遺物) 土師器の小片が少量出土したのみで、全体の器形が明らかな遺物は認められない。(時期) 住居跡の遺存状態や出土遺物が少量であるため、時期については不明である。

S T 101 穫穴住居跡(第16図、写真7)

2区北側の39-Lグリッドに位置し、住居跡の東域が調査区域外となる。検出された住居跡の西壁では、住居の西壁と床面が確認される。西壁を基にした主軸方向はN-20°-Wを示す。(平面形) 平面形、規模は不明であるが、住居全体の形状から隅丸方形を呈すると推測される。南北4.00m、東西は検出長180mを測る。(堆積土) 暗灰黄色のシルト質土で、20cm程度の層厚を測る。(壁面) 壁高は15cm程度を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) ほぼ平坦であり、硬化した面や貼床は認められない。(住居内造構) 柱穴やカマド、壁溝は未検出である。住居内西側には、南北に長い楕円形を呈するE K 136が確認される。規模は、長径130m、短径35cm、床面からの深さは25cm前後を測る。性格については、不明である。(出土遺物) 住居床面から、土師器の鉢、甕が出土する(25~27)。(時期) 出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半~6世紀初)の住居跡と考えられる。

S T 102 穫穴住居跡(第17~19図、写真8~10)

2区北側の東寄り38-Lグリッドに位置する。住居跡の南西隅がS K 128土坑に切られる重複関係にある。主軸方向はE-8°-Sを示す。(平面形) 四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形を呈する。規模は、南北3.65m、東西3.70m、床面積が約13.5m²である。(堆積土) 覆土は、黒褐色を基調する粘質土で、35cm程度の層厚を測る。4~6層の床面直上層では、遺物と共に炭化した木材片が確認される。(壁面) 壁高は約20~30cmを測り、壁面が外傾して立ち上がる。(壁溝) 未検出。(床面) 貼床は認めらず、地山面が床面と考えられる。床面直上には、部分的にワラ状の炭化物が確認される。(柱穴) 住居内中央には、主柱穴2基が確認される(E P 203・204)。東西軸に並び、柱心距離は1.60m、床面下50~75cmを掘り込んで据えている。柱材は、径20cmの外皮が残る丸太材である。詳細はIV章理化学分析の年代測定・樹種同定の項を参照されたい。また、住居跡の外周には、支柱と考えられる柱穴が複数認められる(第19図)。(カマド) 東壁の南寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ1.00m、幅20cmを測り、緩やかな傾斜で立ち上がる。煙道部の付け根はトンネル状を呈する。燃焼部の最大幅は40cm程で、カマドの支脚である礫石が確認される。袖部は、地山面を利用した造りで良好に残存し、焚口には径40cm程の炭化物の広がりが見られる。(貯蔵穴) 南壁中央でE K 139が確認される。径1.00mの楕円形を呈し、床面からの深さは30cm程である。底面出土のR W 280板状木製品は、貯蔵穴の上蓋と考えられる。(出土遺物) 住居床面から、土師器の壺、鉢、甕が出土する(28~39)。(時期) 出土遺物や住居形態から古墳時代中期(5世紀末~6世紀初)の住居跡と考えられる。

S T 103 穫穴住居跡(第20~21図、写真11~13)

2区北側の東寄り36-37-Kグリッドに位置する。住居跡西側に位置するS D 126溝跡に切られる重複関係がある。主軸方向はN-5°-Wを示す。(平面形) 若干東西に長い隅丸方形を呈する。規模は、各中央で南北5.10m、東西5.45m、床面積が約27.8m²である。(堆積土) 1~3層は自然堆積層である。4~6層を中心で遺物が出土する。(壁面) 壁高は20cm程度を測り、壁面が垂直に近い角度で壁が立ち上がる。(床面) 貼床は認められず、

地山面を床面としたと考えられる。(柱穴) 住居跡の四隅を結ぶ対角線上に、柱穴 E P 205 ~ 208 の4基が位置する。各柱穴間の柱心距離は、北西側 E P 205 から右回りで 2.60 m、2.65 m、2.50 m、2.55 m を測る。各柱穴の下部には、径 20 cm 程の外皮が残る丸太材が認められる。掘り方は確認されなかった。詳細はIV章の理化学分析の年代測定・樹種同定の項を参照されたい。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁中央に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ 95 cm、幅 30 cm を測る。燃焼部の最大幅は 40 cm 程で、煮炊きに使用した土師器壺や瓶と共に、カマドの支脚石が確認された。袖部は、地山面を利用した造りであるが、遺存状態はあまり良好ではない。(貯藏穴) カマドの西脇には、貯藏穴 E K 156 が確認される。長径 85 cm、短径 65 cm 程の楕円形を呈し、床面からの深さは 40 cm である。上面や覆土中には、幅 5 cm の板材が貯藏穴の長軸方向に並んで出土する。これらは貯藏穴の上蓋であったと考えられる。(出土遺物) 住居床面から、土師器の壺、瓶、鉢、壺、壺が出土する(40 ~ 69)。また、住居南側や北西隅に構築材と思われる炭化材も多く認められた。(時期) 出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半~6世紀初)の住居跡と考えられる。

S T 104 積穴住居跡(第 22・23 図、写真 14 ~ 16)

2 区北側の中央 38・39 - I グリッドに位置する。主軸方向は E -32° - S を示す。(平面形) 若干南北に長い隅丸方形となる。規模は、各中央で南北 5.30 m、東西 5.15 m、床面積は約 27.3 m² である。(堆積土) 住居壁際に 20 cm 程度の層厚が残存するのみで、堆積状況は不明である。(壁面) 壁高は 15 ~ 20 cm を測り、壁面が外傾して立ち上がる。(床面) 中央部を除く四方の壁際には、地山質土を塊状に含む貼床がみられる。住居内の南側で検出した溝 E D 155 は、間仕切り溝と推測される。(柱穴) 住居跡の四隅を結ぶ対角線上に、柱穴 E P 168 ~ 171 の4基が位置する。柱穴の柱心距離は、南東側 E P 171 から右回りで 2.30 m、2.50 m、2.50 m、2.35 m を測る。各柱穴に柱材が認められるが、腐食が激しく判然としない。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ 1.60 m、幅 30 cm を測り、緩やかな傾斜で立ち上がる。燃焼部の最大幅は 40 cm 程で、煮炊きに使用した土師器壺やカマ

ドの支脚である長石が確認される。袖部は灰白色の粘質土で造り出され、礫石と一部土師器の壺片を用いて袖端部を構成している。(貯藏穴) 南壁中央には、貯藏穴 E K 154 が確認される。長径 95 cm、短径 70 cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 50 cm 程である。(集石) 南西隅の床面には、10 cm 大の長楕円形の躰が計 18 個確認される。1 区包含層でも同様の集石が確認されており、形状や出土状況から「福物用石錘」と推測される。また、住居西側の床面では、径約 10 cm の扁平石がまとまって確認される(R Q 319 ~ 321)。台石に用いられたと思われる。(出土遺物) カマドを中心には多くの遺物が多くみられる。須恵器の壺、土師器の壺、鉢、甌、壺、福物石が出土する(70 ~ 94・267 ~ 284)。(時期) 出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半~6世紀初)の住居跡と考えられる。

S T 105 積穴住居跡(第 24・25 図、写真 17 ~ 19)

2 区北側の東寄り 36・37 - I グリッドに位置する。西辺で測った主軸方向は N -12° - E を示す。(平面形) 若干東西に長い隅丸方形を呈する。規模は、南北 5.20 m、東西 5.40 m、床面積は約 28.6 m² である。住居の床面や覆土中に炭化材や炭化物層が広範囲に分布する。焼失住居と考えられる。(堆積土) 上部は削平されて、下層の黒褐色砂質シルトを中心とする覆土のみが残存する。(壁面) 壁高は 20 cm 程度を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 貼床は認められず、地山面を床面としたと考えられる。(柱穴) 住居跡の四隅を結ぶ対角線上に、柱穴 E P 183 ~ 186 の4基が位置する。各柱穴間の柱心距離は、北西側 E P 183 から右回りで 2.70 m、2.70 m、2.65 m、2.45 m を測る。柱穴 E P 185 には、径 10 cm 程の外皮が残る丸太材が認められる。詳細はIV章の理化学分析の年代測定・樹種同定の項を参照されたい。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁の中央に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ 1.20 m、幅 25 ~ 30 cm を測り、緩やかな傾斜で立ち上がる。燃焼部の最大幅は 30 cm 程で、煮炊きに使用した土師器壺や瓶と共に、カマドの支脚石が確認された。袖部は、ぶい黄橙色シルトを貼って構築される。(貯藏穴) 南壁の中央には、貯藏穴が 2 基が確認される。E K 157 は長径 1.25 m、短径 1.00 m 前後の楕円形を呈し、床面からの深さは 30 cm である。E K 166 は、径 65 cm の円形を呈し、床面からの深さは 15 cm である。

(出土遺物) 住居南東隅の床面には、住居廃絶時に廻棄された、須恵器の壺身、土師器の壺、鉢、壺、瓶、甕が出土する(95~121)。E K 157 覆土からは、滑石製の紡錘車(紡輪)が出土する(308)。(時期) 出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半~6世紀初)の住居跡と考えられる。

S T 106 穫穴住居跡 (第26・27図、写真20・21)

2区北側の東寄り34・35-Iグリッドに位置する。西辺で測った主軸方向はE-8°-Sを示す。(平面形)若干東西に長い隅丸方形を呈する。規模は、各中央で南北3.45m、東西3.95m、床面積は約13.6m²である。(堆積土) 1~4層は後世の自然堆積層、5・6層は住居廃絶直後に堆積した層と考えられる。7層は黒色シルトの炭化物を多く含む層で、遺物がまとまって出土する。(壁面) 壁高は50cm程度を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 貼床は認められず、地山面を床面としたと考えられる。(柱穴) 洪水が多く、検出できなかつた。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は地面をトンネル状に掘り込み、長さ75cm、幅20cmを測り、煙道の奥壁で急に立ち上がる。燃焼部の最大幅は70cm程度、カマドの支脚である長石が確認された。燃焼部内には、完形の土師器壺が出土した(125)。袖部は地山を削り出して形成している。(貯藏穴) カマドの南脇では、E K 193が検出される。長径1.20m、短径75cm程の楕円形を呈し、床面からの深さは10cm程度である。覆土中から土師器の壺や鉢類が一括出土している。(出土遺物) カマド、貯藏穴を中心に集中して認められる。土師器の壺、鉢、壺、甕、瓶、甕が出土する(123~146)。(時期) 住居跡の形態や出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半~6世紀初)の住居跡と考えられる。

S T 107 穫穴住居跡 (第28・29図、写真22・23)

2区南側の中央24-Jグリッドに位置する。住居跡の北壁は、S G 130河川跡により若干切られている。主軸方向はN-7°-Eを示す。(平面形) 若干南北に長い隅丸方を呈する。規模は、各中央で南北5.55m、東西5.05m、床面積は約28m²を測る。(堆積土) 覆土は20cm程度の層厚で、堆積状況は不明である。(壁面) 壁高は10~20cmを測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(壁溝) 未検出。(床面) 貼床は、住居内の

外周に、5cm程度の層厚で認められる。住居内南側の溝状を呈するE D 182は、間仕切り溝と考えられる。(柱穴) 主柱穴であるE P 178~181の4基が確認される。住居跡の四隅を結ぶ対角線上に位置し、柱穴間の柱心距離は、北西側の柱穴E P 178から右回りで2.60m、2.80m、2.70m、2.75mを測る。柱穴の抜き取り痕から径約20cmの柱材が推測される。(炉跡) 住居中央の北寄りに広がる炭化物層の直下には、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。(貯藏穴) 住居東側には、長径80cmを測る楕円形を呈するE K 192が確認される。(出土遺物) 土師器の甕、壺が出土する(147~148)。(時期) 出土遺物や住居形態から古墳時代前期後半(4世紀後半)の住居跡と考えられる。

S T 108 穫穴住居跡 (第30図、写真24)

2区南側の東壁23-Mグリッドに位置し、住居跡の東域が調査区域外となる。検出された住居跡の西域は、西壁と北西・南西隅の床面のみである。西辺で測った主軸方向はN-6°-Wを示す。(平面形) 平面形・規模は不明瞭であるが、住居全体の形状から隅丸方形を呈すると推測される。西壁で南北5.85m、東西検出長3.15mを測る。(堆積土) 覆土は、黒褐色を基調とするシルト質土で、25cm程度の層厚を測る。3層は地山質土を塊状に含む貼床にある。(壁面) 壁高は20cmを測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(壁溝) 西壁と南西隅の一部で、幅15cm程の壁溝E D 174が認められる。(床面) 貼床は10cm程の層厚で、検出された床面全体に見られる。(柱穴) 住居跡の北西・南西側にあたる主柱穴E P 175・176が確認される。柱穴間の柱心距離は2.85mを測り、床面から45cm程度を掘り込んでいる。東域にも同様に柱穴が位置し、住居の主柱穴は4基であったと推測される。(炉跡) 未検出。(出土遺物) 住居底面から、土師器の小型丸底鉢が出土する(149)。(時期) 出土遺物から古墳時代前期後半(4世紀後半)の住居跡と考えられる。

S T 118 穫穴住居跡 (第31図、写真25)

2区中央の西寄り35-Iグリッドに位置する。住居跡の中央を通るS D 122溝跡に切られる重複関係がある。北辺で測った主軸方向はE-7°-Sを示す。(平面形) 若干東西に長い方形を呈し、四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形となる。規模は、各中央で南北3.20m、東西3.70m、床面積は約118m²である。(堆積土) 上層は

黒色シルトを基調とした自然堆積層、下層は黄灰色砂質層となる。(壁面) 壁高は5~25cm程度を測り、壁面が僅かに外傾して立ち上がる。(床面) 概ね床面全体に黄灰砂質シルトが入る貼床が認められる。(柱穴) 住居跡の南東隅に柱穴E P 190が確認されるが、住居の柱穴にはならない。(壁溝) 未検出。(炉跡) 住居中央には、被熱で床面が焼土化した地床炉の痕跡が認められる。(住居内遺構) 住居内北側には、E K 189が確認される。長軸1.90m、短軸55cm程の長楕円形を呈し、床面からの深さは15cm程度である。覆土中には、多量の炭化材が確認される。(出土遺物) 住居床面から、土師器の壺、鉢、甕が出土する(150~152)。(時期) 住居の形態や出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半~6世紀初)の住居跡と考えられる。

S T 120 穫穴住居跡(第32図、写真26)

2区北側の東壁36-Lグリッドに位置し、住居跡の東域が調査区境外となる。検出された住居跡西城には、壁溝と考えられるコの字状の溝と、柱穴が4基が認められる。主軸方向はN-8°-Wを示す。(平面形) 平面形、規模共に判然としないが、壁溝の配置から方形形状を呈すると推測される。規模については、壁溝の配置から南北4.30m、東西2.20m以上を測ると考えられる。(堆積土) 壁溝の覆土のみ認められ、床面からの深さは10cm程度である。(壁面) 未検出。(床面) 削平により未検出。(柱穴) 住居西側には、南北軸に並ぶ柱穴が4基が確認される(E P 144~147)。(出土遺物) 壁溝の覆土から土師器小片が少量出土する。(時期) 住居跡の遺存状態や出土遺物が少量であるため、時期については不明である。

S T 125 穫穴住居跡(第33図、写真26)

2区南東隅の22-Kグリッドに位置し、住居跡の南域が調査区境外となる。周辺の畝状道構を切って住居が構築され、西壁を基にした主軸方向はN-7°-Wを示す。(平面形) 全体の形状や住居隅部が僅かに丸みを持つ形から、隅丸方形を呈すると推測される。規模は、東西3.50m、南北検出長2.40mを測る。(堆積土) 覆土は、黒褐色を基調とするシルト質土で、10cm程度の層厚を測る。4層は、地山質土を塊状に含む貼床にあたる。(壁面) 壁高は10cm程度で、壁面がやや外傾して立ち上がる。(床面) ほぼ平坦で、貼床が床面全体に見られる。(住居内遺構) 柱穴や壁溝は未検出である。(炉跡) 住居中央

には、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。(出土遺物) 住居床面から、土師器の高杯、甕が出土する(153~154)。(時期) 住居の形態や出土遺物から古墳時代前期後半(4世紀後半)の住居跡と考えられる。

B 挖立柱建物跡

S B 2 挖立柱建物跡(第34図、写真28)

1区北側の16-Jグリッドに位置する。(構造) 東西2間、南北2間の側柱建物で、西辺で測った主軸方向はN-25°-Wを示す。南東には出入口と推定されるS D 11を有する。(規模) 東西4.80m、南北4.60mを測り、面積は約21.8m²となる。柱心距離は、北西辺のE B 3-E B 4間から右回りに2.35m~2.50m、2.35m~1.50m~0.80m、2.35m~2.40m、2.10m~2.35mとなる。(柱穴) 一辺40~45cmの隅丸方形を呈し、道構検出面からの深さは30~45cmを測る。E B 4-6-10には径20cm前後の柱痕が認められる。(出土遺物) 柱穴E B 8から土師器片1点が出土する。建物跡の北側には、古墳時代の土師器甕や二重口縁甕が出土するS D 14溝跡が近接しており、本建物跡に付随する外周溝施設の可能性も考えられる。(時期) 出土遺物が僅少のため不明確だが、周辺の建物跡と同じ古墳時代前期後半(4世紀後半)と推測される。

S B 54 挖立柱建物跡(第35図、写真29)

1区北西の東壁K-17-18グリッドに位置する。検出されたのは、建物の西辺にある柱穴列であり、大半が調査区外の東側に位置すると推測される。主軸方向は、N-20°-Wを示す。(構造) 南北4.40m、各柱間の距離は2.20mである。(柱穴) 径40~50cm程の柱穴で、道構検出面からの深さは50cm程を測る。建物跡の西隣には、赤彩された土師器甕などが出土したS D 40溝跡が位置し、本建物跡に付随する外周溝施設の可能性も考えられる。

S B 79 挖立柱建物跡(第36図、写真30)

1区中央の西壁17-18-Gグリッドに位置する。検出されたのは、建物の東辺にある柱穴列で、建物の大半は調査区外の西側に位置すると推測される。主軸方向は、N-5°-Wを示す。(構造) 南北3.60mを測り、南東隅の柱穴E B 77からE B 78まで1.85m~1.75mとなる。(柱穴) 径30~40cm程の円形を基調とし、検

出面からの深さは 20 cm 程度である。本建物跡と近接して E D 64 溝跡が確認される。溝跡は「コ」の字状を呈し、S B 79 建物跡を囲むように配置している。本建物跡に付随する外周溝施設の可能性も考えられるが、建物を構成する柱穴が溝跡を切る重複関係を持つため、同時期に並存した可能性は低い。(出土遺物) 柱穴上面と溝跡から土師器の壺が出土する(160・161)。(時期) 出土遺物から古墳時代前期後半(4世紀後半)と推測される。

C 土坑・柱穴

S K 111 土坑(第37図、写真31)

2区南側の東寄り 22・23-J グリッドに位置する。(平面形) 南北に長い楕円形を呈し、長辺 1.95 m、短辺 1.00 m、検出面からの深さは 20 cm 程度である。(覆土) 黒褐色土を基調とするシルト質土で、炭化物や焼土粒が多く混入する。(断面形) 北側の一部に段を有するが、壁面が緩やかに立ち上がる箱形状を呈する。底面は凸凹が激しく、中央に径 40 cm 程度の焼土塊の広がりが認められる。(出土遺物) 土師器の細片が多量出土する。S T 107 壁穴住居跡から出土した遺物との接合資料が認められることから、住居跡に伴う廐棄土坑の性格も考えられる。

S K 131 土坑(第37図)

2区北側の西寄り 38-K グリッドに位置する。(平面形) 不整形を呈し、西端を擾乱で切られる。長辺 1.80 m、短辺 1.15 m、検出面からの深さは 20 cm 程度である。(覆土) 有機物を含むシルト質土が 20 cm 程度の層厚で堆積する。(断面形) 壁面が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈する。(出土遺物) 覆土から土師器細片が出土する。(時期) 出土遺物が僅少のため、不明である。

S K 133 土坑(第37図、写真31)

2区北側の 38-K グリッドに位置する。(平面形) 不整形楕円形を呈し、長辺 3.65 m、短辺 2.00 m、検出面からの深さは 70 cm 程度である。(覆土) 黒褐色と灰黄褐色を基調とする粘質土が堆積し、覆土から炭化した栗の種子が 1 点出土する(329)。(断面形) 壁面が急に立ち上る逆台形状を呈する。底面には段があり、南側が一段低くなる。(出土遺物) 底面から土師器の壺と木製品が出土する(162・247～256)。木製品は、板状・棒状のものが多く出土する。なかでも 256 は、削物の木製容器で、容器の下部に足が付くものである。樹種などの詳細は、

IV章の記述を参照されたい。(時期) 出土遺物から時期は、古墳時代中期(5世紀後半～6世紀初)と考えられる。近接する壁穴住居群に付隨する貯藏穴の性格が考えられる。

S K 135 土坑(第19図、写真32)

2区北側の東寄り 38-L グリッドに位置する。(平面形) 径 70 cm の円形を呈し、検出面からの深さは 15 cm 程度である。(覆土) 地山質土が混入する粘質土が大半を占め、5 cm 程度の層厚で堆積する。(断面形) 壁面が急に立ち上がる方形形状を呈する。(時期) 遺物の出土は無く、時期については不明である。

S K 148～153 土坑(第19図、写真32)

2区北側の 38-L グリッド付近に位置し、S T 102 住居跡に近接して確認される。(平面形) いずれも長辺 40 cm～70 cm 前後、短辺 30 cm 程度の長楕円形を呈する。検出面からの深さは 20～40 cm 程度である。(断面形) 壁面が急に立ち上がる U 字形を呈する。(覆土) 地山質土が塊状に混入する黒褐色の粘質土が大半を占める。(時期) 遺物の出土は無く、時期については不明である。

S K 158 土坑(第32図、写真33)

2区北側の 35-L グリッドに位置する。造構の東半域が調査区外となるため、平面形や規模は不明である。(堆積土) 覆土は、黒色のシルト質土が大半を占める。(断面形) 壁面が急に立ち上がる方形形状を呈する。(時期) 遺物の出土は無く、時期については不明である。(出土遺物) 覆土から器形が明らかな土師器の鉢が 1 点出土する(163)。(時期) 出土遺物から、古墳時代中期(5世紀後半～6世紀初)と考えられる。

S K 159 土坑(第32図、写真33)

2区北側の 35-L グリッドに位置する。(平面形) 不整形を呈し、規模については、長辺 1.40 m、短辺 1.20 m、検出面からの深さは 20 cm 程度を測る。(堆積土) 覆土は、黒色のシルト質土が大半を占める。(断面形) 壁面が急に立ち上がる方形形状を呈する。(出土遺物) 造構上面から土師器の細片が少量出土するのみである。(時期) 出土遺物が僅少のため、不明である。

S K 164 土坑(第32図、写真33)

2区北側の 38-J グリッドに位置する。(平面形) 長辺 1.25 m、短辺 40 cm の長方形を呈する。検出面からの深さは 10 cm 程度である。(堆積土) 覆土は、黒色の粘質

土が大半を占める。(断面形) 壁面が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈する。(時期) 遺物の出土は無く、時期については不明である。

S K 177 土坑 (第37図、写真33)

2区南側の23-Jグリッドに位置する。(平面形) 長径50cm、短径45cmの長楕円形を呈する。検出面からの深さは10cm程度である。(堆積土) 覆土は、黄色粘質土が大半を占める。(断面形) 壁面が急に立ち上がるU字状を呈する。(時期) 遺物の出土は無く、時期については不明である。

S P 134 柱穴 (第25図、写真33)

2区北側の37-Iグリッドに位置する。(平面形) 長径60cm、短径40cmの長楕円形を呈する。検出面からの深さは40cm程度である。(堆積土) 覆土は、黒色のシルト質土が大半を占める。(断面形) 壁面が急に立ち上がるU字状を呈する。(時期) 遺物の出土は無く、時期については不明である。

D 竊状遺構

竊状小溝 (第33・38・39図、写真37)

竊穴住居跡等の周辺で多く検出される。数条のまとまりを持ち、同一方向へ平行に延びる浅い溝状を呈する。遺構の形態や配置から、竊の間にあたる溝状部分と考えられる。(規模) 長さ4m前後に収まるものと、10m以上を測るもの認められる。幅は20~30cm前後、深さは15cm程度で、底面には掘削による凹凸が認められる。(覆土) 黒褐色土を基調とし、炭化物の混入が多く見られる。これらの炭化物層や遺構上面で土師器の細片が出土する。(時期) 住居跡との重複関係から、古墳時代前期と考えられるものがある。

E 溝 跡

S D 167・172・173 溝跡 (第40・41図、写真34)

S D 167溝跡は、2区33-J・K、34-Jグリッド、S D 172溝跡は、34・35-J・35-Kグリッド、S D 173溝跡は35-K・Lグリッドで検出された。これら3条の溝跡は、「コ」字状の配置をとり、内側には直径約20~45cmのピット群が認められるが、建物を構成するような規則的配置は認められなかった。ただし、この3条の溝跡内や溝跡に囲われる内部には廃棄された

遺物が大量に出土している。S D 167・172溝跡は、S D 160溝跡に切られる重複関係を持つ。それぞれ主軸方向はS D 167溝跡が、N・78°・W、S D 172溝跡が、N・16°・E、S D 173溝跡が、N・88.5°・Wを示す。(規模・断面形・覆土) S D 167溝跡は、検出長約4.65m、幅0.5~1.00m、深さ13cm程、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は上層が黒褐色砂質シルト、下層が黄灰砂質シルトである。S D 172溝跡は、検出長約5.90m、幅0.6~1.15m、深さ12cm程、断面形は、浅い皿状を呈する。覆土は黒褐色砂質シルトである。S D 173溝跡は、検出長約6.50m、幅0.3~1.15m、深さ20cm程、断面形は、壁面が緩やかに立ち上がるU字状を呈する。覆土は暗灰黄色砂質シルト~黒色シルトを主体とする。(出土遺物) 溝の覆土や底面から遺物が大量に出土する。須恵器の有蓋高壺蓋、壺蓋、短頸壺、土師器の壺、鉢、壺、甕が出土する(165~174)。また、漆製品の堅櫛(266)や、白玉、石製模造品、砥石(305・307・309・310)等が溝跡の周辺で出土している。(時期) これらの溝跡は、出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半~6世紀初)とを考えられる。

F 河 川 跡

1区南東端と2区中央で、2条の河川跡が検出された。前者は南西から北東方向へ、後者は東西軸に延びており、双方とも両端が調査区外へ延びていると推測される。以下個別に説明を行う。

S G 1 河川跡 (第43・44図、写真38・39)

1区中央の南壁面から南東端7-Lグリッド付近にかけて、南西から北東へ直線的に延びる。(規模) 検出長約35m、川幅4.20~3.20mで、南北方向へ向かって少しずつ狭くなる。川底までの深さは、最深部で90cm余を測る。底面は窪地状に落ち込む箇所があるので、全体的に小さな起伏がつく程度である。(覆土) 堆積層は大別層で8層を確認した。F 1層、F 2層は黒褐色の泥炭層で、河川跡の全面にわたって堆積している。F 2はやや泥炭の分解が進んでいる。F 3層は、黒色シルト層で分解した泥炭を含む。F 4層は黒色~黒褐色シルトを主体とする層で、灰黄褐色シルトブロックを含む。部分的に、砂質が強い4b層に分かれ。F 5層は、砂を主体とする層である。F 6層は、黒褐色の泥炭や、泥炭を含

む粘質シルト層である。(出土遺物) 木製品として、F 5層から 259、F 3 a層から 260が、F 2層から 257が出土した。土師器では、F 5層から 175、F 3 b層から 177が出土した。(時期) 放射性炭素年代測定では、F 6層出土種子の年代が5世紀～6世紀前半、F 2層出土の木製品が6世紀末～7世紀代という結果が得られている。これより、河川は古墳時代中期頃には機能していたが、以後堆積が進み、7世紀頃にはほぼ埋没したことが想定される。

S G 130 河川跡 (第45図、写真40)

2区中央部の東壁面から西壁面に位置する。西北西～東南東方向に伸びる。検出面はII層上面である。(規模) 検出長約33m、川幅約20～27mを測る。調査では、幅70cm前後のトレントを3本と、調査区西壁沿いにサブトレントを設定し、堆積層と遺物の有無を確認した。川底までの深さは、最も深い地点で検出面から90cm程度である。(覆土) 5b～9層が河川の堆積層となる。5b・6層は泥炭層で、5b層には自然木を含むがやや分解が進む。7は、褐色シルト混じり泥炭層、8は黒色の泥炭層で自然木を多く含む。9は灰黄シルトで泥炭が混じる。(出土遺物) 河川跡中央の西端トレントから、木製品3点(261～263)が出土している。出土層は、東壁の6層対応すると考えられる(時期)出土木製品の放射性炭素年代測定では、4世紀～6世紀代という結果が得られている。古墳時代後期には、やや堆積が進んでいたが、河川として機能していたものと考えられる。

G 性格不明造構

S X 19 性格不明造構 (第11図、写真41)

1区北東隅20-Kグリッドに位置する。(平面形) 大半が調査区外となり、部分的な検出のため形状は不明である。規模は、南北225m、東西1.90mを測る。壁講状の施設が認められるため、住居となる可能性も考えられる。(覆土) 削平されたためか残存していない。(床面) 平坦である。(造構内施設) 條円形状の土坑、E K 31が検出された。また、壁講状の溝跡E D 30がめぐる。(出土遺物) E K 31内から、土師器壺(179)が出土した。また、E D 30から土師器の壺(180)が出土した。(時期) 出土遺物から古墳時代前期後半(4世紀後半)と考えられる。

S X 63 性格不明造構 (第46図、写真42)

1区中央の東寄り14・15-Jグリッドに位置する。耕作等の削平で造構底面が僅かに残るのみである。主軸方向はN-24°-Wを示す。住居跡の可能性も考えられるが、炉跡や柱穴は確認されない。堅穴状造構と捉えたい。(平面形) 南北に長い方形を呈し、各壁中央で南北3.00m、東西3.75mを測る。検出面からの深さは5cm程度である。(覆土) 削平により覆土は確認されない。1層の黒色シルト層は、地山塊を含み、貼床の可能性がある。(床面) 各壁際が中央部より若干窪む形状で、貼床により平坦にしていると考えられる。(出土遺物) 床面から少量の土師器片が出土する。(時期) 出土遺物が僅少のため不明である。

S X 119 性格不明造構 (第46図、写真42)

2区中央の西寄り38-Gグリッドに位置する。主軸方向はN-42°-Eを示す。(平面形) 南北に長い方形を呈し、各壁中央で南北4.25m、東西3.15mを測る。検出面からの深さは20cm程度である。(覆土) 黒色を基調とする粘質土が大半を占める。(床面) 壁際が若干窪む形状がみられる。南側には、長さ3.00m、幅1.00m、床面から10cm程度の長楕円形の掘り込みE K 132が確認される。(出土遺物) 床面から少量の土師器破片が出土する。北側の床面からは、双孔円板状の石製品が1点出土している(306)。(時期) 出土遺物から古墳時代中期の造構と推測される。

S X 161 性格不明造構 (第19図、写真42)

2区の東壁面38-Lグリッドに位置し、造構の東域は調査区外となる。(平面形) 不整形を呈し、長軸1.50m、短軸80cmを測る。(覆土) 黒褐色を基調とするシルト質土が大半を占める。床面からの深さは10cm程度である。北側に位置する柱穴E P 162には、柱材が確認される。(出土遺物) 覆土から少量の土師器破片が出土する。(時期) 出土遺物が僅少のため、不明である。

H 捨場

S X 50 捨場 (第47～51図、写真43・44)

古墳時代の土師器を中心とした遺物が廃棄されている捨場である。1区東側にかけて広範囲に広がり、大別して18-20-E・Fグリッド、12-16-F・Gグリッド、8-10-Eグリッドの3つのブロックで捉えられる。S

D 12・13・15溝跡、S D 71～72畝状遺構に切られる重複関係がある。(平面形) 3つのブロックは、全体的に南北から北西へ緩やかな弧状に分布する。規模は、北端のブロックが南北約10m、東西約5m、調査区中央のブロックが南北約28m、東西約11m、南端のブロックが南北約11m、東西約6mを測る。(覆土) 堆積は、1～6層に分けられるが、1層は基本層のⅡb層、3層がⅢ層、5・6層がⅣ層に対応すると考えられる。遺物は、1層中や、3層との境界からの出土が多い傾向がある。(出土遺物) 北側ブロックから土師器(195・197・208・213・215・219)が出土した。中央部ブロックから土師器(181・184～193・198・200・205～207・211・212・214・218・221～225)が出土した。南側ブロックでは、土師器(182・183・196・199・201・202・204・216・217・220)、石製品として管玉(303・304)が2点出土している。(時期) 出土遺物から古墳時代前期後半(4世紀後半)に属する遺物が主体を占めている。

S X 49集石(第51図)

2区中央の14-G・Hグリッドに位置する。棒状礫が集中して確認されたことから、調査段階で遺物の出土範囲として遺構番号を付した。棒状礫の出土範囲は、長辺90cm、短辺60cm、不整形を呈する。(覆土) Ⅱb層に併行する堆積層の上面にあたり、周辺にみられる土師器と同様にS X 50捨場に属すると考えられる。(出土遺物) 出土した棒状礫は、計18個体を数える(285～302)。長楕円形を呈する自然礫を用いており、加工痕も認められない。棒状礫の集石は、2区のS T 104竪穴住居跡内でも同様に確認される。詳細については後述するが、これらは、編物石に用いたものと推測される。

2 古墳時代の遺物

本遺跡から出土した遺物は、プラスチックコンテナ約57箱分に及ぶ。これらは、古墳時代を主とする土師器や須恵器の土器類が大半を占める。他の遺物には、木製品、石器、石製品、中世・近世の陶磁器などが認められた。

A 土 師 器

(1) 土師器の特徴と器種分類

遺跡の主体となる古墳時代の遺構と、捨場と考えられる遺物包含層から多量に出土する。これらは、出土した

遺構の形態的な特徴や遺物の器種・器形から古墳時代前期と中期の二つの時期が把握される。

器種分類を提示した上で、先行して古墳時代前期の遺物、次に同時代中期の遺物の分類・特色を列記する。なお、分類の括弧内は代表的な遺物例を示す。分類基準は、以下のとおりである。

器種-土器の用途と形を基にした分類。蓋、小型土器、器台、高坏、坏、鉢、壺、瓶、甌である。

器形-器形の形態や整形技法を基に分類し、坏A類・坏B類とした。また、口縁部の変化や部分的な形態差を基にした分類は、坏A 1類・坏B 2類、さらに形態変化が激しい場合はa・b…を追加し、坏A 1a類などと表記した。

(2) 古墳時代前期の土師器分類(第53図)

分類の中心となるものは、竪穴住居跡内の出土遺物である。欠落する器種については、一部S X 50捨場出土遺物から抽出して用いた。

[蓋] S X 19性格不明遺構出土の1点のみである。

A類:鉗状の摘みを有し、天井部から直線的に開く。

器面には赤彩を施す。

[小型土器] 手づくね成形した粗雑な作りの土器。

A類:柱状の底部が付き、鉢状を呈すると推測される。

[器台] 器高15cm前後の器台である。受け部から脚部かけて貫通孔がある。

A類:受け部が塊状を呈し、外傾して立ち上がるもの。

B類:受け部が浅く、口縁部が僅かに内湾するもの。

C類:受け部が浅く、口縁部が外反するもの。

[高坏] 出土量が少量であり、器形が把握されるものは限られる。

A類:脚部が直線的に開く「ハ」の字状を呈し、裾部が僅かに外方に開くもの。

1類 受け部が外傾して開き、口縁端部で内湾する

2類 脚部の裾が外方に長くのびるもの。

B類:基部から内湾して立ち上がる受け部が付き、脚部は中空棒状を呈する。

C類:脚部が直線的に開く「ハ」の字状を呈するもの。

[鉢] 精製品である小型の丸底のものと、調整の粗い粗製のものが見られる。

A類:小型の丸底鉢で、精鍊された胎土を用いている。

器台との対応関係が考えられる。

B類：口縁部が外反するもの、口縁部に面取りをもつ。

C類：長頸の口縁部が付く体部の浅い平底鉢である。

口縁部が僅かに内湾する。

D類：球胴状の体部に外傾する口縁部が付く。

[壺] 複合口縁壺、直口壺がある。

A類：口縁部に段を有する複合口縁壺である。

1類 二重口縁壺で、口縁部下端で平坦となって強い段を呈するもの。

2類 二重口縁壺に類するが、段が不明瞭なもの。

3類 折り返し状の口縁部を呈するもの。

B類：球胴状の体部に直立する口縁部が付く直口壺である。大型と小型のものに大別される。

1類 大型の直口壺。

2類 小型の直口壺。

C類：直立する短い口縁部が付くもの。

D類：口縁が外反・外傾するもの。

1類 頭部のすばまりが強いもの。

2類 頭部のすばまりが弱いもの。

E類：小型の精製品。小型器台とセットで使用された可能性がある。

[壺] 大型と小型のものに大別される。

A類：口縁部の断面形態が「く」の字状に屈曲するもの。

基本的な調整は、内外面ハケメ調整の後、口縁部が切り出されて横方向のナデ調整で整えられている。口縁部上半部は、丁寧に横方向のナデが施される。下半部には、ハケメ調整がナデ消されずに残存していることが多い。壺の大部分は、ここに分類される。口縫形態の違いで細分した。これらは、「北陸東北部系壺」「くの字口縁壺」「能登型壺」と等と呼ばれる。

1類 口縁端部が摘みあげられるもの。

2類 面取りが強く、外側に若干引き出されるもの。

3類 面取りが弱く、口縁部が緩やかに外反するもの。

4類 面取りが認められないもの。

B類：口縁端部が強く外側に引き出され、口縁部が逆「コ」の字状を呈するもの。

C類：脚台の付く壺。所謂台付壺である。

1類 脚台が直線的な「ハ」の字状を呈するもの。

2類 脚台中位で内湾して膨らむもの。

D類：小型の壺を呈するもの。

(3) 古墳時代前期の出土遺物

当期の出土遺物は、竪穴住居跡内出土の一括資料が大半を占める（S T 20・21・22・107・108・125）。これらの住居跡は検出面が浅いため、殆どが床面直上から出土した遺物で、一括資料に恵まれるものは限られる。その中でも比較的まとまった遺物量が出土するのは、S T 20・21・22 竪穴住居跡である。竪穴住居跡出土の遺物を中心に、古墳時代前期に属すると考えられる遺構出土の遺物について詳細を述べる。

S T 20 竪穴住居跡

高坏、壺、壺が出土している（1～11）。1は高坏A 1類で、器形が把握できるものである。器面には、丁寧なヘラミガキとナデを施し、円窓は三方に穿かれる。2は、長頸の口縁部が欠損する壺で、壺B 2類に分類される。4は、体部が球胴状を呈する壺A 3類である。器面の調整には、内外面にハケメ調整を施している。

S T 21 竪穴住居跡

器台、二重口縁壺、壺が出土する（5～10）。5・6は器台の受け部で、5が器台A類、6が器台B類である。7は、二重口縁壺の頭部にあたる破片資料である。器形全体を把握し得ないが、口縁内部に段を作り出す壺A類と考えられる。8～11は壺である。8は、口縁部の破片資料で、「コ」の字状を呈する壺B類である。11は、地床炉の直上層にて一括出土した壺で、肩部付近に最大径をもつ壺A 2類である。10は、小型壺の体部上半部と底部である。器高が15cm以下に収まる壺D類と捉えた。口縁部は、頭部から僅かに内湾して直立する。器面の調整は、外面全体に細かいハケメ調整とナデ調整を施している。

S T 22 竪穴住居跡

当期の住居跡の中で最も多く遺物が出土する。他の住居跡と比較して掘り込みが深いため、出土遺物の一括性が高い。器種は、壺、小型丸底鉢、壺がある（12～18）。ここでは、住居跡に付随する可能性がある S D 34・35 溝跡の出土遺物（19～24）も合わせて列記する。

12・13は壺B 2類である。器形が把握される13は、口径11.2cm、器高は15cmと推測される。体部は球胴状を呈し、底部が丸底となる。焼失家屋出土のため、器面全体が被熱で赤味を帯びている。鉢A類の14は、器台との対応関係が考えられる。器面の調整は、頭部外面に

縦方向のハケメ調整がみられる。15～17は、いずれも壺A 2類である。体部外面には、ハケメ調整とナデ調整がみられる。ハケメ調整は、目の粗いものと、目の細かいものが混在して認められる。15・16は、口縁部の形状が把握されるもので、口縁端部に面取りを施した「く」の字状口縁部が付くものである。壺C 1類の18は、脚台が直線的に開くもので、砂粒などを含まない精鍊された胎土を用いている。

前述した外周の溝跡出土遺物は6点である（19～24）。19は、受け部が内湾する高杯B類である。全体的に磨滅が激しく、器面の調整は不明瞭である。受け部の上半が欠損しているため不明確だが、本遺跡の分布調査の際に出土した高杯（第52図1）と同様に、口縁部が屈曲して外顎するものと考えられる。

20～22は壺である。壺A 1類の20、壺A 4類の21、壺C 2類の22である。鉢B類の24は、底部から体部にかけて外傾して立ち上がり、体部と口縁部の境が強く張り出している。体部外面に丁寧なヘラミガキ調整とナデ調整が施される精製品と考えられる。

S T 107 穫穴住居跡

土師器の細片が多量出土するが、図化出来たのは壺2点である（147・148）。147は壺B 2類、148は壺D 1類に分類される。148は、最大径を胴部中位にもつ球胴状を呈し、器面の調整は、外面に目の細かいハケメとナデ調整が施される。

S T 108 穫穴住居跡

器形が把握されるのは149のみである。口径約10cm、器高49cmを測り、頭部から外傾して開く口縁部が付く鉢A類に分類される。底部中央が円形に窪む凹状となる。器面の調整は、細かいヘラミガキとナデ調整が施され、内外面に赤色塗彩で装飾している。

S T 125 穫穴住居跡

高杯、壺が出土する（153・154）。高杯C類の153は、器高の低い小型の高杯で、脚部には円窓が認められない。154は、壺A 3類に属する。器面の調整は、体部の内外面に目の粗いハケメとナデ調整を施している。

掘立柱建物跡（S B 2・54・53）では、直接関係する遺物は極僅かである。これらの建物跡に関連する遺物として、建物跡に近接する溝跡出土の遺物がある。ここでは、双方の出土遺物について列記する。

S B 2 掘立柱建物跡

直接的な出土遺物は認められないが、北側に近接するS D 14溝跡から壺、壺が出土する（155～157）。155・156は二重口縁壺である。なかでも156は、口縁部内面に平坦な段が作り出される壺A類に属し、口径25cm前後を測る大型のものと考えられる。157は、壺A 3類に分類される。精鍊した胎土を用いて、器厚を薄く仕上げる作りである。

S B 54 掘立柱建物跡

直接的な出土遺物は認められないが、西側に近接するS D 40溝跡から壺が出土する（158・159）。158は、壺A 2類の上半部である。頭部のすぼまりが強く、頭部径が小さい。159は、壺B 1類に分類される。最大径を下半にもつ皮袋形の胴部に、外傾して大きく開く長頭の口縁部が付く。口縁端部は欠損するため不明である。器面の調整は、丁寧なヘラミガキとナデ調整が施され、口縁部内面と外面全体を赤色塗彩で装飾している。

S B 79 掘立柱建物跡

壺が出土する（160・161）。160は、建物を構成する柱穴から出土した壺である。体部下半は欠損しているが、球胴状の体部に直立する口縁部が付く壺C類に分類される。器面の調整は、体部に細かいヘラミガキ調整と口縁部に横方向のナデ調整がみられる。161は壺の底部で、建物跡の外周溝と考えられるE D 64溝跡から出土する。器厚が薄く、内外面には、煤や炭化物が環状に付着しており、煮炊きの調理具に転用されたものと考えられる。

S G 1 河川跡

覆土中から3点が出土する（175～177）。175は下層出土の器台で、受け部が僅かに外反する器台C類に分類される。脚部は「ハ」の字状に開き、円窓が三方に穿かれる。器面の調整は、受け部外面で横方向、脚部外面では縦方向のヘラミガキ調整がみられる。176は、壺の口縁部片である。細片資料のため不明な点が多いが、大型の直口壺と推測される。177は、河川跡上層で出土した壺である。体部の下半に最大径を持つ下彫れの形状で、外傾する短い口縁部が付く。底部には、輪状の粘土紐を貼り付けている。外面には、縦方向に粗いハケメ調整を施し、口縁部付近に横方向のナデ調整がみられる。これは、古墳時代中期に属する小型の壺（C 2 b類）と考えられる。

S X 19 性格不明遺構

蓋、二重口縁壺、甕の3点が出土する（178～180）。178は、鉢状のつまみを有する蓋A類である。器面は、外面に丁寧なヘラミガキを施している。残存状態は悪いが、外面に赤色塗彩が認められる。179は、球胴状の体部をもつ壺A2類である。遺構内の構から出土した180は、甕A2類に分類される。

遺構外出土遺物

1区調査区の西側で確認されたS X 50 捜場出土のものが大半を占める。器台、高坏、鉢、壺、甕の各器種のなかでも、器形や器種が把握される計46点を図化した（181～226）。ここでは、特徴的な遺物のみを取り上げ、その他は遺物観察表に参照されたい。

181～187は器台である。受け部が欠損する脚部で、基部から脚部にかけて貫通孔をもつ。185・186は、脚部の裾部が外方へ向かって「八」の字状に開く。器形が把握できる187は、受け部の口縁部が僅かに内湾して立ち上がる器台B類に分類される。脚部は、「ハ」の字状に直線的に開き、円窓が対角線上の四方に穿かれる。器面の調整には、ヘラミガキ調整とナデ調整を施し、受け部内面と外面全体を赤色塗彩で装飾している。

188・189は高坏である。共に脚部の裾が外方へ向かって「八」の字状に開く。188は、口縁部が内湾する壺状の受け部が付く高坏A2類である。残存する脚部の形状から、円窓は三方に穿かれると捉えた。189の脚部は、外面全体にヘラミガキとナデ調整を施し、赤色塗彩で器面を装飾している。円窓は三方に穿かれると考えられ、小型の受け部が付く高坏A2類となろう。

190～194は鉢である。190・191は、短く外傾する口縁部が付く鉢D類である。191は、底部中央が円形に窪む凹状となる。192・193は、長頭の口縁部をもつ平底鉢で、鉢C類に分類される。体部が浅く、口縁部と体部の境には強い稜がみられる。194は口縁部が折り返し状となる鉢である。器面の調整には、細かいハケメやナデを施している。

195～210は壺である。器形は、小型壺、二重口縁壺、直口壺、単純口縁の壺があり、甕に転用したと考えられるものも認められる。

小型壺は、丸底の体部に直立気味の短い口縁部が付く198と、球胴状の体部に折り返し状の口縁部が付く199

がある。198が壺E類、199はA3類に分類される。

200～202は二重口縁壺で、いずれも口縁部から頸部にあたる。201・202は、壺A1類に分類される。頸部と口縁部の境となる屈曲部が強く張り出し、刺突を連続させた刻み目状の加飾が施されている。これらは、北陸地方にみられる土器様相と近似している。

205～207は、壺B類である。205・206は壺B2類に分類される。205は、体部外面に赤色塗彩を施している。全体の器形が把握できる206は、体部中央で最大径を測り、口縁部が僅かに内湾する。207は、壺B1類に分類される。口径15.8cm、器高22.5cm以上を測り、頸部から強く屈曲して聞く口縁が付く。器面の調整は、体部に目の細かいハケメ調整がみられ、器厚が薄く仕上げている。

203・204・208～210は、器面全体に被熱痕や煤が付着する壺で、調理具に転用して使用したと考えられる。口縁部の形状が把握できる209・210は、口縁部が弱く外反する。頸部の形状から壺D1類195・196・208・209と、壺D2類210に分けられる。

211は、単孔のある底部資料である。器面は全体的に被熱痕があり、調整等は不明瞭である。外面全体に煤や炭化物が付着している。これは、有孔鉢と考えられる。

212～226は甕である。口縁部の形状が把握できるものをを中心に、計14点を図化した。

212は、脚台の中位が膨らむ甕C2類に分類される。内面には、砂混じりの土を補充して、なで付けた痕跡がみられる。

213～224は甕の口縁部である。これらは口縁部の形状が「く」の字状を呈する甕A類215～218・220・223・226、「コ」の字状の呈する甕B類222・224に大別できる。各々の口縁端部には、面を作り出したものが認められ、北陸東部系の能登甕と呼ばれるものに近似する。全体の器形が把握される225・226は、体部が丸く張り、最大径が体部中央に求められる。

311・312の2点は、SD13溝跡底面から出土した古墳時代の土師器である。溝跡の埋没時に流れ込んだものと考えられる。311は、手捏くねで成形した小型土器A類である。外傾した口縁部が付く鉢形を呈すると考えられる。312は、口縁部に刺突を施した隆帯が巡る甕である。器面には、赤色塗彩した痕跡が認められる。

(4) 古墳時代中期の土師器分類 (第 54 図)

分類の中心となるものは、当期に属する堅穴住居跡内出土の一括遺物である。器種は、壺、鉢、壺、甌、甌の 5 種類に大別し、口縁部や底部の形態と大きさの違いから細別した。器形や大きさの関係から、壺類の中でも器高が高いものを鉢類に、器高の低い小型の甌については、甌の範疇に含めた。

分類に際しては「山形県における古墳時代中期の土器様相 (1)」(阿部・吉田 2002) の分類基準に準拠する。なお、欠損により全体の形が明確でないものについても分類に加えたものがある。

【壺】口縁部の形態で大別した。底部の形状は、丸底と平底が混在して認められる。

A 類：半球形の体部に、外反または外傾する口縁部をもつもの。底部は丸底と平底がある。

1 類 体部下半が内傾した後に、外反する口縁部を呈する。両者の境は内外面共に稜線をもつ。

2 類 口縁端部が外頭する口縁部を呈するもの。

B 類：半球形の体部と内湾する口縁部からなる。体部と口縁部の境に稜線をもたない。底部は丸底と平底がある。

1 類 口縁端部が内湾するもの。

2 類 口縁端部が直立するもの。

3 類 口縁部が僅かに外にのびるもの。

C 類：扁平な半球形の体部とほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ。体部と口縁部の境には、外面に段、内面に稜線をもつ。須恵器模倣壺とされる。

1 類 直行する部分が 1/3 以下のもの。

2 類 直行する部分が 1/3 以上を占めるもの。

D 類：半球形の体部と外反する口縁部をもつ。両者の境には、外面に段、内面に稜をもつ。

E 類：深みのある塊状を呈する。

【鉢】口縁部が外反または直立し、器高が口径の 1/2 を上回るものを目安とした。調整はヘラミガキやナデ調整を基本とするが、一部ケズリやハケメ調整を施す粗製品もある。

A 類：球状の体部に外反する口縁部が付くもの。

1 類 底部が丸底のもの。

2 類 平底、平底気味のもの。

B 類：口縁部が外方向にやや直線的にのびるもの。

C 類：底部から直立気味に立ち上がり、口縁部が僅かに外傾するもの。

D 類：口縁下部に、注口や有孔が付くもの。

【甌】口縁形態と胴部の形状から細分した。

A 類：複合口縁を呈するもの

B 類：丸形となるもの。

1 類 脇部が丸形で頭部が短いもの。

a 類 口縁部が外反・外傾するもの。

b 類 口縁部が内湾するもの。

2 類 脇部が丸形で頭部が長いもの。

C 類：球胴状の胴部から口縁部が短く外反するもの。

(須恵器短頭甌の模倣)

D 類：無頭のもの。

【甌】無底式の甌形甌と小型の単孔甌が認められる。

A 類：無底式の甌形甌

1 類 最大径が口縁部にあるもの。

2 類 最大径が脇部にあるもの。

B 類：小型の有底單孔甌

1 類 丸底となるもの。

2 類 平底となるもの。

【甌】器形や大きさから大別した。大半が外面に煤や炭化物が付着している。調整は、内外面ハケメまたは、ナデ調整を主体とするが、内外面ミガキやケズリ調整を施した個体も認められる。なお、小型の甌として分類に加えたものがある。

A 類：器高 23 cm 以上となる大型で球胴形を呈するもの。

1 類 頭のすばまりが強い。

2 類 頭のすばまりが弱い。

a 類 口縁部が強く外反するもの。

b 類 口縁部が緩やかに外反するもの。

c 類 口縁部が直行で外傾するもの。

B 類：器高 23 cm 以上となる長胴化した体部のもの。

1 類 頭のすばまりが強い。

2 類 頭のすばまりが弱い。

a 類 口縁部が強く外反するもの。

b 類 口縁部が緩やかに外反するもの。

c 類 口縁部が直行で外傾するもの。

C 類：器高 23 cm 以下となる小型の甌。

1 類 器高 15 cm 以上で頭が短いもの。

a 類 口縁部が強く外反するもの。

b類 口縁部が直立して外傾するもの。

2類 器高 15 cm 以下で頭が短いもの。

a類 刷径が口徑より大きいもの。

b類 刷径が口徑と同じか小さいもの。

D類：菱形となるもの。

(5) 古墳時代中期の出土遺物

大半は、調査2区に位置する竪穴住居跡内から出土した遺物である。以下、主な出土遺物の器種分類、特徴について列記するが、詳細は遺物観察表を参照されたい。

S T 101 竪穴住居跡

鉢、甕が出土する(26～27)。25は、口縁部が直線的に外傾する鉢B類に分類される。底部は平底気味である。器面の調整は、内面にミガキ調整、外面にナデとケズリ調整がみられる。26は、頭部から口縁部が外反する壺C 1 a類である。27は、最大径を胴部中位にもつ壺D類に分類される。すばまりの強い頭部から、屈曲して聞く口縁部が付く。

S T 102 竪穴住居跡

壺、鉢、甕が出土する(28～39)。焼失住居出土のため、各々の外面には、煤の付着や被熱面がみられる。

主体を占める壺類は、計9点を数える(28～35)。このうち、28～30は住居上層から出土する。床面直上出土の31・32・34・35は、口縁部が内溝する壺B類に分類される。33は、口縁部が直立気味に立ち上がる壺C類に分類される。36は、口径 16.4 cm を測る大型の壺で、口縁外面に段をもつ壺D類に分類される。内溝する壺B類の内面には、放射状のミガキ調整が多く認められる。

37は、頭部から外傾する口縁が付く鉢A 1類である。38は、短く外傾する口縁部が付く甕B 2 b類である。器面の調整は、体部下半から底部にかけて縱方向のケズリ調整がみられる。カマド付近に直置きして用いた調理具の性格が考えられる。

39は、最大径を胴部中位にもつ広口の甕で、口縁部が短く外反する甕A 2 a類に分類される。器面の調整は、体部外面にナデとケズリ調整、内面には横方向のナデ調整が幾重ともみられる。底部は、厚みのある柱状を呈する。

S T 103 竪穴住居跡

鉢、甕、壺、甕が出土する(40～69)。40～56は壺類である。壺類は、A類 40・41・46・48・50、B類 53、C類 42・43・45・51・52、D類 44・54～56 に大別さ

れる。このうちの 51～56 の 6 点は、内外面に赤色塗彩を施す赤色土器である。57・58は深みのある壺E類に分類され、口縁内面に明瞭な棱線が認められる。

甕は、カマド付近から集中して出土し、壺や鉢形の甕 B 1類 59・60 と、無底式の甕 A 2類である 61 が認められる。59は、口縁部が直線的に外傾する壺形に単孔があるので、容量が小さいため、甕として機能するか検討する必要がある。

62は、口縁部が僅かに外反する甕 C 2 b類に分類される。器面の調整は、体部中位から底部に縱方向のナデとヘラケズリ調整がみられる。内面には、ナデ調整と円状の煤の付着が認められる。カマドの火元に直置きして用いた調理具と考えられる。67・68は壺を転用した甕である。67は、頭部のすばまりの強い壺 B 1 a類に分類される。68は、体部が球胴状を呈する壺 B 1 b類に属し、胴部中位の最大径は 29 cm 前後を測る。66・69は、長胴化した胴部をもつもので、甕 B 1 c類に分類される。

S T 104 竪穴住居跡

壺、鉢、甕、甕が出土する(71～94)。壺類は、A類 71・74～76・81・82、B類 72・73・77～80 の 2類に大別される。これらは、底部が丸底状を呈するものが多い傾向がみられる。

83～85は、外反する口縁部が付く鉢 A 2類に属する。84には、底部に輪状の貼り付けが認められる。体部器面全体に被熱痕がみられ、赤みを帯びる。

86は、体部が内溝して立ち上がる壺の底部である。内面に吃水線が認められる。製作時に生じたへたりに、粘土を貼り付けて補修を施している。

87は、口縁端部が僅かに外反する甕 B 1類である。器面の調整は、内外面にハケメ調整、口縁部内面には横方向のナデ調整が施される。器厚が薄い作りである。88は、胴部中位が膨らむ甕 A 2類に分類される。口縁部が僅かに外反し、外面に縱方向のヘラケズリ調整、口縁部付近に横方向のナデ調整が施される。

89～94は甕である。甕 A 2 a類 92、甕 B 1 a類 93、甕 B 1 b類 90、甕 B 2 a類 91、甕 B 1 c類 94 に分類される。外面に目の粗いハケメ、縦方向のケズリ調整を施し、柱状の厚みをもつ底部である。いずれもカマドにかけられた甕で、複数個設置されたものと考えられる。91は、頭部から直線的に外傾して聞く口縁部が付くもので、

端部に僅かな平坦面をもつ形状である。

S T 105 穫穴住居跡

壺、鉢、瓶、壺、甕が出土する(96~122)。主体を占める壺類は、A類99・103~105・108、B類96・98・102・110・111、C類97・101、D類100・106・109に大別される。このうちの7点は、内外面に赤色塗彩を施す赤色土器である(106~112)。口縁内面に、内削ぎを有するものが多い傾向がある。102、103は、底部が幅広の平底となり、扁平な体部を呈する。

113は、赤色塗彩を施した小型の壺である。口縁端部が内湾する壺B2類に分類される。内外面は、細かい単位のヘラミガキ調整を施している。水入れとして使用された細頭の精製壺と考えられる。

114は、鉢D類に分類される。球状の体部に、短く外反する口縁部が付く。体部中位には、長さ3cm前後のU字状の注ぎ口が付く。片口状の口縁部をもつ鉢類は、県内でも数例認められるが、注ぎ口が付くものは確認されない。器面の調整は、体部の内外面に細かいハケメ調整と口縁部にナデ調整がみられる。

115~119は、外反する口縁部が付く鉢である。丸底の鉢A1類115・117と、平底の鉢A2類116・118・119に分類される。なかでも118は、外面全体に横方向へのヘラミガキ調整を施し、器面を赤色塗彩で装飾する精製品の鉢となる。119は、柱状の底部が付く大型の鉢である。器面の調整は、内面に一部ヘラミガキ調整が認められる。外面には、煤や炭化物の付着が認められ、直置きの調理具として使用されたと考えられる。

120は、体部から口縁部にかけて外傾して開く瓶A1類である。口縁部は、体部との境で短く外傾して開く。器面の調整は、底部付近にハケメ調整、体部に縱方向のヘラケズリ調整が認められる。

121は、甕C1a類の小型甕である。内外面に煤や炭化物の付着が認められ、119の大型鉢と同様に直置きの調理具と考えられる。

122は、壺を転用した甕である。器種分類は、壺B1b類に分類した。口縁部中位には、沈線が1条巡っている。外面には、被熱によって煤が飛んだ火痕が認められ、カマドに設置した状態が把握できる資料となる。底部には、支脚の跡も確認できる。カマドに設置して用いた湯釜の性格が考えられる。

S T 106 穫穴住居跡

壺、鉢、壺、甕、甕が出土する(123~146)。

壺類は、A類125~127、B類123・124・128・129に大別される。123は、内面に放射状のミガキ調整がみられる。125・126は、円形の窪みがある凹状の底部を有する。126は、カマド内の底面から出土することや器面の被熱の度合いが高いことから、カマドの支脚として転用されたと考えられる。127は、口径17.8cmを測る大型の壺で、外面下部には煤が全体的に付着している。128・129は、扁平な体部に内湾する口縁が付く壺で、須恵器の壺身を模倣した可能性も考えられる。

130は、短い口縁部が付く壺B1b類である。器面全体に被熱痕がみられる。131は、体部中位に最大径をもつ壺B2類である。直立する口縁部が付くと考えられる。精練された胎土を用い、外面に細かいヘラミガキ調整を施している。S T 105 穫穴住居跡出土の113と同様に、水入れとして使用された細頭の精製壺と考えられる。132・133は、短い口縁部が付く壺C類に分類される。これらは、須恵器の短頭壺を模倣したものと考えられる。器面の調整は、体部外面に目の粗いハケメとケズリ調整が認められる。

134~137は、広口の鉢である。小型の134は、底部の幅が広い鉢C類に分類される。135~137は、体部が内湾して屈曲し、外反する口縁部が付く鉢A2類である。底面は、いずれも平底気味となる。

甕は2点である。鉢形の甕B2類138と、無底式の甕A1類139に分類される。139は、底部を摘み出して立ち上げる形状である。

140~145は甕である。141・142は、口縁部が短く外傾する小型の甕で、甕C2b類に分類される。カマドがけではなく、直置きの調理具として使用されたと考えられる。140・142の底部には、初圧痕が認められる。

144は、カマド付近からほぼ完形で出土した壺である。口縁部に段を有する壺A類に分類されるが、壺に転用されたものと考えられる。体部下部には、環状の煤が付着し、内面に乾燥線が認められる。器面の調整は、体部にミガキとナデ調整、頭部に横方向に連続させたケズリ調整がみられる。143・145は、口縁部が直立気味に立ち上がる壺A1c類に分類される。器面の調整は、体部外面にケズリとナデ調整がみられる。

146は、最大径を胴部にもつ壺形を呈する。上半部の器形から壺の性格も考えられるが、底部付近が欠損しているため断定はできない。

S T 118 壺穴住居跡

壺、鉢、壺が出土する(150～152)。150は、口径が17.8 cmを測る大型の壺で、口縁端部が短く外傾する壺A 2類に大別される。小型の鉢である151は、口縁部が外傾する鉢A 2類に分類される。152は、底面に稍圧痕が認められる。

S K 133 土坑

162は、土坑の底面から出土した丸底の壺である。口縁端部が僅かに外反する壺A 2類に分類される。円形の突みがある凹状の底部を呈する。

S K 158 土坑

163は、口縁部が広口となる小型の鉢で、鉢A 2類に分類した。口縁部内面には、明瞭な稜線が認められる。器面の調整は、体部外面に目の粗いハケメ調整と、口縁部に横方向のナデ調整がみられる。

S D 167・172・173 溝跡

上層から壺、鉢、壺が出土する(168～174)。

168・171は、口縁部が外傾する壺A 2類に分類される。いずれも底部は、丸底状を呈する。

169は、壺D類に分類される。口縁部下には、径3 mmの円孔が認められる。口縁端部は斜線状を呈しており、蓋が付く可能性が高い。類似するものとして、本遺跡の分布調査で出土した有孔の壺がある(第51図3)。

172・173は、口縁部が僅かに外傾して開く小型の壺で、壺C 2 b類に分類した。体部外面には、縱方向の粗いハケメ調整と、ヘラケズリ調整がみられる。内面にベンガラと思われる赤色顔料が付着することから、彩色に用いた容器と考えられる。

174は、体部中央に最大径をもつ壺である。口縁部が直立気味に立ち上がる壺B 1 a類に分類される。器面には、体部外面にナデ調整と一部ケズリ調整がみられる。体部下部には、煤の付着が認められることから、壺に転用された可能性が高い。

B 須 恵 器

須恵器は、壺穴住居跡出土2点、溝跡1点、遺物包含層2点の計5点が出土した(70・95・165～167)。器種

は、有蓋高壺の蓋、壺蓋、壺身、甌、短頸壺がある。

これらは、概ね陶邑古窯跡群編年のT K 23～47(I～4)型式に併行する時期に比定され、5世紀後半～末の様相を呈する。いずれも形状などの外見上の特徴が、陶邑と共通する要素が多い。以下詳細を述べる。

70はS T 104 壺穴住居跡出土の甌である。口縁部が直線的に外傾して開き、口縁端部がやや丸みを持つ。頭部外面には、細かい櫛描の波状文を施して器面を装飾している。破片資料のため全体を把握するには至らないが、T K 23型式併行の時期に比定される。

95は口径11.5 cm、器高5.2 cmの壺身で、器形が明らかなものである。焼失家屋のS T 105 壺穴住居跡から出土するため、外面には黒斑がみられる。口縁部はやや内傾し、口縁端部で丸みを持つ。受け部は、やや内傾して端部で丸みを持つ。底部の回転ヘラケズリの範囲は、2/3強である。器形が扁平になる直前の段階のT K 23もしくはT K 47型式併行の時期に比定される。

165～167は、S D 167・172・173 溝跡上面、遺物包含層であるII b層から出土する。

165は、口径13 cm、器高5.2 cmの有蓋高壺の蓋である。中央が深む扁平な摘みが付き、外面の突端部は、鋭く明瞭である。調整は全体にロクロナデを施し、外面天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/3強でみられる。県内では、天童市西沼田遺跡出土の有蓋高壺の蓋と近似し、同遺物と並行するT K 23～47型式併行の時期と考えられる。

166は、口径12.4 cm、器高5 cmの壺蓋である。蓋の突端部は弱く、端部がやや丸みを持つ。調整は全体にロクロナデを施し、外面天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/3強でみられる。T K 47型式から次の段階への過渡期段階に併行する時期と考えられる。

167は、口径11.8 cm、器高7.3 cmの短頸壺である。やや張り出した胴部から直立する口縁部へと至り、口縁端部がやや丸みを持つ。調整は、口縁端部まで強いロクロナデ調整が施され、底部の回転ヘラケズリの範囲は2/3強でみられる。胎土は緻密で、焼成も良好である。T K 47型式に併行する時期と考えられる。

C 木 製 品

古墳時代の木製品は、1次調査のS G 1 河川跡、2次調査のS T 102・103・105 壺穴住居跡、S K 133 土坑、

S G 130 河川跡等の遺構から出土している。遺存状態が比較的良好なものについて、40点を図示した。また、縦台・容器・杭状の木製品等の主な木製品については、樹種の同定を実施した。詳細は第IV章に記載している。

堅穴住居跡からは、住居に関連する建築部材や柱材が出土している。性格が特定できない加工材も多い。木製品が出土した堅穴住居跡は、いずれも焼失住居と考えられ、炭化した部材が散見される。以下、出土遺構毎に内容を述べる。

227～238は、S T 102 堅穴住居跡出土の木製品で、住居の建築部材と考えられる。227・228・232・234・236は板材である。229・230・231・233・235は角材である。231・235は部分的に炭化している。これらの材は、住居の建築部材である。237・238は、住居の柱材である。両者とも、樹皮を部分的に残す丸太材であり、斧状工具で切断されている。237は、運搬の紐掛けのためと考えられる大きな抉りが1ヶ所施される。

239～244は、S T 103 堅穴住居跡出土の木製品である。239は、断面扇状の角材で両端を欠く。240は角材と思われる。炭化や腐食が目立つ。241～244は、住居の柱材である。丸太材の一端を裁断し、一部樹皮を残す。241・243は先端を平坦に成形し、242・244は先端をV字状に成形する。242は、側面に一部加工を施す。

245・246は、S T 105 堅穴住居跡出土の木製品である。245はE K 166 出土の細い板材で、貯蔵穴の蓋材の一部に使用されたと思われる。246は、住居の柱材である。丸太材を切断しているが、切断面の仕上げは雑である。

247～256は、S K 133 土坑出土の木製品である。247・249～254は薄い板材である。248・255は角材である。248は一辺46cmの材であるが、一端を杭状に尖らせている。255は加工後の不要な材として廃棄されたと思われる。256は別物の容器（槽）である。残存長は、57.2cm、幅29.1cm、高さ13.9cmで、削り出しによる脚が2ヶ所付く。容器長軸の上端に、ヒレ状の張り出し部を持つ。容器類は、山形市藤治屋敷遺跡、南陽市百刈田遺跡などで出土しているが、同様の形態をもつ容器類は、県内では確認されていない。

257～260は、S G 1 河川跡から出土した。257は、棒状の加工材で一端が破損する。角を面取りしている。258は、用途不明の断面長方形の角材であるが、側面が

済曲し、両端が細くなる。259は加工材で、板状の材の一端を尖らせる。また、片面が炭化している。260は、長さ176cmと大型で、縦台の目盛板と考えられる。細い丸太材の両端を削り扁平にし、抉りを入れてホゾ状に成形する。また、材の中央部に、幅4～11mm、長さ18～22mmの刻み目が22ヶ所確認される。

261～263は、S G 130 河川跡から出土した。261は、残存長が324cmと長大な加工材で、一端はやや細くホゾ状の加工が施され、反対側は破損し形状不明である。断面円形に整形される。用途は不明である。262は、棒状の加工材で、一端を尖らせ、断面形は半円形を呈し丁寧に調整されている。全体的に薄く炭化する。263は一辺約1.7cmの角材で、両端を欠く。

264・265は、遺構外出土の木製品であるが、古墳時代の包含層に帰属するものと考えられる。264は、棒状の加工材である。部分的に抉り状の加工が入り、断面は円形に整形される。265は、把手と考えられるが、何に付随するのか不明である。断面は円形に整形される。

D 漆 製 品

漆製品は、結歛式の堅櫛266の1点のみである。残存長は31×30mmで、櫛の棟部のみが残る。竹櫛状の素材を糸で縛り、黒色漆を塗って固めて成形したものと考えられる。なお、製作時の所見については、第IV章4節に詳細を記載している。

E 石 製 品

石製品は、管玉、臼玉、石模製造品、紡錘車（紡輪）、砥石、棒状礫の計43点がある。遺構外出土のものは、全てⅡb層から出土した（第75～77図）。

303・304は、S X 50 捜場から出土した管玉である。碧玉（緑色凝灰岩）を素材とし、長さ21mm前後、直径6.5mmの円筒形を呈する。303は風化の影響を強く受けているため、表面の剥落や欠損部が見られる。304は比較的の状態の良い完形品である。表面を丁寧に研磨し、両側から穿孔した孔は径約2mmを測る。

305は、遺構外から出土した白玉である。側面に後が認められず、直線的で丁寧に研磨される。素材は碧玉（緑色凝灰岩）である。管玉と幅が近似することから、管玉状のものを切って作成したと考えられる。

306・307は、黒色の粘板岩を素材に用いた有孔の石製品である。306は、S X 119性格不明遺構の底面から出土した双孔円板である。逆台形状を呈し、両側から穿孔した2つの孔が確認できる。307は、遺構外出土の勾玉形をなす石製模造品である。長さ44mm、幅25mm、厚さ6mmを測る。頭部の穿孔は両側から行われている。頭部から尾部への屈曲は弱く、尾部には、若干の欠損が認められる。

本遺跡から北東約3kmの南原遺跡からも、黒色系の粘板岩を用いた有孔円板が出土する。石製模造品は多く用いられる粘板岩は、県内では産出しない。また、石製模造品を製作する遺跡も現在までに確認されないことから、これらは他地域からの搬入品の可能性が高い。

308は、S T 105堅穴住居跡の床面から出土した石製の紡錘車である。素材は滑石を用い、逆截頭円錐形を呈する。直径38mm、孔径55mmを測り、表裏面と側面に擦痕が観察される。古墳時代中期以降から截頭円錐形の滑石紡錘車が多くなる傾向に対応している。

309・310は、遺構外から出土した砥石である。309は角状を呈する砥石で、磨面が5面で見られる。中央部の瘤み状の欠損は、被熱した際の火はねによるものと考えられる。310は、凝灰質の砂岩、もしくは泥岩を素材とする板状の砥石である。面積の広い2面を使用し、磨面と数本の条痕が認められる。金属製品の仕上砥に使用したと考えられる。

267～302は、S T 104堅穴住居跡とS X 49集石から出土した棒状砾である。出土点数は総計40点を数え、いずれも長楕円形や長方形を呈する自然砾を素材に用いている。長さ9～15cm、幅3～6cm、重量は平均で160g前後を測る。敲打等の加工痕は認められない。法量が似通った砾が集中して出土することから、編物に用いた編物石として捉えた。

F 自然 遺 物

329は、S K 133土坑の覆土出土の炭化した種子で、外皮が残存しているものである。

3 中世・近世の遺構と遺物

中世・近世の遺構は、いずれも溝跡である。出土遺物は少量であるが、陶磁器や曲物の底板等の木製品がある。

A 遺 構

S D 12溝跡（第42図、写真37）

1区北西隅の19・20-F、20-Gグリッドにかけて検出された。SD 13・15溝跡に切られる重複関係を持つ。溝跡北側は、開田時の削平により消滅したと考えられる。（規模）検出長約9.33m、幅30cm前後、検出面からの深さは15cm程度である。（断面形）壁面が緩やかに立ち上がるU字状を呈し、底面には凹凸が若干見られる。（覆土）上層に黒褐色シルト、下層に灰色粘質土が堆積する。（出土遺物）底面から土師器片が多量出土するが、大半が周辺に近接する古墳時代の遺構からの流れ込みである。（時期）中世以前の時期と考えられるが、詳細は不明である。

S D 13溝跡（第42図、写真37）

1区北壁面から中央部西壁10-Eグリッドにかけて検出された。南南西から北北東へ伸びる。SD 12溝跡を切る重複関係を持つ。溝跡は北側の2区にまで至ると考えられるが、開田時の削平で消滅したと考えられる。（規模）検出長約110m、幅10～13m、検出面からの深さは25cm程度である。（断面形）壁面が急角度で立ち上がる逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面である。（覆土）黒褐色を基調とする粘質土で、上位層が植物遺体を含む有機物層である。（出土遺物）底面から土師器片が多量出土するが、古墳時代の包含層を切って造成された際の混入と考えられる。（時期）時期を示す遺物は乏しいが、放射性炭素年代測定では、溝底面から出土した骨片の分析により、13世紀代という結果が得られている。

S D 15溝跡（第42図、写真37）

1区北西隅の19-Eグリッドで検出された。東西に伸びる。SD 12溝跡を切る重複関係を持つ。（規模）長さ32.5m、幅40cm前後、検出面からの深さは10cm程度である。（断面形）壁面が急角度で立ち上がる逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面である。（覆土）黒色を基調とする粘質土である。（時期）遺物の出土が無く、不明である。

S D 16溝跡（第44図、写真37）

1区中央の西寄り14-Eグリッドで検出された。主軸方向はN-20°-Eを示す。（規模）検出長約13.2m、幅1.0～1.2m、検出面からの深さは30cm程度である。（断

面形) 壁面が急角度で立ち上がる逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面である。(覆土) 黒色を基調とする粘質土で、酸化鉄を多量に含む。(出土遺物) S D 13 溝跡と同様、混入した土師器片の出土が多い。また、覆土中から唐津焼の皿が1点出土する。(時期) 出土遺物から近世と推測される。

S D 126 溝跡 (第20図)

2区32~36-J, 37~40-K, 40~41-Lグリッドにかけて検出された。S D 123 溝跡を切り、S T 103 壓穴住居跡に切られる重複関係を持つ。北北東から南南西に伸びる。(規模) 検出長約43m、幅35~115cmである。(断面形) 壁面が緩やかに立ち上がる浅い皿状を呈する。(覆土) 黒褐色の粘質土を基とする自然堆積層である。(出土遺物) 覆土や底面から土師器片が少量出土するが、周辺の古墳時代の遺構からの流れ込みである。(時期) 覆土の状況より中世以降の時期と考えられる。

S D 160 溝跡 (第40・41図、写真34・35)

2区34-J・Kグリッドにかけて検出された。S D 167・172 溝跡に切られる重複関係を持ち、北東から南西に伸びる。(規模) 検出長約4.8m、幅30~135cm、溝南東端が深く落ち込み、検出面から最も深い地点で37cm程度である。(断面形) 壁面が緩やかに立ち上がるU字状を呈する。(覆土) 3層に分かれ、黒褐色シルトを基調とした自然堆積層である。(出土遺物) 覆土や底面から土師器片が少量出土するが、周辺の古墳時代の遺構からの流れ込みである。(時期) 覆土がS D 126 溝跡と類似することから中世以降の時期と考えられる。

B 遺 物

中世・近世陶磁器 (第78図)

出土した陶磁器について、以下に述べる。

327は、中国産の青磁碗である。鎮連弁文が施され、釉色はオリーブ灰色、胎土は灰色で緻密である。龍泉窯系青磁碗で、鎌倉時代のものと考えられる。315は、中世陶器片と思われるが、時期的な詳細は不明である。外面は黒褐色で焼き締めており、自然釉がかかる。灰白色の胎土は緻密で、内外面に白い微小な斑点がみられる。

近世陶磁器であるが、313・314は肥前陶器の皿である。313は、砂目積みで、内面に3ヶ所の目跡が認められる。高台は削り出し成形である。314は、底部が削りにより

基筒底となる。釉調が313と類似するので、砂目積みの段階と考えられる。両者は、17世紀前半に位置づけられる。318は、肥前系磁器の染付碗である。器形から18世紀末から19世紀前半と考えられる。見込に圓線と文様が描かれるが、残存部が少なく不明である。

316は、大堀相馬焼の碗で、糠白釉を施し、高台は露胎である。年代は19世紀代である。317は、会津本郷焼と思われる搗鉢体部破片である。卸目がまばらに施され、内外面は鐵釉により暗赤褐色を呈する。18世紀代と考えられる。

木製品 (第78図)

中世の木製品は、S D 13 溝跡を中心に出土が確認された。6点を図示した。

319・324は、曲物の底板と考えられる。319は、底面の一部が炭化している。324は、中央に直径14mmほどの円孔がある。片面が被熱のためか黒変している。

320は箸の可能性が考えられる。幅8mm、厚さは3mmで、両端を欠く。炭化が認められる。

321~323は、用途不明の加工材である。321は、先端が尖り、反対側は円孔の加工が施されるが、孔の部位で破損している。322は、短冊状の材の中央に直径約10mmの円孔がある。323は、板材状の一端に、抉り状の加工が施される。

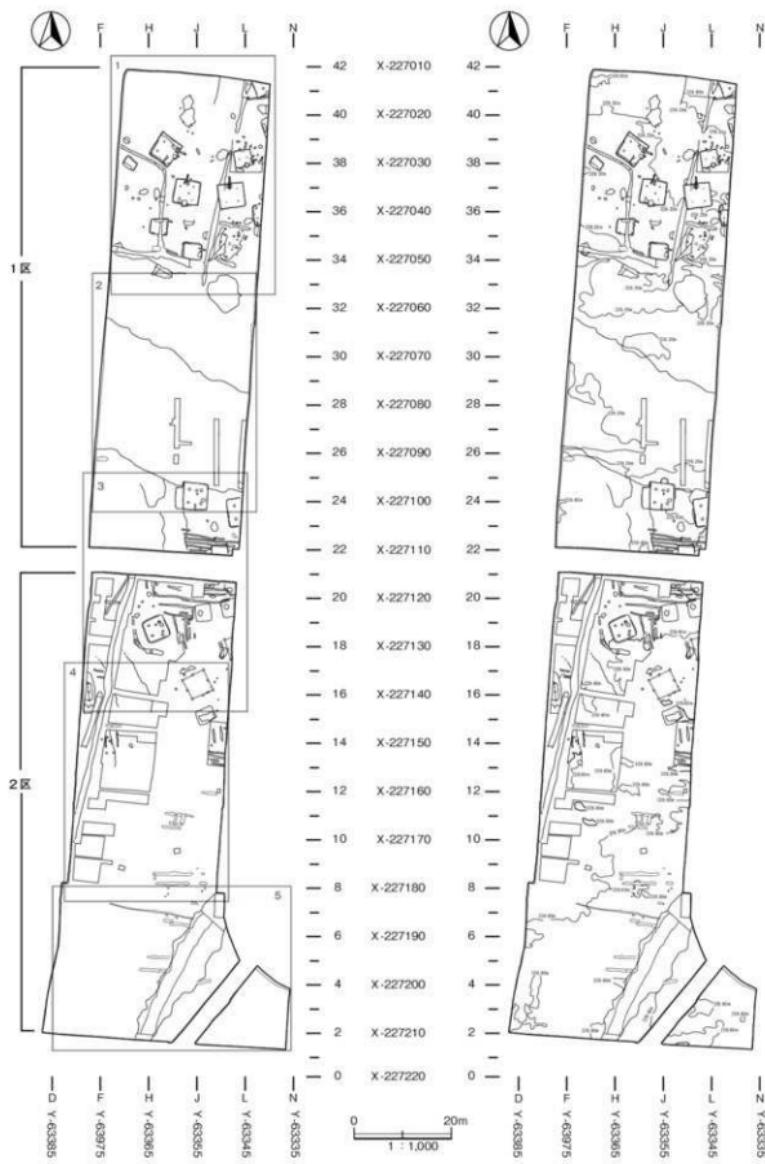
4 その他の遺物

遺構外から出土した石器・須恵器有台坏である。

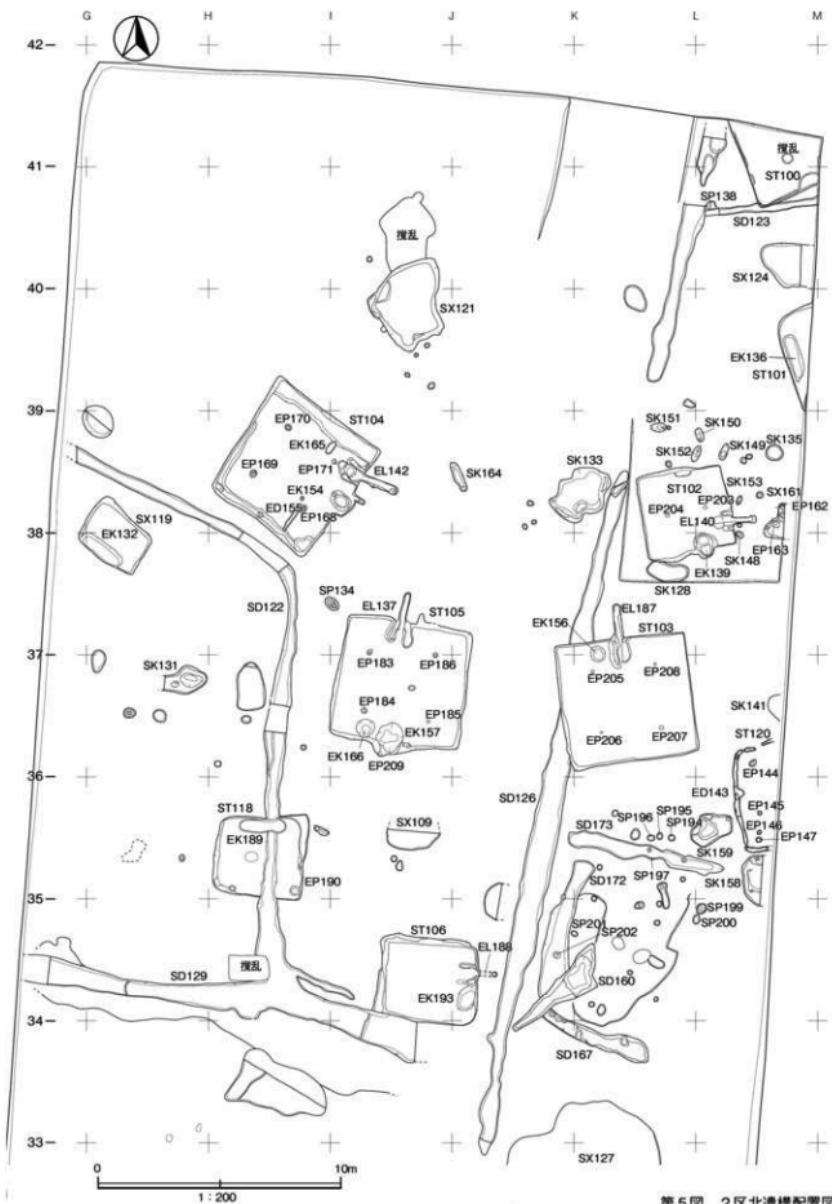
325の石器は、II b層出土の剥片である。明確な二次調整を持たないが、石質が良好なため、実際に使用した可能性も考えられる。

326は、基本層序③地点の土層観察の際に出土した須恵器有台坏である。奈良・平安時代に属すると推測されるが、この時期に該当する遺構は認められなかった。

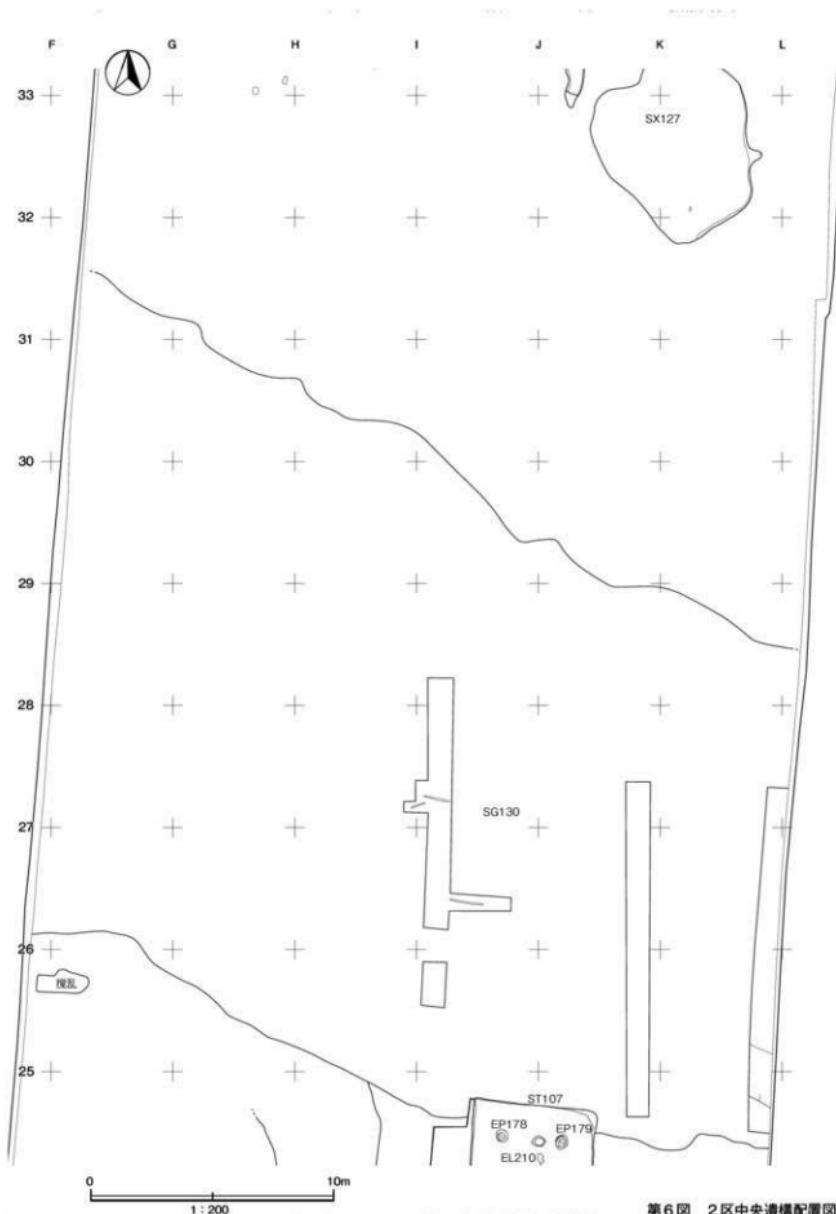
328は、II b層から出土した古銭である。北宋で铸造された「咸平元寶」で、径24mm、中央の方形の孔は一辺7mmである。11世紀前半頃の铸造年代が知られている。



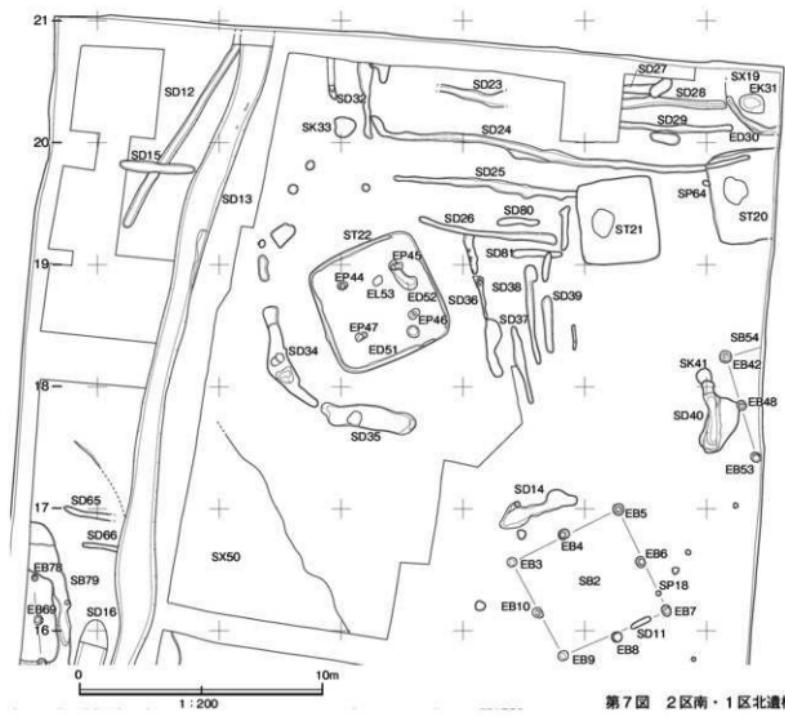
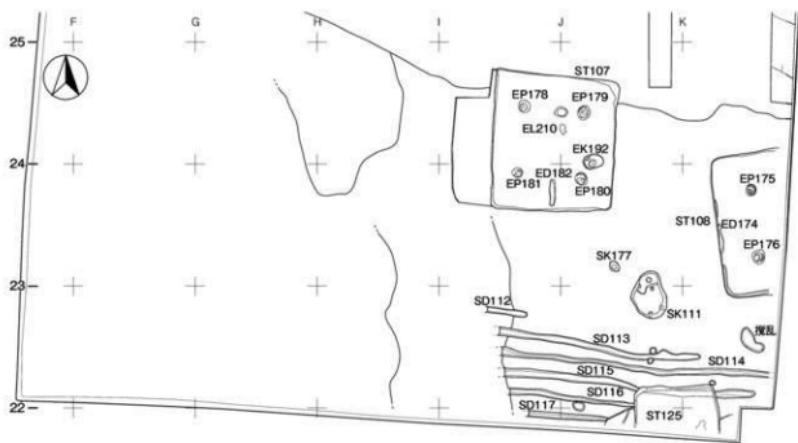
第4図 調査区全体図



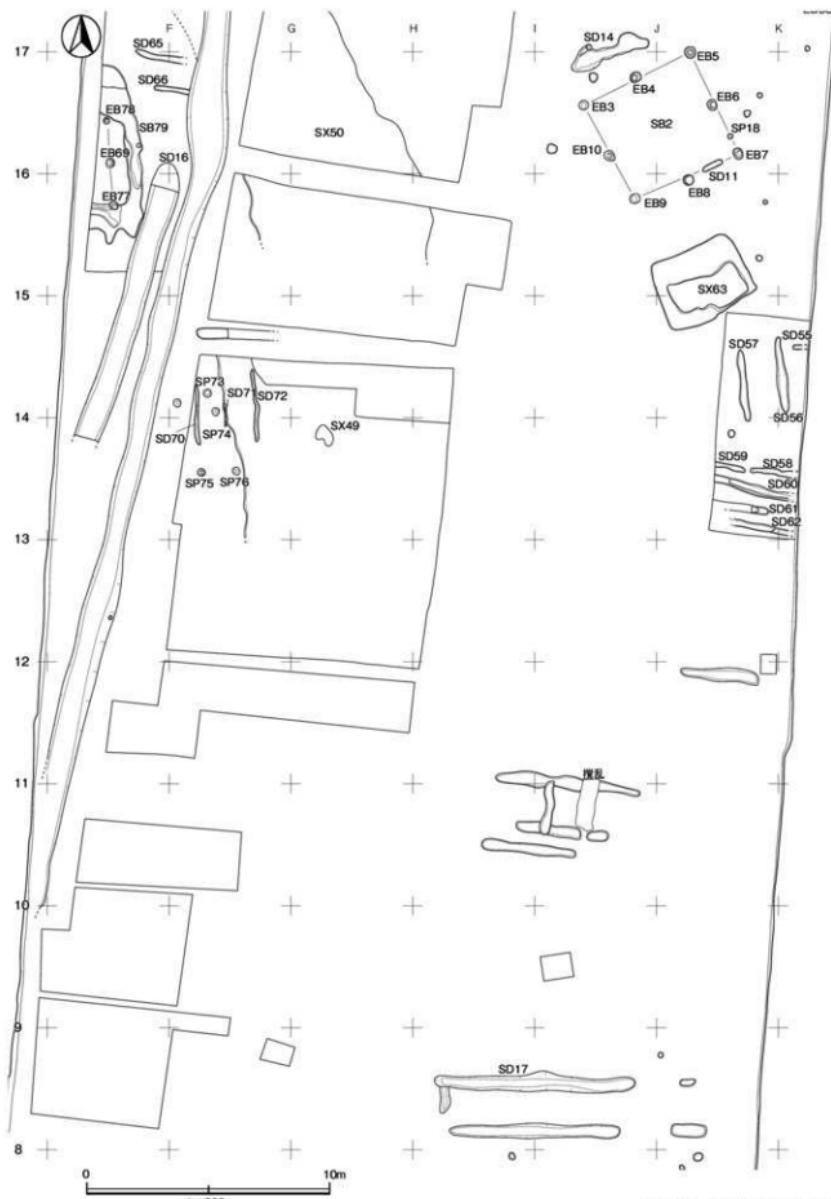
第5図 2区北造構配図



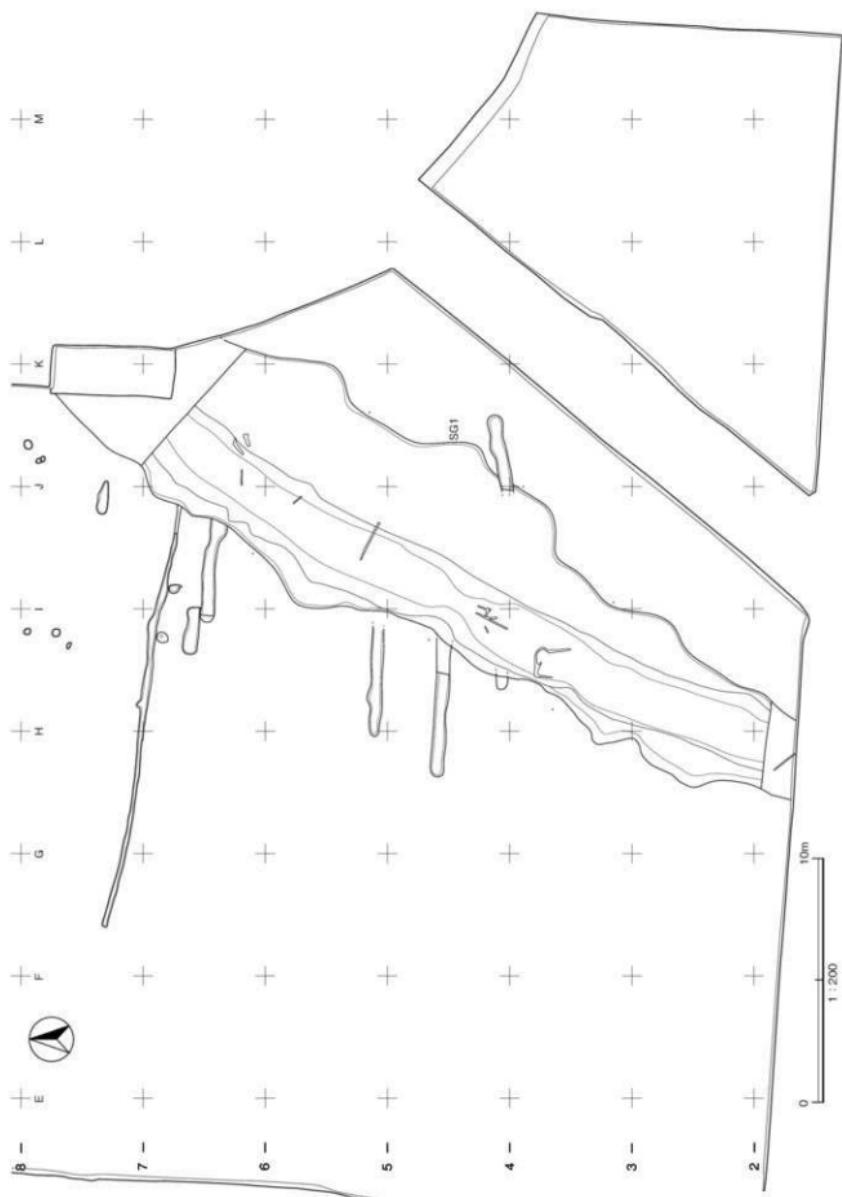
第6図 2区中央造構配図



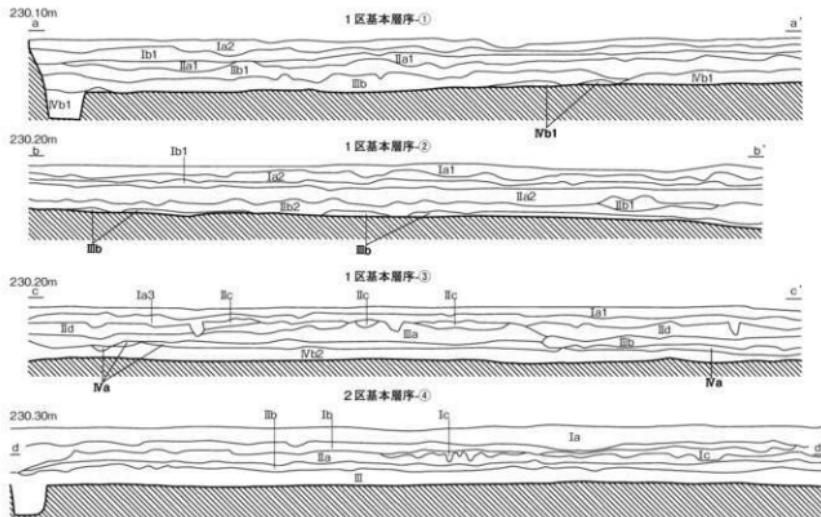
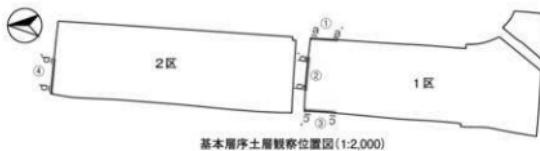
第7図 2区南・1区北造構配置図



第8図 1区中央構造配置図



第9図 1区南造構配置図



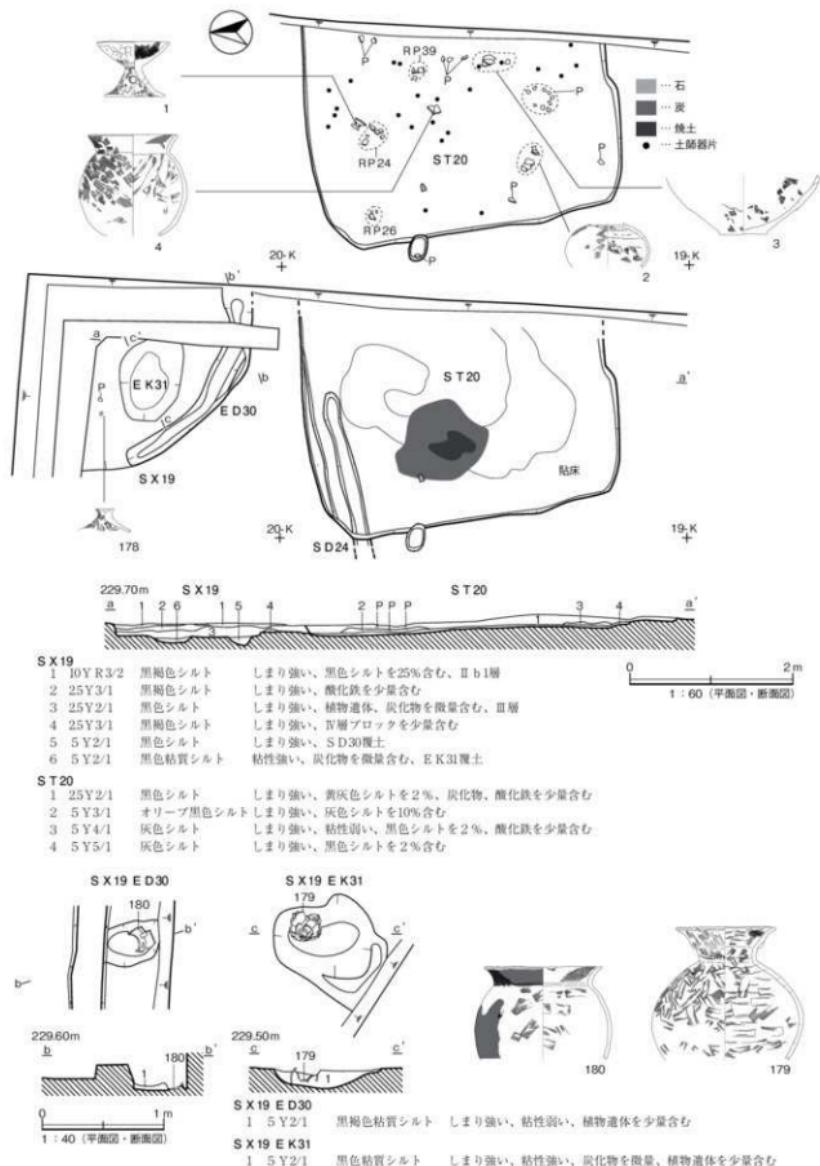
1区基本層序①～③

I a 1	10Y R3/2 黒褐色シルト	しまり強い。表土
I a 2	10Y R3/2 黒褐色シルト	酸化鉄を含む。耕作土
I a 3	10Y R4/1 褐灰シルト	しまり強い。黒色泥炭を微量、酸化鉄を少量含む
I b 1	10Y R3/1 黒褐色シルト	しまり強い。黒色シルトを3%含む。耕作の擾乱を受ける
I b 2	10Y R4/2 灰黄褐色シルト	しまり強い。粘性中。黒褐色シルトを2%含む
II a 1	25Y 3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い。粘性強い。酸化鉄を含む
II a 2	10Y R3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い。粘性強い。炭化物を10%含む
II b 1	10Y R2/1 黒色粘質シルト	しまり強い。粘性強い。酸化鉄を含む。炭化物を微量含む
II b 2	10Y R2/1 黑褐色粘質シルト	しまり強い。粘性強い。黄灰色粘質シルトを5%含む
II c	10Y R2/2 黒褐色泥炭	しまり弱い。褐灰色シルトを10%含む、分解した泥炭層
II d	10Y R2/2 黒色シルト	しまり弱い。粘性弱い。褐灰色シルトを微量、酸化鉄を含む
III a	10Y R2/2 黒色シルト	しまり弱い。粘性弱い。褐灰色シルトを微量、酸化鉄を含む、遺物包含層
III b	25Y 3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い。粘性強い。酸化鉄、炭化物を微量含む、遺物包含層
IV a	25Y 4/1 黄灰粘質シルト	しまり強い。粘性強い。酸化鉄を含む
IV b 1	10Y R5/1 褐色粘質シルト	しまり強い。粘性強い。酸化鉄を含む、透構検出面
IV b 2	25Y 4/1 黄灰色シルト	しまり強い。粘性強い。酸化鉄を含む、透構検出面

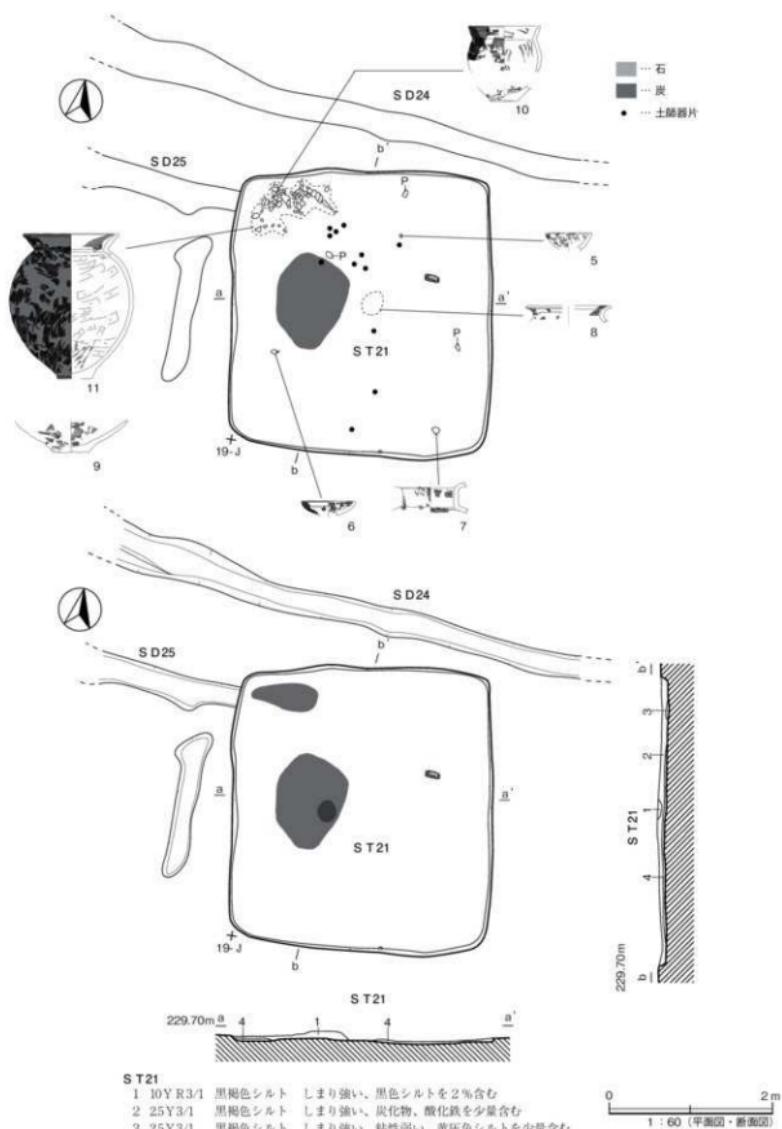
2区基本層序④

I a	10Y R4/1 褐灰色粘質シルト	しまり強い。表土
I b	10Y R3/1 黒褐色シルト	しまり強い。耕作を3%、酸化鉄を少量含む
I c	10Y R4/2 灰黄褐色粘質シルト	しまり強い。粘性弱い。褐灰色粘土を5%、植物遺体を少量含む
II a	黑色粘質シルト	しまり強い。ぶい黄褐色シルトを3%、酸化鉄を少量含む
II b	10Y R4/1 褐灰色砂質シルト	しまり強い。黄灰色砂質シルトを2%、植物遺体を少量含む
III	25Y 6/1 黄灰色砂質シルト	しまり強い。耕作を5%含む、透構検出。地山

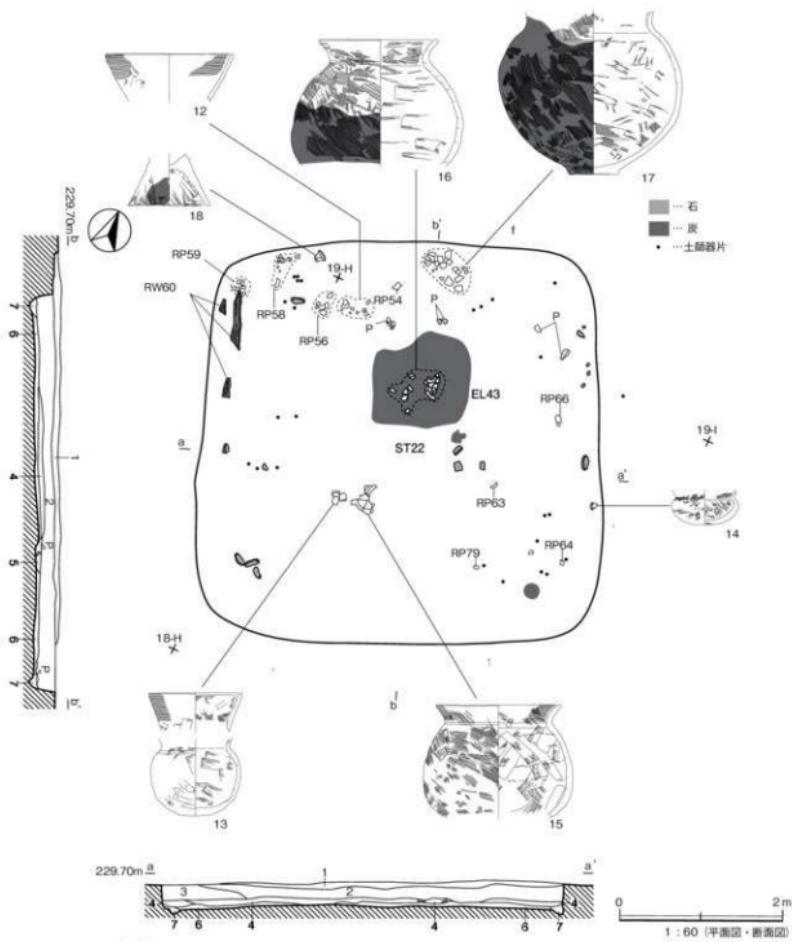
第10図 調査区基本層序



第11図 ST 20 積穴住居跡・SX 19 性格不明遺構

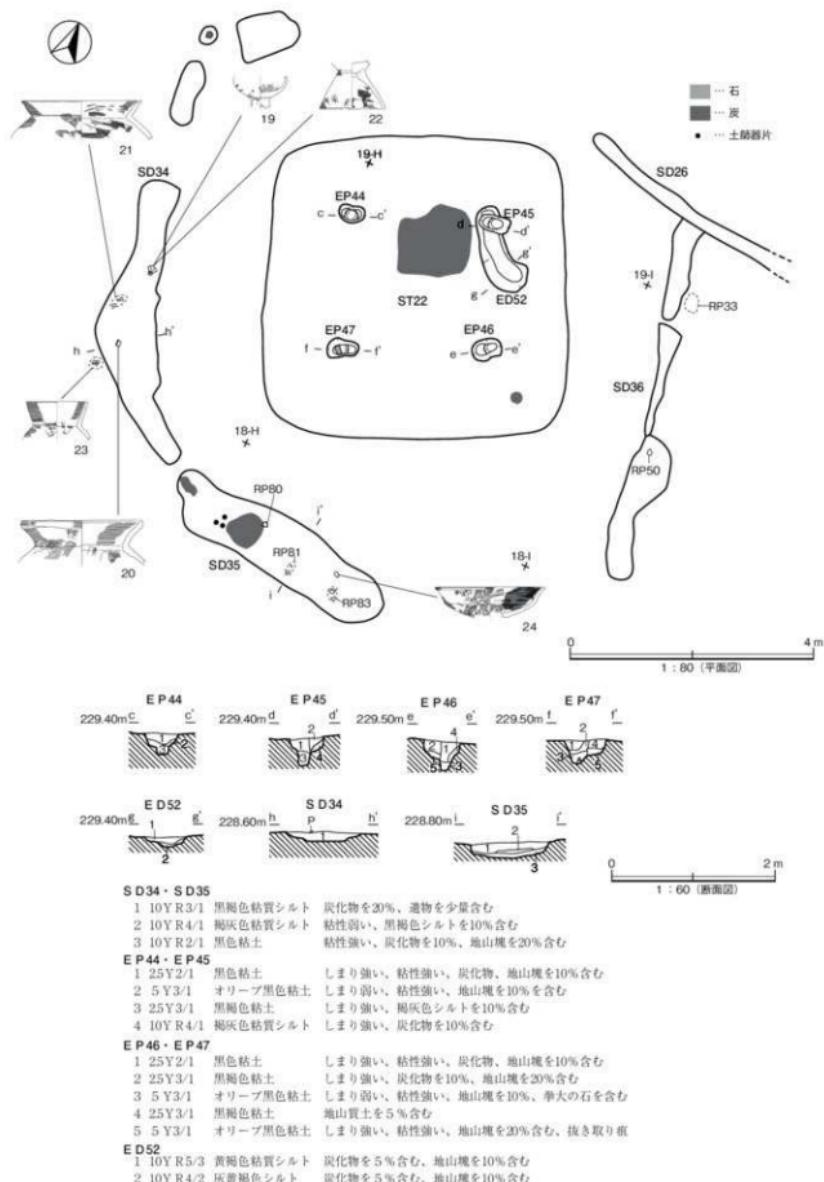


第12図 ST 21 竪穴住居跡

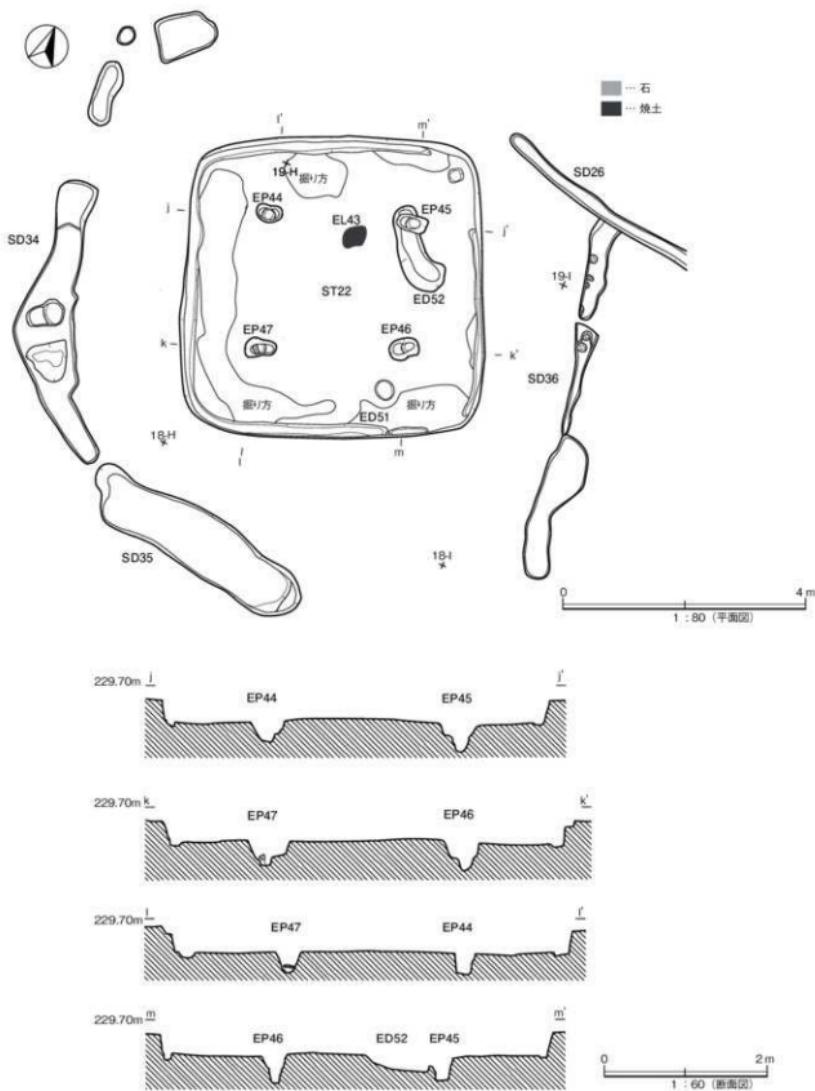
**S T 22**

- 1 25Y5/2 灰褐色シルト しまり強い、黒色シルトを15%含む
- 2 5Y3/1 オリーブ黑色シルト しまり強い、植物遺体を少量、炭化物を微量含む
- 3 5Y3/1 オリーブ黑色シルト しまり強い、粘性弱い、灰色シルトを15%含む
- 4 10Y R3/2 黑褐色シルト しまり強い、オリーブ黑色シルトを10%含む、炭化物を15%含む
- 5 10Y R2/1 黒色粘質シルト しまり強い、炭化物を非常に多く含む、か跡上面の後層
- 6 5Y3/1 オリーブ黑色シルト しまり強い、灰オリーブ色微砂を30%含む、住居貼床
- 7 5Y5/1 灰色オリーブ砂 しまり強い、オリーブ黑色シルトを10%含む、住居内壁溝覆土

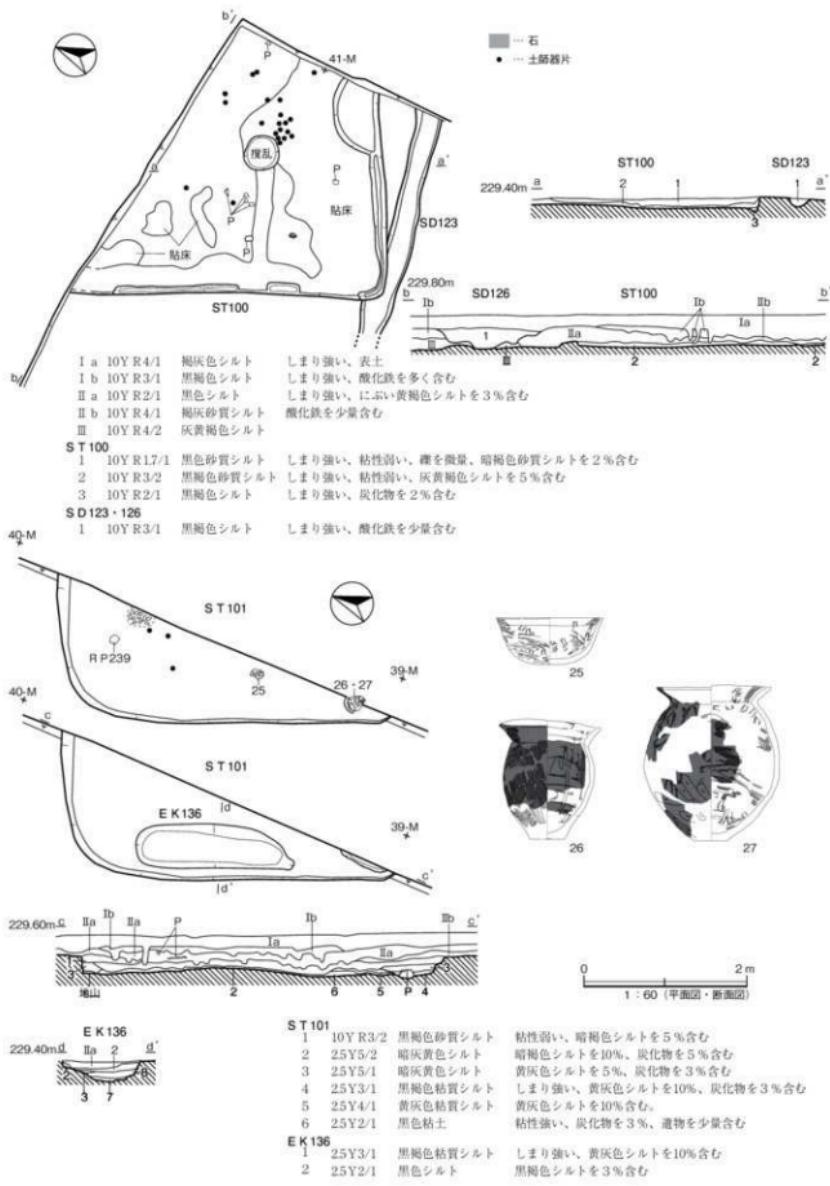
第 13 図 S T 22 穫穴住居跡 (1)



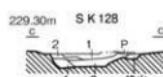
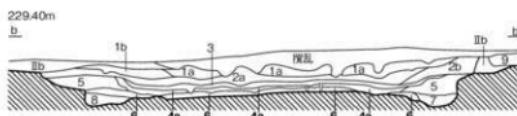
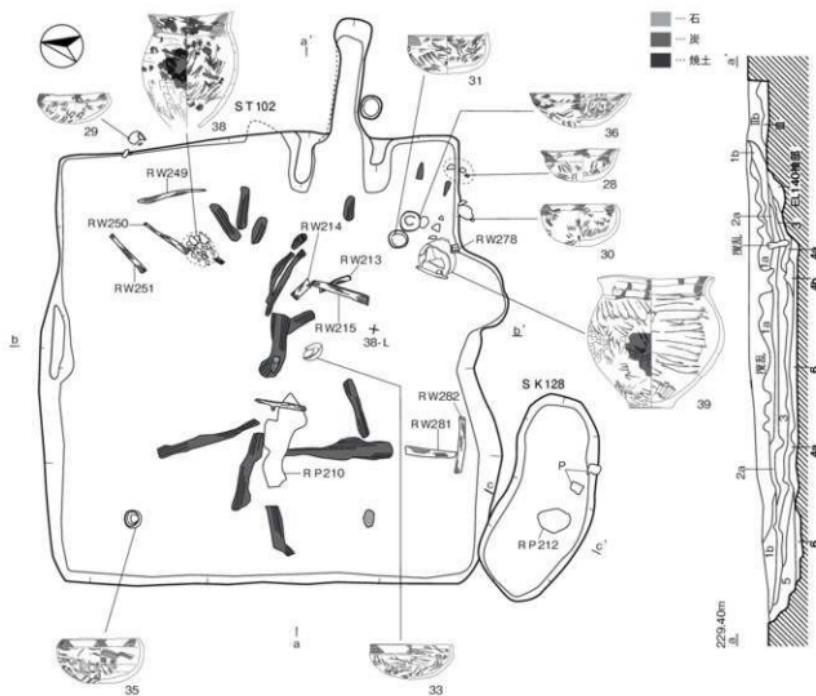
第14図 ST 22 穫穴住居跡 (2)



第 15 図 ST 22 積穴住居跡 (3)



第16図 ST 100・101 竪穴住居跡



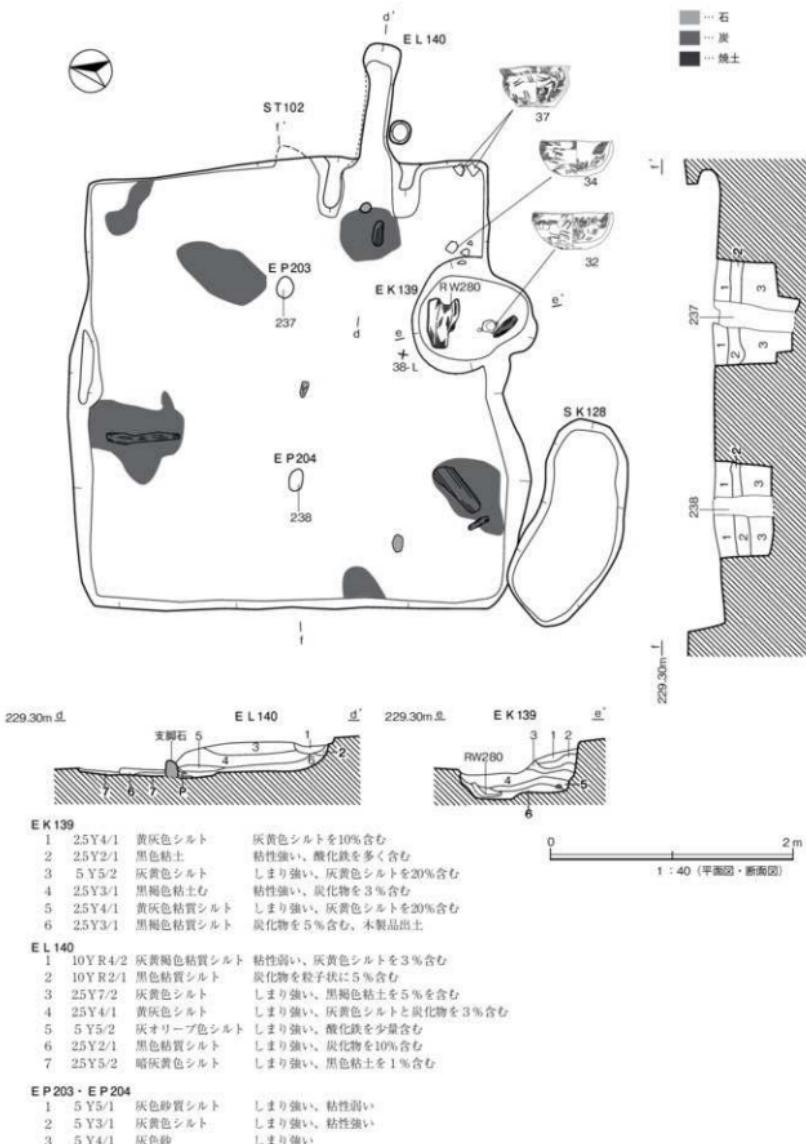
S T 102

- | | | | |
|----|----------|----------|-------------------------|
| 1a | 10YR 2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性弱い、植物遺体を帯状に10%含む |
| 1b | 25SY5/1 | 褐灰色シルト | 褐灰色シルトを3%含む |
| 2a | 10YR 2/1 | 黒褐色粘質シルト | 粘性弱い、植物遺体を多く含む |
| 2b | 10YR 4/1 | 褐灰色粘質シルト | しまり強い、褐灰色シルトと炭化物を5%含む |
| 2c | 25Y8/2 | 黒色粘土 | 粘性弱い、炭化物を3%含む |
| 4a | 25ZY2/1 | 黒色粘質シルト | 黄褐色シルトを3%、炭化物を10%含む |
| 4b | 25ZY3/1 | 暗褐色シルト | 下界構築材 (RW213-215) |
| 5 | 25Y3/2 | 黒褐色シルト | しまり強い、褐灰色シルトと炭化物を10%含む |
| 6 | 25Y3/1 | 黒褐色粘質シルト | しまり強い、炭化物を15%含む(底面直下) |
| 7 | 25Y2/1 | 黒褐色粘質シルト | しまり強い、炭化物を5%含む、E K139覆土 |
| 8 | 10YR 3/2 | 黒褐色粘土 | しまり強い、褐灰色シルトと3%含む |
| 9 | 25Y5/2 | 黒灰褐色シルト | しまり強い、黒褐色シルトと3%含む |

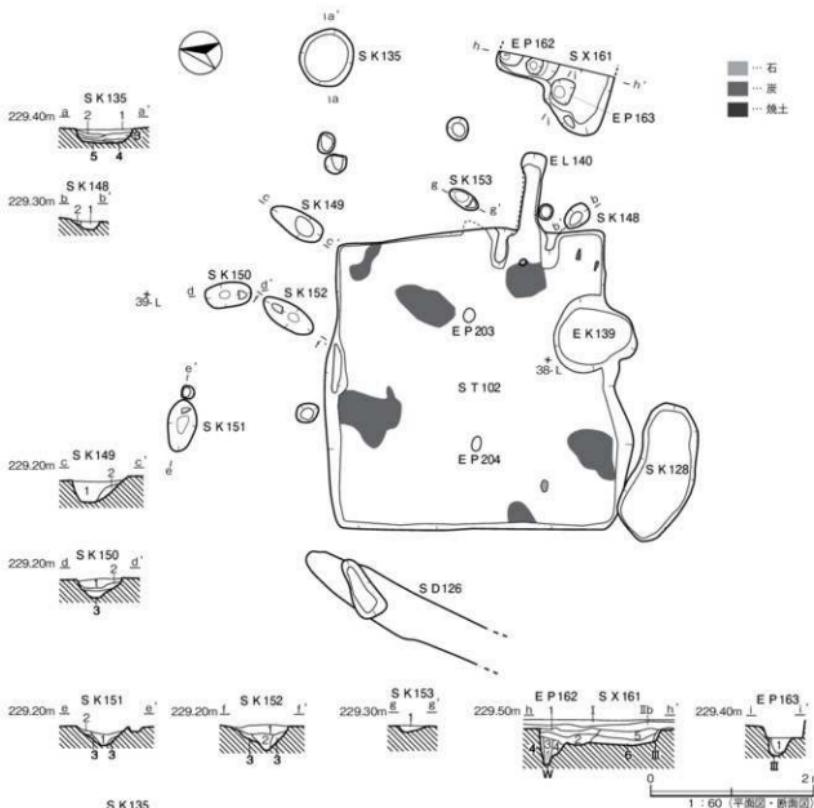
8 M 120

- | | | | |
|------|-----------|---------|-------------------|
| K120 | 10 YR R/2 | 黒色粘質シルト | 粘性弱い、炭化物を3%、遺物を含む |
| 2 | 10 YR R/3 | 黒褐色シルト | しまり強い、黄灰色シルトを3%含む |
| 3 | 2.5 Y4/1 | 褐褐色シルト | 炭化物を3%含む |
| 4 | 2.5Y3/1 | 黄褐色シルト | 黄灰色シルトを2%含む |

第17図 ST 102 體穴住居跡（1）



第18図 ST 102 肩穴住居跡 (2)



S K135			
1	10 YR 4/1	褐灰色粘質シルト	粘性弱い、炭化物を2%含む
2	25 Y5/2	暗灰黃粘質シルト	粘性弱い、灰黃色シルトを5%含む
3	25 Y3/2	黑褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物を5%含む
4	25 Y4/2	暗灰黃色膠質シルト	しまり強い、灰黃色シルトを7%含む
5	10 YR 2/1	黑赤色粘土	しまり強い、粘性強い

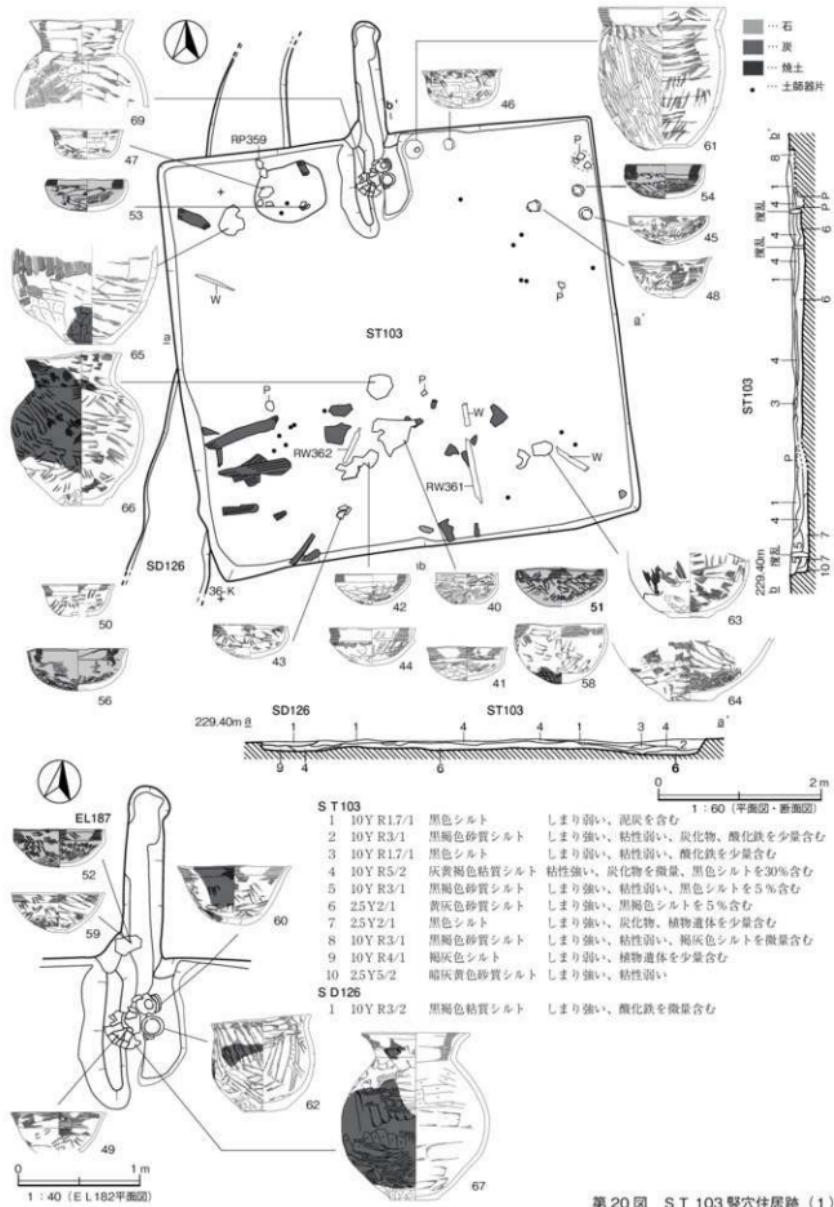
S K148 - 149 - 150 - 151 - 152 - 153	
1 10YR3/2	黑褐色粘土 粘性強い、灰黄色シルトを10%含む
2 2.5Y5/2	暗灰黄色粘質シルト 粘性強い、灰黄色シルトを5%含む
3 25Y3/1	黑褐色シルト しまり強い、灰黄色シルトを3%含む

S X161

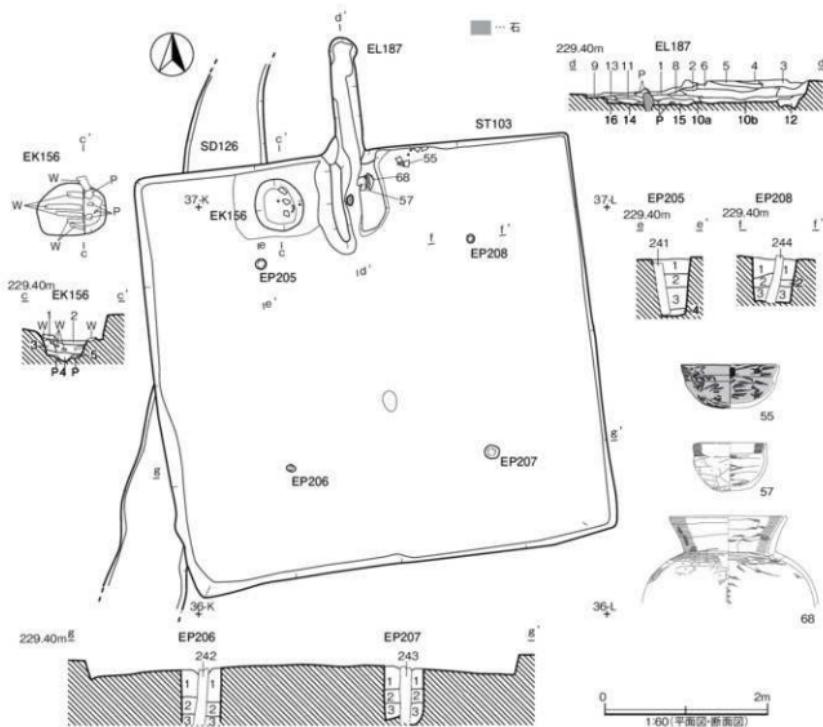
1	10YR2/1	黒色シルト	炭化物を5%含む
2	10YR3/1	黒褐色粘質シルト	粘性弱い、灰黃色シルトを3%含む
3	10YR3/3	暗褐色粘土	粘性強い、酸化鉄を少し含む。柱痕
4	5Y6/2	灰黃色シルト	黒褐色粘土を3%含む、柱穴埋土
5	25Y3/2	黒褐色粘質シルト	灰黃色シルトを5%含む
6	25Y4/1	黒灰色シルト	黒褐色粘土を1%含む

E P 163

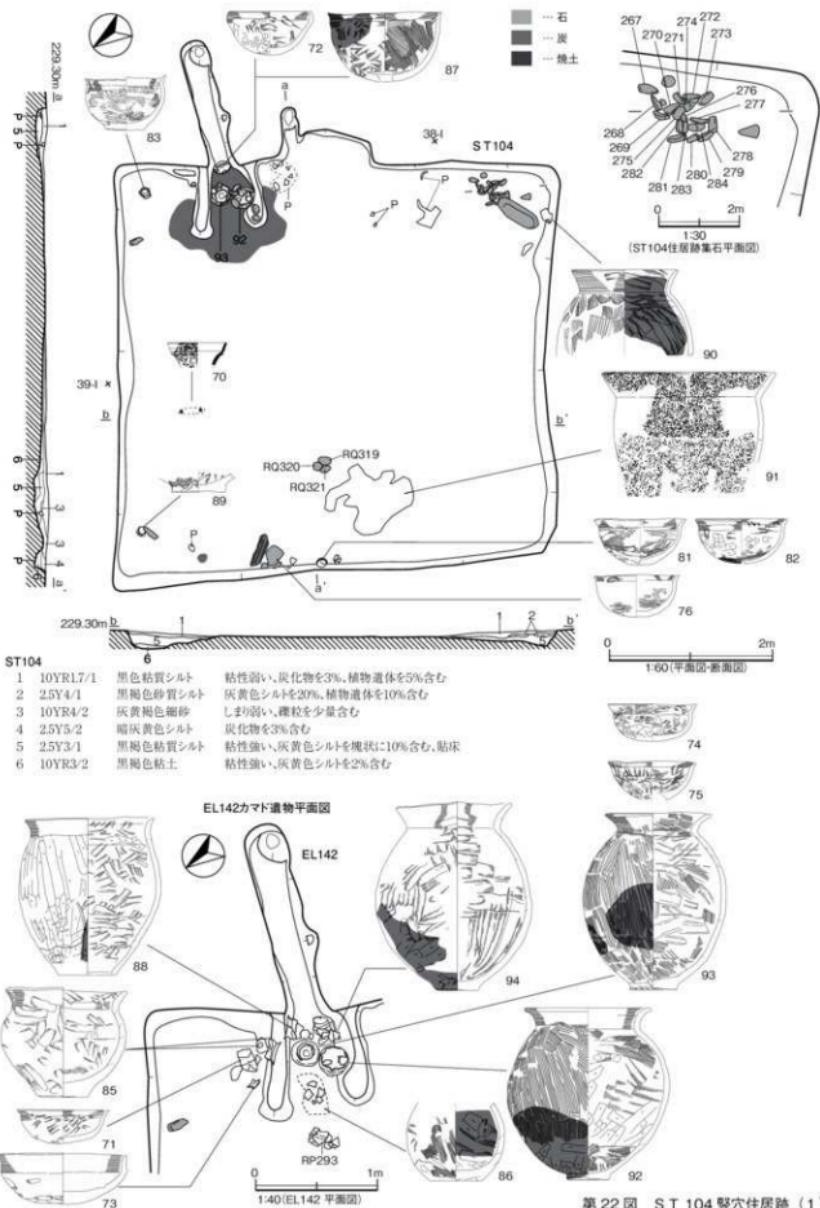
第19図 ST 102 竪穴住居跡（3）



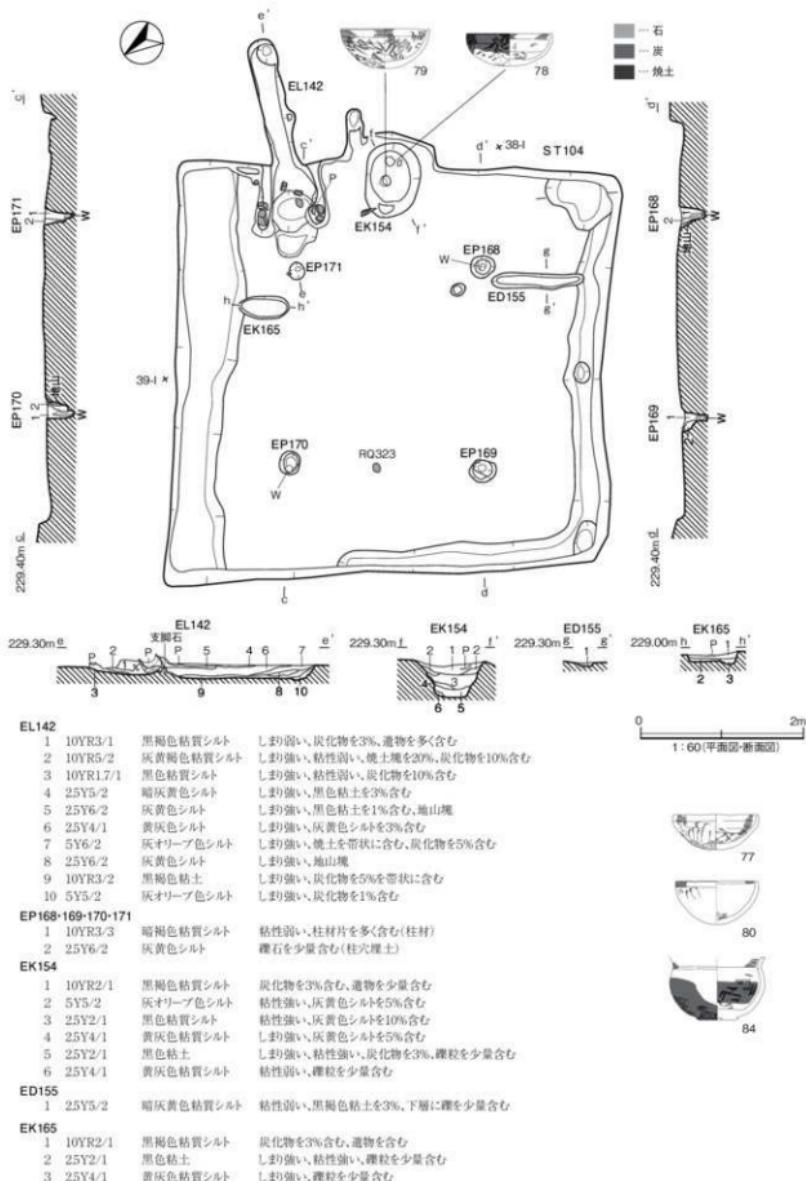
第20図 ST 103 竪穴住居跡（1）



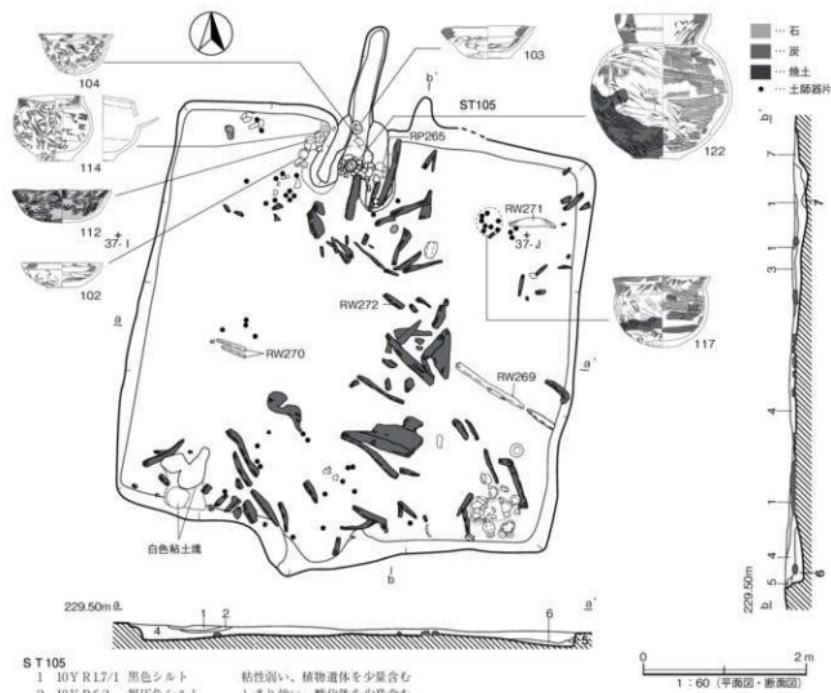
第21図 ST 103 穫穴住居跡 (2)



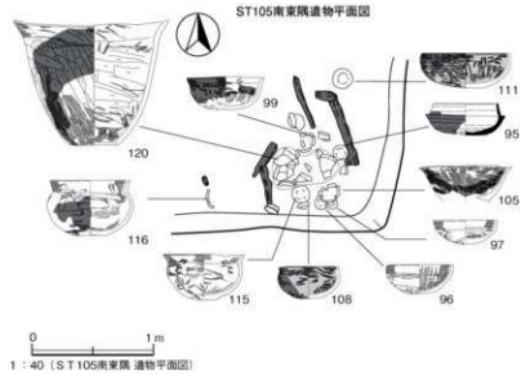
第22図 ST 104 垂穴住居跡 (1)



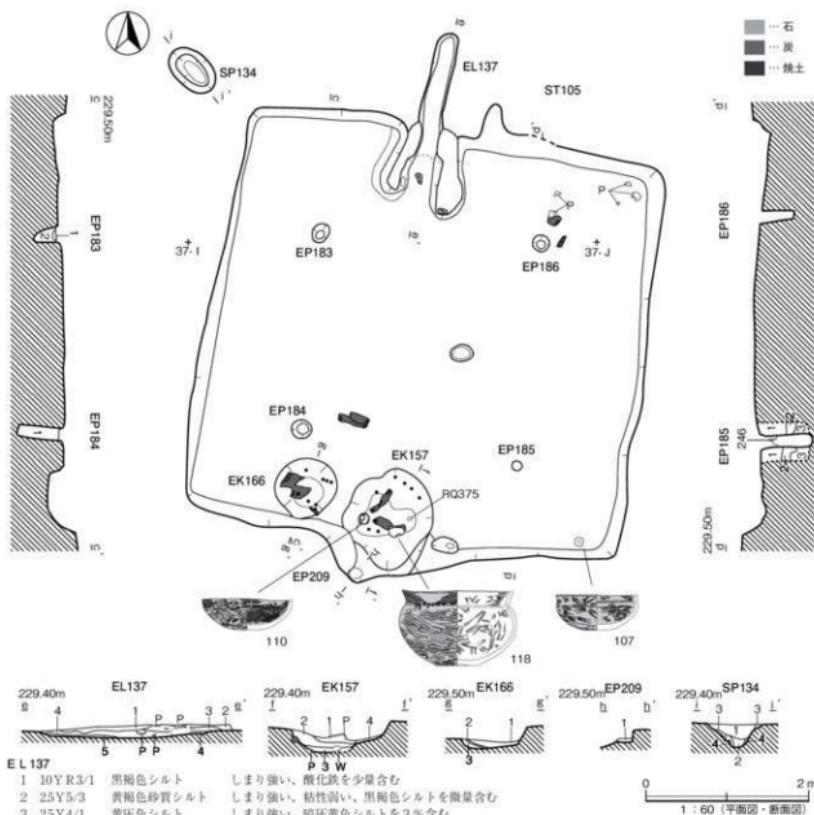
第23図 ST 104 竪穴住居跡 (2)



S T 105 底面出土遺物



第24図 S T 105 竪穴住居跡 (1)

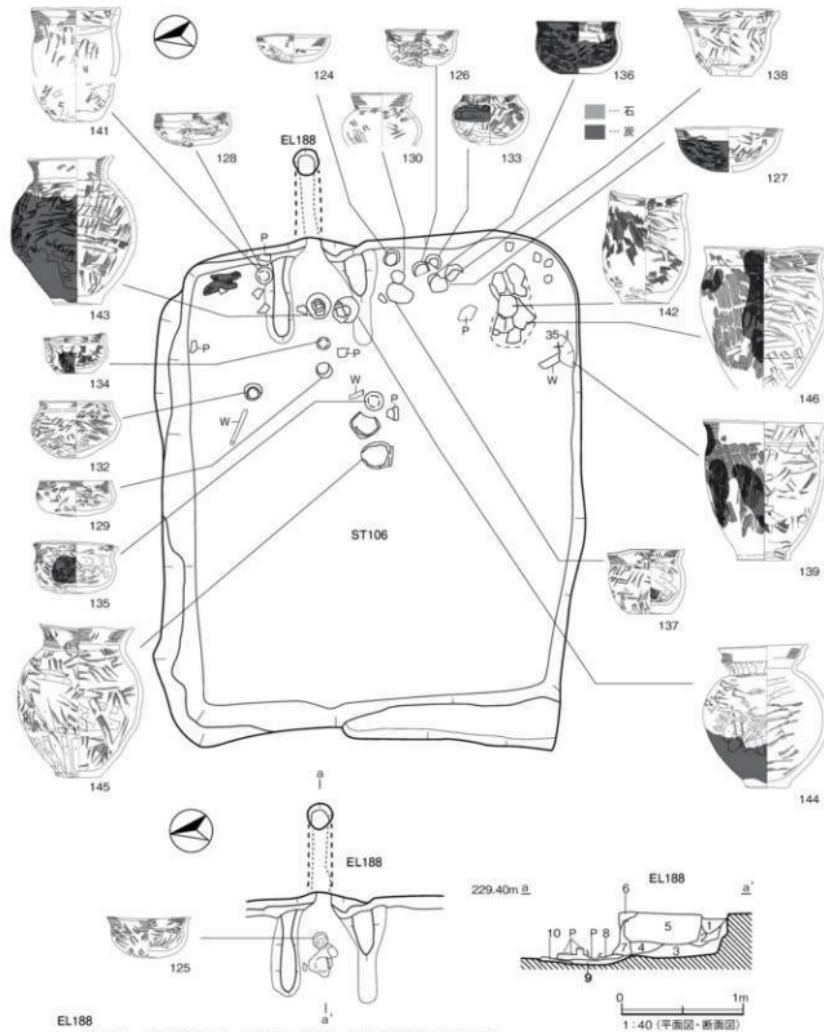


E K 166 出土遺物

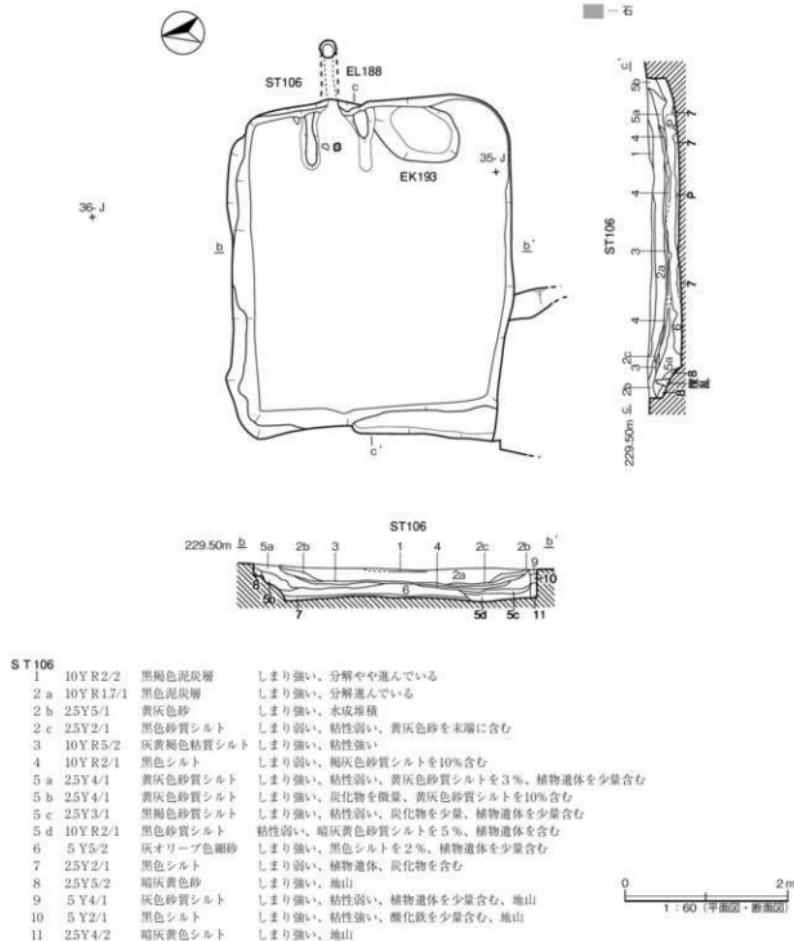


1	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
2	25Y5/3	黄褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトを微量含む
3	25Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、暗灰褐色シルトを3%含む
4	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、炭化物を少量、にぶい黄褐色シルトを3%含む
5	25Y6/2	黄灰色細砂	黒褐色シルトを5%含む
E K157			
1	10YR17/1	黒色シルト	黄褐色砂質シルトを10%含む
2	25Y2/1	黒色シルト	炭化物を2%、黄灰色砂質シルトを5%含む
3	25Y3/1	黒褐色砂質シルト	炭化物を2%含む
4	25Y5/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い。黄灰色砂質シルトを5%含む
E K166			
1	25Y4/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い。黄灰色砂質シルトを5%含む
2	10YR8/2	白色粘土	しまり強い、粘性弱い、塊状に入る
3	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、炭化物を少量含む
E P183			
1	10YR5/2	黄褐色砂質シルト	粘性強い
2	25Y2/1	黒色シルト	しまり弱い、粘性強い、植物遺体を多く含む
E P184			
1	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、植物遺体を多く含む
E P185			
1	25Y5/1	黄灰色砂	しまり強い
2	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性やや強い 円錐含む
E P209			
1	25Y2/1	黒色シルト	しまり強い、酸化鉄を微量含む
S P134			
1	25Y2/1	黒色シルト	しまり強い

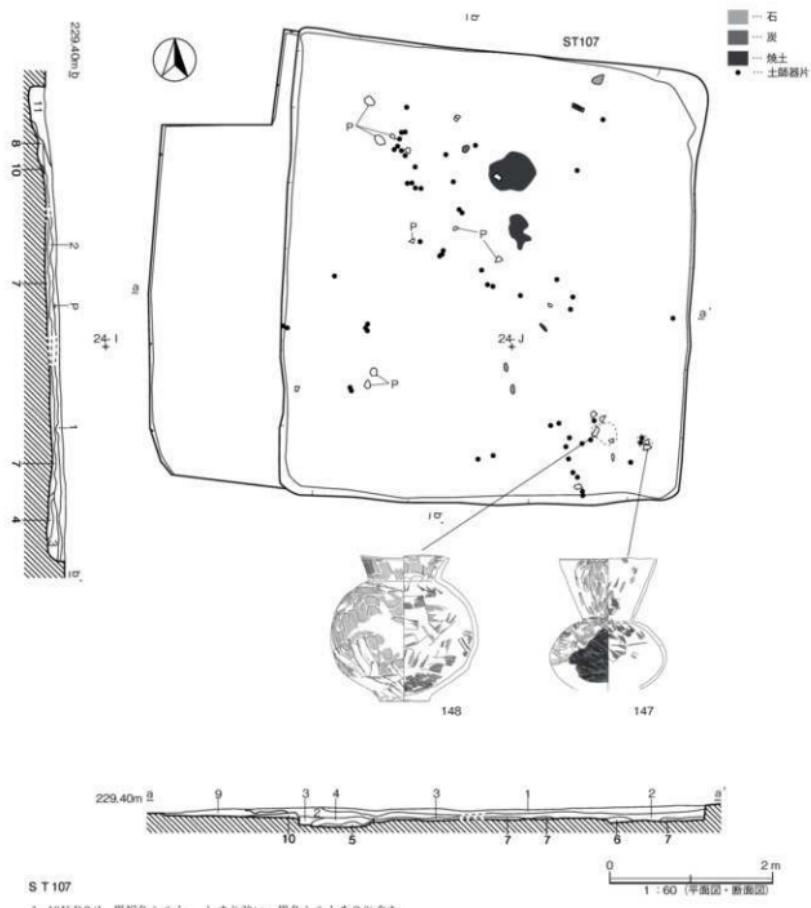
第25図 ST 105 體穴住居跡(2)



第26図 ST 106 體穴住居跡（1）



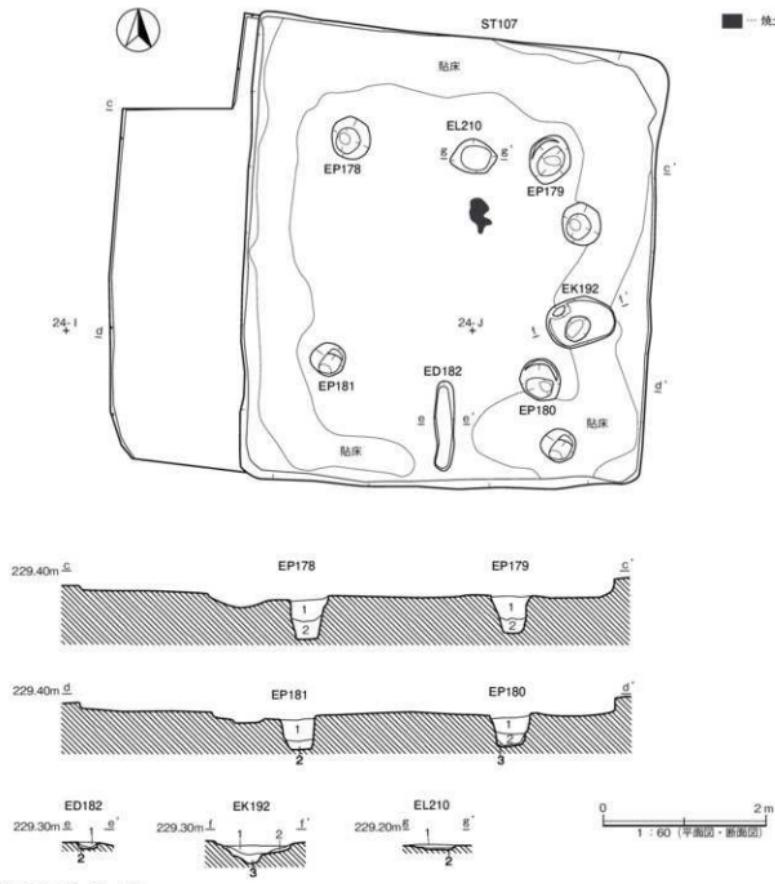
第27図 ST 106 積穴住居跡（2）



S T 107

- | | | |
|-------------|---------|--------------------------------|
| 1 10Y R3/1 | 黒褐色シルト | しまり強い、黒色シルトを3%含む |
| 2 10Y R | 黒褐色シルト | しまり強い、炭化物を微量、灰黃褐色シルトを3%含む |
| 3 5Y4/1 | 灰色シルト | しまり強い、粘性強い、黒色シルトを5%含む |
| 4 25Y2/1 | 黒色シルト | しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを5%含む |
| 5 5Y4/1 | 黄灰色シルト | しまり強い、黒色シルトを10%含む |
| 6 25Y3/1 | 黒褐色シルト | しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを5%含む |
| 7 25Y | 暗灰褐色シルト | しまり強い、粘性強い、黒褐色シルトを5%含む |
| 8 25Y3/1 | 黒褐色シルト | しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを5%、植物遺体を少量含む |
| 9 10Y R3/1 | 黒色シルト | しまり強い、植物遺体を少量含む、地山 |
| 10 25Y4/1 | 黄灰色シルト | しまり強い、植物遺体を微量含む、地山 |
| 11 10Y R2/2 | 黒色泥炭層 | しまり弱い |

第28図 S T 107 竪穴住居跡 (1)

**E P 178 - 179 - 180 - 181**

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1 25Y3/1 黒褐色粘質シルト | 灰白色シルトを20%含む。炭化物を5%含む |
| 2 25Y2/1 黒色粘土 | 粘性強い、灰白色シルトを10%。炭化物を3%含む |
| 3 25Y3/2 黑褐色粘土 | しまり強い、粘性強い、灰白色シルト、炭化物を3%含む |

E D 182

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 25Y3/1 黒褐色粘土 | しまり強い、灰白色シルトを3%含む |
| 2 25Y6/2 灰黄色粘質シルト | しまり強い |

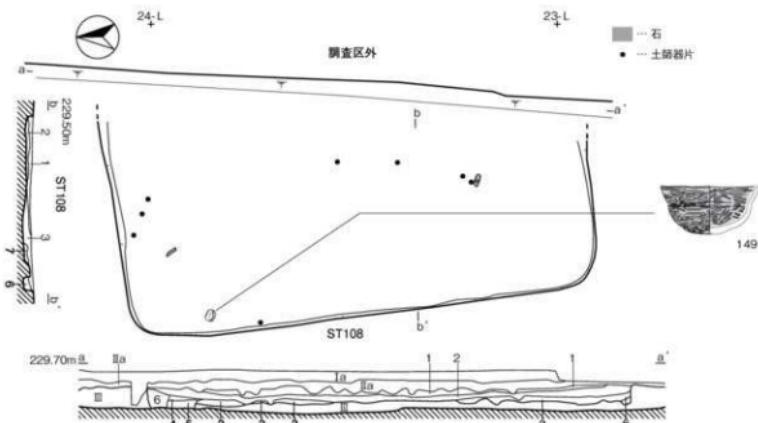
E K 192

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1 25Y3/2 黒褐色粘質シルト | 粘性強い、灰白色シルトを3%含む |
| 2 25Y3/3 灰褐色粘土 | 粘性強い、酸化鉄を少量含む |
| 3 25Y2/1 黑褐色粘土 | しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを3%含む |

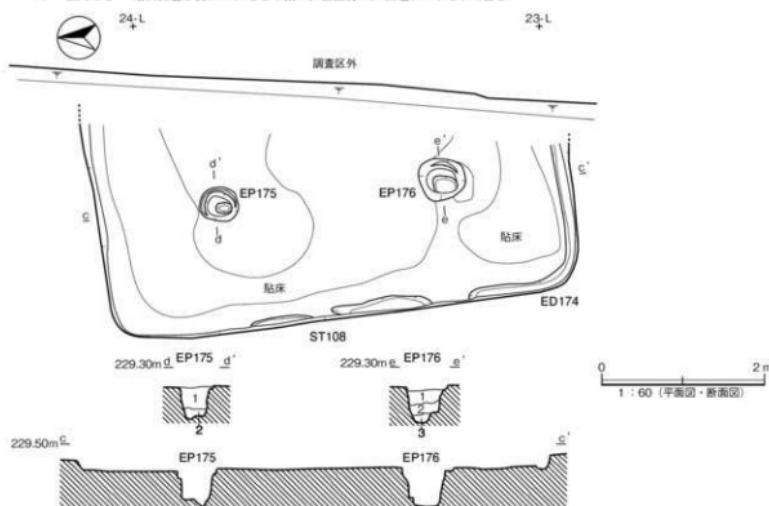
E L 210

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 5 YR5/4 にぶい赤褐色シルト | 炭化物を5%、焼土粒を斑状に15%含む |
| 2 25Y5/2 灰灰黄色シルト | しまり強い、粘性強い、黑褐色シルトを5%含む |

第29図 ST 107 穫穴住居跡（2）

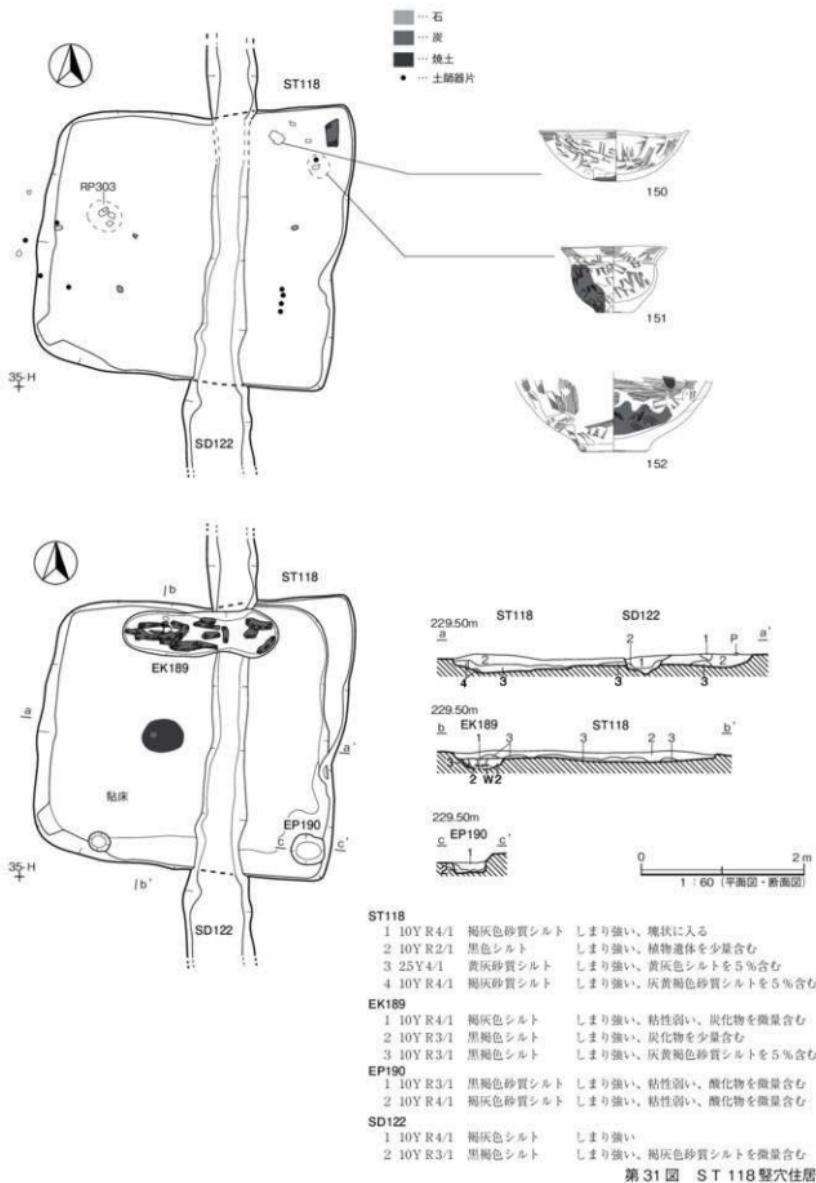


- | | | | |
|--------------|-----------|----------|-------------------------------|
| I a | 10 YR 4/1 | 褐灰シルト | しまり強い、表土 |
| II a | 10 YR 2/1 | 黒色シルト | しまり強い、にぶい黄褐色シルトを3%含む |
| ST108 | | | |
| 1 | 10 YR 4/1 | 褐灰色粘質シルト | 粘性弱い、灰白色粘土。灰化物を10%含む |
| 2 | 10 YR 3/1 | 黒褐色粘質シルト | 粘性弱い、炭化物を2%、酸化鉄を少量含む。 |
| 3 | 25Y3/2 | 黒褐色シルト | しまり強い、地山土質を20%。炭化物を2%含む、住居點床 |
| 4 | 10 YR 2/2 | 黒褐色粘質シルト | しまり強い、炭化物を2%含む |
| 5 | 10 YR 2/1 | 黒色粘土 | 粘性強い、地山土質、炭化物を2%含む |
| 6 | 10 YR 4/1 | 褐灰色シルト | しまり強い、地山土質5%、炭化物を2%含む、E 174擁土 |
| 7 | 25Y4/2 | 明黄色粘質シルト | しまり強い、粘性弱い。黒色シルトを7%含む |



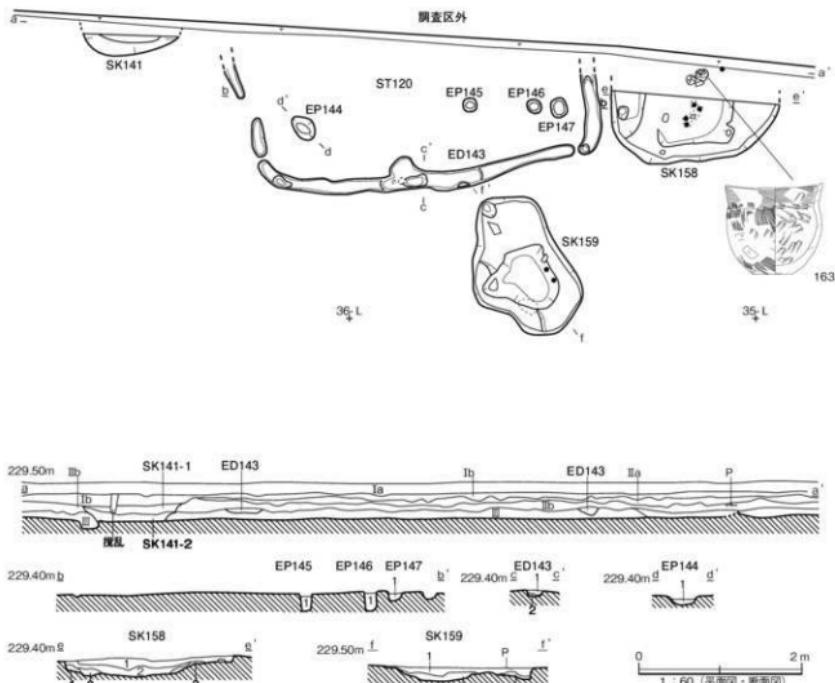
- | EP175-176 | | 黒褐色粘質シルト | 灰黄色シルトを20%、炭化物を7%含む |
|-----------|--------|----------|--------------------------|
| 1 | 25Y3/1 | 黒色粘質シルト | 粘性強い、灰黄色シルトを20%、炭化物を5%含む |
| 2 | 25Y2/1 | 黑色粘質シルト | しまり強い、粘性強い、炭化物を3%含む |
| 3 | 25Y4/1 | 黄褐色粘質シルト | |

第30図 ST 108 髪穴住居跡





— 石
— 砂
— 土
● 土器片



- I a 10Y R4/1 黒褐色粘質シルト しまり強い、表土
 I b 10Y R3/1 黒褐色シルト しまり強い、繊維を3%、酸化鉄を少量含む
 II a 10Y R2/1 黒色粘質シルト しまり強い、にぶい黄褐色シルトを3%、酸化鉄を少量含む
 II b 10Y R4/1 黑褐色砂質シルト しまり強い、黄灰色砂質シルトを2%、植物遺体を少量含む
 III 25Y G6/1 黄褐色砂質シルト しまり強い、繊維を5%含む、地山

- S T 120**
E D143
 1 10Y R2/1 黒色粘質シルト 粘性弱い、炭化物を3%、遺物を少量含む
 2 10Y R6/2 灰褐色シルト 黑色粘土を5%含む

- E P 144**
 1 10Y R6/2 灰褐色シルト 黑色粘土を5%含む

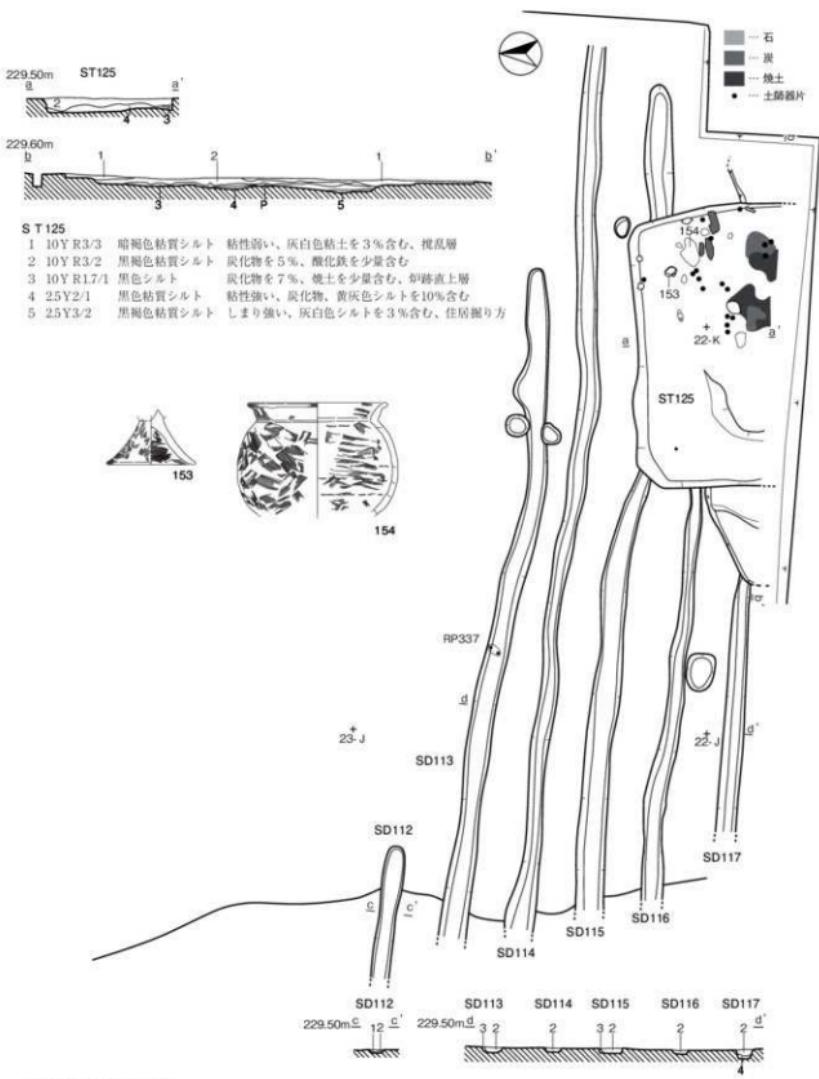
- E P 145・146・147**
 1 10Y R2/1 黑色粘土 粘性強い、炭化物を3%含む

- S K 141**
 1 10Y R3/2 黑褐色粘質シルト 炭化物を5%含む
 2 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 炭化物を5%含む

- S K 158**
 1 10Y R17/1 黑色シルト しまり強い、酸化鉄を少量、灰黃褐色砂質シルトを2%含む
 2 10Y R2/1 黑色シルト しまり強い、粘性強い、酸化鉄を少量、灰黃褐色砂質シルトを7%含む
 3 10Y R5/2 灰褐色砂質シルト 粘性弱い、黑色シルトを15%含む
 4 10Y R5/2 灰褐色砂質シルト しまり弱い

- S K 159**
 1 10Y R2/1 黑色砂質シルト しまり強い、酸化鉄を少量、炭化物を微量含む
 2 25Y S/2 暗灰褐色砂質シルト しまり強い、黑色シルトを5%含む

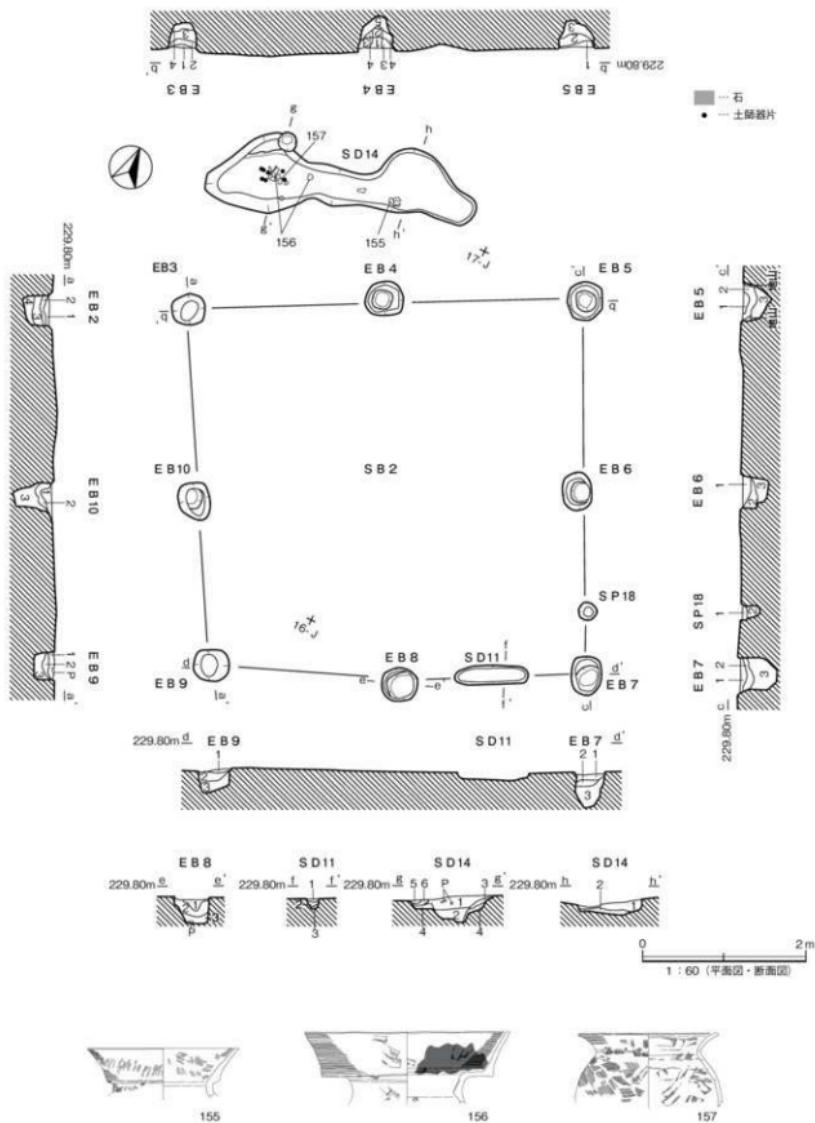
第32図 ST 120 竪穴住居跡・SK 158・159 土坑



歛状遺構 (SD 112~117)

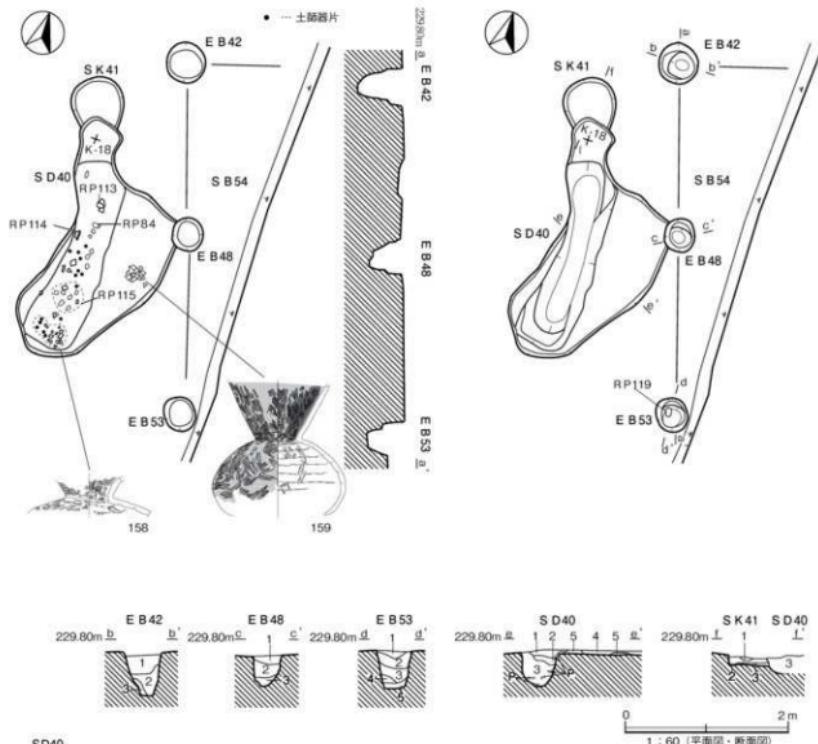
- | | | |
|----------|----------|---------------------|
| 1 25Y3/1 | 黒褐色粘質シルト | しまり強い、酸化鉄を少量含む |
| 2 25Y2/1 | 黒色シルト | しまり強い、暗灰黄色シルトを5%含む |
| 3 25Y4/1 | 黄灰色粘質シルト | しまり強い、粘性弱い |
| 4 25Y4/2 | 黄灰色シルト | しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を少量含む |

第33図 ST 125 竪穴住居跡・SD 112~117 歛状遺構



第34図 SB2 振立柱建物跡・SD14溝跡

S B 2		
E B 3		
1 10Y R4/1	褐色灰色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%、酸化鉄を含む
2 10Y R3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を5%，酸化鉄を含む
3 25Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを斑状に5%含む
4 25Y2/1	黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を10%，酸化鉄を含む
E B 4		
1 10Y R2/1	黒色粘土	しまり強い、炭化物（φ 3mm）を10%含む、柱痕
2 10Y R2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を10%含む、柱痕
3 10Y R4/1	褐色灰色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を10%，地山粒を含む
4 25Y3/1	黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を10%，酸化鉄を含む
5 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を5%，酸化鉄を含む
E B 5		
1 10Y R3/1	黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを斑状に10%含む
2 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を10%，地山粒を5%含む
3 10Y R6/2	灰黃褐色粘質シルト	しまり弱い、灰褐色粘土を斑状に10%含む
E B 6		
1 10Y R3/1	黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを斑状に10%含む
2 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 3mm）を10%，地山粒を5%含む
3 25Y2/1	黑色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、地山ブロックを斑状に10%含む
E B 7		
1 10Y R3/1	黒褐色粘土	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%含む
2 25Y3/1	黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 2～3mm）を10%，酸化鉄を含む
3 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 2～3mm）を10%，酸化鉄を含む
E B 8		
1 10Y R2/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%、炭化物（φ 2～3mm）を10%含む
2 25Y3/1	黒褐色粘土	しまり強い、灰白色シルトを斑状に20%、炭化物（φ 2～3mm）を10%含む
3 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 2～3mm）を5%含む、遺物を含む
E B 9		
1 10Y R4/1	褐色灰色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%，遺物を含む
2 25Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物（φ 2～3mm）を10%，酸化鉄を含む
3 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 2～3mm）を5%，酸化鉄を含む
E B 10		
1 10Y R4/1	褐色灰色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%、炭化物（φ 2～3mm）を5%含む
2 25Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物（φ 2～3mm）を10%，酸化鉄を含む
3 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、地山粒を5%，酸化鉄を含む
S D 11		
1 10Y R4/1	褐色灰色粘質シルト	しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを10%含む
2 25Y2/1	黑色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物を10%含む
3 25Y2/1	黑色粘土	しまり強い、粘性強い、地山ブロックを斑状に20%含む
S D 12		
1 10Y R4/1	褐色灰色粘質シルト	しまり強い、炭化物（φ 5mm）を5%含む
2 25Y3/1	黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ 5mm）を5%，酸化鉄を含む
S D 14		
1 10Y R4/1	褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物を5%，遺物を多く含む
2 25Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、地山を斑状に20%。植物遺体を10%含む
3 10Y R4/2	灰黃褐色粘質シルト	しまり強い、地山を斑状に20%含む
4 25Y3/1	黒褐色シルト	粘性強い、褐色粘土を斑状に5%含む
5 10Y R4/1	褐色粘質シルト	地山を斑状に20%含む。推風。
6 25Y2/1	黑色粘質シルト	粘性弱い、植物遺体を10%含む、擾乱



SD40

- 1 25Y3/1 黒褐色シルト しまり強い、黄灰色シルト、炭化物を2%含む
- 2 25Y3/1 黑褐色シルト しまり強い、灰黄色シルト、炭化物を2%含む
- 3 25Y3/1 黑褐色シルト しまり強い、褐灰色シルトを10%、遺物を多量含む
- 4 25Y2/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、粘性強い灰褐色シルトを5%含む
- 5 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強い、酸化鉄を含む

SK41

- 1 25Y8/2 灰白色粘土 しまり強い、酸化鉄を含む
- 2 25Y2/1 黒色シルト しまり強い
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト しまり強い

SB54

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト しまり強い、灰黄色シルトを10%含む、抜き取り痕
- 2 10YR2/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、粘性強い、柱痕
- 3 5Y4/1 灰色シルト しまり強い、灰色シルトを2%含む

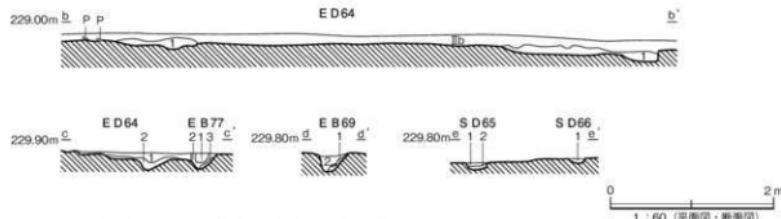
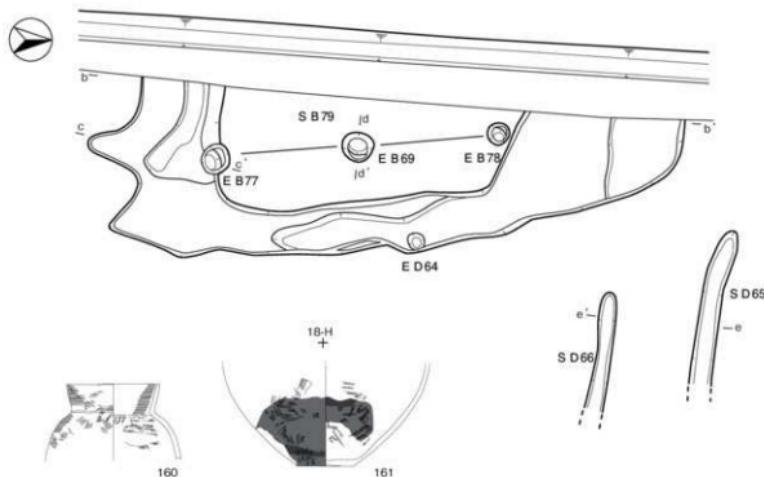
E-B48

- 1 25Y3/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、灰黄色シルトを10%含む
- 2 10YR2/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、粘性強い、灰色シルトを20%含む
- 3 10YR2/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性強い、灰色シルトを5%含む

E-B53

- 1 25Y3/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、灰黄色シルトを粒状に含む
- 2 25Y3/2 黑褐色粘質シルト しまり強い、粘性強い、灰色シルトを5%含む
- 3 25Y3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性強い、灰色シルトを20%含む
- 4 25Y3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性強い、灰色シルトを5%含む
- 5 25Y3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性強い

第35図 S B 54 振立柱建物跡・S D 40溝跡



II b 25Y5/1 黄灰色シルト しまり強い、黒色シルトを20%含む

E D68

- 1 10Y R5/1 黄灰色粘質シルト しまり強い、炭化物を5%を含む
- 2 25Y3/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、黄灰色シルト、炭化物を10%含む

E B69

- 1 25Y2/1 黑褐色粘土 しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを15%、炭化物を3%含む、柱根
- 2 25Y5/1 黄灰色シルト しまり強い、黑褐色シルトを3%を含む
- 3 25Y3/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、黄灰色シルトを5%、漂石を少量含む

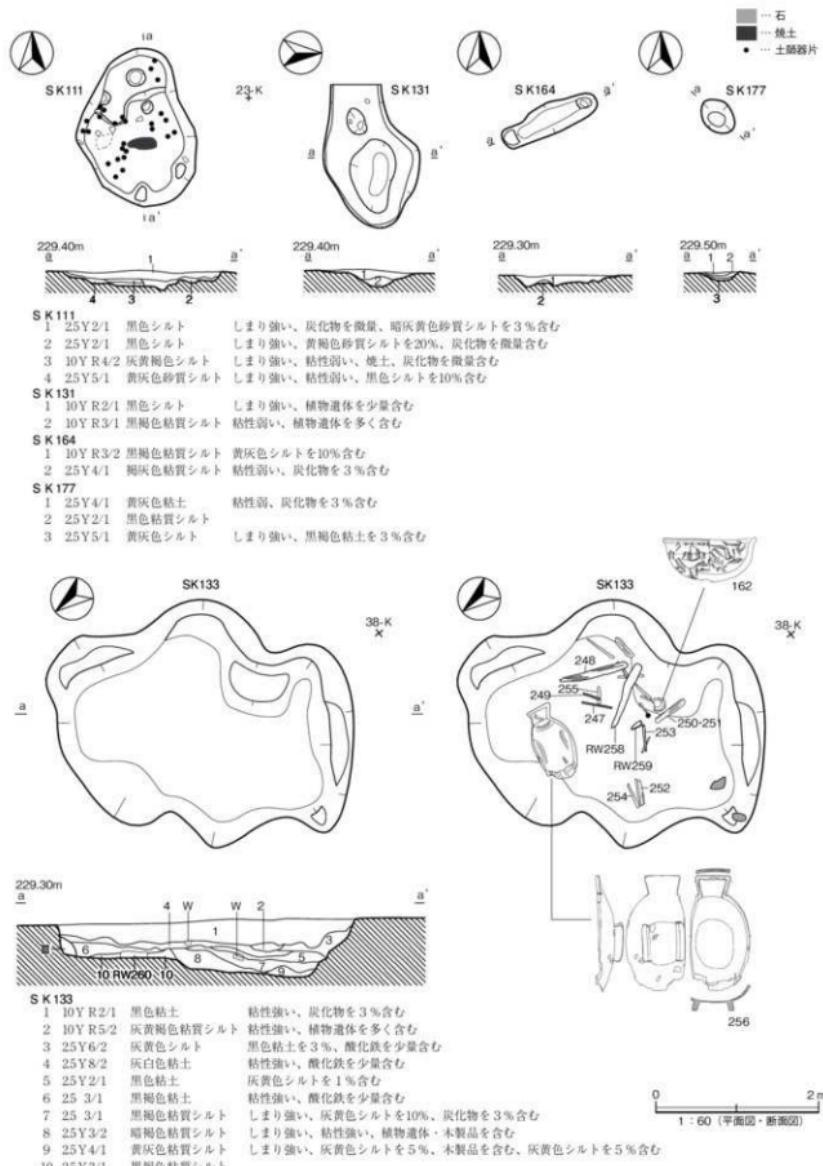
E B77

- 1 25Y3/2 黑褐色粘質シルト しまり強い、粘性強い、炭化物を5%を含む
- 2 25Y2/1 黑褐色粘土 しまり強い、炭化物を5%を含む
- 3 25Y3/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、黄灰色シルトを5%、漂石を少量含む

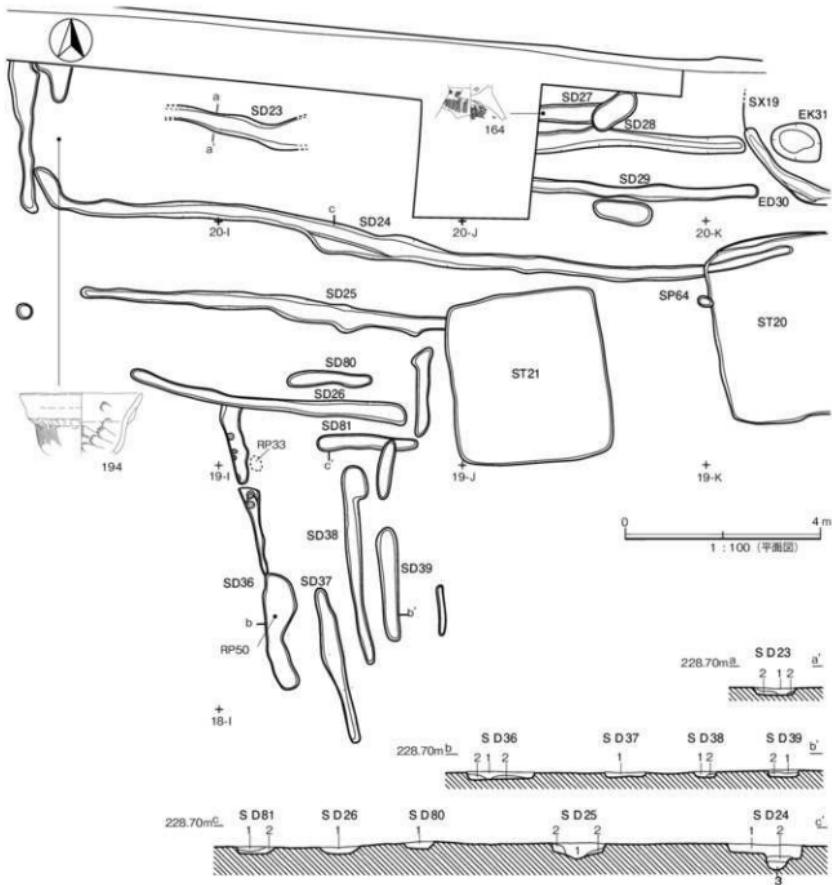
S D65・66

- 1 25Y3/1 黑褐色粘質シルト しまり強い、黄灰色シルトを5%、炭化物を微量含む
- 2 25Y5/1 黄灰色シルト しまり強い

第36図 S B 79 振立柱建物跡・S D 65・66 飲状造構



第37図 SK 111・131・133・164・177 土坑



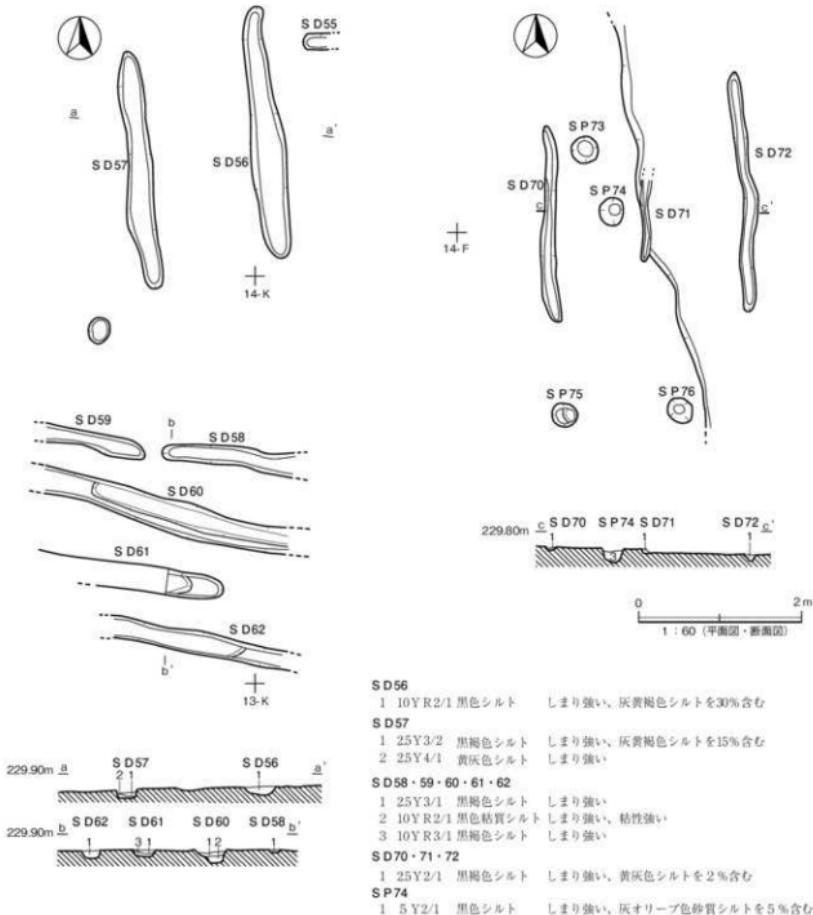
第38図 1区北側歛状構造

SD 36・37・38

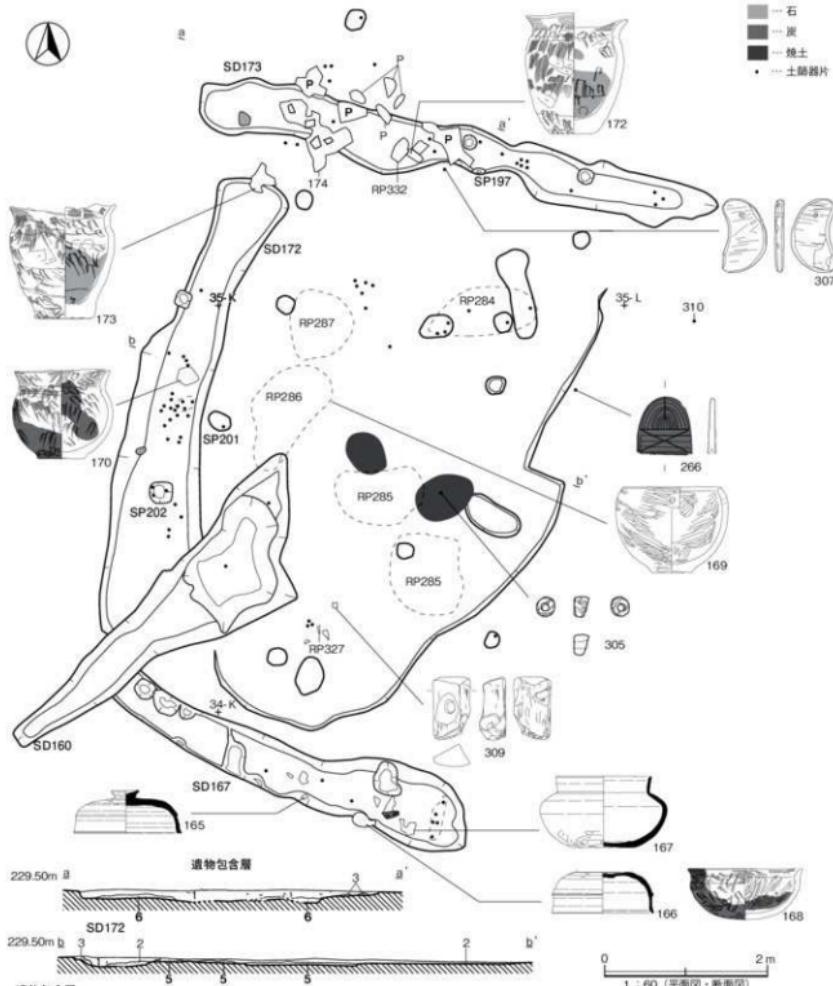
- 1 5Y2/1 黒色シルト しまり強い、褐色シルトを5%含む
2 25Y3/1 黑褐色シルト しまり強い

SD 39

- 1 25Y2/1 黒色シルト しまり強い、暗黄灰色シルトを5%、炭化物、酸化鉄を微量含む
2 25Y4/1 褐灰色シルト しまり強い



第39図 SD 56～62・70～72 断状造構

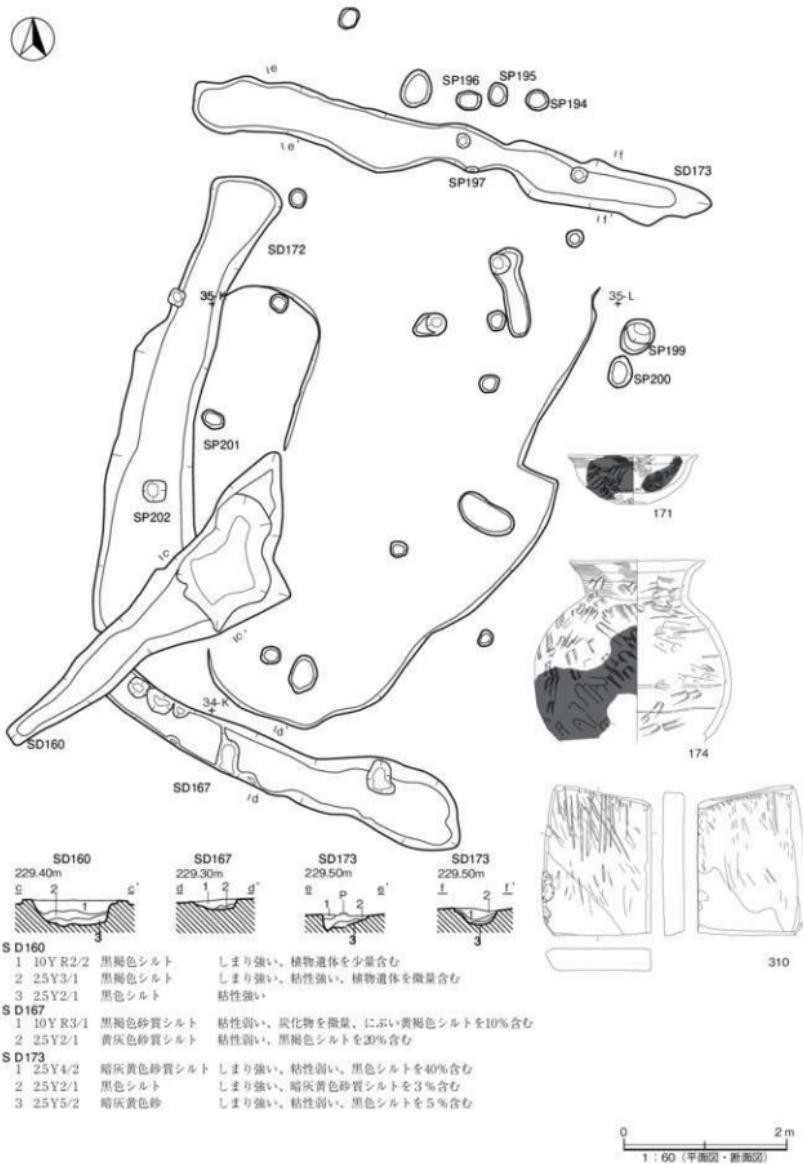


選物包含層	
1 10Y R2/2	黒褐色艶質シルト
2 10Y R3/1	黒褐色艶質シルト
3 10Y R5/2	黒褐色艶質シルト
4 10Y R2/2	黒褐色艶質シルト
5 10Y R5/2	黒褐色艶質シルト
6 25Y3/1	黒褐色シルト

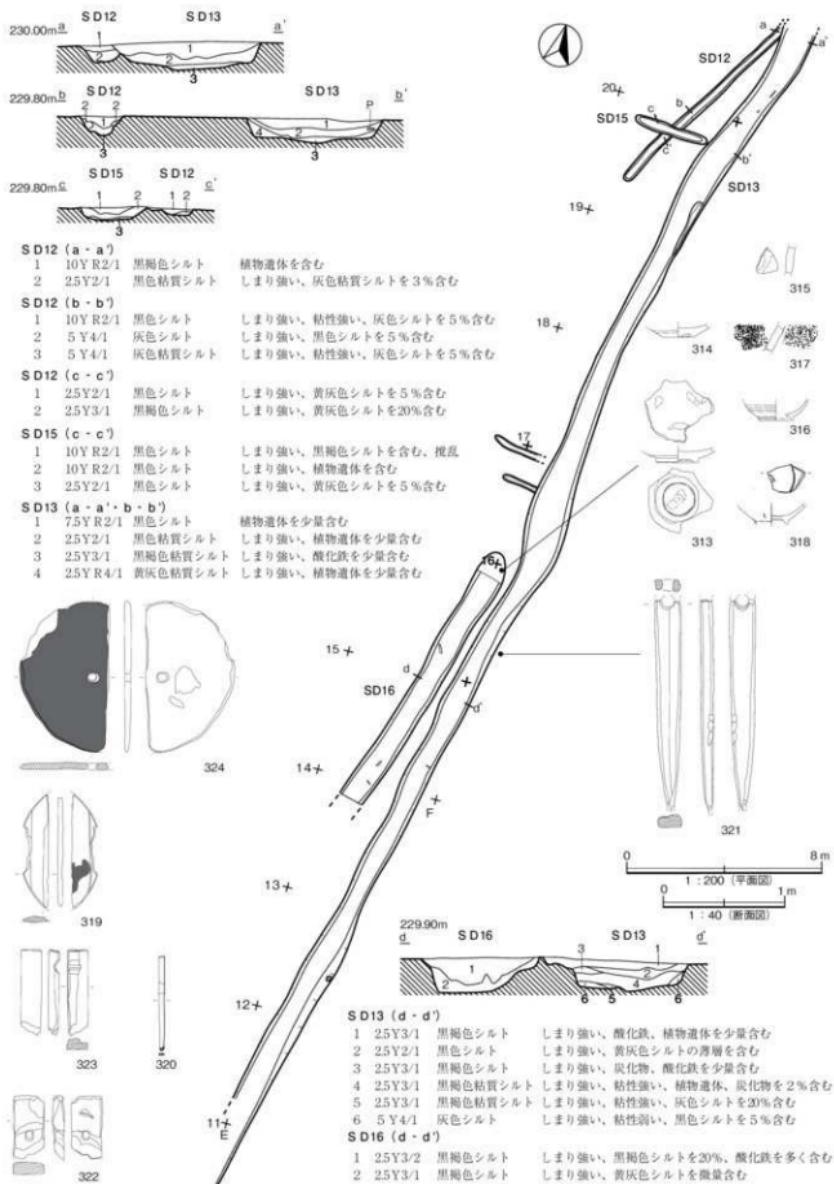
SD172

- | | | | |
|---|----------|---------|---------------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黑色砂質シルト | しまり強い。粘性弱い。酸化鉄を少量含む |
| 2 | 10YR17/1 | 黒色シルト | 灰黄色砂を5%含む |
| 3 | 2.5Y6/2 | 灰黄色砂 | しまり強い |

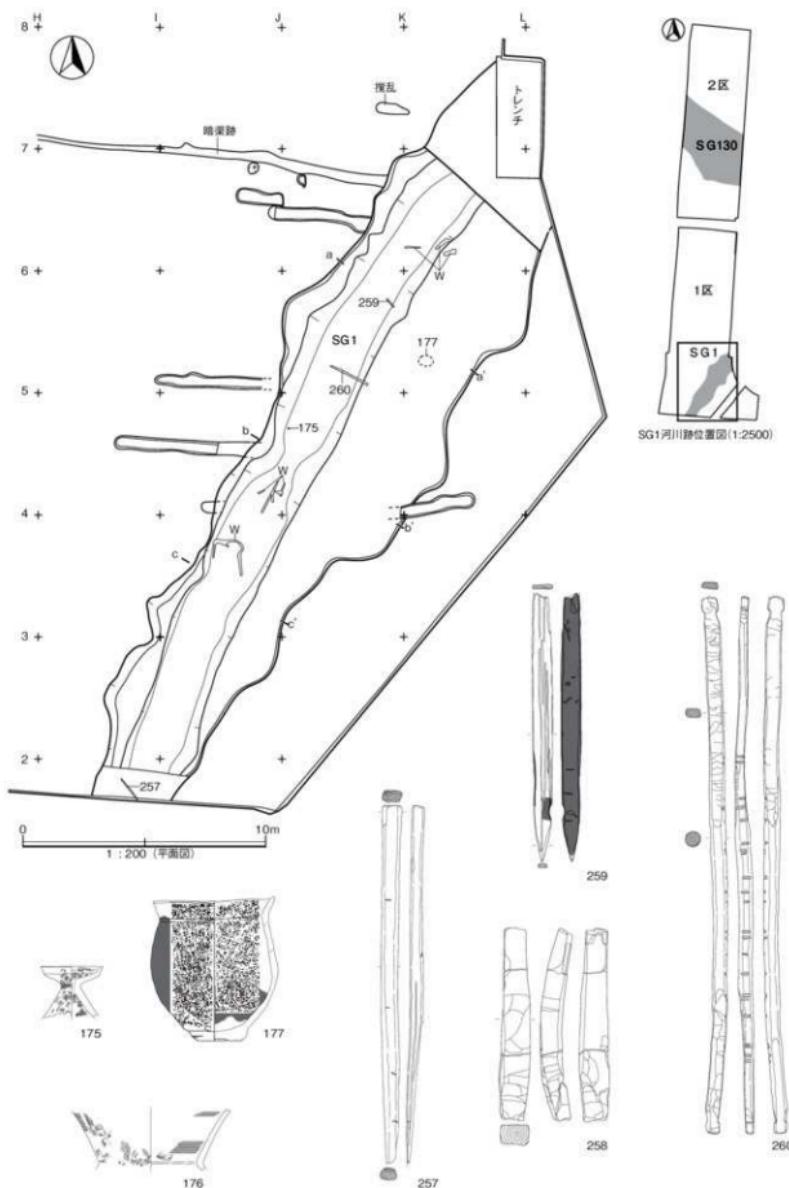
第40図 SD 160・167・172・173溝跡（1）



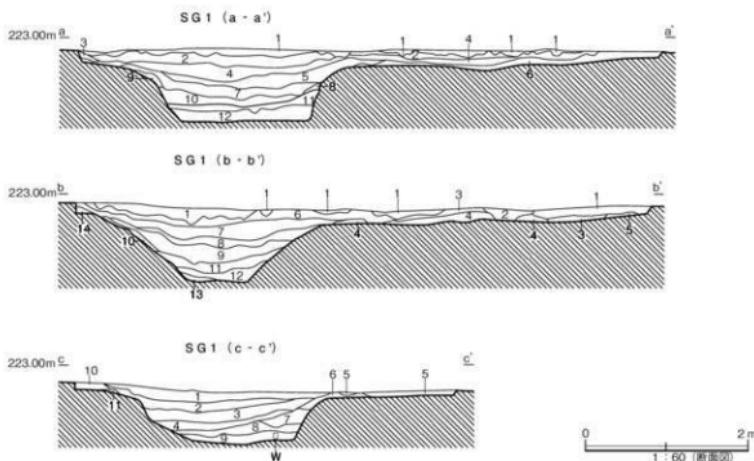
第41図 SD 160・167・172・173溝跡 (2)



第42図 SD 12・13・15・16溝跡



第43図 SG1河川跡(1)

**SG1 (a - a')**

1	25YR4/1	黄灰色シルト	しまり強い、酸化鉄を含む、表土1層
2	10YR2/3	黒褐色泥炭	しまり弱い、粘性弱い、植物遺体を含む、F 1層
3	25Y2/1	黒色シルト	しまり弱い、植物遺体を少量含む、調査区北側IV層併行
4	25Y3/1	黒褐色シルト	泥炭層が分解した植物遺体を多く含む、F 2層
5	25Y2/3	黒色シルト	しまり弱い、下層に黄灰色シルトを含む
6	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり弱い、黄灰色シルトを30%、植物遺体を含む、F 3層
7	10YR17/1	黒色シルト	しまり弱い、黄灰色シルトを含む
8	25Y4/1	黄灰色砂質シルト	しまり弱い、粘性弱い、黄灰色シルトを5%、砂を10%、植物遺体を多く含む
9	25Y3/1	黄灰色シルト	しまり弱い、黒色シルトを5%含む、6層に対応
10	5Y5/1	灰色砂	しまり弱い、粗礫を含む、自然砂が出土する、F 4 b層
11	10YR2/3	黒褐色泥炭	粘性弱い、自然木が出土する、F 5層
12	10YR2/3	暗オリーブ褐色シルト	しまり弱い、粘性弱い、植物遺体を多く含む、F 6層

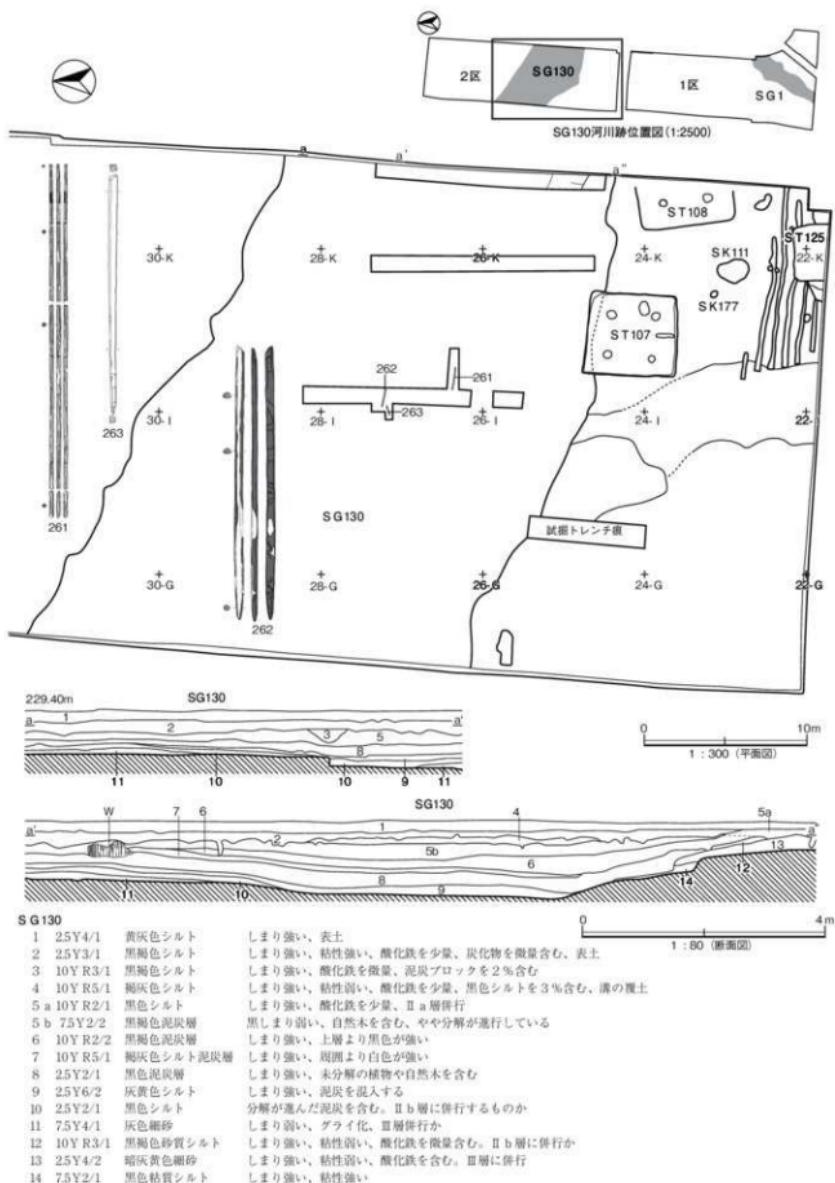
SG1 (b - b')

1	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを含む、I 層併行
2	10YR3/1	黒褐色シルト	植物遺体を多く含む、暗褐色土
3	10YR3/1	黒褐色シルト	黄灰色シルトを微量、植物遺体を少量含む
4	10YR3/1	黒褐色シルト	黄灰色シルトを15%、植物遺体を少量含む
5	25Y2/1	黒色シルト	しまり弱い、基本層
6	10YR2/3	黒褐色泥炭	しまり弱い、粘性弱い、下層に黄灰色シルトを含む、F 1層
7	25Y3/1	黒褐色泥炭	しまり弱い、泥炭は分解が進んでいる、F 2層
8	10YR2/1	黒色シルト	植物遺体を少含む、F 3層
9	25Y3/1	黒褐色シルト	粘性弱い、黒色シルトを20%含む、F 4層
10	25Y4/1	黄灰色シルト	しまり弱い、黒色シルトを3%含む
11	5Y4/1	灰色砂	しまり弱い、F 5層
12	10YR2/3	黒褐色泥炭	纏かい植物遺体を含む、F 6層
13	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり弱い、植物遺体を少量含む
14	25Y4/1	黄灰色シルト	しまり弱い、IV層に対応する

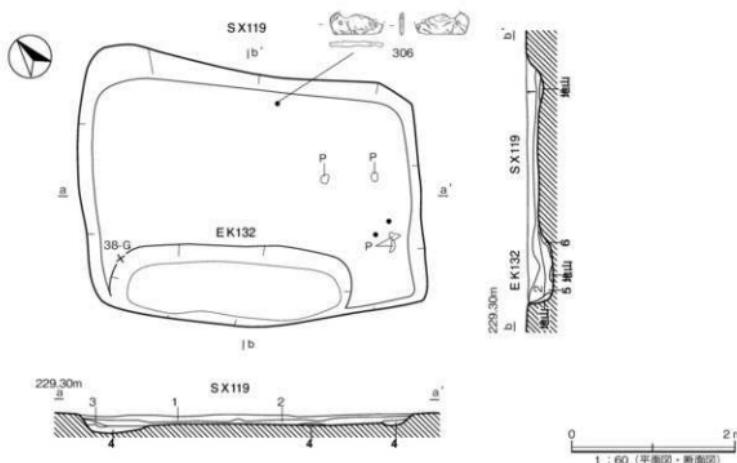
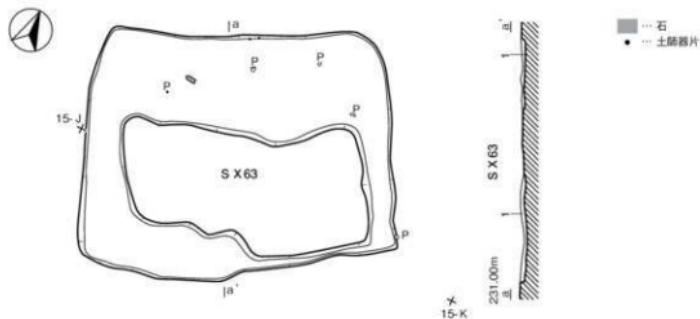
SG1 (c - c')

1	10YR2/2	黒褐色泥炭層	しまり弱い、粘性弱い、泥炭層が分解した植物遺体を多く含む、F 2層
2	25YR2/1	黒色泥炭	しまり弱い、粘性弱い、泥炭層を20%含む、F 3層
3	10YR2/1	黒色シルト	しまり弱い、F 4層
4	10YR3/2	黒褐色シルト	しまり弱い、植物遺体を少量含む
5	10YR	黒褐色シルト	しまり弱い、F 5層
6	25Y4/1	黄灰色シルト	しまり弱い、下層に黄灰色シルトを含む
7	25Y3/2	黒褐色砂質シルト	しまり弱い、粘性強い、砂ブロックを5%、植物遺体を微量含む
8	25Y5/2	明灰黄色砂	しまり弱い、F 5層
9	25Y3/1	黒褐色砂質シルト	しまり弱い、粘性強い、植物遺体を含む、F 6層
10	10YR7/1	黒色シルト	しまり弱い、酸化鉄を含む、II b層に対応
11	25Y5/1	黄灰色細砂	しまり弱い、IV層に対応

第44図 SG1河川跡(2)

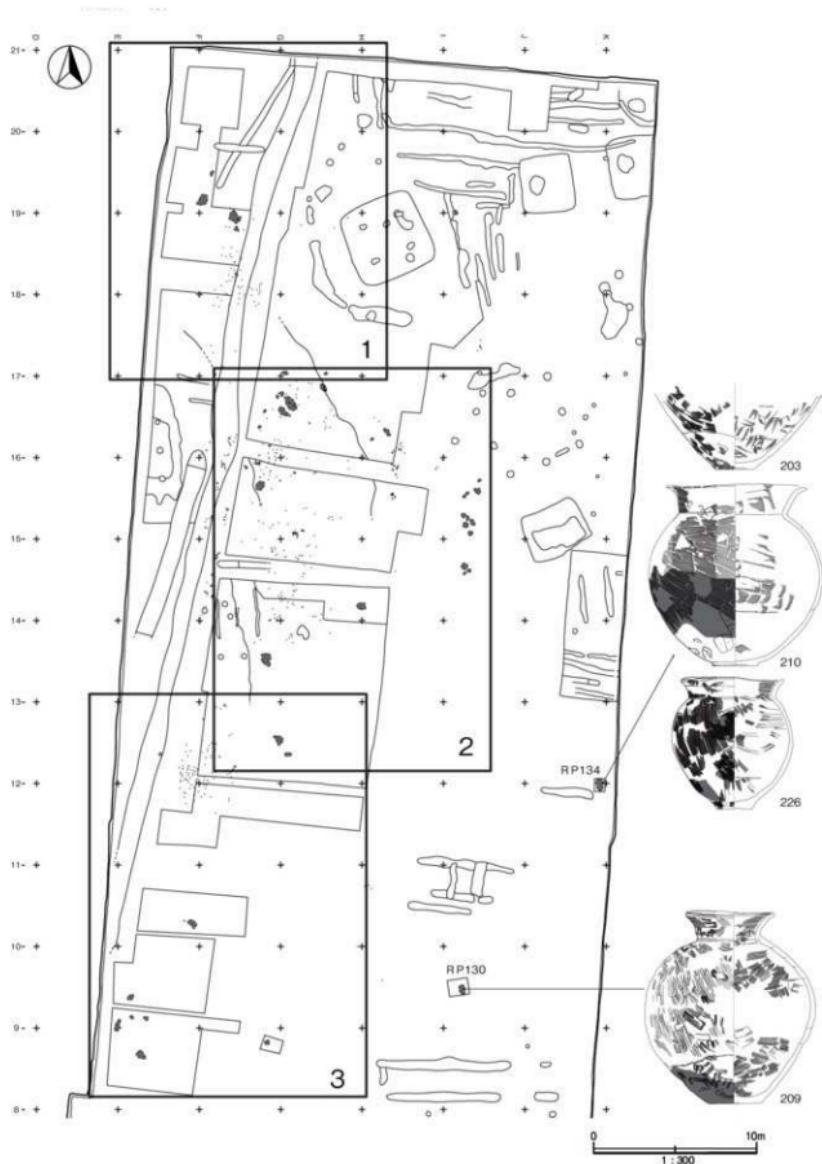


第45図 SG130河川跡

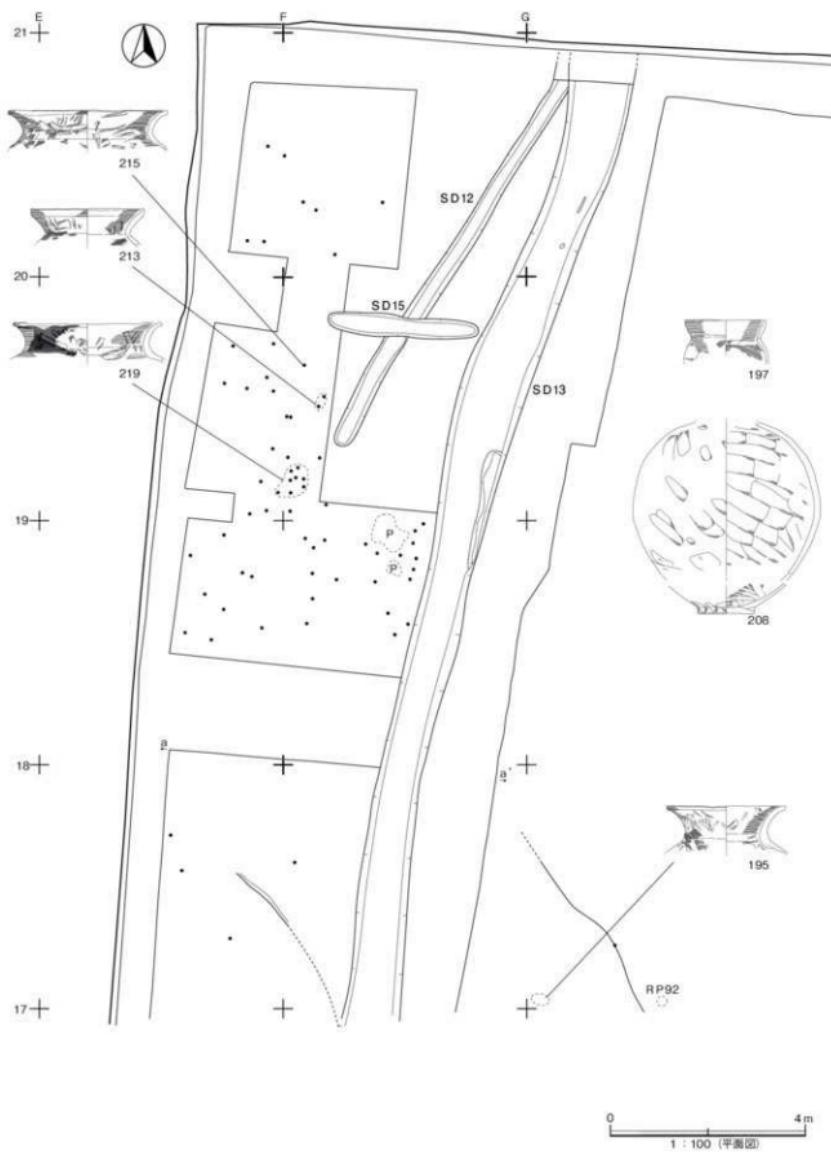


S X 119			
1	10Y R3/2	黒褐色粘質シルト	粘性弱い、黒色シルトを2%含む
2	10Y R2/1	黒色粘質シルト	粘性弱い、灰黄色シルトを2%、炭化物を3%含む
3	25Y4/1	灰褐色シルト	しまり強い、灰黄色シルトを7%含む
4	10Y R17/1	黒色粘質シルト	黒褐色粘質シルトを3%、炭化物を3%含む
5	25Y2/1	黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物を10%含む、E K132覆土
6	25Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、灰黄色シルトを3%含む、E K132覆土

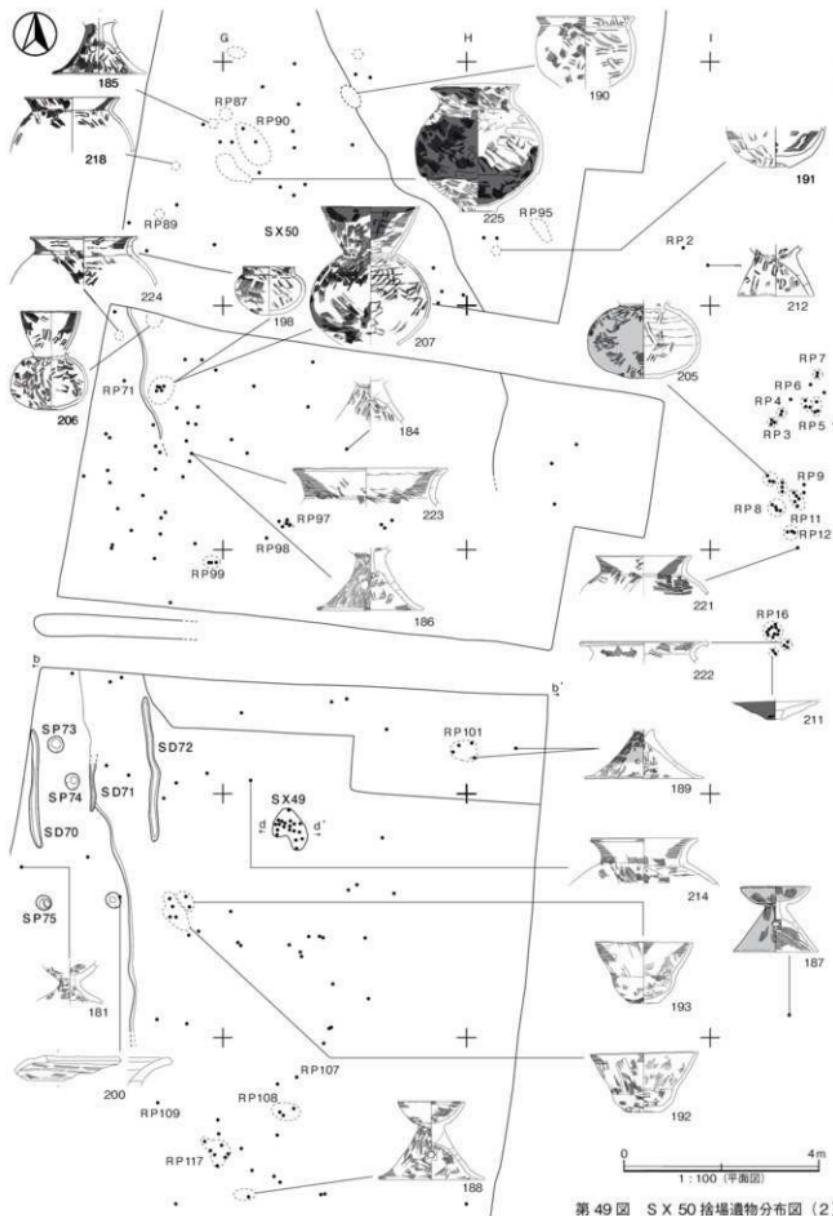
第46図 S X 63・119 性格不明遺構



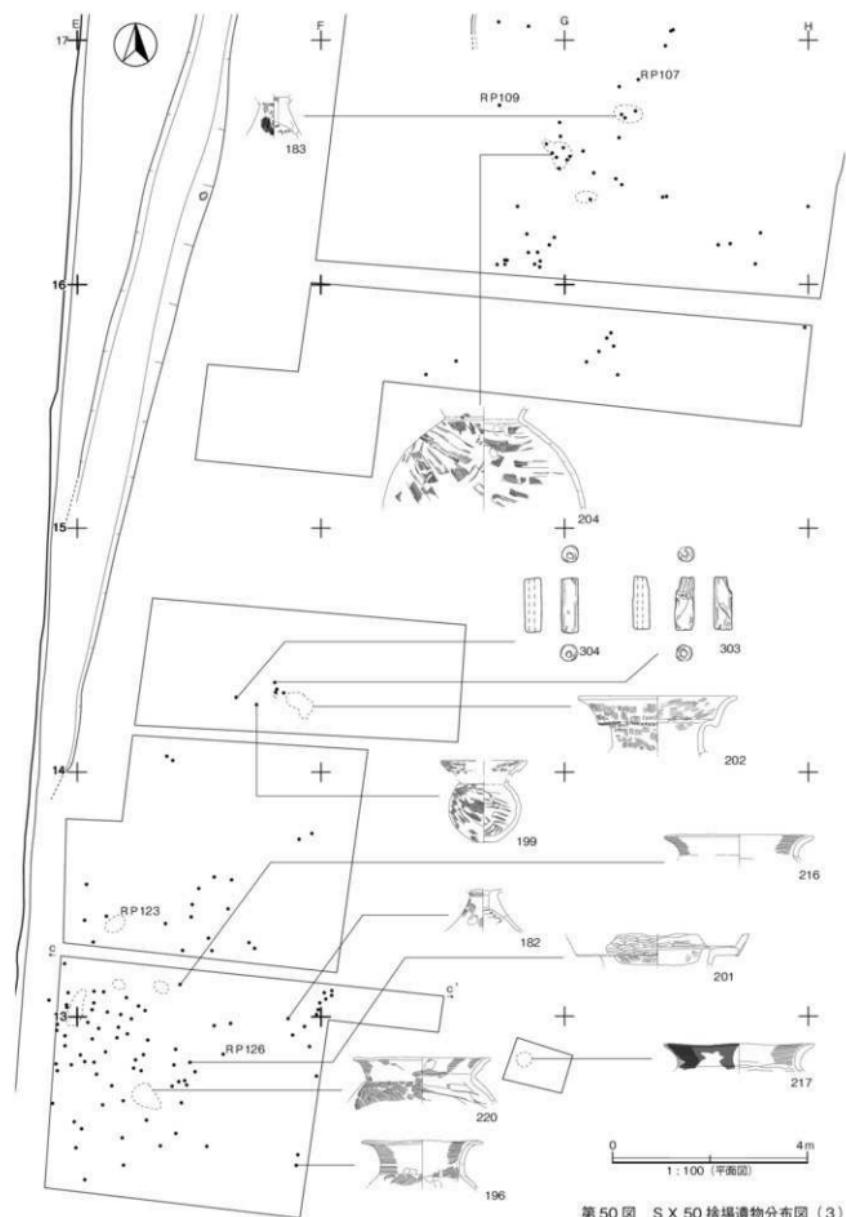
第47図 S X 50 捨場出土遺物全体図



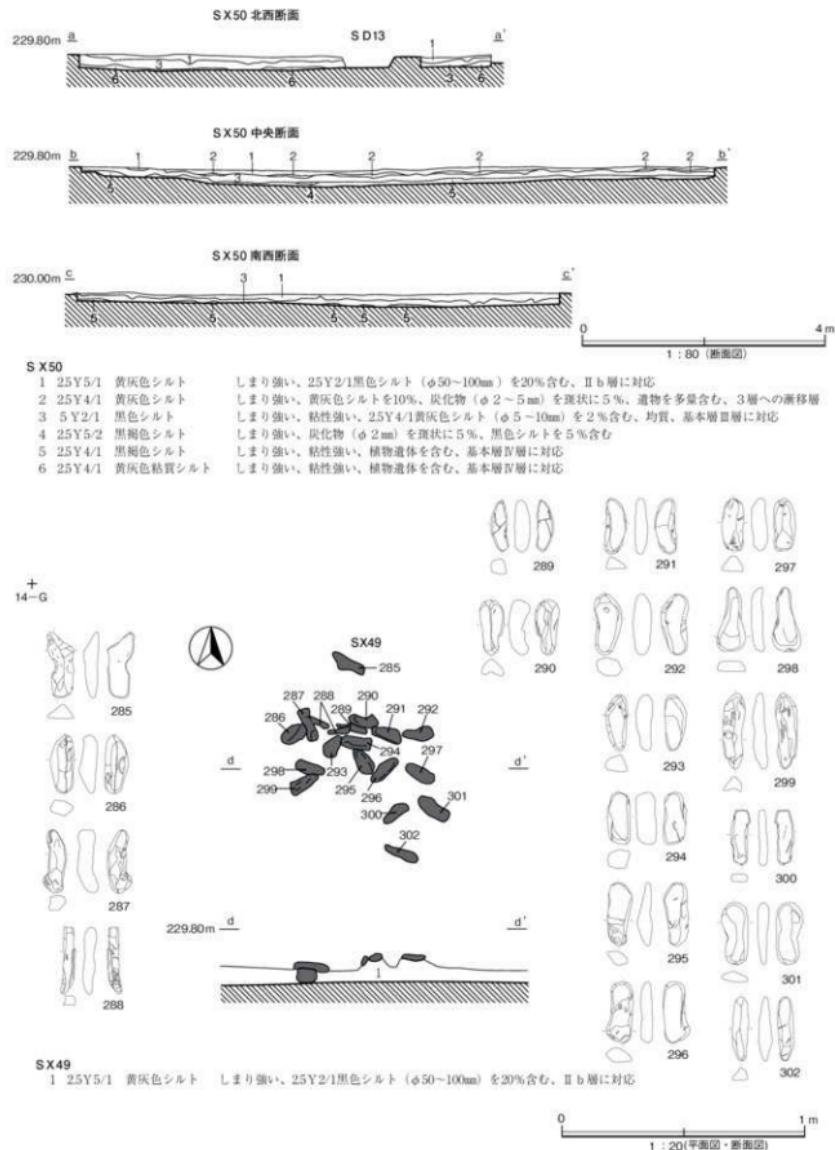
第48図 S X 50 捨場遺物分布図（1）



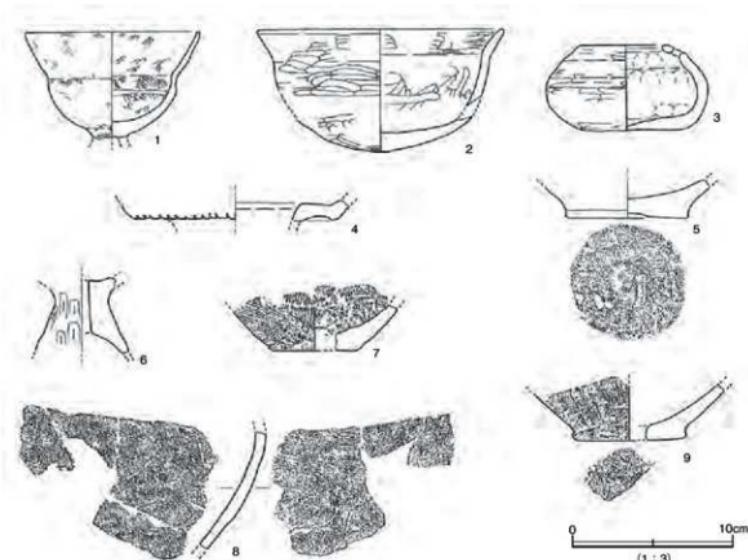
第49図 S×50捨場遺物分布図(2)



第50図 S X 50 捨場遺物分布図（3）



第 51 図 SX 50 捨場土層断面・SX 49 集石

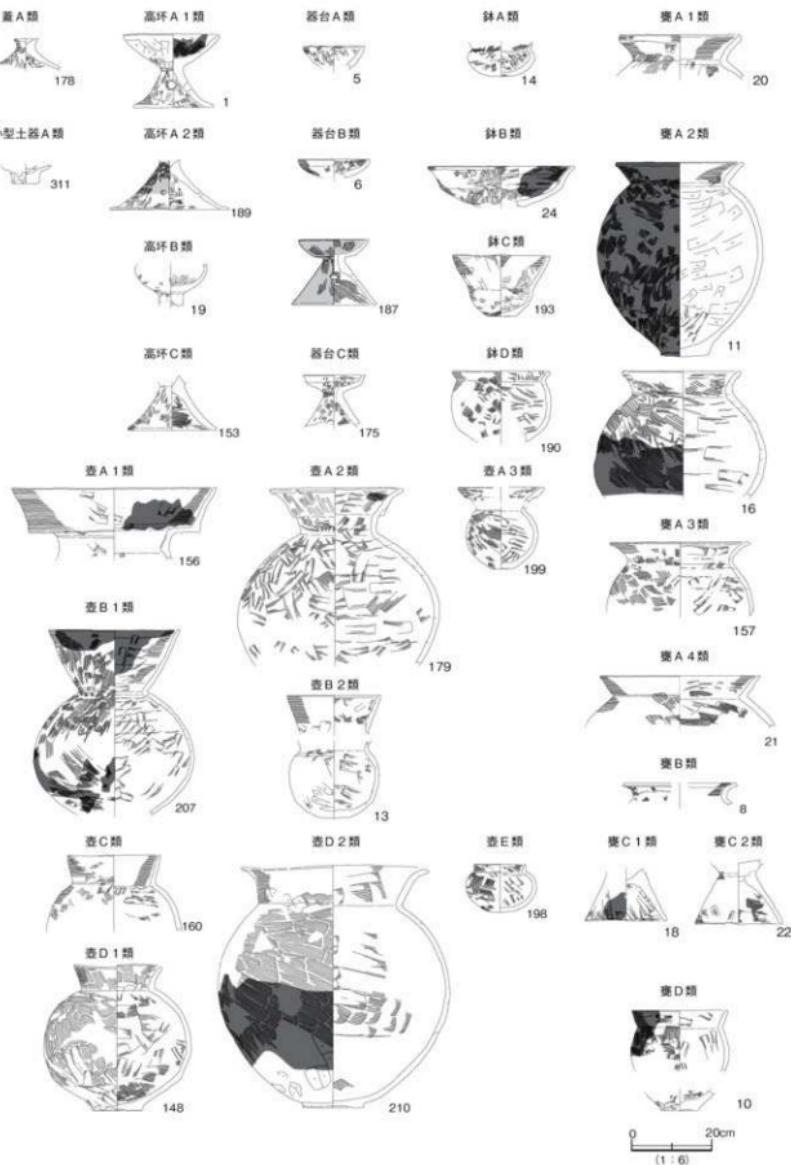


分布調査報告書 (36) p.32 を転載 (山形県教育委員会 2010)

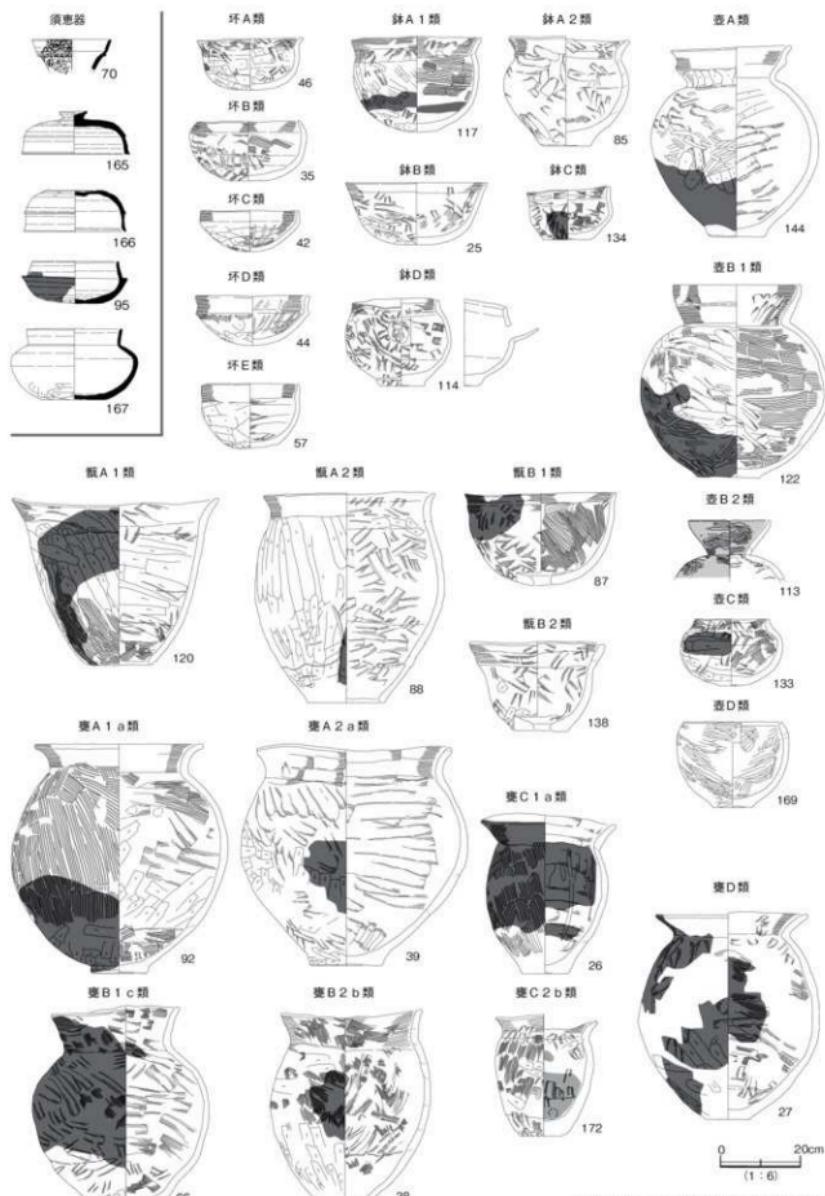
第 52 図 分布調査の出土遺物

表3 分布調査の出土遺物詳細表

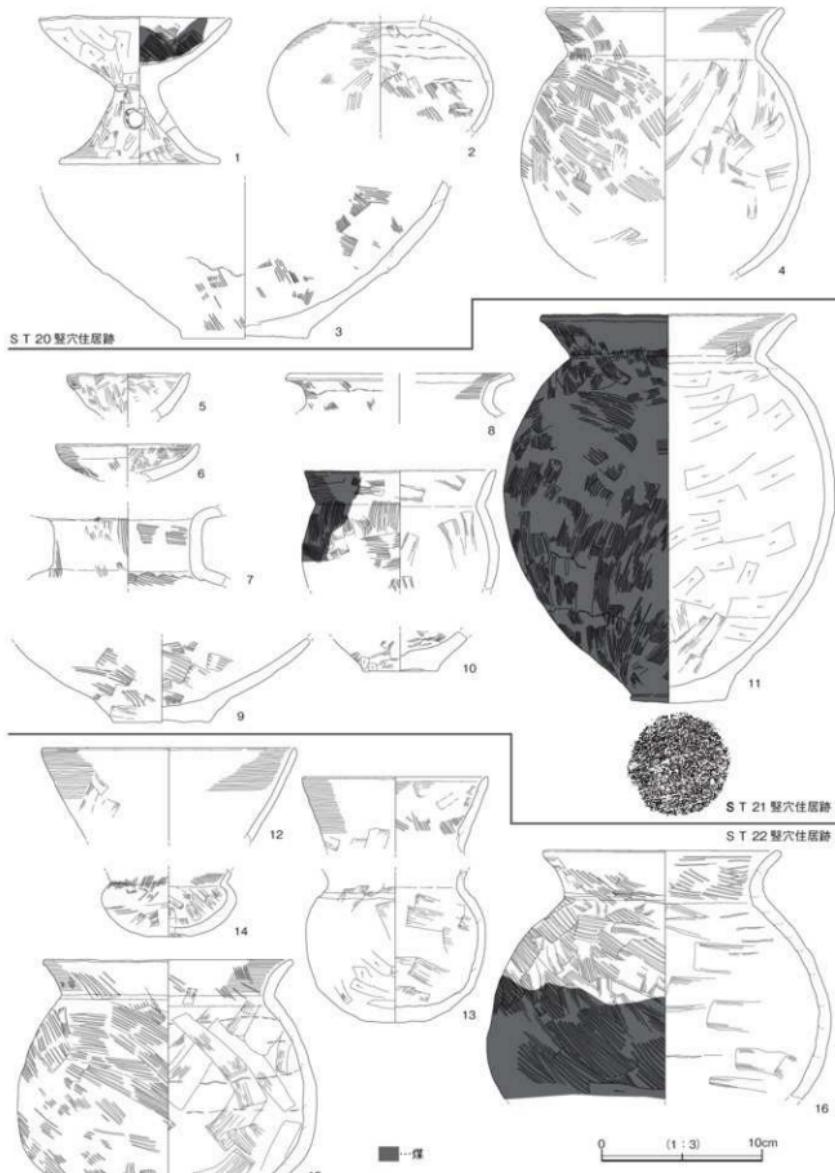
遺物 番号	出土地点	種別	器種	計測値 (mm)					調整 内面	底部	備考
				口径	底径	器高	器厚	外面			
1	調査2区東 TT 1	土師器	高環	108		(64.8)	4.5	ミガキ	ミガキ		報告書遺物No.19に類似
2	調査2区西 TT 3	土師器	鉢	153		75	5.1	ミガキ	ミガキ	ケズリ	丸底状
3		土師器	壺	525	63	52.5	6.9	ミガキ	ナデ・指頭痕	ケズリ	口縁部下に有孔
4		土師器	壺				7.5	ナデ・刺突文	ナデ		頸部に刺み日状の刺突文
5		土師器	不明	72			7.8	ナデ			底部に輪台貼付
6		土師器	器台		(48)	9.0		ケズリ			貫通孔
7		土師器	不明		(51)	8.4	ハケメ、ナデ	ナデ			底部片
8		土師器	壺?			7.5	ハケメ、ナデ	ハケメ・ナデ			体部片
9		土師器	不明		(66)	8.4	ハケメ、ナデ			ナデ	底部片



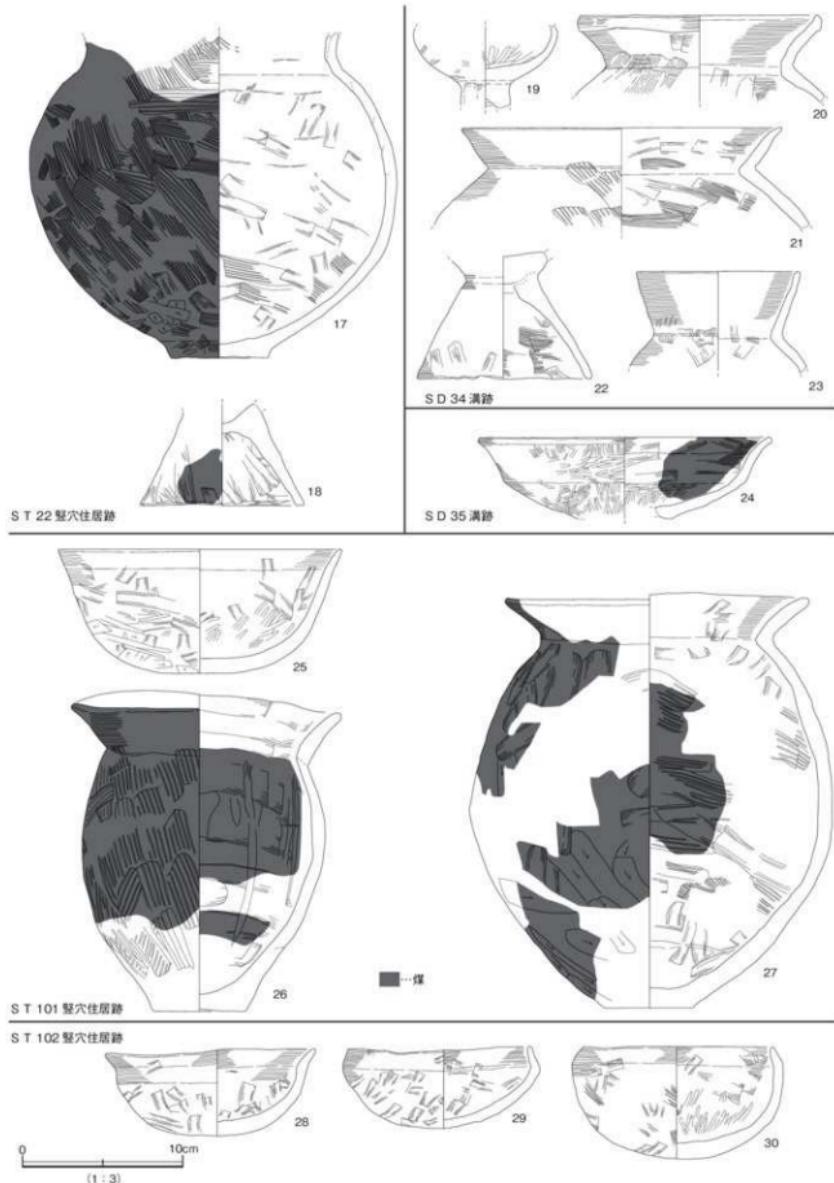
第 53 図 古墳時代前期土器の器種分類



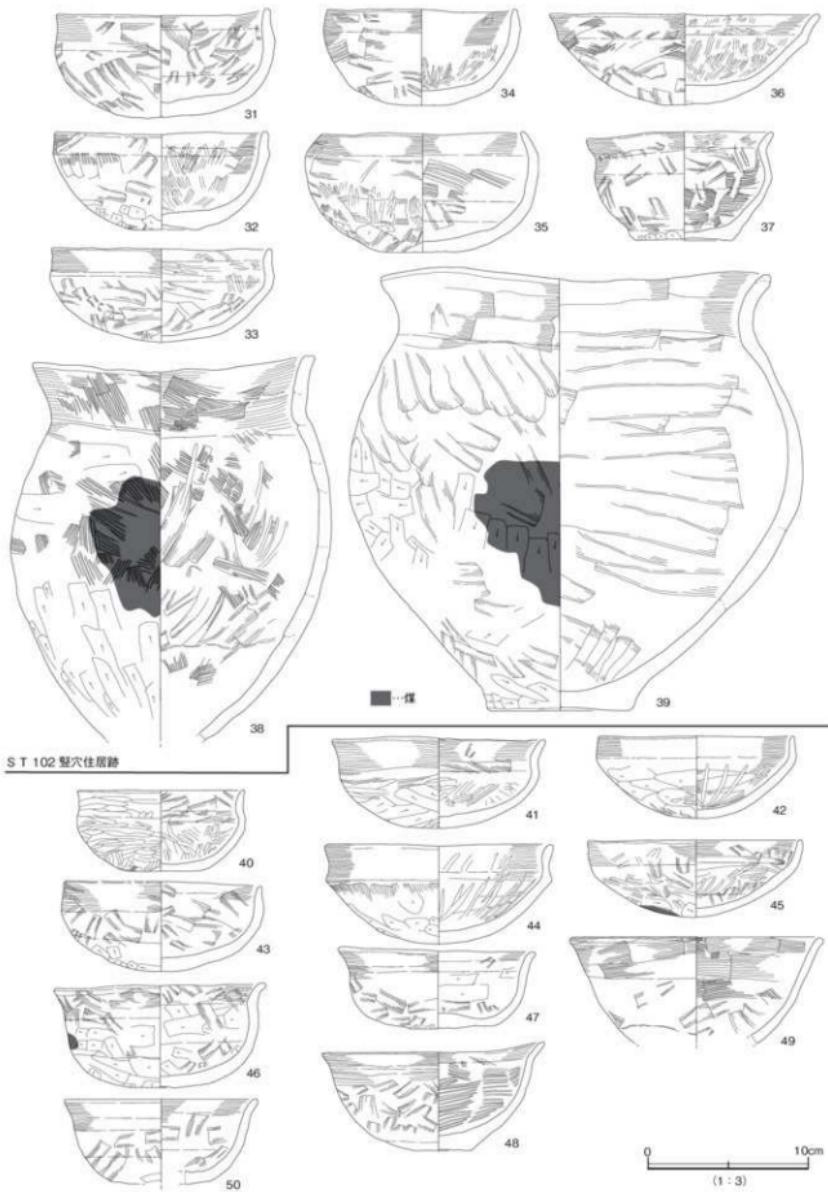
第54図 古墳時代中期土器の器種分類



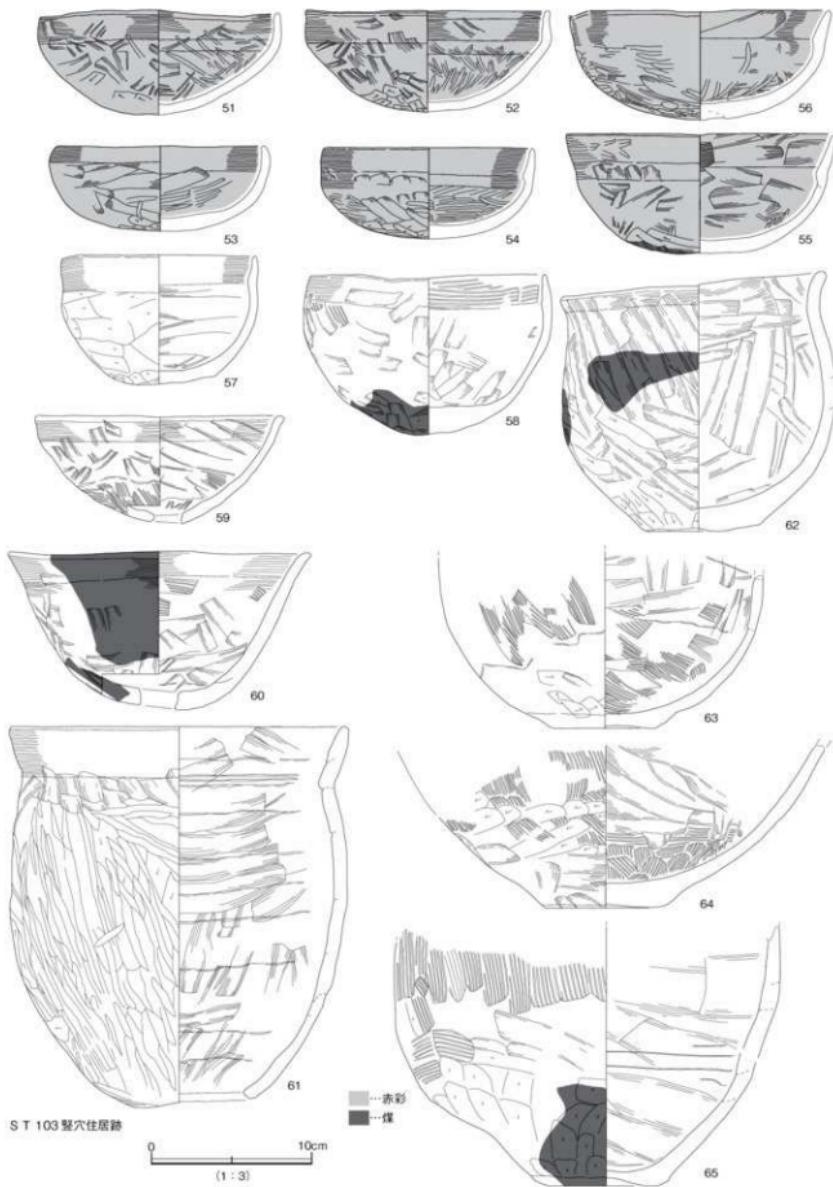
第 55 図 S T 20・21・22 暫穴住居跡出土遺物



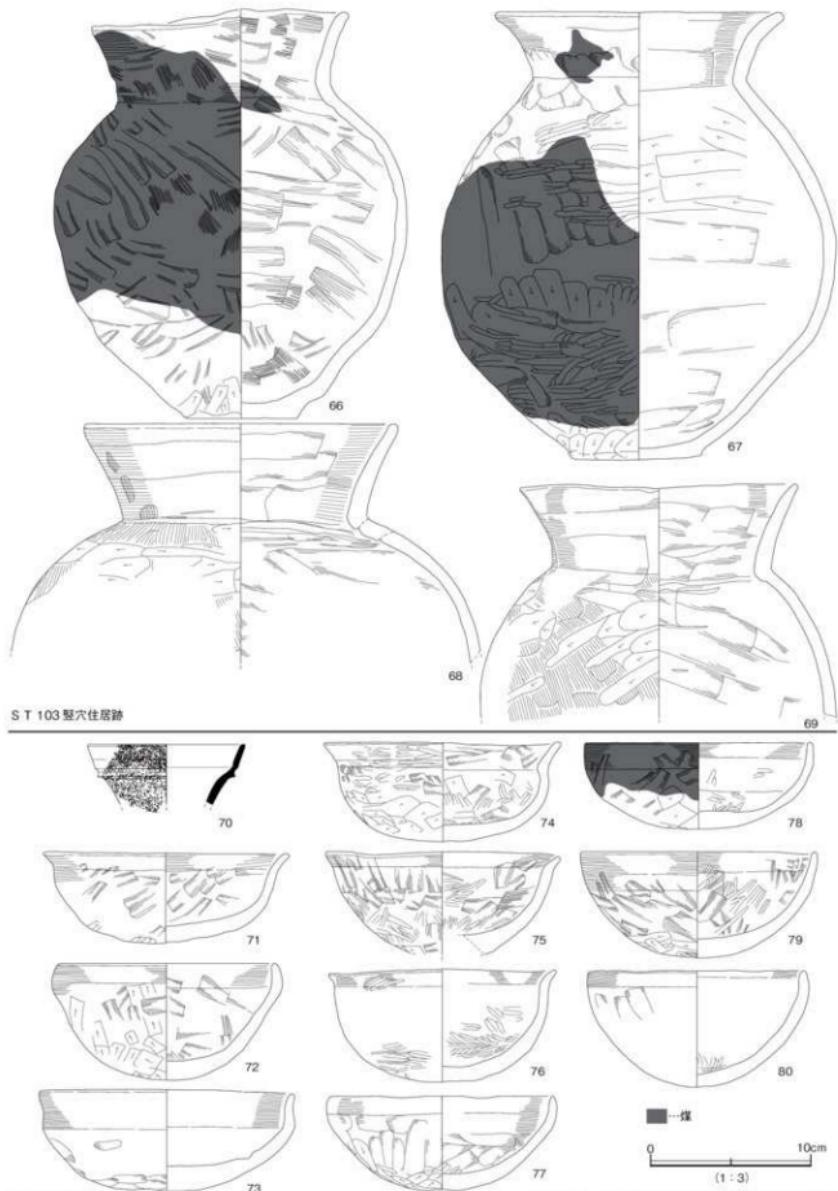
第 56 図 S T 22・101・102 整穴住居跡・SD 34・35 溝跡出土遺物



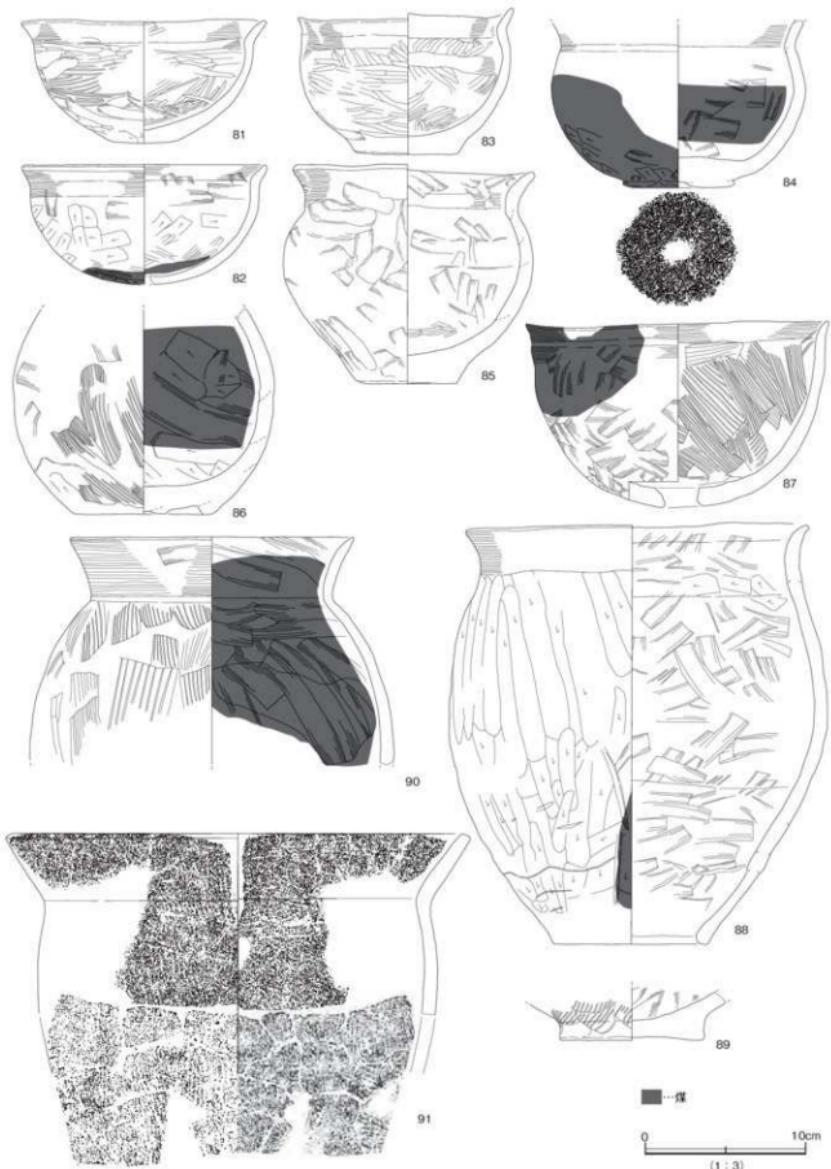
第57図 S T 102・103聖穴住居跡出土遺物



第58図 S T 103 積穴住居出土遺物

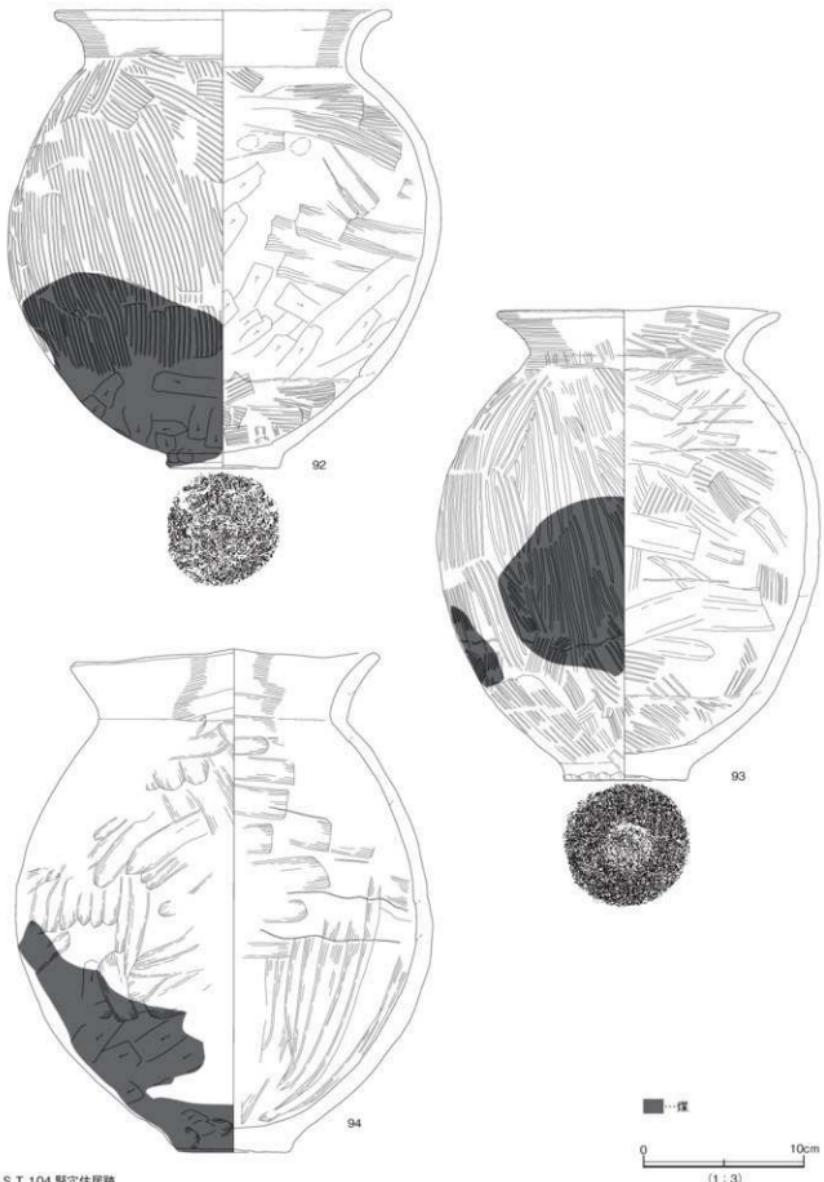


第59図 S T 103・104 穹穴住居跡出土遺物



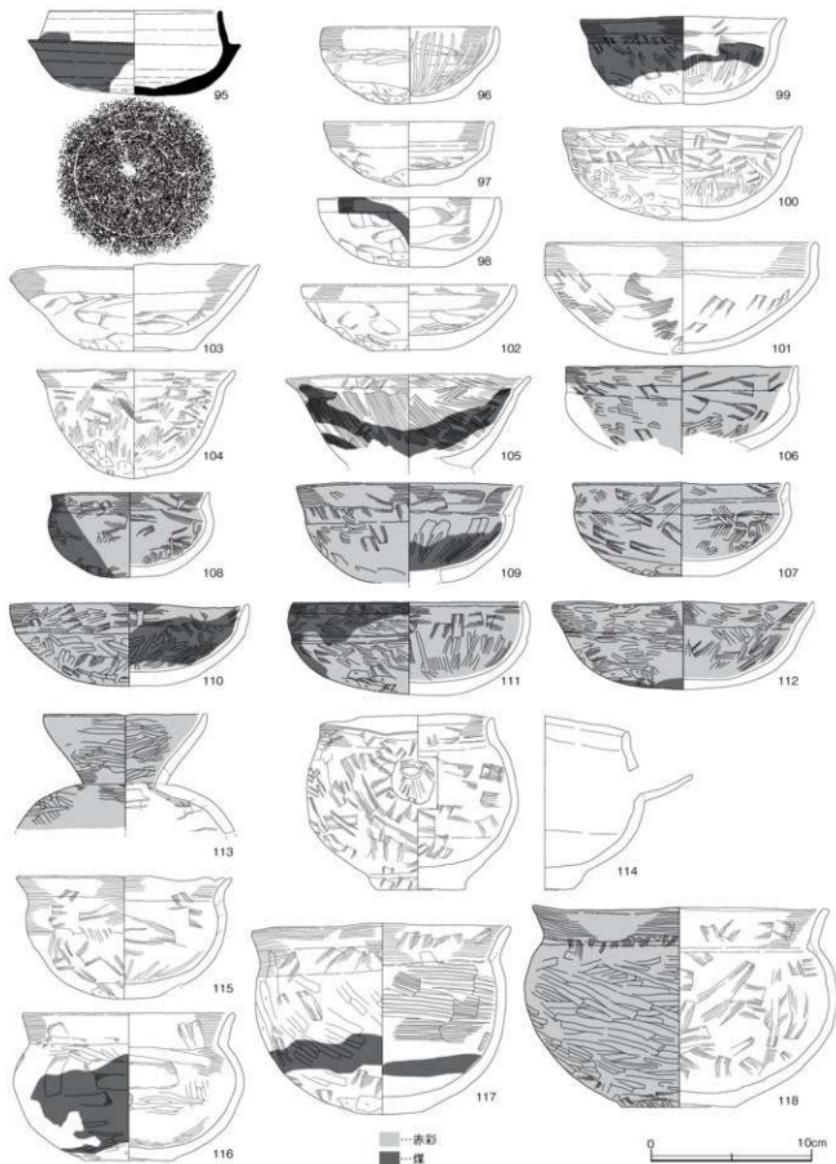
ST 104 壁穴住居跡

第60図 ST 104 壁穴住居跡出土遺物 (1)



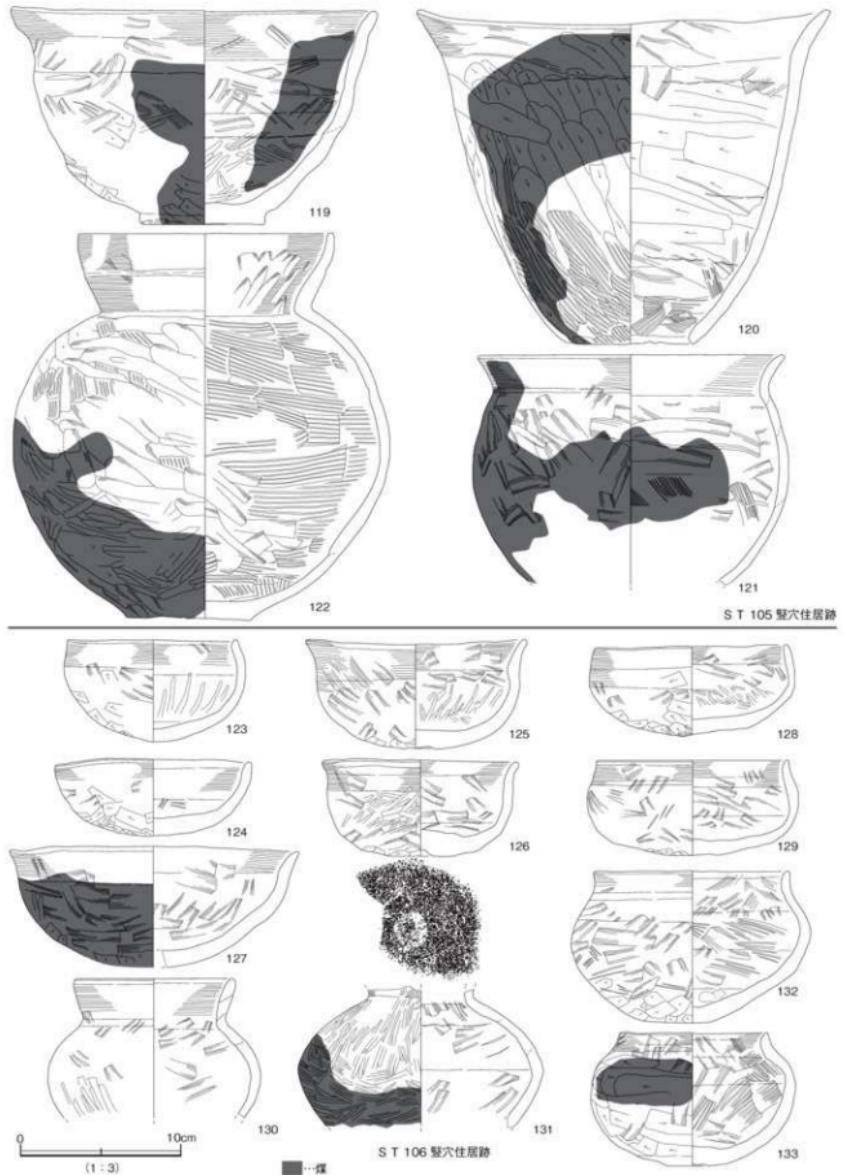
S T 104 壁穴住居跡

第61図 S T 104 壁穴住居跡出土遺物 (2)



S T 105 積穴住居跡

第62図 S T 105 積穴住居跡出土遺物

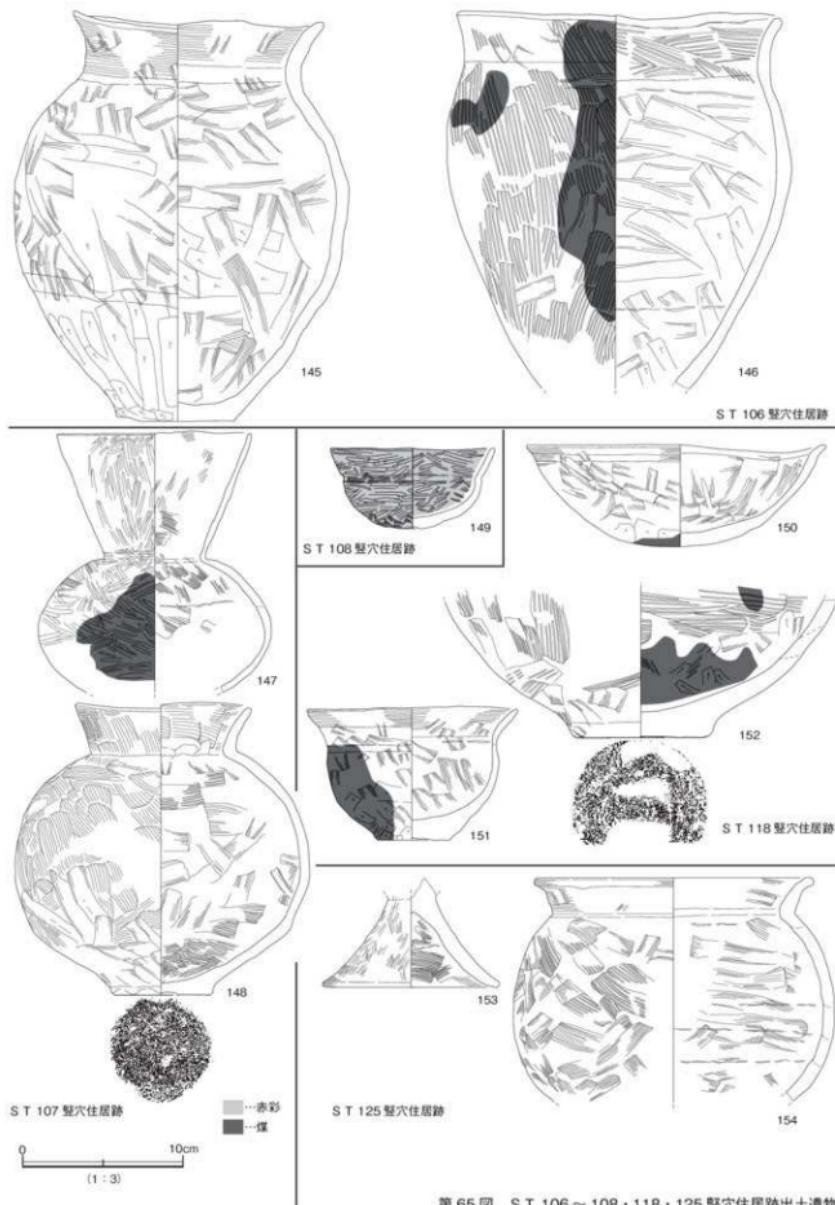


第 63 図 S T 105・106 整穴住居跡出土遺物

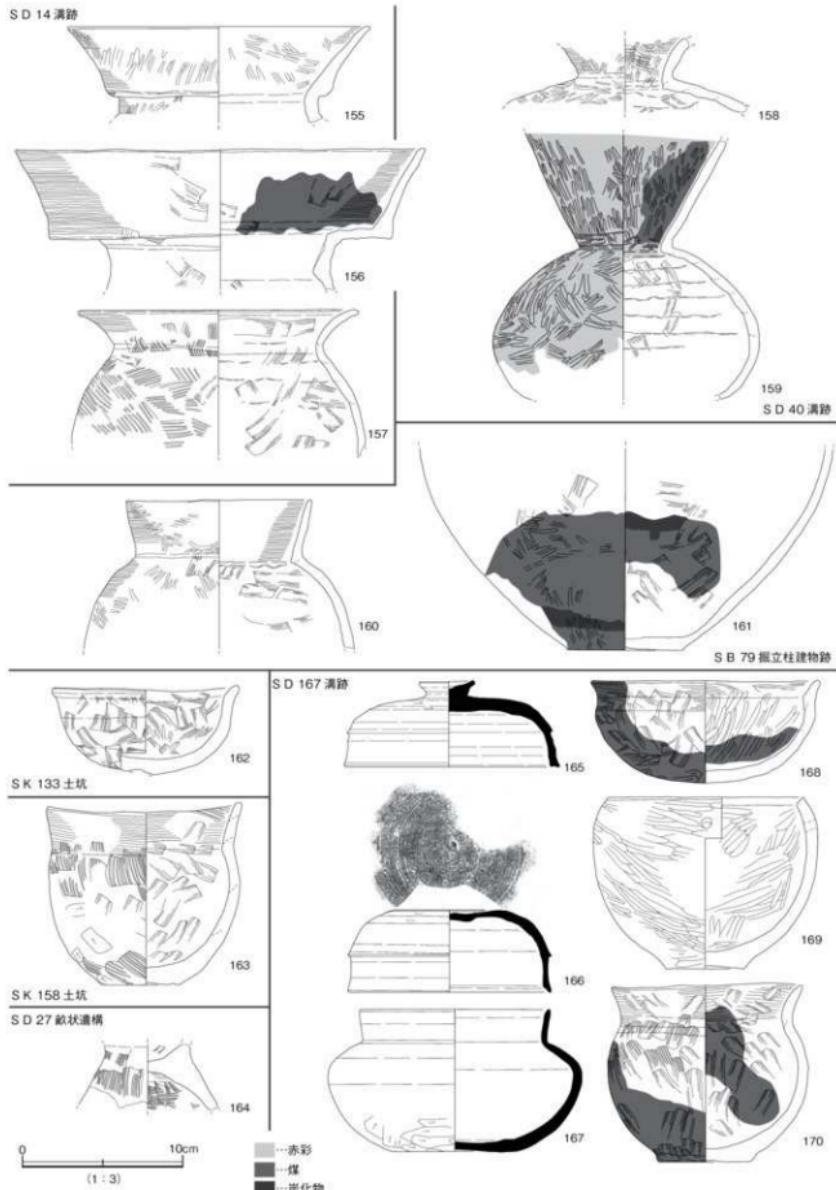


ST 106 積穴住居跡

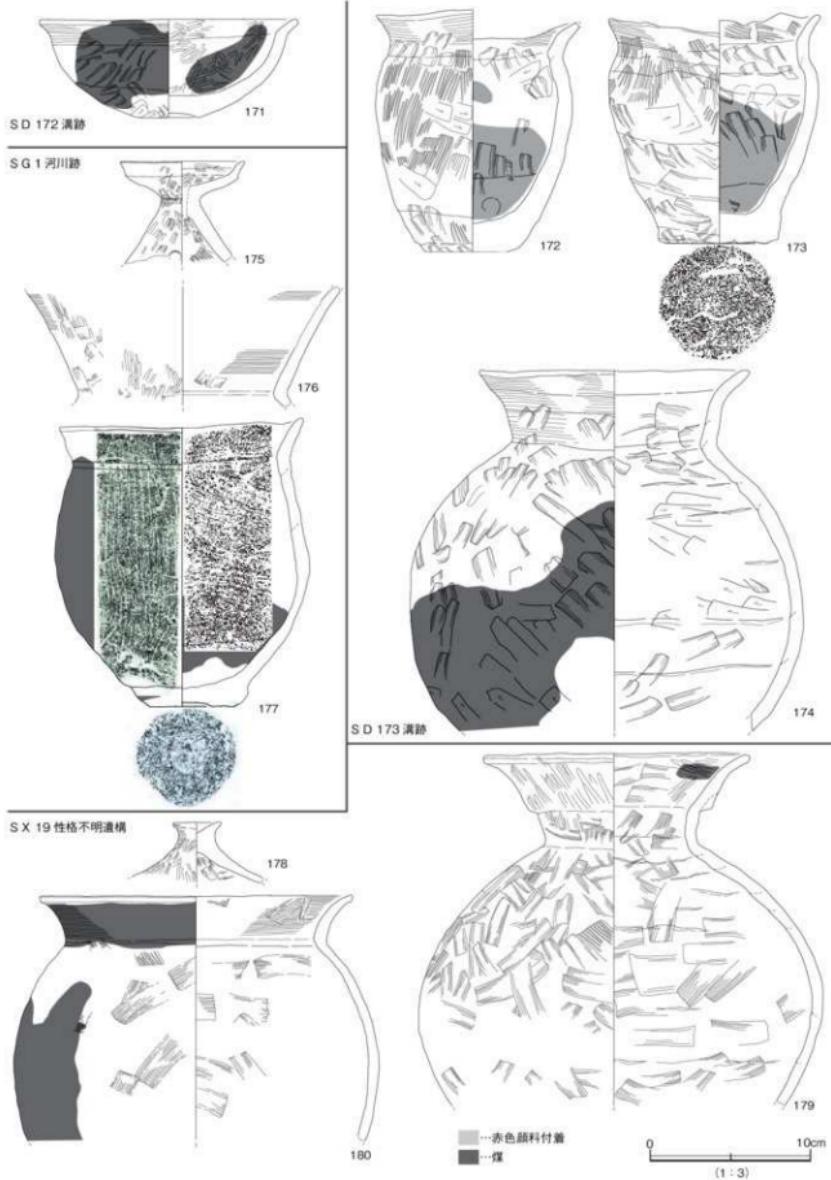
第64図 ST 106 積穴住居跡出土遺物



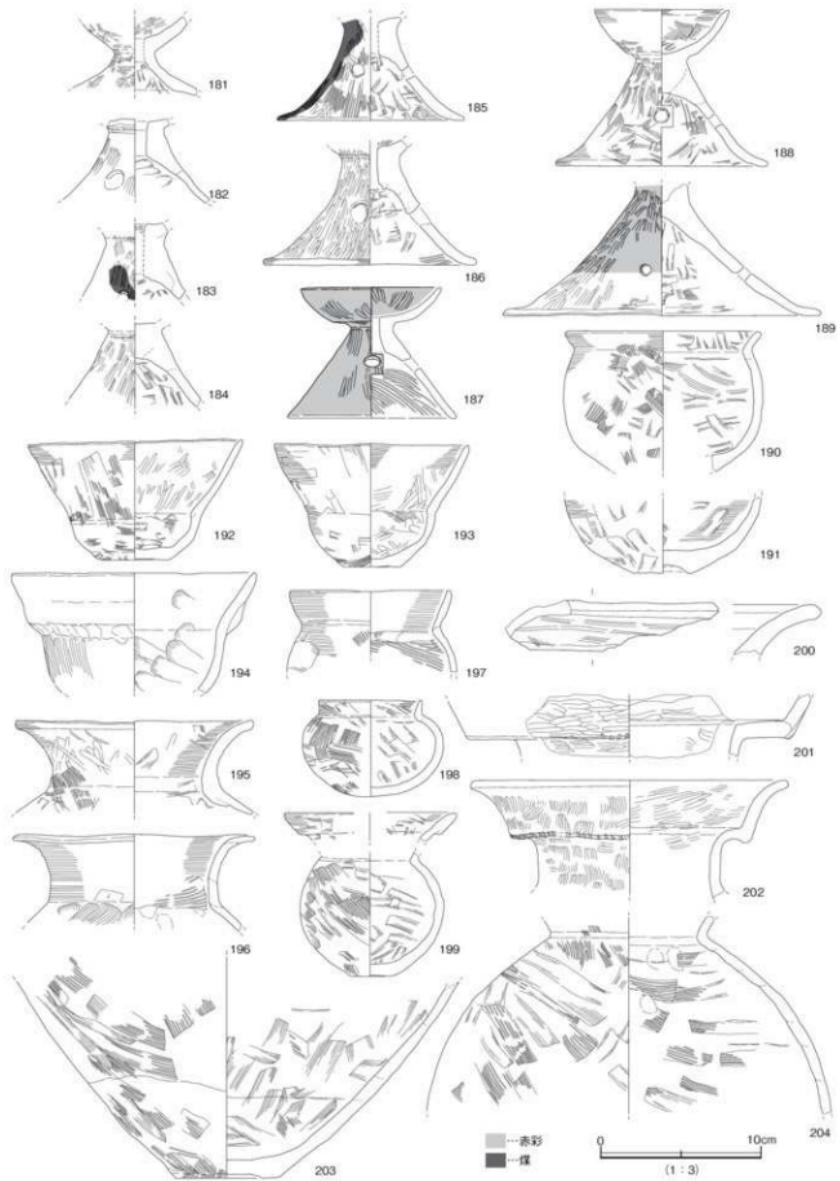
第65図 S T 106~108・118・125 穹穴住居跡出土遺物



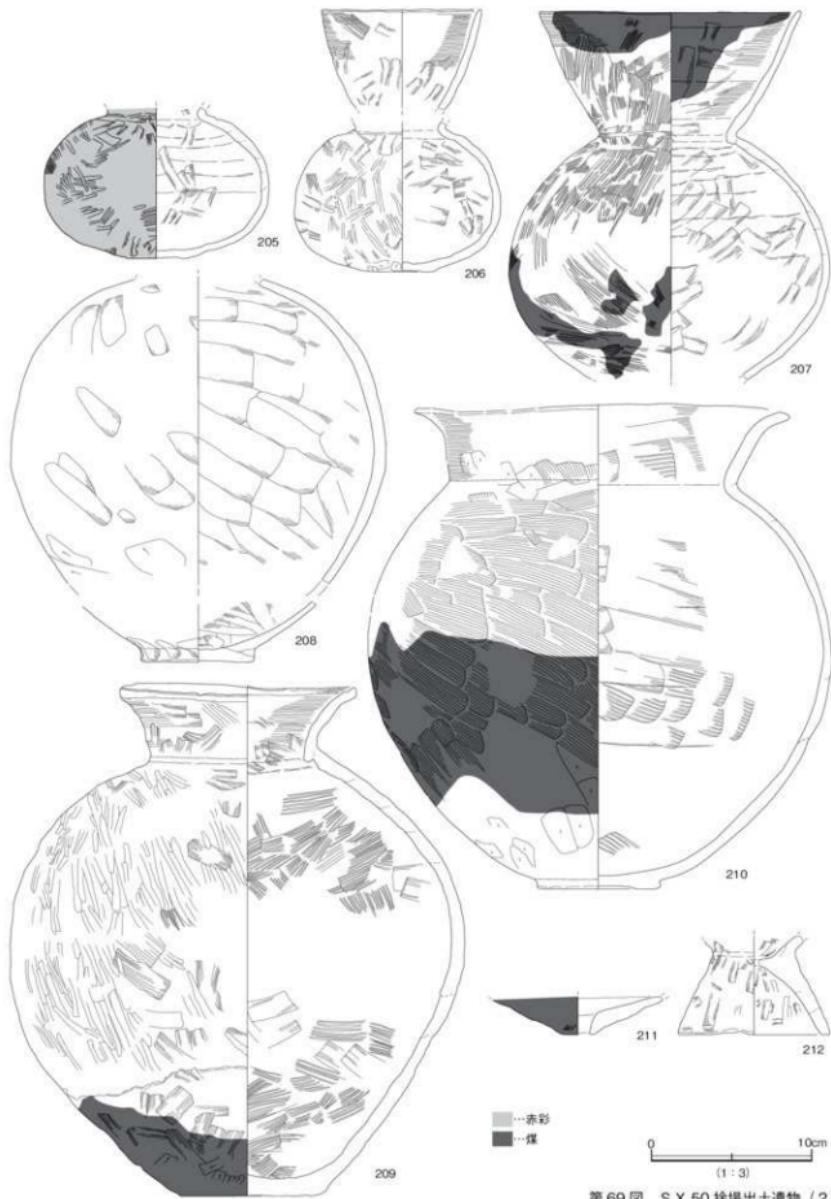
第66図 SD 14・27・40・167溝跡・S B 79振立柱建物跡出土遺物



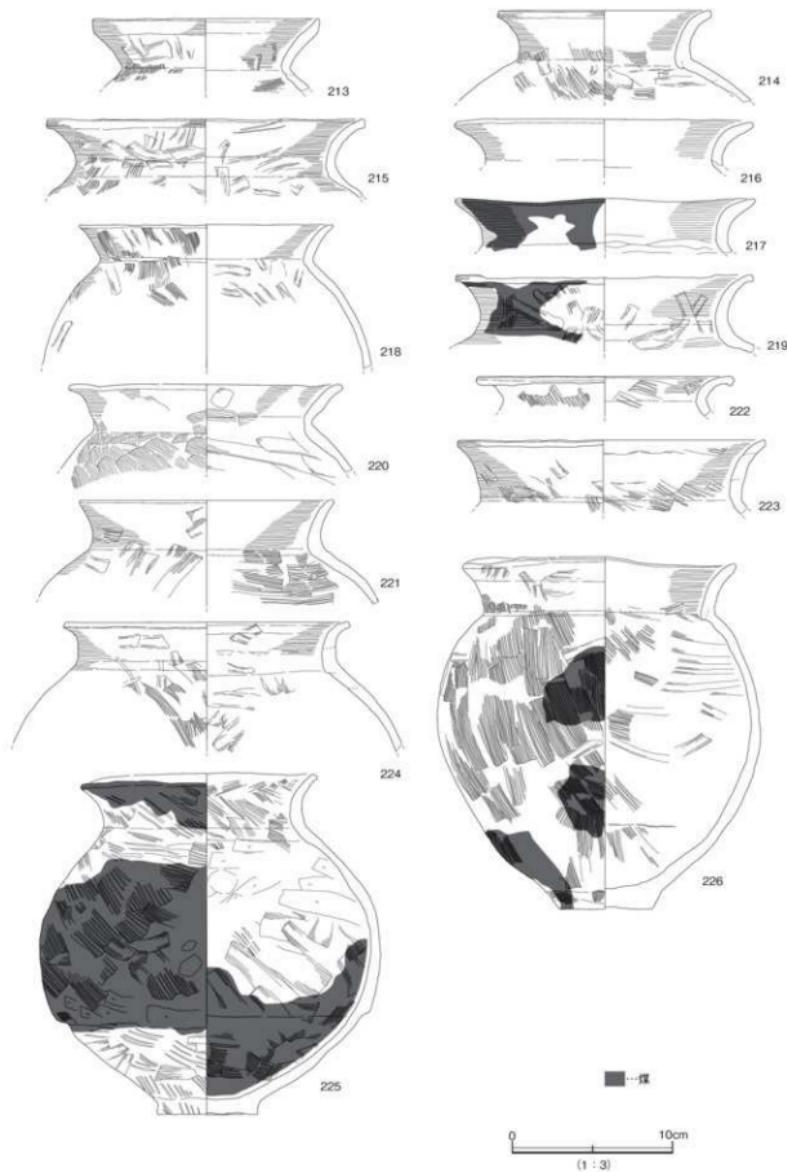
第67図 SD 172・173溝跡・SG 1河川跡・SX 19性格不明遺構出土遺物



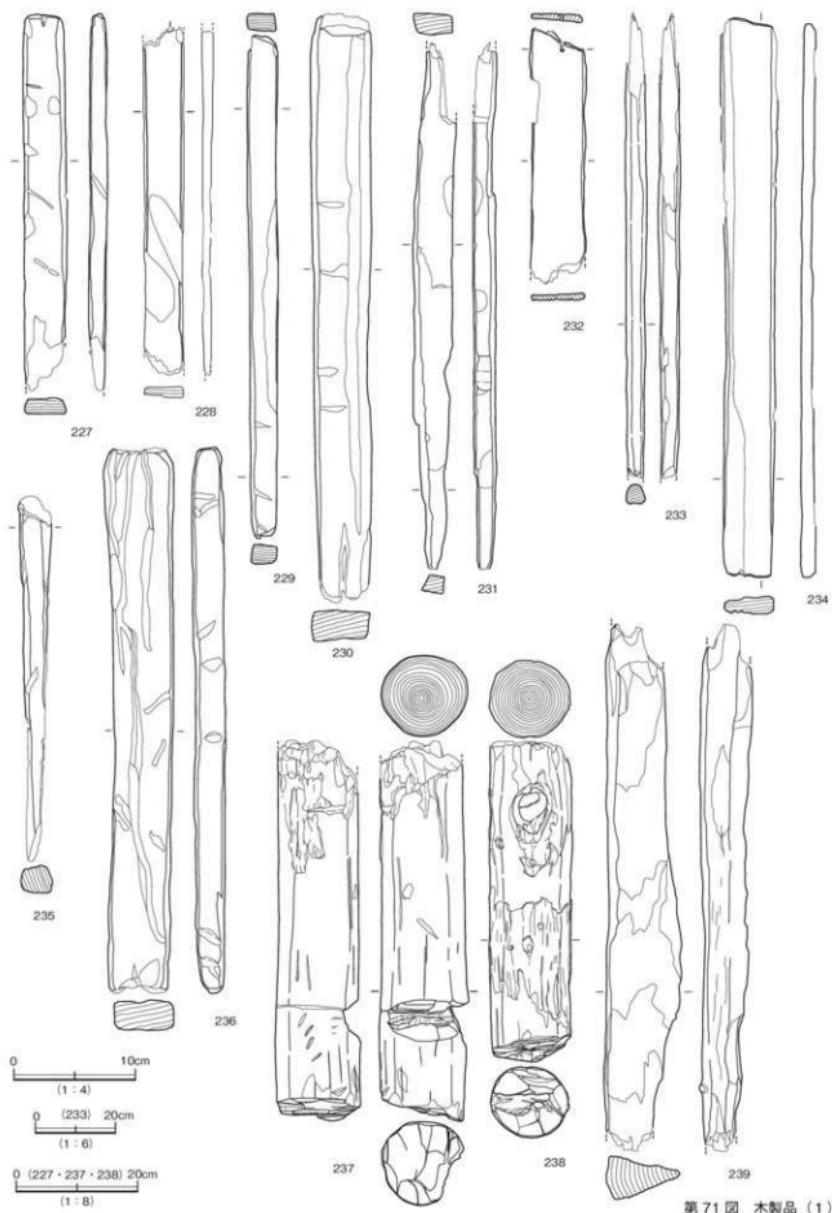
第 68 図 S X 50 捨場出土遺物 (1)



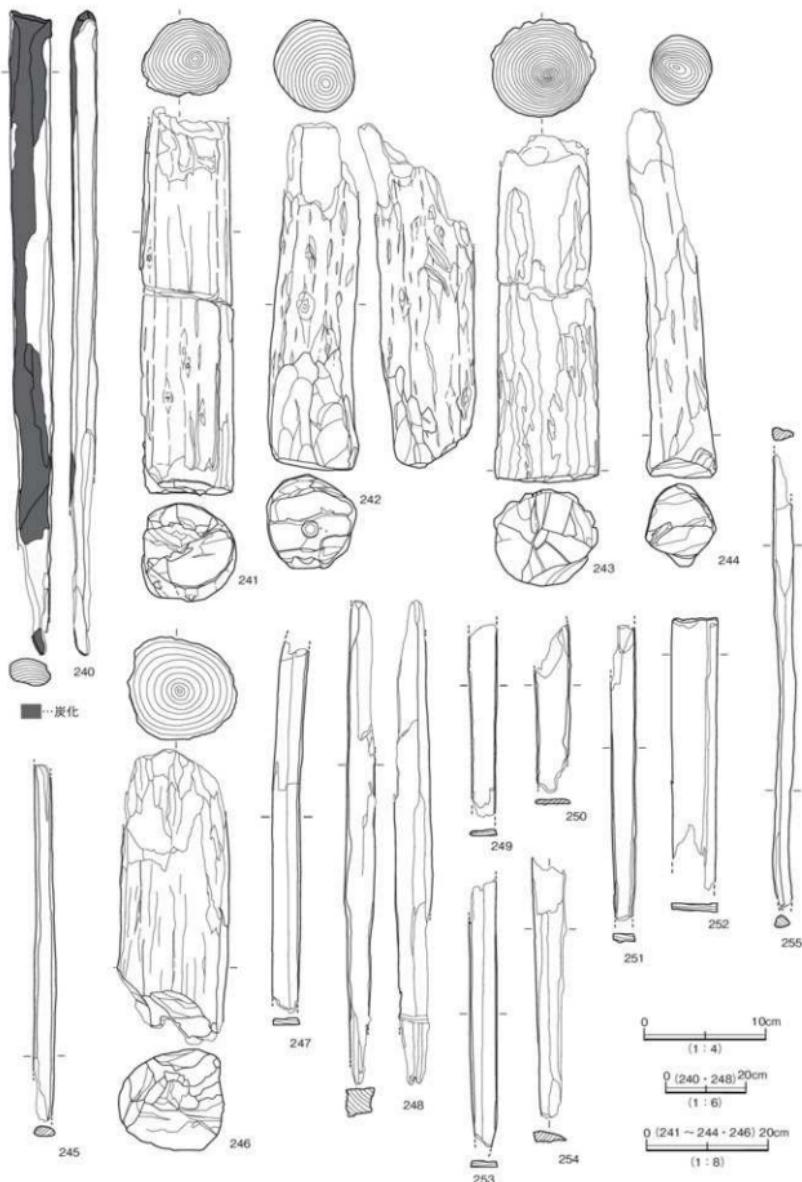
第69図 S X 50 捨場出土遺物（2）



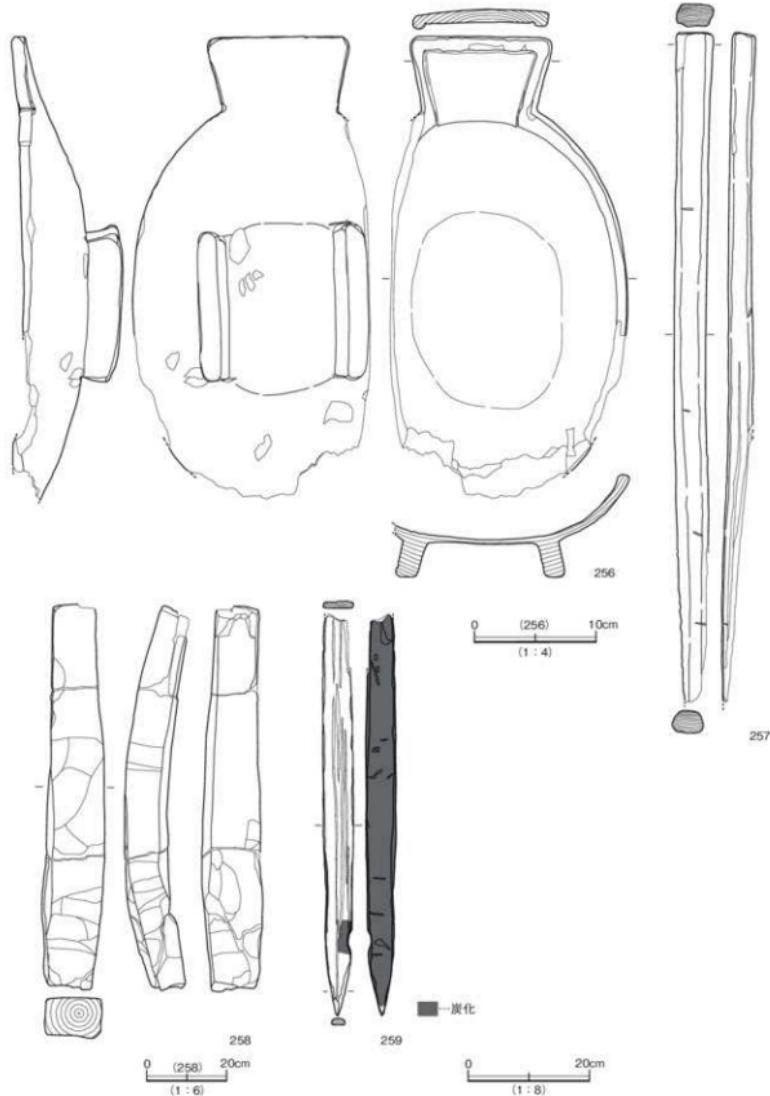
第70図 S X 50捨場出土遺物（3）



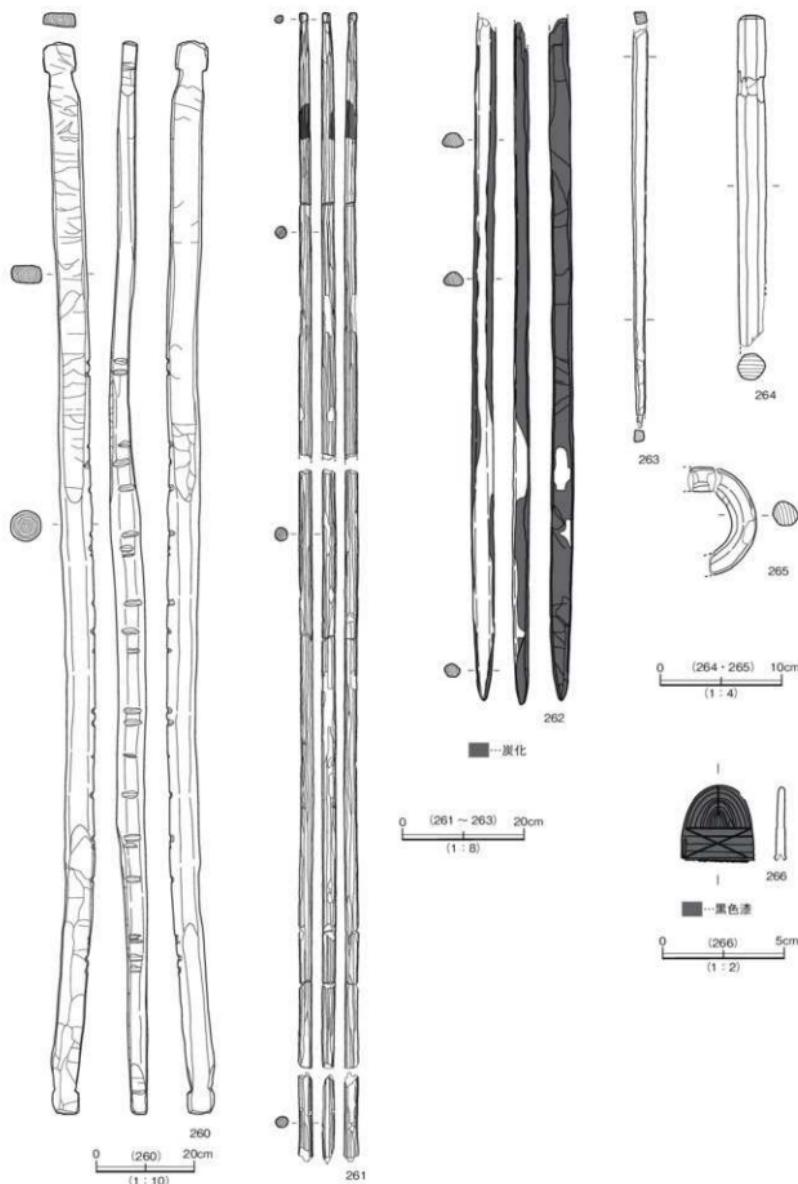
第71図 木製品(1)



第 72 図 木製品 (2)

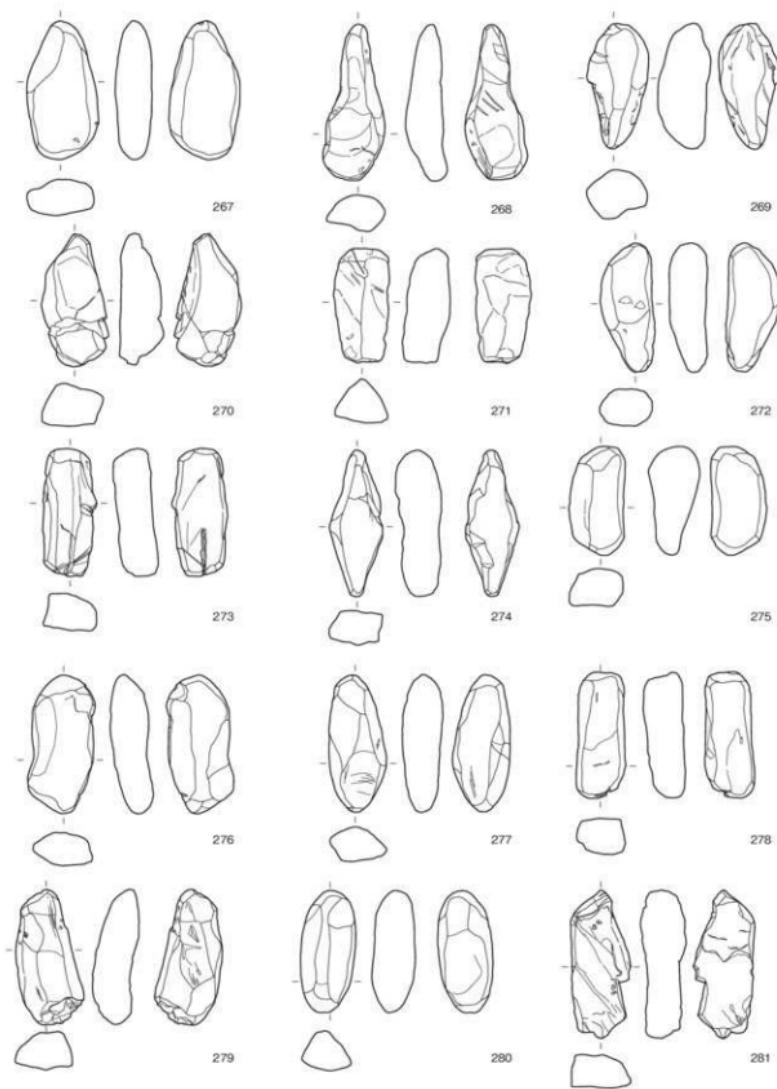


第73図 木製品(3)



第74図 木製品(4), 漆製品

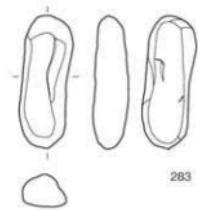
S T 104 穴住居跡



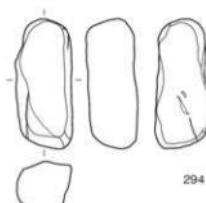
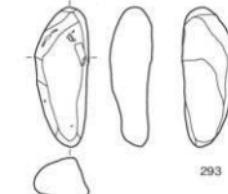
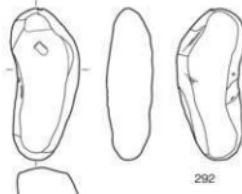
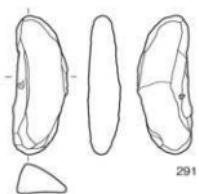
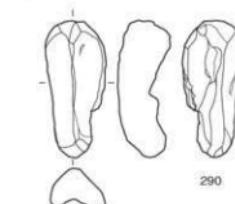
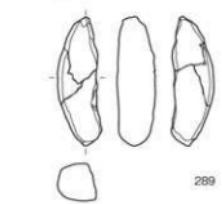
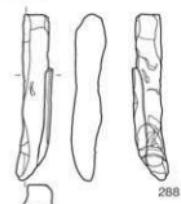
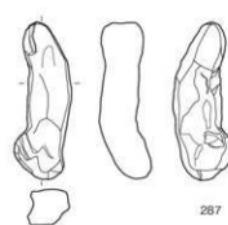
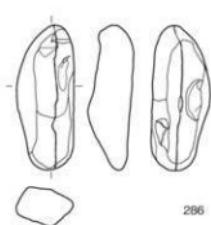
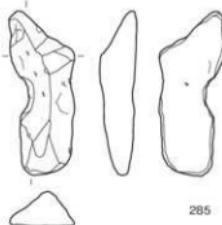
0
10cm
(1 : 4)

第75図 石製品(1)

S T 104 穴住居跡



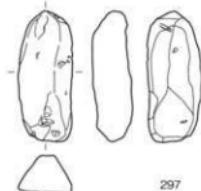
S X 49 集石



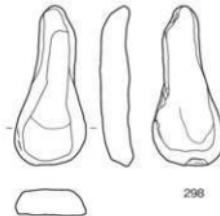
0
10cm
(1 : 4)

第 76 図 石製品 (2)

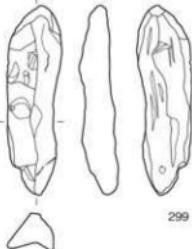
S X 49 集石



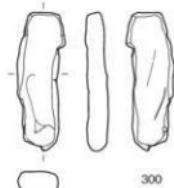
297



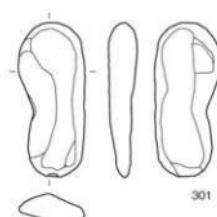
298



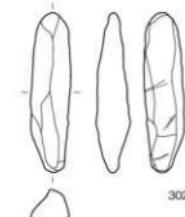
299



300

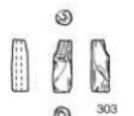


301



302

0 (297 ~ 302) 10cm
(1 : 4)



303

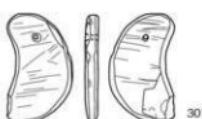
304



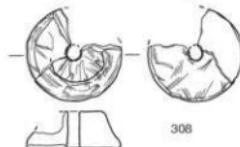
305



306

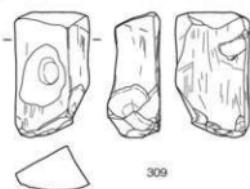


307



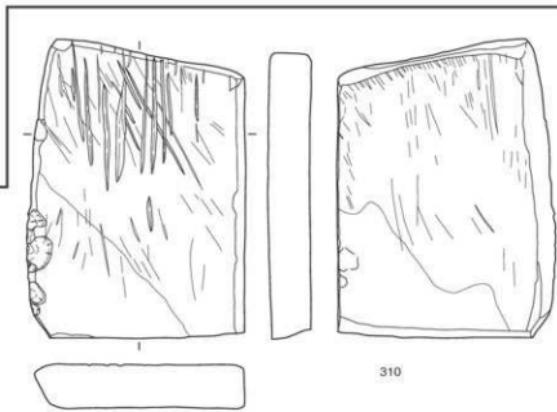
308

0 (303 ~ 308) 5cm
(1 : 2)



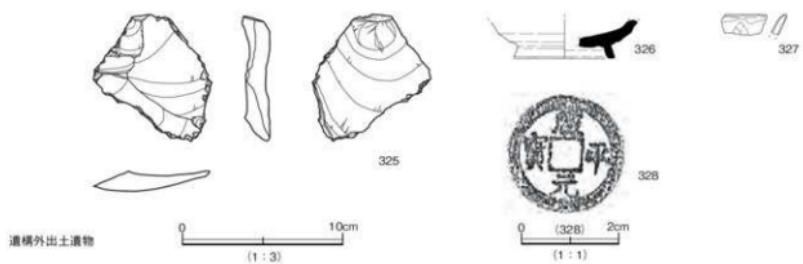
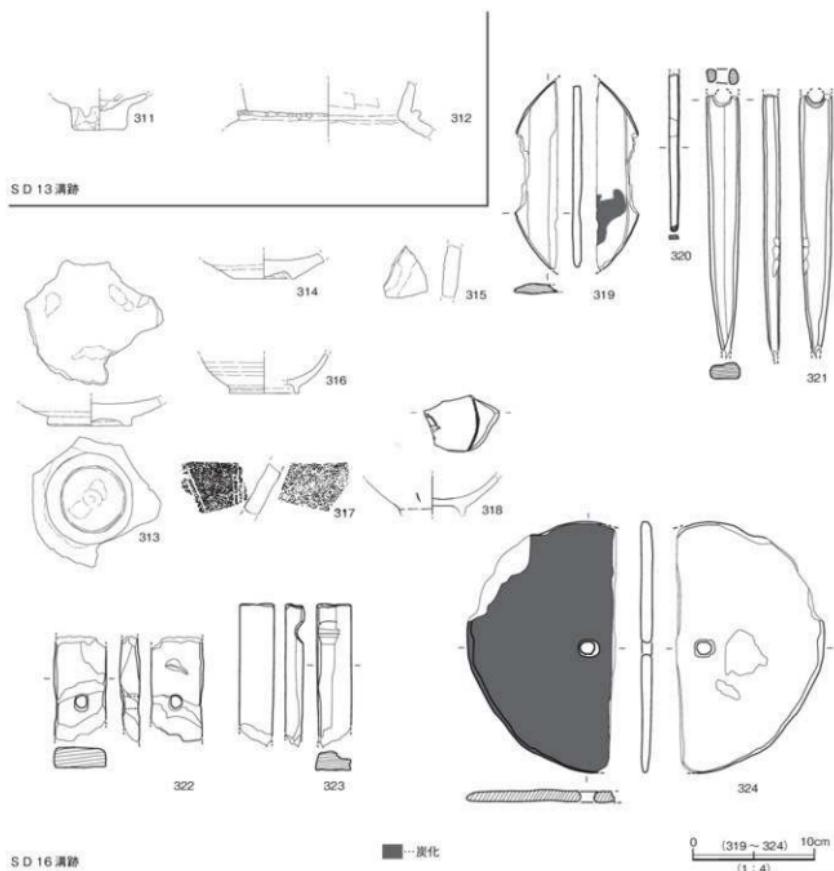
309

0 (309 ~ 310) 10cm
(1 : 3)



310

第 77 図 石製品 (3)



第 78 図 SD 13・16 溝跡・道構外出土遺物

表4 古墳時代遺物觀察表(1) 凡例・計測値の()は口徑・底径の値を示す。底径・高さ・幅の場合は、残存する最大値を示す。備考中の高杯・高台の円括弧()内の記述は、現存する最大値である。

回数	遺物 番号	出土地点 番号	種類	種別	番号	分類	計測値 (mm)	外側			内面		底部	備考	
								口径	底径	高さ	器高	器厚			
1	S120Y	25	土器	高杯	A.1	(1.6)	96	91	5	ケイズリ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	無鉢	円底3、外面部に底付筋、底部高杯	
2	S120Y	22	土器	高杯	B.2	(4.0)	100	95.5	8	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢	
3	S120Y	40	土器	高杯	A.3	(1.6)	7	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢	
4	S120Y	23,24,39	土器	高台	A.3	(1.6)	74	72.5	6	ミガキ、ハラ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢	
5	S120Y	27	土器	高台	A.	(1.6)	86	72.5	6	ミガキ、ハラ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢	
6	S121Y	32	土器	高台	B.	(2.2)	6	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢	
7	S121Y	29	土器	高台	A.1	(1.6)	75	7.5	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢
8	S121Y	28	土器	高台	B.	(1.6)	75	7.5	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢
9	S121Y	30b	土器	高台	A.2	(1.6)	75	7.5	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢
10	S121Y	31	土器	高台	D.	(1.6)	60	51	7	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	無鉢	小形器、外腹に底付筋	
11	S121Y	30a	土器	高台	A.2	(1.6)	58	48	6	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	無鉢	小形器、全体に底付筋、口部底面凹り	
12	S122Y	57	土器	高台	B.2	(1.6)	57	57	5	ヨコナフ、腹四方凹	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢	無鉢	
13	S122Y	61,66,62	土器	高台	B.2	(1.6)	112	112	24	(40)	7	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ	無鉢
14	S122Y	65,66,79	土器	高台	A.2	(1.6)	110	110	24	(40)	7	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ	無鉢
15	S122Y	62	土器	高台	A.2	(1.6)	110	110	24	(130)	8	ケイズリ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	無鉢
16	S122Y	32	土器	高台	A.2	(1.6)	110	110	24	(130)	7	ケイズリ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	無鉢
17	S122Y	33,34	土器	高台	A.2	(1.6)	110	110	24	(130)	7	ケイズリ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	ハラ、ミガキ、ナフ	無鉢
18	S122Y	55	土器	高台	C.1	(1.6)	50	50	16	ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢	
19	S123Y	45a	土器	高台	A.1	(1.6)	50	50	16	ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢	
20	S123Y	48	土器	高台	A.1	(1.6)	144	144	9	ヘラナフ、ヨコナフ	ヘラナフ、ヨコナフ	ヘラナフ、ヨコナフ	無鉢	無鉢	
21	S124Y	46	土器	高台	A.4	(1.6)	118	118	24	(62)	6	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	無鉢
22	S124Y	45b	土器	高台	C.2	(1.6)	104	104	24	(62)	6	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	ナフ、ハラ	無鉢
23	S124Y	49	土器	高台	C.	(1.6)	98	98	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
24	S125Y	82	土器	高台	B.	(1.6)	108	108	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
25	S126Y	240	土器	高台	B.	(1.6)	122	122	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
26	S126Y	265a	土器	高台	B.	(1.6)	122	122	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
27	S126Y	265b	土器	高台	D.	(1.6)	122	122	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
28	S126Y	268	土器	高台	A.1	(1.6)	128	128	24	(53)	8	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
29	S126Y	299	土器	高台	B.1	(1.6)	112	112	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
30	S126Y	211	土器	高台	B.1	(1.6)	115	115	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
31	S126Y	243	土器	高台	B.2	(1.6)	128	128	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
32	S126Y	279	土器	高台	B.2	(1.6)	128	128	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
33	S126Y	242	土器	高台	C.2	(1.6)	133	133	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
34	S126Y	279a	土器	高台	B.2	(1.6)	133	133	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
35	S126Y	241	土器	高台	B.1	(1.6)	122	122	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
36	S126Y	244	土器	高台	D.	(1.6)	164	164	56	6	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	全体に底付筋
37	S126Y	276	土器	高台	A.1	(1.6)	112	112	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
38	S126Y	248	土器	高台	B.2 b	(1.6)	108	108	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
39	S126Y	243,245	土器	高台	A.2 a	(1.6)	128	128	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
40	S126Y	256a	土器	高台	A.1	(1.6)	102	43	49	10	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	無鉢
41	S126Y	256c	土器	高台	B.2	(1.6)	115	59	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
42	S126Y	236a	土器	高台	C.1	(1.6)	118	118	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
43	S126Y	236b	土器	高台	C.2	(1.6)	120	120	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
44	S126Y	247	土器	高台	D.	(1.6)	138	138	24	(62)	6	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	ヨコナフ、ナフ	無鉢
45	S126Y	245	土器	高台	C.1	(1.6)	112	59	45	10	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	無鉢	大形杯、器内有底色
46	S126Y	356	土器	高台	A.1	(1.6)	131	54	66	6	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	無鉢	丸底
47	S126Y	358	土器	高台	A.1	(1.6)	130	54	66	6	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	無鉢	平底
48	S126Y	359	土器	高台	A.2	(1.6)	130	54	66	6	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	無鉢	全体的・無鉢
49	S126Y	357	土器	高台	A.2	(1.6)	130	54	66	6	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	無鉢	無鉢
50	S126Y	358	土器	高台	A.1	(1.6)	116	53	65	6	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	ナフ、ヨコナフ	無鉢	小形、内外壁に塗り付

古墳時代遺物観察表(2)

区分	遺物	出土場所	番号	登錄	種類	種別	器種	分類	前縁	中縫	口縫	直徑	器高	素算	計測値(mm)		施土	施部	
															内面				
51	ST103F	235a	上部	环	C 2	145	61	6	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
52	ST103	EL187-353	上部	环	C 2	150	62	65	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
53	ST103	EL187-357	上部	环	B 1	127	52	65	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
54	ST103Y	236	上部	环	D	128	56	65	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
55	ST103Y	237	上部	环	D	160	72	5	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
56	ST103	EL187-351	上部	环	D	162	69	65	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
57	ST103	EL187-351-290	上部	环	E	118	79	6	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
58	ST103Y	238	上部	环	E	144	99	53	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
59	ST103	EL187-352b	上部	环	B 1	184	66	6	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
60	ST103	EL187-354a	上部	环	B 1	184	97	66	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
61	ST103Y	238	上部	环	A 2	205	86	233	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
62	ST103	EL187-231	上部	环	C 2 b	157	70	159	9	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
63	ST103Y	239	上部	环	D	104	8	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ		
64	ST103	EL187-239	上部	环	D	126	76	8	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
65	ST103Y	240	上部	环	D	154	68	66	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
66	ST103	EL187Y-238b	上部	环	B 1 c	184	73	274	75	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
67	ST103	EL187Y-238b	上部	环	B 1 a	188	147	7	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
68	ST103	EL187-352b	上部	环	B 1 c	168	104	7	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
69	ST103	EL187-353	上部	环	D	170	92	7	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
70	ST103Y	2313	上部	环	A 1	146	56	7	ロクロ、直状文	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
71	ST104	EL142-267	上部	环	B 1	136	71	7	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
72	ST104	EL142-267b	上部	环	B 1	154	62	15	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
73	ST104	EL142-296	上部	环	B 1	144	61	6	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
74	ST104	EL142Y-296b	上部	环	A 2	145	63	7	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
75	ST104	EL142Y-296c	上部	环	A 2	138	69	9	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
76	ST104Y	208	上部	环	A 2	136	58	65	ナフ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
77	ST104Y	210	上部	环	B 1	141	53	11	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
78	ST104	EL142-311	上部	环	B 2	134	7	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ		
79	ST104	EL142-310	上部	环	B 1	132	65	7	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
80	ST104	EL142Y-314Y	上部	环	B 1	130	76	8	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
81	ST104Y	307b	上部	环	A 2	148	730	6	ケズリ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
82	ST104Y	309	上部	环	A 2	130	62	89	7	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
83	ST104Y	218	上部	环	A 2	136	68	7	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
84	ST104	EL154	上部	环	B 1	136	61	7	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
85	ST104	EL142-295	上部	环	A 2	143	60	134	85	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
86	ST104	EL142-303b	上部	环	B 1	132	76	186	9	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
87	ST104	EL142-303c	上部	环	B 1	130	76	257	85	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
88	ST104	EL142-306	上部	环	A 2	210	88	9	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
89	ST104Y	309	上部	环	A 2	148	72	7	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
90	ST104Y	312	上部	环	B 1 a	126	8	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ		
91	ST104F	306	上部	环	B 1 a	201	68	281	7	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
92	ST104	EL142-298	上部	环	A 1	169	70	291	8	ナラタ、ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
93	ST104	EL142-300b	上部	环	B 1 c	184	68	268	8	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
94	ST104Y	224	上部	环	B 1	105	52	6	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
95	ST104Y	225	上部	环	B 1	106	47	47	5	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
96	ST104Y	226	上部	环	B 1	104	40	40	5	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
97	ST104Y	228	上部	环	B 1	105	46	42	63	ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
98	ST105	EN106F	上部	环	B 1	109	59	5	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	
99	ST105Y	225	上部	环	A 1	105	47	47	5	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ
100	ST105Y	226	上部	环	D	144	57	7	ケズリ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ミガキ、ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	ナフ	

古墳時代遺物觀察表 (3)

回函	博物館	出土地点	資料番号	番号	種別	器種	分類	計測値 (mm)	測量			施土	底部			
									前	中	後	口径	底径	器高	外周	内面
101	ST016_EK15TP	土師壺	H	C 1	366	68	6	62	55	41	55	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
102	ST016_EK15TP	土師壺	H	B 1	120	48	5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
103	ST016_EK15TY	土師壺	H	A 2	152	70	53.5	6	ナメ							
104	ST016_EK15T	土師壺	H	A 2	120	67	5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
105	ST016_EK15	土師壺	H	A 2	150	7	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	
106	ST016_EK15AF	土師壺	H	D	144	51	7	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
107	ST016_EK15F	土師壺	H	A 1	130	38	53	5	ナメ							
108	ST016_EK15Y	土師壺	H	A 1	97	52	75	7.5	ナメ							
109	ST016_EK15Y	土師壺	H	D	138	51	5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
110	ST016_EK15Y	土師壺	H	B 3	146	51	5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
111	ST016_EK15Y	土師壺	H	B 1	142	57	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
112	ST016_EK16	土師壺	H	A 2	(80)	54	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
113	ST016_EK16	土師壺	H	B 2	100	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
114	ST016_EK16	土師壺	H	D	114	32	108	5	ナメ							
115	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1	132	75	54	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
116	ST016_EK16F	土師壺	H	A 2	(130)	54	12.5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
117	ST016_EK16F	土師壺	H	A 1	156	126	7	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
118	ST016_EK16	土師壺	H	A 2	179	68	123	5	ナメ							
119	ST016_EK16	土師壺	H	A 2	129	74	133	8	ナメ							
120	ST016_EK16F	土師壺	H	A 1	259	76	125	7.5	ナメ							
121	ST016_EK16F	土師壺	H	C 1	186	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
122	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 1	156	76	256	7	ナメ							
123	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 2	112	62	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
124	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 2	120	48	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
125	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1	112	66.5	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
126	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1	118	69	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
127	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 2	178	74	87	5	ナメ							
128	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 2	116	56	5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
129	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 3	116	68	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
130	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 1 b	96	7	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
131	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 2	122	6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
132	ST016_EK16Y	土師壺	H	C	120	40	143	7	ナメ							
133	ST016_EK16T	土師壺	H	C	90	28	82	7	ナメ							
134	ST016_EK16Y	土師壺	H	C	100	56	65	5	ナメ							
135	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 2	138	45	85	6	ナメ							
136	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 2	134	60	86	6	ナメ							
137	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1 c	112	64	104	7	ナメ							
138	ST016_EK16Y	土師壺	H	B 2	164	64	110	8	ナメ							
64	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1	205	85	229	7.5	ナメ							
141	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 2	106	50	32	8	ナメ							
142	ST016_EK16Y	土師壺	H	C 2 b	(142)	60	8	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
143	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1	120	76	184	9	ナメ							
144	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1 c	112	80	243	8.5	ナメ							
145	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1 c	115	70	255	10	ナメ							
146	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 1 c	152	72	251	8	ナメ							
147	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 2	112	70	243	7	ナメ							
65	ST016_EK16Y	土師壺	H	C	118	56	128	6	ナメ							
149	ST016_EK16Y	土師壺	H	A	100	49	4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
150	ST016_EK16Y	土師壺	H	A 2	178	62	5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ

古墳時代遺物觀察表(4)

回叢 番号	出土地点	登錄 番号	種類	特徴	分類	前期	中期	口徑	周長	高さ	底径	調整		出土		
												内面	底部			
65	151 ST116F	365	土陶器	壺	A.2	(127)	43	82	4	ケイク,ナラ	ナラ	ケイク,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	152 ST117Y	360	土陶器	壺	C	(168)	(126)	(69)	9	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
66	153 ST125Y	349	土陶器	壺	A.3	(168)	(137)	7	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	154 ST126Y	19	土陶器	壺	A.2	(184)	(156)	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
67	155 SD14F	1821	土陶器	壺	A.1	(250)	(96.5)	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	156 SD14F	18	土陶器	壺	A.3	168	(89)	6	日コヨナ(内側)ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
68	158 SD16F	774	土陶器	壺	A.2	(161)	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	159 SD16F	7884	土陶器	壺	B.1	(163)	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
69	160 ST87	E106F	1	土陶器	壺	C	(112)	(70)	120	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底
	161 SK107	290	土陶器	壺	A.2	172	14	54	8	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
70	162 SK108F	202	土陶器	壺	A.2	116	48	(40)	10	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	163 SK108F	28	土陶器	壺	不明	130	52	50	4	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
71	164 SU127F	23318	土陶器	有蓋高足壺		124	50	4	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	165 SU127F	255284	土陶器	有蓋高足壺		116	23	87	55	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
72	166 SU165F	325334	土陶器	有蓋壺		135	18	63	7	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	167 SU165F	175	土陶器	壺	D	120	47	105	7	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
73	169 SU165F	286	土陶器	壺	A.2	115	56	109	8	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	170 SU172F	366	土陶器	壺	A.2	(154)	37	60	8	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
74	171 SU172F	233334	土陶器	壺	C.2.b	(122)	46	148	9	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	172 SU172F	177	土陶器	壺	C.2.b	127	72	139	9	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
75	173 SU173F	330	土陶器	壺	B.1.a	26	162	(221)	9	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	174 SU173F	331	土陶器	壺	C	26	106	106	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
76	175 SG15F	26	土陶器	甕		123	7	123	7	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	176 SG15F	67	土陶器	甕	C.2.b	147	32	186	65	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
77	177 SG15F	66	土陶器	甕	A	(166)	7	125	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	178 SG15F	56	土陶器	甕	A.2	(160)	7	126	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
78	179 SG15F	57	土陶器	甕	A.2	(190)	130	55	5	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	180 SG15F	25	土陶器	甕	A.2	(166)	7	125	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
79	181 SG15F	13.F	土陶器	甕	B.1.a	26	162	(221)	9	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	182 SG15F	9.E	土陶器	甕	C	26	106	106	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
80	183 SG15F	12.H	土陶器	甕		(166)	7	125	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	184 SG15F	15.G	土陶器	甕	D	(30)	40	120	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
81	185 SG15F	16.F	土陶器	甕	C	130	40	73	5	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	186 SG15F	15.F	土陶器	甕	B	86	104	80	5	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
82	187 SG15F	13.I	土陶器	甕	A.2	(82)	(134)	(96)	5	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	188 SG15F	12.G	土陶器	甕	B	(128)	104	80	5	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
83	189 SG15F	11.F	土陶器	甕	A.2	(166)	(86)	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	190 SG15F	9.I	土陶器	甕	D	(16)	(66)	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
84	191 SG15F	16.H	9.I	土陶器		(30)	40	120	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	192 SG15F	13.F	土陶器	甕	C	118	34	75	5	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
85	193 SG15F	13.F	土陶器	甕	C	(188)	(32)	7	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	194 SG15F	10.E	土陶器	甕	A.2	(144)	(86)	7	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
86	195 SG15F	9.E	土陶器	甕	B	(188)	(76)	7	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	196 SG15F	8.E	土陶器	甕	C	(96)	45	187	8	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
87	197 SG15F	20.E	土陶器	甕	D	(166)	(66)	6	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
	198 SG15F	15.F	土陶器	甕	E	(62)	59	5	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		
88	199 SG15F	10.E	土陶器	甕	A.3	(164)	24	(76)	8	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底	
	200 SG15F	13.F	土陶器	甕	A.1	(164)	194	8	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ,ナラ	ナラ	ナラ	箱形底		

古墳時代遺物觀察表(5)

回版	遺物	番号	出土地點	資料	種類	種別	器形	分類	口径	底径	高	計測値(mm)	調整		附註
													内面	外面	
203	SNS50	9.E	137	土陶器	器	A.1	土陶器	直	1.75	1.75	6	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
68	SNS50	10.E	132	土陶器	器	A.1	土陶器	直	1.94	1.94	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
203	上.9.9.9	12.K	134c	土陶器	器	D.1	土陶器	直	1.20	1.20	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
203	SNS50	12.G	117.16	土陶器	器	D.1	土陶器	直	1.20	1.20	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
205	上.9.9.9	15.1	10	土陶器	器	B.2	土陶器	直	1.96	1.96	5	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
206	SNS50	15.F	73	土陶器	器	B.2	土陶器	直	1.96	1.96	5	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
207	SNS50	15.F	71a	土陶器	器	B.1	土陶器	直	1.58	1.58	4.5	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
69	SNS50	18.F.26.E	130	土陶器	器	D.1	土陶器	直	1.68	1.68	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
209	上.9.9.9	9.I	134a	土陶器	器	D.1	土陶器	直	1.42	1.42	8.1	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
210	上.9.9.9	12.K	134a	土陶器	器	D.1	土陶器	直	1.29	1.29	6.5	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
211	上.9.9.9	15.	15	土陶器	器	D.1	土陶器	直	1.18	1.18	8	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
212	上.9.9.9	16.H	1	土陶器	器	C.2	土陶器	直	1.90	1.90	10	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
213	SNS50	11.1	11.1	土陶器	器	A.1	土陶器	直	1.28	1.28	4.5	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
214	SNS50	14.G	102	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.28	1.28	6	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
215	SNS50	19.F	112	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.92	1.92	6	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
216	SNS50	9.E	124	土陶器	器	A.4	土陶器	直	1.82	1.82	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
217	SNS50	8.E	129	土陶器	器	A.4	土陶器	直	1.84	1.84	8	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
70	SNS50	16.G	88	土陶器	器	A.3	土陶器	直	1.54	1.54	8	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
219	SNS50	18.E	110	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.79	1.79	7.5	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
220	SNS50	18.E	128	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.66	1.66	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
221	上.9.9.9	15.1	13.	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.54	1.54	6	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
222	上.9.9.9	14.1	14	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.14	1.14	6	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
223	SNS50	15.F	70	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.96	1.96	6.5	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
224	SNS50	15.F	72	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.72	1.72	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
225	SNS50	16.G	86.87.90	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.40	1.40	6.0	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
226	上.9.9.9	12.K	134b	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.66	1.66	5.7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
78	SNS50	15.F	73	土陶器	器	A.2	土陶器	直	1.30	1.30	4	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
312	SNS13V	13.E	13.1	土陶器	器	D.1	土陶器	直	(31)	7	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤

表5 陶磁器・遺構外縁物觀察表

回版	遺物	出土地點	資料	番号	種類	種別	器形	分類	口径	底径	高	計測値(mm)	調整		附註
													内面	外面	
203	SND16	15.F			陶器	器	陶器	直	50	17.5	6	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
314	SND16	15.F			陶器	器	陶器	直	34	15.5	7	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
315	SND16	15.F			陶器	器	陶器	直	(31.5)	8	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
78	SND16	15.F			陶器	器	陶器	直	(31)	3	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
316	SND16	15.F			陶器	器	陶器	直	31.5	9	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
317	SND16	15.F			陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
318	SND16	15.F			陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
319	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
320	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
321	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
322	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
323	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
324	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
325	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
326	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤
327	奈良				陶器	器	陶器	直	(31)	4	ナラ	口2.00+	口2.00+	口2.00+	直口盤

表 6 木製品觀察表

団体	種類	番号	出土地点	種別	長さ	幅	厚さ	備考	時代	団体	種類	番号	出土地点	種類	番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考
227	21.3	ST100P3	木材	柱材	307	34	13	古墳	古墳	267	棒状鉢	ST104	367	114	58.5	30	25.6	小端石	無鉄石?		
228	21.3	ST100P3	木材	柱材	290	32	9	同上	古墳	268	棒状鉢	ST104	368	126	51	30	14.9	小端石	無鉄石?		
229	25.0	ST100P3	木材	柱材	410	21	14	同上	古墳	269	棒状鉢	ST104	389	103	51	40	23.0	小端石	無鉄石?		
230	21.5	ST100P3	木材	柱材	930	25	14	同上	古墳	270	棒状鉢	ST104	380	109	55	35	27.3	火候石	無鉄石?		
231	21.4	ST100P3	木材	柱材	430	32	18	同上	古墳	271	棒状鉢	ST104	391	94.5	46	37	18.8	火候石	無鉄石?		
71	234	21.4	ST100P3	木材	328	46	5	同上	古墳	272	棒状鉢	ST104	382	106	45	30	18.5	火候石	無鉄石?		
75	234	21.9	ST100P3	木材	572	23	24	同上	古墳	273	棒状鉢	ST104	393	105	45	31	26.2	火候石	無鉄石?		
71	234	282	ST100Z	木材	311	40	14	同上	古墳	274	棒状鉢	ST104	394	120	44	28	211.8	火候石	無鉄石?		
225	W(2)	ST102	木材	145	26	24	同上	古墳	275	棒状鉢	ST104	395	89	46	31	26.5	火候石	無鉄石?			
226	284	ST102	木材	145	36	24	同上	古墳	276	棒状鉢	ST104	396	114	55.5	27.5	266.5	火候石	無鉄石?			
227	367	ST102P233	木材	625	42	133	同上	古墳	277	棒状鉢	ST104	397	113	47	27	23.3	七之器?	無鉄石?			
228	368	ST102P204	木材	535	33	126	同上	古墳	278	棒状鉢	ST104	398	104	41	25.5	20.9	火候石	無鉄石?			
229	369	ST102Y	木材	430	61	42	同上	古墳	279	棒状鉢	ST104	399	111.5	56	32	25.2	七之器?	無鉄石?			
340	361	ST100Y	木材	780	31	100	同上	古墳	280	棒状鉢	ST104	400	109	45	33	25.2	七之器?	無鉄石?			
241	ST100P246	木材	640	122	126	同上	古墳	281	棒状鉢	ST104	401	122	49	27	25.6	火候石	無鉄石?				
242	ST100P206	木材	572	132	151	同上	古墳	282	棒状鉢	ST104	402	108	43.5	42	19.8	流石	無鉄石?				
243	ST100P247	木材	570	170	160	同上	古墳	283	棒状鉢	ST104	403	109	44	26.5	26.5	火候石	無鉄石?				
244	ST100P247	木材	695	101	114	同上	古墳	284	棒状鉢	ST104	404	95	38	27	161.9	同上	無鉄石?				
245	ST105EK166	木材	921	17	8	同上	古墳	285	棒状鉢	SX49	135	53	29	104	25.7	火候石?	無鉄石?				
246	ST105EP185	木材	485	182	165	先端削除	古墳	286	棒状鉢	SX49	119	47	32	25.4	25.4	火候石	無鉄石?				
72	247	25.5	SK132P3	木材	314	5.5	25	同上	古墳	287	棒状鉢	SX49	129	47	29	26.7	火候石	無鉄石?			
72	248	24.5	SK132P3	木材	637	46	25	同上	古墳	288	棒状鉢	SX49	137	30	19	10.5	火候石	無鉄石?			
249	25.6	SK132Y	木材	1157	23	45	同上	古墳	289	棒状鉢	SX49	106	36	31	14.8	火候石	無鉄石?				
250	289	1.1	SK132Y	木材	1375	26.5	4	同上	古墳	290	棒状鉢	SX49	112	50	33.5	19	16.8	火候石?	無鉄石?		
251	291	1.1	SK132Y	木材	211	29	2	同上	古墳	291	棒状鉢	SX49	114	45	21	15.5	15.5	火候石?	無鉄石?		
252	294	1.1	SK132Y	木材	222	7	2	同上	古墳	292	棒状鉢	SX49	129	56.5	37	28.6	同上	無鉄石?			
253	286	1.1	SK132Y	木材	219	22	5	同上	古墳	293	棒状鉢	SX49	114	45	34	23.4	23.4	流石	無鉄石?		
254	294	1.1	SK132Y	木材	210	28	8	同上	古墳	294	棒状鉢	SX49	106	47	36.5	35.6	26.5	火候石	無鉄石?		
255	292	SK132Y	木材	573	17	10	同上	古墳	295	棒状鉢	SX49	129	51	29	20.5	20.5	火候石	無鉄石?			
73	257	27.5	SK1.1	木材	572	29	139	2.9	古墳	296	棒状鉢	SX49	125	55	29.5	29.9	火候石	無鉄石?			
73	258	SG.1.2	木材	316	26	26	同上	古墳	297	棒状鉢	SX49	106	31	31	18.0	18.0	火候石?	無鉄石?			
259	68	SG.1	木材	666	60	12	-同上	古墳	298	棒状鉢	SX49	131	59	22	19.9	19.9	火候石?	無鉄石?			
260	69	SG.1	木材	1700	50	14	-同上	古墳	299	棒状鉢	SX49	155	45	30	18.0	18.0	火候石?	無鉄石?			
261	37	SG.3MP2	木材	1345	40	29	-同上	古墳	300	棒状鉢	SX49	113	40	16	14.0	14.0	火候石	無鉄石?			
74	263	384	SG.3MP2	木材	(1381.5)	36	23	-同上	古墳	301	棒状鉢	SX49	131	53	25	14.7	14.7	火候石?	無鉄石?		
264	260	北半部	木材	572	29	139	2.9	古墳	302	棒状鉢	SX49	120	21	7	13.8	13.8	綠色細火石	徑6.5mm、完形			
73	257	27.5	SG.1.2	木材	1110	61	38	同上	古墳	303	管状	SX50	132	22	7	16.8	16.8	綠色細火石	徑6.5mm、完形		
265	266	1.1	木材	1361	20	19	-同上	古墳	304	管状	SX50	131	5.5	5	4	1	1	白玉	無鉄石?		
319	267	1.1	木材	1341	34	8	同上	古墳	305	同上	SX119Y	204	36	15	3	2.3	2.3	白玉	無鉄石?		
320	269	1.1	木材	1295	8	3	同上	古墳	306	同上	SX119Y	352	44	24	6	8	8	白玉	無鉄石?		
78	321	11.6	1.1	木材	216	25	13	同上	古墳	307	同上	ST105EK157	375	15	17	17	17	17	滑石	徑38mm、孔φ5.5mm	
322	322	1.1	木材	186	42	17	同上	古墳	308	同上	SX119Y	328	77	46	27	11.4	11.4	白玉	無鉄石?		
323	323	1.1	木材	117	25	15	同上	古墳	309	同上	SX119Y	354.5	158	134	26	19.7	19.7	滑石質火石	無鉄石?		
324	324	1.1	木材	306	121	9	同上	古墳	310	同上	SX119Y	325	15.5	5.5	4	5.5	5.5	白玉	無鉄石?		

卷号	種類	番号	写真	標類	出土地点	種類	番号	長	幅	厚さ	重量(g)	備考
78	267	古墳	II.5	標	II.5	標	24	1	3		成年男	

表 7 石製品・石器観察表

IV 理化学分析

1 放射性炭素年代測定（1）

(株) 加速器分析研究所

試 料

分析試料の詳細を表9に示す。

試料は、河川跡や溝跡出土の木製品や種子、骨のほか、堅穴住居跡から出土した炭化材など計10点である。

化学処理工程

A. 木片・炭化物の化学処理

- (1) メス・ピンセットで、表面的な不純物を取り除く。
- (2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。なおAAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。
- (3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに、ハンドプレス機で詰めてホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

表9 試料一覧・放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)		$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり Libby Age (yrBP)	pMC (%)
					(AMS)			
IAAA-92381	1	S G 1 覆土2層	木製品	AAA	-21.72 ± 0.70		1,420 ± 30	83.84 ± 0.29
IAAA-92382	2	S G 1 覆土3層	種子	AAA	-25.98 ± 0.66		1,680 ± 30	81.09 ± 0.28
IAAA-92383	3	S G 1 覆土5層	種子	AAA	-25.23 ± 0.49		1,570 ± 30	82.29 ± 0.28
IAAA-92384	4	S G 1 覆土6層	種子	AAA	-24.73 ± 0.83		1,570 ± 30	82.20 ± 0.30
IAAA-92385	5	S D13 底面	骨	CEx	-18.72 ± 0.75		790 ± 30	90.66 ± 0.32
IAAA-92386	6	S D13 覆土1層(No.10)	木製品	AAA	-20.69 ± 0.76		990 ± 30	88.38 ± 0.31
IAAA-92387	7	S G 1 覆土1層	種子	AAA	-26.39 ± 0.52		Modern	127.78 ± 0.38
IAAA-92388	8	S G 1 覆土4 b層	種子	AAA	-25.60 ± 0.72		1,560 ± 30	82.35 ± 0.30
IAAA-92389	9	S T22 覆土2層	炭化材	AAA	-30.95 ± 0.78		1,820 ± 30	79.76 ± 0.31
IAAA-92390	10	S T22 E L43印跡	炭化物	AAA	-25.78 ± 0.67		1,740 ± 30	80.47 ± 0.28

B. 骨の化学処理

- (1) 骨試料はコラーゲン抽出(CEx)を行なう。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラン等を使い、表面的な不純物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。
- (2) 0.2Nの水酸化ナトリウム溶液を骨試料と超純水の入ったビーカーに入れ、骨試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて1Nの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、沈殿物を凍結乾燥させる。沈殿物に超純水を入れて、90°Cで保温した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。
- (3) 抽出試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。以下、木片・炭化物の化学処理工程(4)～(6)と同じ。

測定方法

測定機器は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、測定は、米国国立標準局(NIST)提供のシウ酸(HOx II)を標準試料とする。標準試

料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定と仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。この値は $\delta^{14}\text{C}$ により補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1 術目を四捨五入して 10 年単位で表示される。 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定して基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、基準値からのずれを千分偏差 (%) で表される。測定には、質量分析計または加速器を用いる。加速器 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合、表中に (AMS) 表記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照合して、過去の ^{14}C 濃度変化等を補正して、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲で 1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) または 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しな

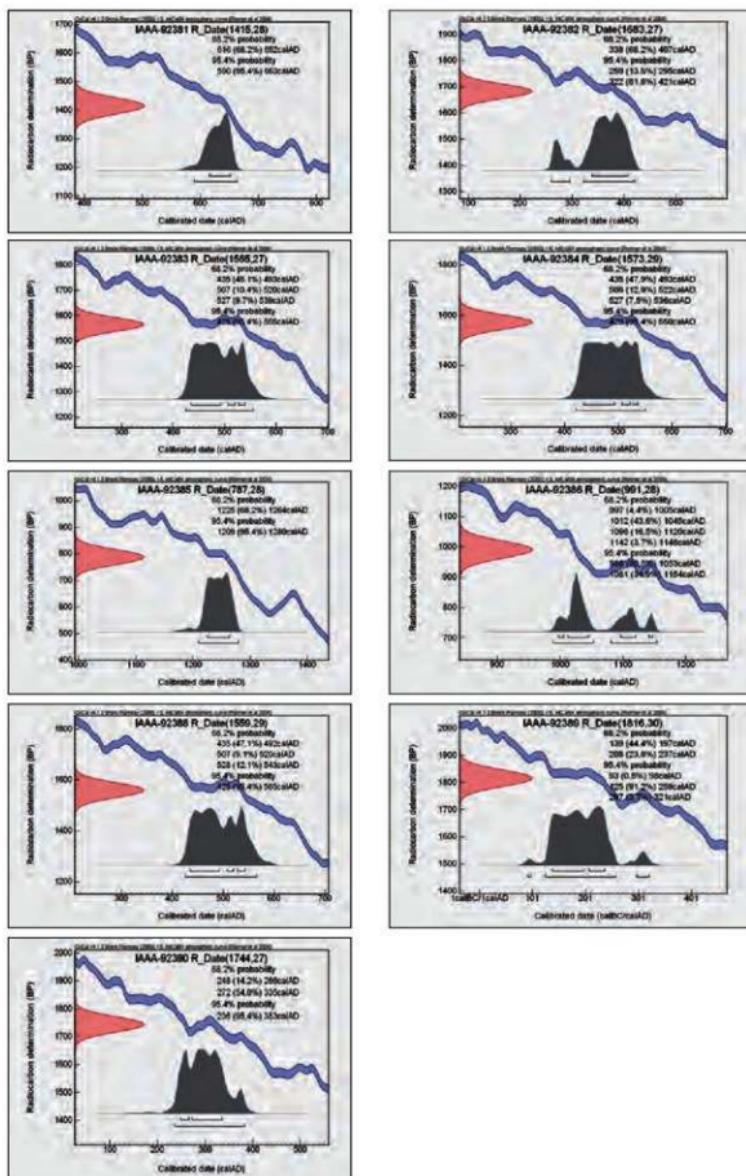
い ^{14}C 年代値である。較正曲線及び較正プログラムは、データ蓄積によって更新される。プログラムの種類により結果が異なるため、年代への活用には種類やバージョンの確認が必要である。历年較正年代の計算には、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995; Bronk Ramsey 2001; Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

測定結果

S G 1 河川跡試料は、覆土 1 層出土の 7 が Modern、覆土 2 層出土の 1 が 1420 ± 30 yrBP、覆土 3 層出土の 2 が 1680 ± 30 yrBP、覆土 4 b 層出土の 8 が 1560 ± 30 yrBP、覆土 5 層出土の 3 が 1570 ± 30 yrBP、覆土 6 層出土の 4 が 1570 ± 30 yrBP である。历年較正年代 (1σ) で見ると、2 が 4 世紀中葉～5 世紀初頭、3、4、8 は 5 世紀中葉～6 世紀前半、1 が 7 世紀前半で、7 を除いて古墳時代に相当する年代値を示した。S D 13 溝跡試料は、底面出土の 5 が 790 ± 30 yrBP、覆土 1 層出土の 6 が 990 ± 30 yrBP である。历年較正年代 (1σ) は、5 が 13 世紀中頃、6 が 11 世紀～12 世紀前半の間に複数の範囲で示される。S T 22 住居跡試料の ^{14}C 年代は、覆土 2 層出土の 9 が 1820 ± 30 yrBP、E L 43 炉跡出土の 10 が 1740 ± 30 yrBP である。历年較正年代 (1σ) は、9 が 2 世紀中葉～3 世紀前半、10 が 3 世紀中葉～4 世紀前半の範囲となっている。炭素含有率は、試料の材質ごとに適正な値となり、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 10 历年較正結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1σ 历年年代範囲	2σ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-92381	1360 ± 30	8441 ± 0.27	1415 ± 28	616AD - 652AD (68.2%)	590AD - 661AD (95.4%)
IAAA-92382	1700 ± 30	8093 ± 0.25	1683 ± 27	338AD - 407AD (68.2%)	259AD - 295AD (13.6%) 322AD - 421AD (81.8%)
IAAA-92383	1570 ± 30	8225 ± 0.27	1565 ± 27	435AD - 493AD (48.1%) 507AD - 520AD (10.4%) 527AD - 539AD (9.7%)	425AD - 555AD (95.4%)
IAAA-92384	1570 ± 30	8225 ± 0.27	1573 ± 29	435AD - 493AD (47.9%) 506AD - 522AD (12.9%) 527AD - 536AD (7.5%)	420AD - 550AD (95.4%)
IAAA-92385	680 ± 30	9183 ± 0.29	787 ± 28	1225AD - 1261AD (68.2%)	1209AD - 1280AD (95.4%)
IAAA-92386	920 ± 30	8916 ± 0.28	991 ± 28	997AD - 1005AD (4.4%) 1012AD - 1045AD (43.6%) 1096AD - 1120AD (16.5%) 1142AD - 1148AD (3.7%)	988AD - 1053AD (60.5%) 1081AD - 1154AD (34.9%)
IAAA-92387	Modern	12742 ± 0.35	Modern		
IAAA-92388	1570 ± 30	8225 ± 0.27	1559 ± 29	435AD - 492AD (47.3%) 507AD - 520AD (9.1%) 528AD - 543AD (12.1%)	425AD - 565AD (95.4%)
IAAA-92389	1910 ± 30	7879 ± 0.28	1816 ± 30	129AD - 197AD (44.4%) 208AD - 237AD (23.8%)	93AD - 98AD (0.5%) 125AD - 259AD (91.2%) 297AD - 321AD (3.7%)
IAAA-92390	1760 ± 30	8035 ± 0.25	1744 ± 27	248AD - 266AD (14.2%) 272AD - 335AD (54.0%)	236AD - 383AD (95.4%)



第79図 历年校正年代グラフ(1)

引用文献

- Stuiver M and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data Radiocarbon 19:p.355 ~ p.363
 Bronk Ramsey C 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program Radiocarbon 37(2)p.425 ~ 430
 Bronk Ramsey C 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal Radiocarbon 43(2A)p.355 ~ 363
 Bronk Ramsey C van der Plicht J and Weninger B 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates Radiocarbon 43(2A)p.381 ~ 389

2 放射性炭素年代測定（2）

バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子
廣田正史・山形秀樹・小林絢一

試料と方法

鎌倉上遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

測定試料は、河川跡出土の生材 3 点、堅穴住居跡出土の生材 4 点、炭化材 2 点、生種実 1 点、土坑出土の生材 1 点の計 11 点である（表 15）。

表 11 放射性炭素年代測定分析試料一覧

測定番号	通路データ	試料データ	前処理
PLD-17317	遺構：S G130河川跡 層位：2 層 報告書遺物No.262 R W372	試料の種類：生材 状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 3 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17318	遺構：S G130河川跡 層位：2 層 報告書遺物No.261 R W371	試料の種類：生材 状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 3 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17319	遺構：S G130河川跡 層位：2 層 報告書遺物No.263 R W384	試料の種類：生材 状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 5 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17320	遺構：S T102堅穴住居跡 E P203柱穴 層位：柱材の上部 報告書遺物No.237 R W367	試料の種類：生材 状態：wet 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外 - 3 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17321	遺構：S T103堅穴住居跡 E P206柱穴 層位：柱材の上部 報告書遺物No.242	試料の種類：生材 状態：wet 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外 - 2 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17322	遺構：S T105堅穴住居跡 E P185柱穴 層位：柱材の上部 報告書遺物No.246	試料の種類：生材 状態：wet 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外 - 2 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17323	遺構：S K133号土坑 層位：土坑底面 報告書遺物No.256	試料の種類：生材 状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17324	遺構：S T104堅穴住居跡 E L142カマド 層位：カマド覆土	試料の種類：オニグリミ核 状態：dry (生種子 1 点)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17325	遺構：S T106堅穴住居跡 層位：床面	試料の種類：生材 状態：dry 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17326	遺構：S T107堅穴住居跡 E P179柱穴 層位：柱穴覆土中	試料の種類：炭化材 状態：dry 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）
PLD-17327	遺構：S T118堅穴住居跡 E K189土坑 層位：土坑覆土 1 層	試料の種類：炭化材 状態：dry 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N）

河川跡出土の試料は、S G 130 河川跡の 2 層出土の木製品である。堅穴住居跡出土の試料は、各住居跡の柱に用いられていた丸太材から採取した 3 点、カマドの覆土から出土した種子（オニグリミ核）のほか、住居機能時の柱材や構築材の可能性がある炭化材である。土坑出土の試料は、S K 133 土坑出土の木製容器の一部である。

堅穴住居跡の柱に用いられた丸太材の上部から採取された試料 No. 4 ~ 6 は、樹皮の内側が採取された試料である。これらは最外年輪を含む試料で、それ以外の試料は最外年輪以外の部位不明の木材であった。試料の想定年代は、S G 130 河川跡試料 No. 1 ~ 3 が古墳時代以降、それ以外の試料は、出土遺物の時期から古墳時代と推定されている。試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・

ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 15SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度に同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年代を算出した。

結果

表 12 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正により得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 80・81 図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下 1 行を丸めていない値で、曆年較正曲線が更新された際に、この年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。 ^{14}C 年代は AD1950 年を基点に何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が

表 12 曆年較正年代結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-17317 試料 No. 1 報告書遺物 No.262 R W32	-26.84 \pm 0.31	1699 \pm 24	1700 \pm 25	264AD(10.2%)276AD 332AD(58.0%)391AD	257AD(23.1%)301AD 317AD(72.3%)410AD
PLD-17318 試料 No. 2 報告書遺物 No.261 R W31	-26.55 \pm 0.27	1455 \pm 25	1455 \pm 25	591AD(68.2%)640AD	564AD(95.4%)648AD
PLD-17319 試料 No. 3 報告書遺物 No.263 R W384	-25.72 \pm 0.20	1552 \pm 26	1550 \pm 25	436AD(46.0%)490AD 509AD(5.8%)518AD 529AD(16.4%)548AD	428AD(95.4%)566AD
PLD-17320 試料 No. 4 報告書遺物 No.237 R W367	-30.32 \pm 0.29	1580 \pm 23	1580 \pm 25	433AD(25.4%)465AD 483AD(42.8%)533AD	424AD(95.4%)540AD
PLD-17321 試料 No. 5 報告書遺物 No.242	-30.73 \pm 0.17	1527 \pm 22	1525 \pm 20	466AD(9.7%)482AD 533AD(58.5%)582AD	435AD(26.0%)491AD 509AD(19%)518AD 529AD(67.5%)600AD
PLD-17322 試料 No. 6 報告書遺物 No.246	-30.30 \pm 0.15	1560 \pm 22	1560 \pm 20	436AD(50.8%)490AD 510AD(6.1%)517AD 529AD(11.3%)541AD	428AD(95.4%)552AD
PLD-17323 試料 No. 7 報告書遺物 No.256 R W260	-24.18 \pm 0.16	1584 \pm 22	1585 \pm 20	430AD(11.4%)443AD 451AD(9.8%)462AD 483AD(47.2%)533AD	422AD(95.4%)539AD
PLD-17324 試料 No. 8	-27.90 \pm 0.14	1563 \pm 22	1565 \pm 20	435AD(50.3%)491AD 509AD(7.7%)518AD 528AD(10.1%)540AD	427AD(95.4%)549AD
PLD-17325 試料 No. 9	-26.01 \pm 0.15	1581 \pm 23	1580 \pm 25	432AD(25.7%)465AD 483AD(42.5%)533AD	423AD(95.4%)540AD
PLD-17326 試料 No. 10	-28.09 \pm 0.18	1747 \pm 23	1745 \pm 25	247AD(15.0%)264AD 276AD(53.2%)332AD	235AD(92.3%)356AD 366AD(31%)381AD
PLD-17327 試料 No. 11	-30.03 \pm 0.15	1604 \pm 23	1605 \pm 25	416AD(23.8%)441AD 485AD(44.4%)532AD	411AD(95.4%)536AD

5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 ^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ : IntCal09) を使用した。1 σ 曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2 σ 曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

考察

各試料の曆年較正結果のうち、2 σ 曆年代範囲 (95.4% の確率) に着目して結果を整理する。S G 130 河川跡の 2 層出土の木製品 3 点は、試料 No. 1 (PLD-17317) が 3 世紀中頃～5 世紀前半、試料 No. 2 (PLD-17318) が 6 世紀後半～7 世紀中頃、試料 No. 3 (PLD-17319) が 5 世紀前半～6 世紀後半の曆年代範囲を示した。古墳時

代前期～古墳時代中期、古墳時代末～飛鳥時代、古墳時代中期～後期に相当する。木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。S G 130 河川跡の3点はすべて最外年輪以外の部位不明の木材である。試料の木材が実際に伐採された年代よりも古い年代が得られている可能性を考慮する必要がある。S G 130 河川跡出土の3点はそれぞれ異なる時期の暦年代を示すが、古木効果の影響の可能性を加味すると、古墳時代以降という想定年代に対しては整合的な結果となった。

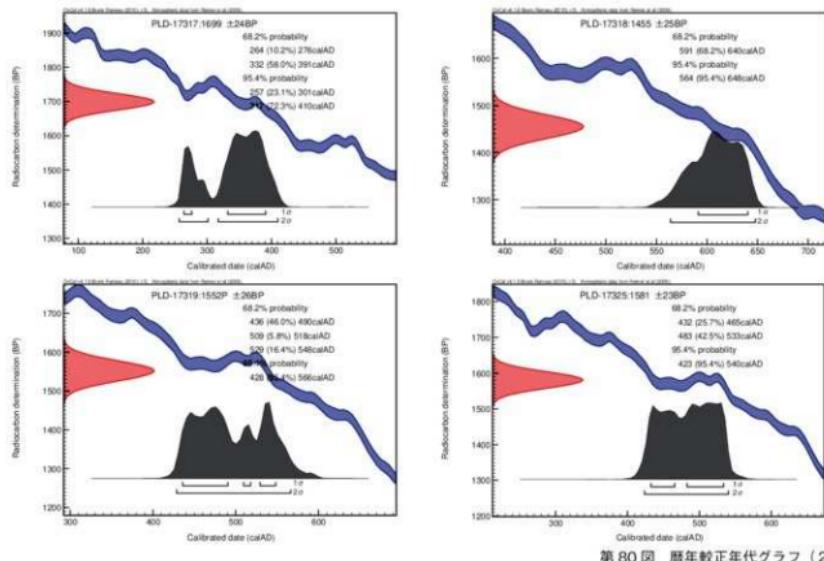
堅穴住居跡と土坑から出土した試料の計8点のうち、S T 107 堅穴住居跡のE K 189出土の試料No.10 (PLD-17326) を除く7点（試料No. 4～9、11: PLD-17320～17325、17327）は、すべて5世紀前半～6世紀末におさ

まる暦年代範囲を示した。これは古墳時代中期～後期に相当する。S T 107 堅穴住居跡のE K 189出土の試料No.10は3世紀前半～4世紀後半で、古墳時代前期～中期に相当する暦年代範囲を示した。いずれも古墳時代という想定年代に対して整合的であった。

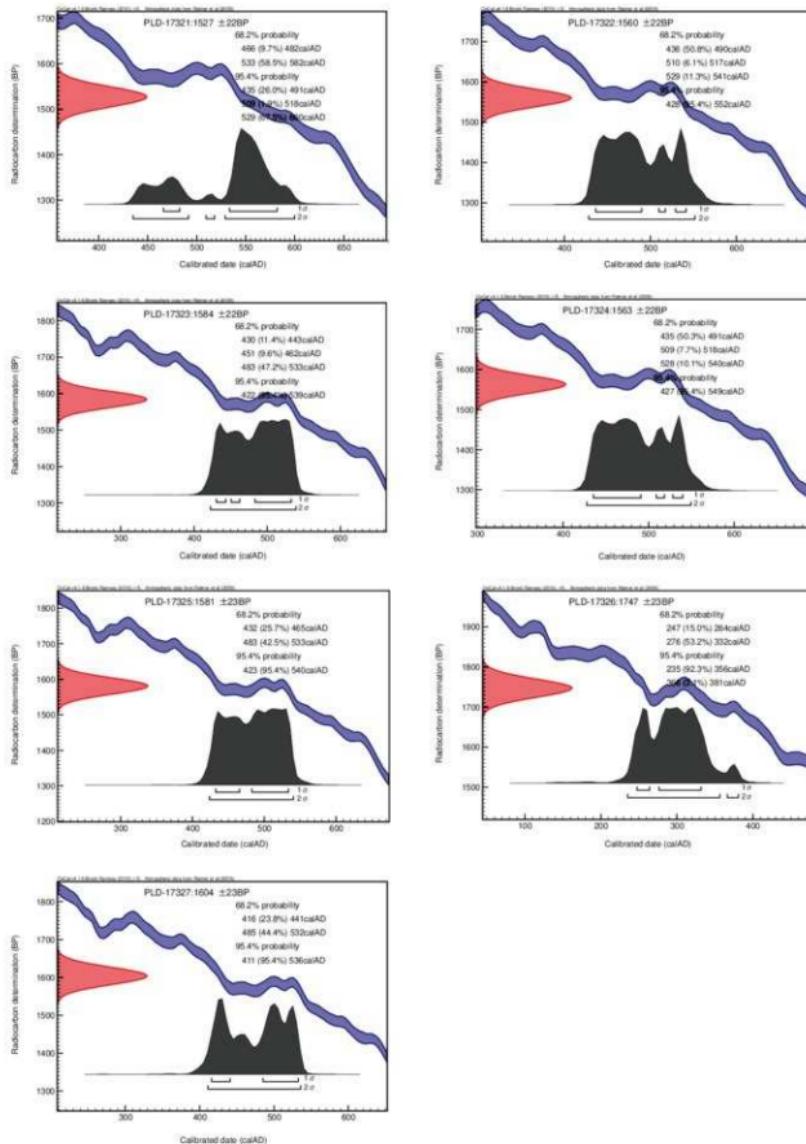
ただし木材の場合は、前述した古木効果の影響を受けける可能性も考えなければならない。最外年輪以外の部位不明の試料である試料No. 7および試料No. 9～11の4点は、解釈の際に古木効果の影響がある可能性を考慮に入れる必要がある。一方、S T 102、103、105 堅穴住居跡の柱である丸太材から採取した試料No. 4～6は、最外年輪を含む試料であり、実際に木材が伐採された年代を示すと考えられる。S T 104 堅穴住居跡のカマド出土の試料No. 8については、試料のオニグレルミが熟して落とした年代を示すと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey,C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates.Radiocarbon,51(1):p.337～p.360.
 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」p.3～p.20
 日本第四紀学会
 Reimer,P.J.,Bailie,M.G.L.,Bard,E.,Bayliss,A.,Beck,J.W.,Blackwell,P.G.,Bronk Ramsey,C.,Buck,C.E.,Burr,G.S.,Edwards,R.L.,Friedrich,M.,Grootes,P.,M.Guilderson,T.P.,Hajdas,I.,Heaton,T.J.,Hogg,A.G.,Hughen,K.A.,Kaiser,K.F.,Kromer,B.,McCormac,F.G.,Manning,S.W.,Reimer,R.W.,Richards,2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves,0–50,000 Years cal BP.Radiocarbon,51(p.1111～p.1150.



第80図 暦年較正年代グラフ（2）



第 81 図 歴年校正年代グラフ（3）

3 樹種同定

(株)吉田生物研究所

試料と観察方法

試料は、鎌倉上遺跡から出土した服飾具1点、建築部材6点、用途不明品10点の合計21点である(表13)。

観察方法は、剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察して同定した。

結果

樹種同定結果(針葉樹2種、広葉樹3種)の表13と顕微鏡写真を示し、各種の解剖学的特徴を以下に記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

(試料No.1, 3~5, 7~10, 19, 20)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(試料No.2, 6, 11)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) クワ科クワ属 (*Morus* sp.)

(試料No.15, 17)

環孔材である。木口では大道管($\sim 280 \mu\text{m}$)が年輪界にそって1~5列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では小道管が2~6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物(チロース)が見られる。板目では放射組織は1~6細胞列、高さ $\sim 1.1\text{mm}$ からなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

4) カエデ科カエデ属 (*Acer* sp.)

(試料No.12, 13)

散孔材である。木口ではやや小さい道管($\sim 100 \mu\text{m}$)が単独ないし2~4個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顯著である。木繊維の壁に厚薄があり、木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は單穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり、同性である。板目では放射組織は1~6細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ からなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) ヤナギ科ヤナギ属 (*Salix* sp.)

(試料No.14, 16, 18)

散孔材である。木口では中庸やや小さい道管($\sim 110 \mu\text{m}$)が単独または2~4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顯著である。柾目では道管は單穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、節状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ $\sim 450 \mu\text{m}$ であった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

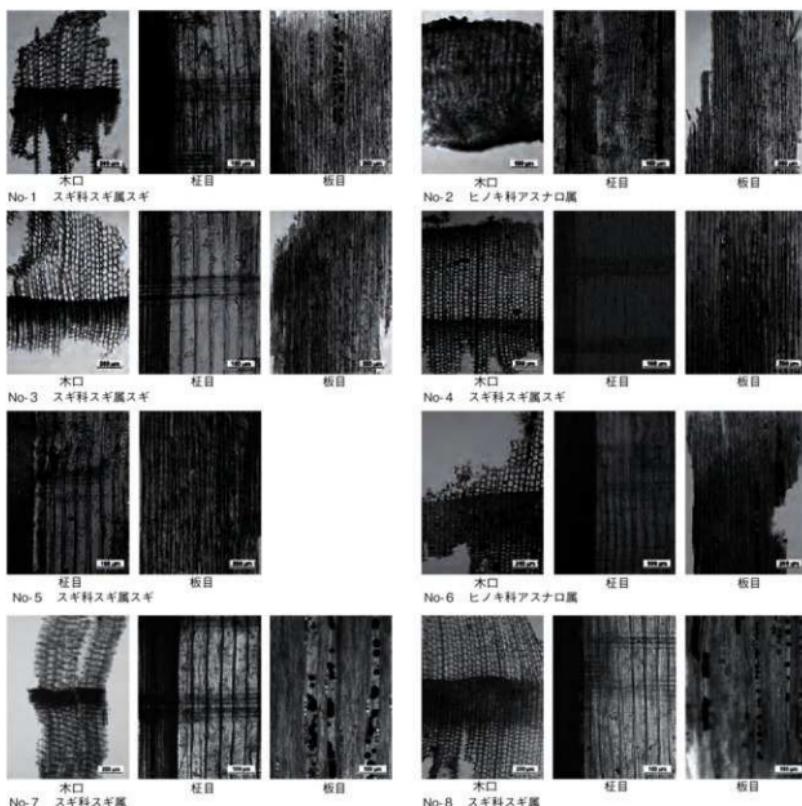
参考文献

- 島地謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版
- 島地謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 地球社
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ~V」 京都大学木質科学研究所
- 北村四郎・村田源 1979 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社
- 深澤和三 1997 「樹体の解剖」 海青社
- 奈良国立文化財研究所 1985 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」
- 使用顕微鏡
- Nikon DS-Fil

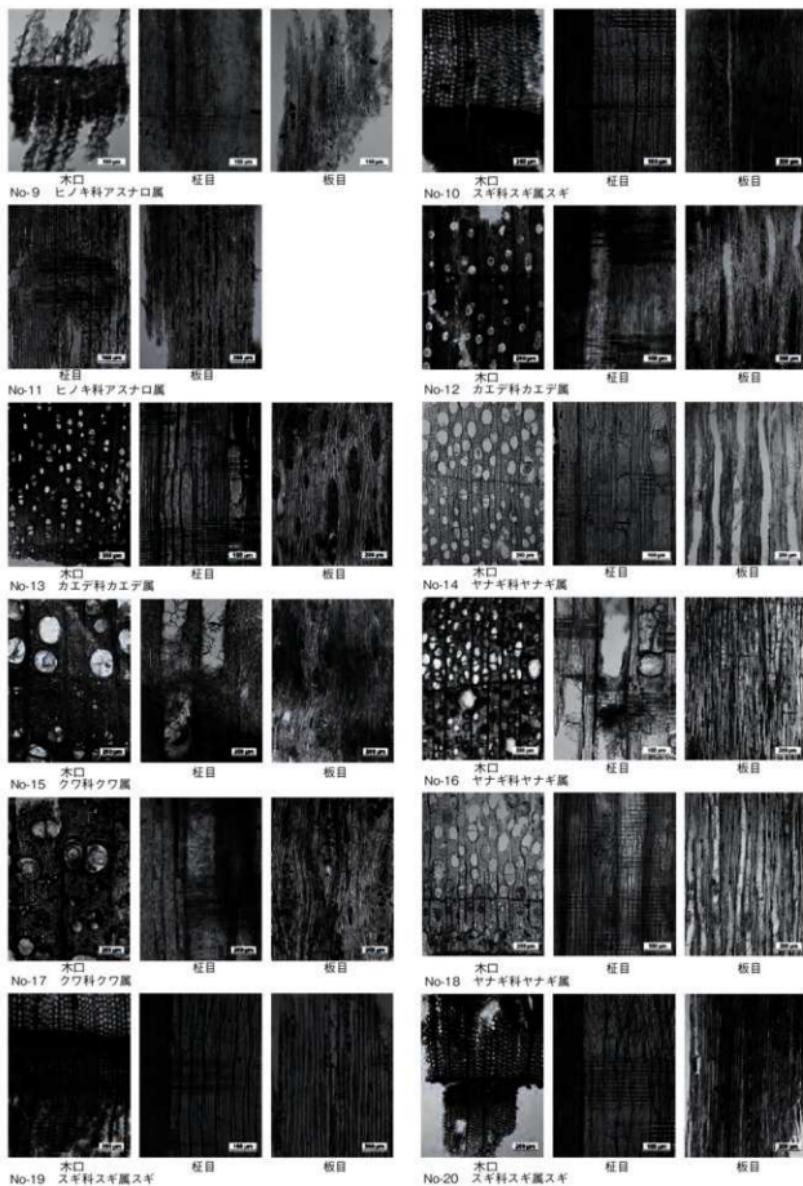
表13 樹種同定分析試料一覧

試料 No.	報告書No.	出土地点	遺物番号	遺物名	樹種
1	259	S G 1	RW 68	加工材	スギ科スギ属スギ
2	260	S G 1	RW 69	縦台	ヒノキ科アスナロ属
3	257	S G 1	RW 75	加工材	スギ科スギ属スギ
4	261	S G 130 : F2	RW 371	加工材	スギ科スギ属スギ
5	262	S G 130 : F	RW 372	加工材	スギ科スギ属スギ
6	263	S G 130 : F	RW 384	角材	ヒノキ科アスナロ属
7	230	S T 102 : F3	RW 215	角材	スギ科スギ属スギ
8		S T 102 E K 139	RW 280	板材	スギ科スギ属スギ
9	236	S T 102	RW 281	板材	スギ科スギ属スギ
10	234	S T 102	RW 282	板材	スギ科スギ属スギ
11	240	S T 103 : Y	RW 361	角材	ヒノキ科アスナロ属
12	237	S T 102 E P 203	RW 367	柱材	カツラ科カエデ属
13	238	S T 102 E P 204	RW 368	柱材	カツラ科カエデ属
14	241	S T 103 E P 205		柱材	ヤナギ科ヤナギ属
15	242	S T 103 E P 206		柱材	クリ科クリ属
16	243	S T 103 E P 207		柱材	ヤナギ科ヤナギ属
17	244	S T 103 E P 208		柱材	クリ科クリ属
18	246	S T 105 E P 185		柱材	ヤナギ科ヤナギ属
19	248	S K 133 : F3	RW 257	角材	スギ科スギ属スギ
20	256	S K 133 : Y	RW 260	管部	スギ科スギ属スギ
21	266	E b 屋	RW 200	柵	木質部なし※

※同時に行った塗膜構造分析でも木質部は確認出来なかった



第82図 分析木材顕微鏡写真 (1)



第 83 図 分析木材顯微鏡写真（2）

4 漆製品の塗膜構造調査

(株)吉田生物研究所

分析方法

鎌倉上遺跡から出土した古墳時代の堅櫛 1 点について、制作技法を復元する目的で塗膜構造調査を行った。調査は、本体から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光下で検鏡した。

断面観察結果

塗膜構造: 横木上 (No. 1)、帯部上 (No. 2) ともに素地は残存せず、下地も観察されず（元来施されていない）、塗膜のみが観察された。

漆層 : No. 1, 2 ともに色調の異なる漆層が 4 ~ 5 層観察された。最下層には油煙類の黒色微粒子の混和が認められる。

帯の素材: 塗膜の中に、白く抜けた部分が横方向に続く様子が観察される。この白く抜けた部分は帯の糸がかつて存在した部分である。糸の継断面方向である。帯の糸は植物繊維ではなく、その形状から絹と判断される。

櫛の歯 : 素地は残存していない。しかし、櫛の帯部と平行、つまり櫛の横断面方向の帯部の塗膜断面を観察すると、櫛の歯の横断面が円形ではなく、四角形であったことがわかる（写真 9,10）。そして歯と歯の間に漆が十分に浸透していることがわかる（写真 7, 9,11）。

表 14 調査資料詳細表

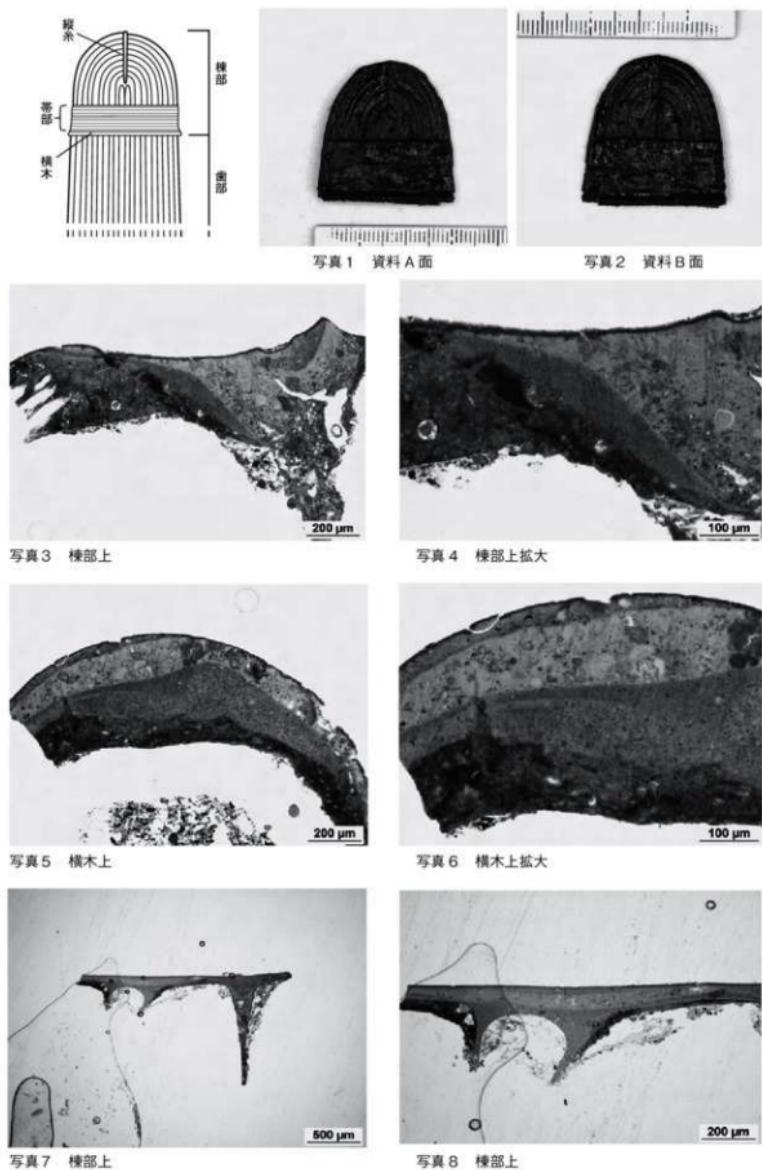
資料	概要											
古墳時代の堅櫛。この時代の類例と同様に、櫛部両端に塗布された漆膜のみが遺存している。櫛の歯や横木の素地は遺存していない。歯の本数は不明であるが、歯の中央部の 2 本は、それより外側のように一本を U 字形に曲げたものではなく、直線状のものが挿入されている。帯は数 mm の幅を持つものではない。横木を縫じている糸は、片面ではほぼ垂直方向に横木上に現れるが、もう一方の面では左上の斜め状に現れている。なお今回は、帯部上と横木上の遺膜を採取し、その微断面を観察した。												
堅櫛式 U 字形												
櫛部	縫糸	帯部	横木	高さ	幅	長さ						
30	30	1.2	1.2	30	30	0.1						

法量 (単位は cm)

概要

堅櫛は、櫛部の漆膜のみが遺存した状態で、櫛の歯や横木、帯や糸は遺存していないかった。今回は、帯部・横木上部の塗膜構造の観察結果を反映させた上で、調査した堅櫛の制作方法を復元してみる。

- ① 櫛の歯となる断面四角形の棒状の素材（タケ？）を一列に並べる。
- ② ばらばらにならないように、歯（棒）の長さの半分くらいの位置で、細い紐状のもので棒を 1 本ずつ締じて固定する。
- ③ 緒で締じた部分を頂点として、歯（棒）の束を両側から力を加えて折り曲げ、U 字形に湾曲させ、その形状を保つように仮留める。
- ④ 並んだ歯（棒）の中央部分の隙間に、折り曲げた歯（棒）の半分程の長さの歯（棒）を 2 本挿入する。
- ⑤ 櫛の向きと水平に、断面円形の横木を両面に 1 本ずつ同じ高さに添える。（2 本の横木によって歯を両面から挟むことになる）
- ⑥ 櫛を天地逆の方向（櫛部が下で歯部が上）に持った状態で、歯を固定し歯間に間隔を持たせるため、歯を 1 本ずつ 2 本の横木に紐状のもので 8 の字状に締じ付ける。（この結果、一方の面では横木上を紐が垂直方向に伝い、もう一方の面では斜めに伝うことになる）
- ⑦ 櫛全体の仮留めを外し、横木より上部を適度な幅で、糸で緊縛する。（櫛の成形は終了）
- ⑧ 仕上げに漆を 4 ~ 5 層塗布する。下地は施さない。素地にいきなり漆を塗布する。素地が透けて見えないように、素地の直上には油煙類が黒色の顔料として混和された漆（黒漆）が塗布される。歯と歯の間には十分に漆をしみ込ませ、櫛全体を固める。上層には混和物を含まない透明漆が塗布される。（完成）
- ⑤と⑥の工程については、明確な順番は確定できず、逆であった可能性もある。なお、遺存しているのは櫛の櫛部の漆膜のみであるので、横木より下の歯部の歯に漆が塗布されたのか、あるいは白木のままだったのかは不明である。既往の調査例には、歯の素材としてタケが遺存していた事例や、歯部に塗布されていた漆が遺存していた事例等もある。



第84図 竪櫛模式図・塗膜分析顕微鏡写真（1）



写真9 棟部上

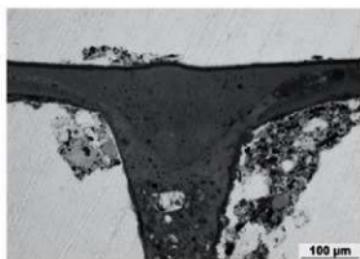


写真10 棟部上（歯間）



写真11 棟部の帶上

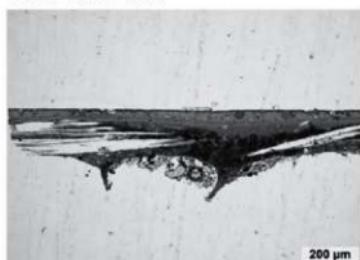


写真12 帶拡大

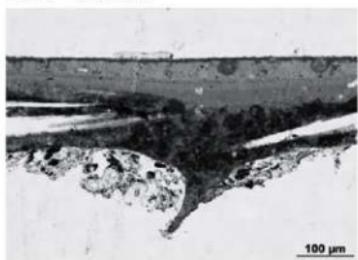


写真13 帯上最下層の油煙類



写真14 帶拡大

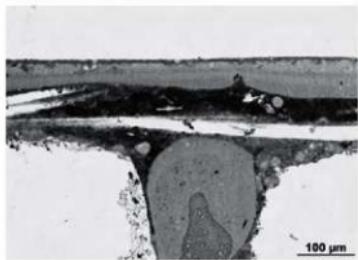


写真15 帯上最下層の油煙類

第85図 塗膜分析顕微鏡写真（2）

V 調査のまとめ

I 古墳時代集落について

鎌倉上遺跡では、古墳時代の2時期にわたる集落の変遷が確認された。前期の集落では、6棟の堅穴住居跡が検出された。1区の3棟（S T 20・21・22）、2区の3棟（S T 107・108・125）である。堅穴住居跡は、5m前後の比較的規模が大きいタイプ（S T 22・107・108）と、住居規模が4mに満たない小型の住居（S T 20・21・125）がある（第86・87図）。S T 22は焼失住居で外周溝が付属する。このタイプの住居は、県内の鶴岡市畠田遺跡（山形県埋文1995）、山形市梅野木前1遺跡（山形県埋文2007）、米沢市大清水遺跡（米沢市教委1986）で確認されている。掘立柱建物跡は3棟（S B 2・54・79）検出された。間取りは2×2間と考えられ、規模は3.6m～4.8mと小型である。倉庫の役割を担うと考えられる。

掘立柱建物跡と堅穴住居跡の配置は、S T 22とS B 2が、S T 20・21とS B 54の主軸が類似する。これらの堅穴住居と掘立柱建物は、それぞれ対応し同時期に存在していた可能性がある。住居分布域の西側に、捨場（S X 50）が広がる。周囲よりやや低い南北方向に伸びる浅い窪地で、土師器を中心とした遺物が廃棄されている。生産施設として、烟と考えられる畝状遺構が検出された。主に東西方向にのびる群が3ヶ所、南北方向にのびる群が3ヶ所確認される。河川跡であるが、S G 1は、前期集落が営まれた時期に機能しており、中・後期にかけて堆積が進んだものと思われる。前期集落の広がりは、1区東側に中心域があり、1区西側にも確実に集落域が広がることが想定される。

前期集落から時期的な断絶の後、中期後半の集落跡が営まれる。中期の堅穴住居群は、2区のS G 130河川跡の北側に分布し、前期集落跡の分布域と異なる。堅穴住居跡は、古墳時代の中期後半に位置づけられるものが7棟（S T 101・102～106・118）、詳細な時期が不明なものは2棟（S T 100・120）である。堅穴住居の規模は、一辺が5mを超える住居跡と（S T 103～105）、4m

前半以下の住居に分かれる。S T 102～106は煙道を有するカマドを備え、住居の東辺や北辺に構築される。カマドが備わる住居には貯蔵穴が確認される。

中期の集落には焼失住居が確認された。S T 105は住居の全面に炭化材が検出された。S T 102・103・106も焼失住居の可能性が高い。これらの住居跡から、中期後半の土師器・須恵器のセット関係や、土器の使用状況を把握できる良好な資料を得た。S T 102・103・105は、住居の柱材や建築部材の一部が残され、住居の建築材の樹種の情報を得ることができた。

中期集落では、掘立柱建物跡は確認されないが、カマドを伴わない堅穴状遺構とも称すべきS X 119や、焼土が検出されたが生活痕跡が希薄なS T 118が確認された。これらは、倉庫もしくは作業場の施設の役割を担っていたと思われる。生産施設は調査区内に確認されていないが、出土土師器に枠痕が確認される個体が複数あり、集落が水田を備えていたことが想定される。中期の集落域は、2区の東・西に拡大することは確実であるが、東側が中心域と考えられる。

周辺遺跡との関係について触れたい。前期の集落として、米沢盆地では大清水遺跡がある。外周溝をもつ堅穴住居跡、掘立柱建物跡、烟跡、方形周溝墓が検出された。

鎌倉上遺跡は、墓域は確認されないものの、同様の構成をなし、前期集落の事例が少ない米沢盆地での集落構成を明らかにする好例となろう。また、墳墓との関連であるが、米沢市大西遺跡（米沢市教委2004）は、鎌倉上遺跡から南西に約400mに位置し、前期後半を主体とする周溝墓や箱形石棺などが検出された。鎌倉上の集落と併存していた可能性が高く、関連が注目される。

中期では、本遺跡周辺の河川間低地に、前期より多数の遺跡が確認される。米沢市窟田町には中里遺跡、北東約3kmには、河川の両岸に古墳時代中期の堅穴住居が33棟検出された大規模な集落である高畠町南原遺跡（山形県埋文1994）があり、併存していたと考えられる。

鎌倉上遺跡も類似した立地であり、今後これらの集落間の比較や古墳との関係の研究の進展が期待される。

2 出土遺物の特色

(1) 出土遺物の分布状況

遺物の出土量分布図を第88図に示す。遺物量が多い1・2区の北側は、堅穴住居跡や掘立柱建物跡が密集する居住域である。遺構の希薄な1区西側にみられる遺物量の分布は、土器類を廃棄したSX50捨場の範囲にある。1区D～J～8列から南側の範囲では、遺構・遺物共に殆どみられず、SG1河川跡出土の遺物が僅かに確認されるのみである。

SX50捨場の出土遺物は、器台や二重口縁の壺など古墳時代前期に属する遺物が多い傾向がある。口縁端部に面取りのある壺や、刺突文による刻目状の加飾を施す壺など、北陸北東部系の特徴を有する土器が一定量認められる。他に管玉や棒状環の出土がある。

(2) 古墳時代前期の遺物

古墳時代前期の遺物は、当期に属する堅穴住居跡と溝状遺構が隣接する建物跡出土の土器が相当する。ST20・21・22堅穴住居跡では、床面出土の一括遺物が認められる。これらの器種は、高环、器台、鉢、壺、壺の5種がある。以下に代表的な遺物を取り上げて詳細を述べる。括弧内は遺物番号を示す。

時期や様相を表す高环は、出土数が僅小で遺構出土のものは限られる。ST20住居跡出土の高环（1）は、受け部となる口縁部が直線的に開く高环A1類に分類される。受け部と脚部の境に稜線が認められず、全体の形状から外來（東海系）の影響を受けたものと捉えた。時期については、新潟シンボジウム編年（新潟考古2005）の9期に属し、古墳時代前期後葉に比定される。

SD34溝跡は、「周溝式堅穴建物」の外周溝であり、高环の上半部（19）が出土する。全形は把握し得ないが、口縁部が外傾する小型鉢状の受け部に、中空柱状の脚部が付く高环B類と推定される。

捨場出土の高环A2類（188・189）は、塊状の小型の受け部と、脚部裾が伸びる形状が特徴的で、市内の古墳出土資料の中に近似するものが見受けられる。

ST22・108堅穴住居跡の底面出土の小型丸底鉢（14・149）は、口縁部と体部の境に段を有し、凹状の底部である。これらは、器台との対応関係が考えられる。壺は、口縁部に面をもつ北陸北東部系の「能登型壺」が多く確

認される。口縁端部を摘み上げる壺A類（20）や台付壺の壺C類（18）は、そのなかでも古手と考えられる。

県内の古墳時代前期の土器について、東北地方南部の土器編年（辻1993）や、北陸地方の漆町遺跡の編年観（田嶋1986）との比較がなされてきた。また、近年の発掘調査による資料増加から、土器群の集成と各地域毎の土器の変遷や年代時期の検討が試みられている（植松2005）。これらの土器の編年案を基に、出土遺構である堅穴住居跡の形態も踏まえて、本遺跡の前期集落を概ね二つの時期に細別した。

1期：ST22・107・108堅穴住居跡の出土遺物が相当する。この時期の特徴的な遺物は、鉢A類の小型丸底鉢で、器台とのセット関係の様相が読み取れる。

壺は、北陸北東部系の壺が占め、口縁部が強く面取りされるものをはじめ、口縁端部を上方につまみ出す古手のもの（壺A1類）や、台付壺（壺C類）が含まれる。

壺A類は、遺構外出土に多くみられる器種で、口縁部と頸部の境に刺突文が巡る北陸地方の影響を受けるもののが存在する。また、SX19性格不明遺構出土のつまみを有する壺は、県内でも古手の器種として捉えられる。これらの遺物が認められることから、1段階古い遺構が周辺に存在する可能性も考えられる。

本期では、壺の口縁端部に明瞭な面を持つ特徴が多く認められ、総じて北陸色の強い様相を示す。

2期：ST20・21・125堅穴住居跡出土・SB54・79掘立柱建物跡の土器が相当する。前述した東海系の高环（1）や、器形が15cm以内に収まる小型の壺（10）が含まれる。壺については、口縁部が長頸の直口壺が多く、体部が扁平となる傾向が認められる。捨場出土の遺物では、長頸の口縁部を持つ平底の鉢C類や、口縁部の面取りが弱くなるもの、または面をもたない壺（壺A4類）など前段階の北陸北東部系の特徴が弱まる傾向や、新手の器種が出現することが把握される。

前期集落について、出土遺物や堅穴住居跡の形態を中心にして2時期に細別したが、遺物量や器形を把握できる資料が少量であること、遺構の前後関係が明確でないことなど多くの課題点があり、今後検討する必要性がある。

しかし、これら土器群の時期については、新潟シンボジウム編年の9・10期に属する遺物が多いことから、古墳時代前期の後半段階のものと考えられる。

(3) 古墳時代中期の遺物

カマドを有する竪穴住居跡出土の一括遺物が挙げられる（S T 102～106）。このうちS T 102・103・105の焼失住居では、カマド周辺や貯蔵穴から一括性のある壺や鉢類、甕が多く出土している。これらの土器類は、南小泉式が終焉する時期から、次期への過渡期段階にあたる。この段階では、供膳具形態が高壺から丸底や平底状の壺・鉢類に代わる変遷が前々から指摘されてきた。

最も多い壺類は、形状や容量などの特徴から、口縁部が外傾または外反するA類、口縁部が内湾するB類、口縁部が屈曲して直立気味に立ち上がるC類、口縁部と体部の境に稜や段を有するD類、深みのある塊状のE類の5種に大別される。なかでもC類は、須恵器模倣壺と考えられ、次期に主体を占めるD類と共に新手であろう。

壺や鉢類、甕の器種には、器面を赤く発色させるものが多く認められる。赤色土器と総称されるこの土器は、地域毎にその技法が異なることが指摘されている（長谷川1993・大川1996）。主なものに、ベンガラなどの赤色顔料を塗布するものや、胎土に鉄分を含有して焼成後に赤く発色させる方法がある。

当遺跡では、これらの技法による赤色土器が双方とも認められる。また、赤色顔料に用いられたベンガラを入れた容器（172・173）が出土している。赤色の有無については、遺物観察表の備考欄に示した。同時期の集落跡である南原遺跡や中里遺跡においても、赤色土器は認められる。壺・高壺・鉢などの小型の器種に多く、同時にヘラミガキ調整の多用するなど、他器種と比較して精製土器に用いられる傾向がある。

赤色土器の初現は南小泉式まで遡り、以後の佐平林式まで比較的多くの資料が赤色土器を含んでいる。この状況は、次期で減少傾向となり、更に次の栗田式まで至らないとされている（青山1999）。

一方で、古墳時代中期後半から後期段階に多くみられる黒色処理を施す黒色土器が、本遺跡では認められないことが特徴として挙げられる。

甕は、無底式のA類と単孔式のB類に大別される。前者は、引田式段階まで球頭状を呈するものが多いが、佐平林式段階に入ると、長胴化が進行したものが凌駕する傾向がある。本遺跡出土の甕A類は、いずれも長胴化した變形を呈しており、他器種の年代観とも対応する。

年代決定の主な資料となる須恵器は、壺、壺身、壺蓋、有蓋高壺蓋、短頭甕の計5点が出土する。いずれもTK 23～47型式に併行する時期と考えられる。

土器の出土頻度や器種組成、形態の変遷の検討を行ったが、各遺構間に大きな差異は認められず、共通した要素が多い。このことは比較的短い期間のうちに建物が廃絶したものと考えられる。土器群は、次の1群に大別でき、さらに2段階の小期を設けた。以下詳細を述べる。

第1a群土器

S T 101・102・104 竪穴住居跡の出土遺物が相当する。土師器の壺、鉢、甕、瓶、甕、須恵器壺などから構成される。本土器群の特徴は、内湾する壺B類と外反する壺A類であり、内湾するB類がA類よりも量的に多い、もしくは同等の割合で構成されることが挙げられる。

甕については、最大径が体部中位にある壺A・D類などの球頭状を呈するものが大半を占めるが、長胴化した甕B類も僅かに確認できる。口縁部の形態は、「く」の字状の口縁部が多く見られるが、直立気味に立ち上がるもののや、外傾して開くものもある。

以上の内容を有するS T 104 竪穴住居跡からは、床面からTK 23～TK 47型式の須恵器甕が出土している。本土器群の年代時期は、6世紀初頭を中心に、5世紀末に遡る可能性を提示しておきたい。

第1b群土器

S T 103・105・106 竪穴住居跡の出土遺物が相当する。土師器の壺、鉢、甕、瓶、小型甕、甕、須恵器の壺身から構成される。土器組成の中心となる壺類は、壺A・B類（前時期の外反・内湾）が主体を占めるが、壺C類（須恵器模倣壺）が一定量認められることが一つの特徴といえる。また、口縁部と体部に稜や段を有する壺D類や深みのある塊状の壺E類が含まれる。

甕の形態では、前段階まで頭部が「く」の字状をしていたものが、口縁部が直立気味に立ち上がるようになり、体部の長胴化も更に進行する。他に須恵器の短頭甕を模倣した甕C類や、小型甕の甕C b 2類など他器種でも様々な形態が認められることも特徴である。

土器群の壺や鉢類は、川西町太夫小屋2遺跡の竪穴住居跡内の出土遺物と同時期か、前出するものと考えられる。年代は、第1a群土器の繼続性と太夫小屋2遺跡の年代観から6世紀前半に比定しておきたい。

古墳時代中期の土師器は、壺、鉢、壺、瓶、甕が多く、器面が赤く彩色される赤色土器も多く認められる。最も多い壺は、口縁部が外反するA類や内湾するB類が多く混在するが、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる須恵器模倣の壺C類や大型壺を呈する器形への変遷がみられる。甕では、球胴状の甕A類から、長胴化が進行した甕B類へと移り代わること、S T 104・105 竪穴住居跡出土の須恵器が、T K 23 型式～T K 47 型式に併行することから、5世紀後葉～6世紀初頭の南小泉式の終末段階から次期への過渡期にあたると捉えた。

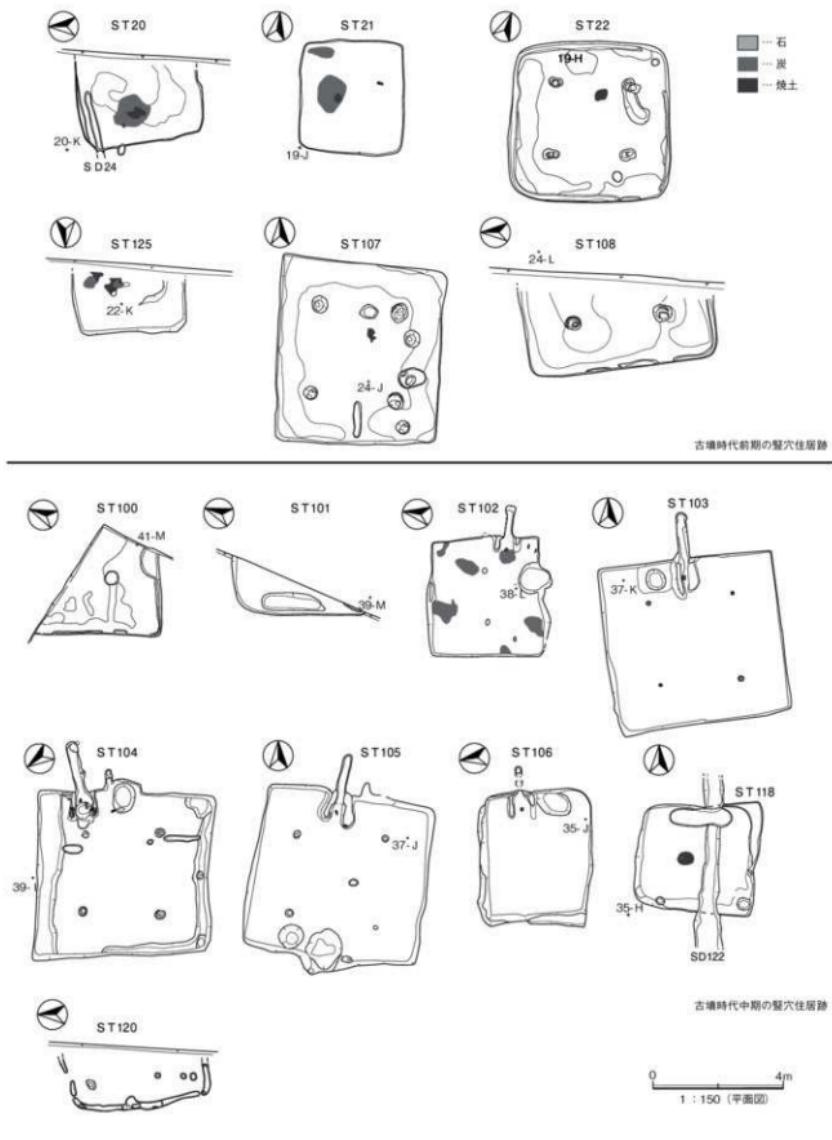
置賜地方における古墳時代中期から後期に属する集落

遺跡は、鎌倉上遺跡周辺でも確認されており、高畠町南原遺跡、米沢市中里遺跡、北小屋敷遺跡、川西町太夫小屋遺跡などが挙げられる。出土土器の特徴から南原遺跡古相・中里遺跡→南原遺跡新相・北小屋敷遺跡→太夫小屋2遺跡の変遷が考えられている。

鎌倉上遺跡の出土資料は、古墳時代後期に主体を占める黒色土器や有段丸底壺が出現する直前の土器様相であること、年代時期を判断する須恵器の共伴関係から、当地域の古墳時代中期から後期への変遷を比較できる資料となろう。

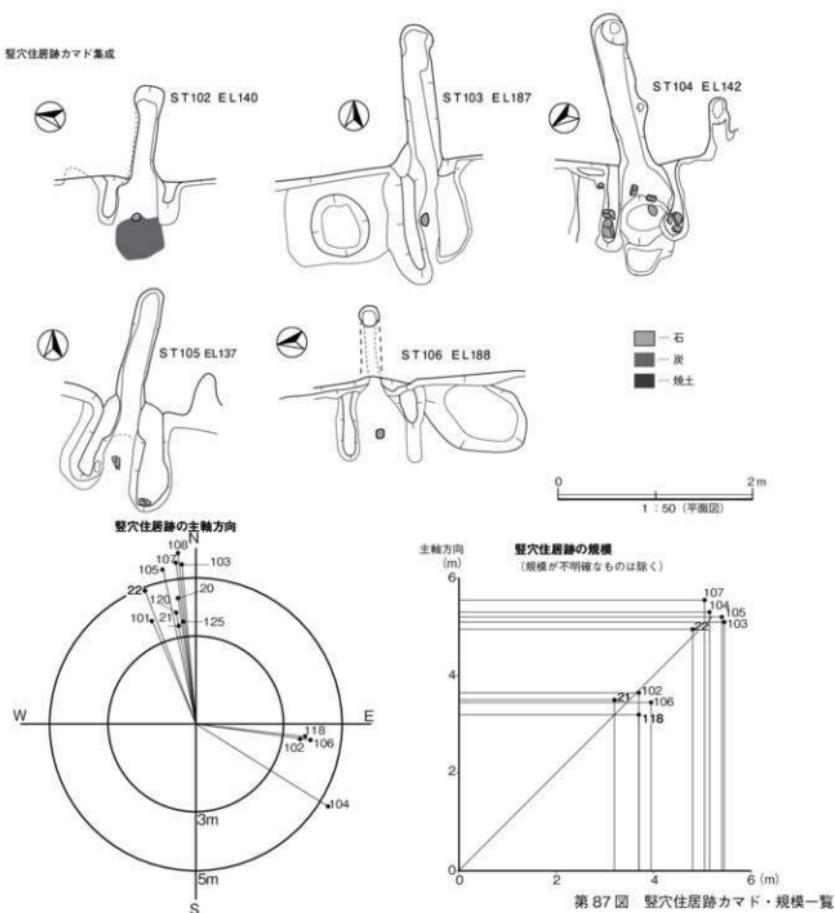
引用・参考文献

- 青山博樹 1999 「古墳時代中～後期の土器編年－福島県中通り地方南部を中心に－」『福島考古』第40号 PP.54～57
- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年－仙台平野とその周辺－」[北社] 辻秀人先生還暉記念論集 辻秀人先生還暉記念論集刊行会
- 阿部明彦・吉田江美子 2002 「山形県における古墳時代中期の土器様相（1）」『山形考古』第7巻第2号（通巻32号）山形考古学会
- 松積暎彦 2005 「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」[新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第1分冊）] PP. 259～277 新潟県考古学会
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 「年代のもとさし－陶邑の須恵器－」大阪府立近づ飛鳥博物館図録 40
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1994 「南原遺跡・堂ノ下遺跡・坂塚駄馬跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第2集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1995 「畠田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第22集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1995 「廻り屋遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第27集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1996 「下柳A遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第38集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2000 「中里遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第75集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2001 「太夫小屋1・2・3遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第160集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2002 「北小屋敷発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第103集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2004 「服部遺跡・藤原塚遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2004 「洪江遺跡第2・3次遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第124集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2004 「の場遺跡第2・3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第126集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2007 「梅野木前1遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第160集
- 佐久間正明 2000 「福島県における5世紀代の土器変遷－様式的側面を中心にして－」『法政考古学』第26集
- 佐藤耕雄 2011 「百井根畠・奥沢盆地・長井盆地のムラと古墳－」[山形の古墳時代－最上川流域のムラと古墳－] PP. 27～50 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 満沢規則 2011 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（上）－器種分類と基準資料の提示－」『三面地域の考古学』第9号 PP. 66～98 奥三面を考える会
- 田嶋明人 1986 「山道遺跡出土土器の編年の考察」[塙町遺跡1] 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2011 「古墳確立期土器の広域編年－東日本を対象とした検討（その4）－」『西相模考古』第20号 西相模考古学研究会
- 辻秀人 1993 「東北南部の古墳出現期の様相」[東日本における古墳出現過程の再検討] 日本国考古学協会新潟大会実行委員会
- 新潟県考古学会 2005 「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第1分冊）」
- 新潟県教育委員会・財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005 「日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅲ 道端遺跡Ⅲ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第14集
- 長谷川厚 1993 「赤い土器・黒い土器」[縄古論叢] 久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 福島県教育委員会 1978 「佐平林（I～IV相）」[母地塚遺跡発掘調査報告書] II
- 福島県教育委員会 「正面A遺跡」[母地塚遺跡発掘調査報告書] 34
- 福島県会津坂下町教育委員会 1995 「作ガ森古墳・鶴荷塚遺跡発掘調査報告書」
- 福島県会津坂下町教育委員会 2003 「会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ・中平遺跡・男墳遺跡」会津坂下町文化財調査報告書第54集
- 柳沼賢治 1999 「福島県における5世紀土器とその前後」[東国土器研究] 第5号 東国土器研究会
- 山形県教育委員会 2010 「分布調査報告書（36）」山形県埋蔵文化財調査報告書第212集
- 米沢市教育委員会 1986 「米沢市万世町桑山地区造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集大清水道路」米沢市埋蔵文化財調査報告書第17集
- 米沢市教育委員会 1993 「「新田A遺跡発掘調査報告書 第2集」米沢市埋蔵文化財調査報告書第39集
- 米沢市教育委員会 2004 「大西遺跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第85集
- 吉田江美子 2008 「山形県内の古墳時代前期土器について－近年における発掘調査の成果－」[研究紀要] 第5号 財团法人山形県埋蔵文化財センター



第 86 図 竪穴住居跡集成

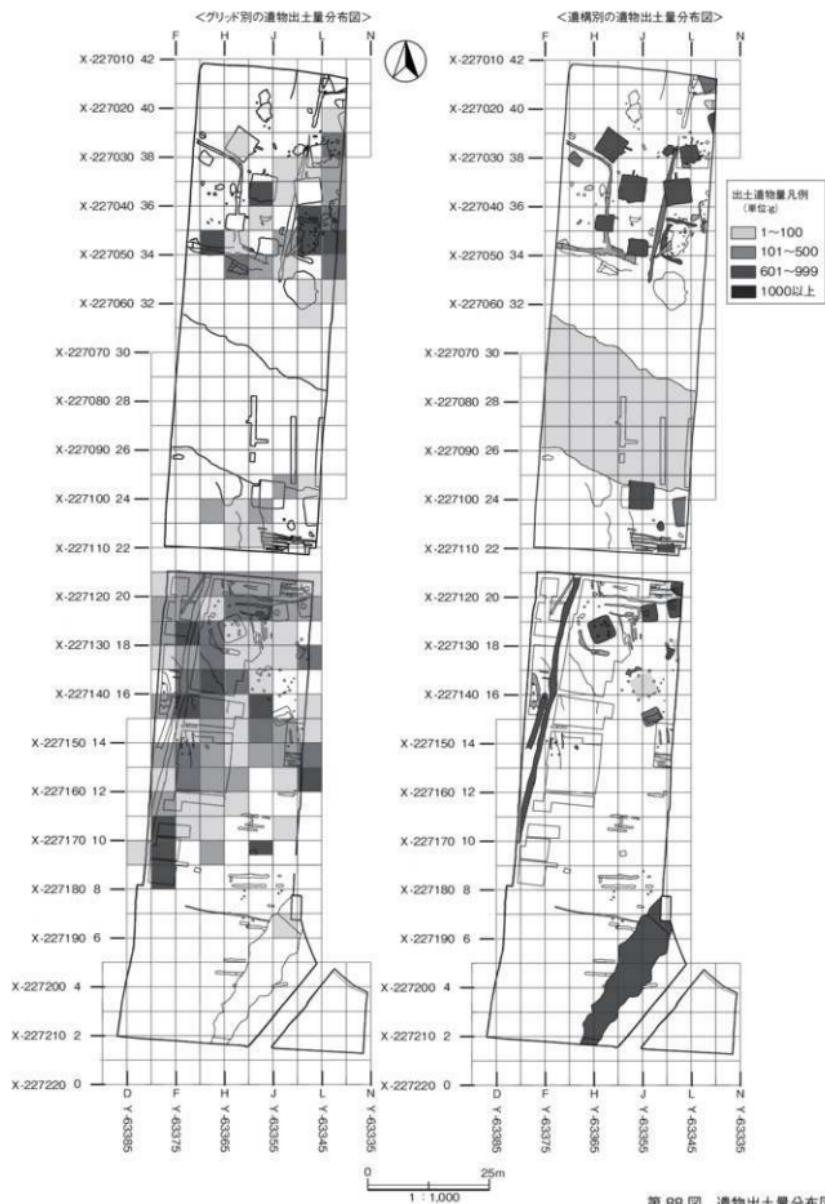
豊穴住居跡カマド集成



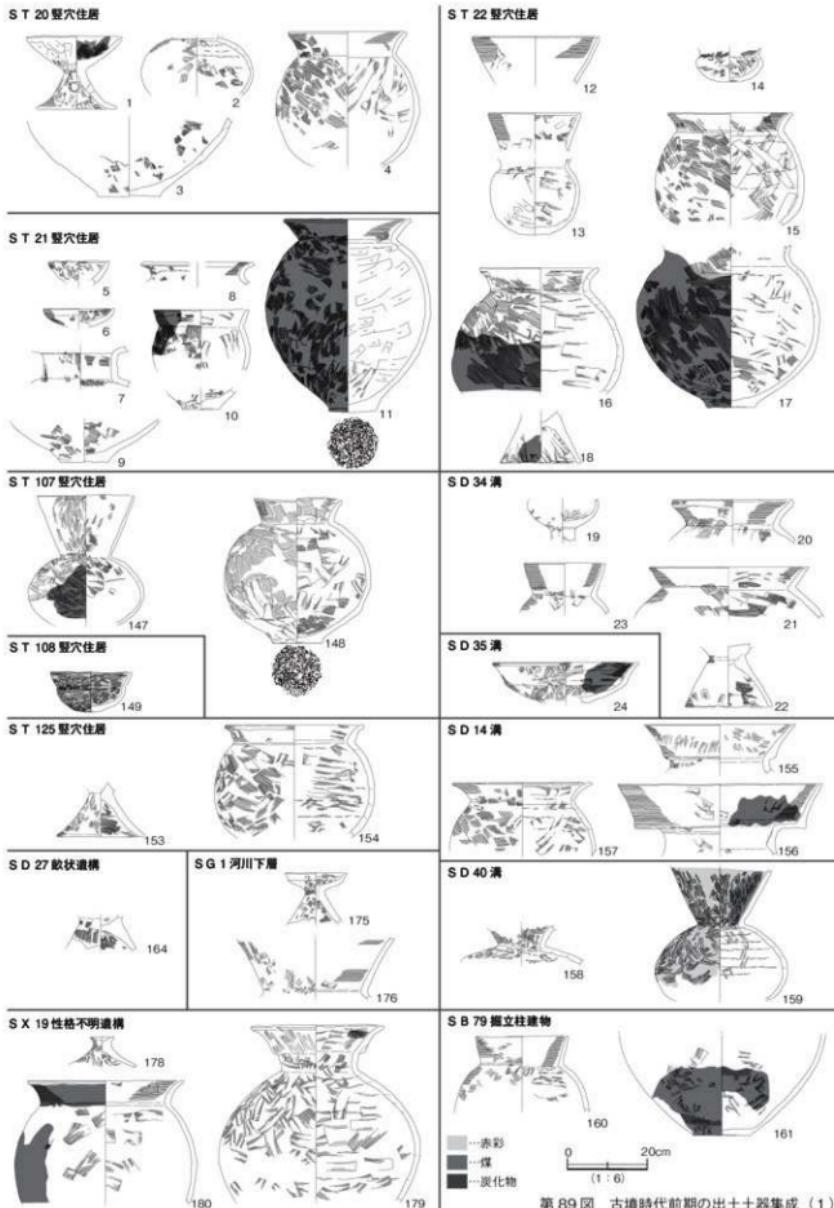
第87図 豊穴住居跡カマド・規模一覧

表15 豊穴住居跡詳細表

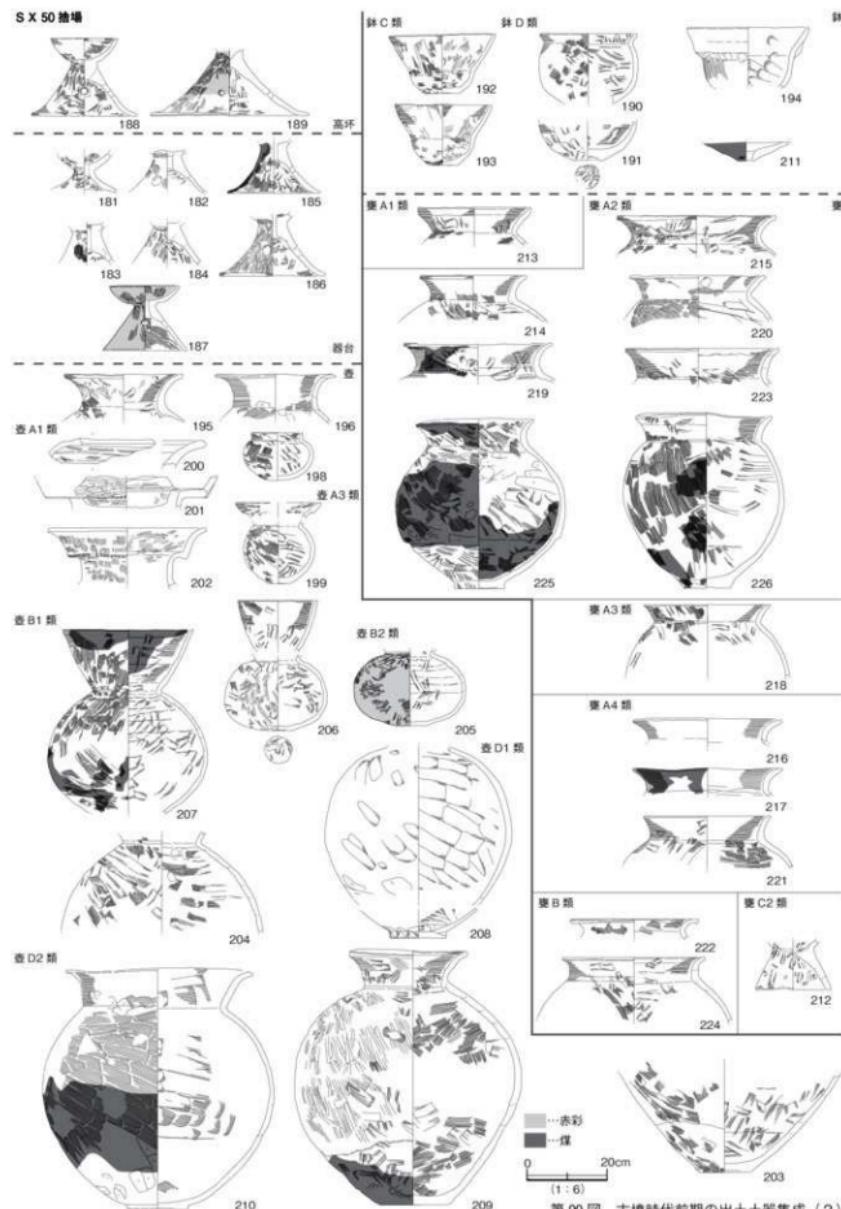
井図番号	構造	グリッド	平面形	主軸方位 (基盤)	規模 (m)	深さ (cm)	壁 状況	構内構造 (ピット、貯蔵穴など)	炉・カマド	備考
11 ST20	19-L	隅丸方形	N-10°-W	(3.85) × (2.80)	15	外傾 貼床			地床炉: 中央部	柱穴なし
12 ST21	19-J	隅丸方形	N-10°-W	3.50 × 3.20	15	外傾 貼床			地床炉: 西寄り	柱穴なし
15 ST22	18-19-H	隅丸方形	N-21°-W	4.95 × 4.80	35	直立 貼床	柱穴4基、壁溝		地床炉: 中央部	外周溝
16 ST100	41-L	方形	N-23°-W	(3.80) × (2.50)	15	直立 貼床	壁溝			不明
16 ST101	39-L	隅丸方形	N-20°-W	4.00 × (1.80)	15	直立 直床	長楕円状の割り込み			不明
19 ST102	38-L	隅丸方形	E-8°-S	3.65 × 3.20	30	直立 直床	東西側に柱穴2基		カマド: 東壁面寄り	
21 ST103	36-37-K	隅丸方形	N-5°-W	5.10 × 5.45	20	直立 直床	柱穴4基、北壁西側に貯蔵穴1		カマド: 北壁中央	
23 ST104	38-39-I	隅丸方形	E-32°-S	5.30 × 5.15	20	直立 貼床	柱穴4基、南壁中央に貯蔵穴1。両仕切り溝		カマド: 東壁北寄り	
25 ST105	36-37-L	隅丸方形	N-12°-E	5.20 × 5.40	20	直立 直床	柱穴4基、南壁中央に貯蔵穴2		カマド: 北壁中央	
27 ST106	34-35-I	隅丸方形	E-8°-S	3.45 × 3.95	50	直立 直床	東壁中央に貯蔵穴1		カマド: 気吹北寄り	柱穴なし
29 ST107	24-J	隅丸方形	N-7°-E	5.55 × 5.05	20	直立 貼床	柱穴4基、東側に貯蔵穴1、両仕切り溝		地床炉: 北寄り	
30 ST108	23-M	隅丸方形	N-6°-W	5.85 × (3.15)	20	直立 貼床	柱穴2基(推定4基)、壁溝			不明
31 ST118	35-I	隅丸方形	E-7°-S	3.20 × 3.70	25	外傾 貼床	北側に長楕円状の割り込み		地床炉: 中央部	
32 ST120	36-L	方形	N-8°-W	(4.30) × (2.20)			壁溝、西壁際に4基			不明
33 ST125	22-K	隅丸方形	N-7°-W	3.50 × (2.40)	10	外傾 貼床			地床炉: 中央部	



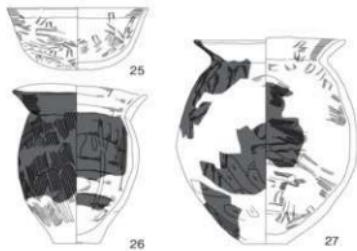
第88図 遺物出土量分布図



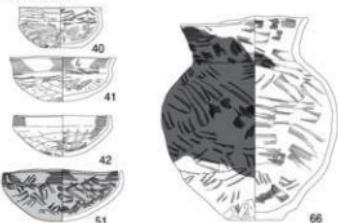
第89図 古墳時代前期の出土土器集成（1）



S T 101 壁穴住居



S T 103 壁穴住居

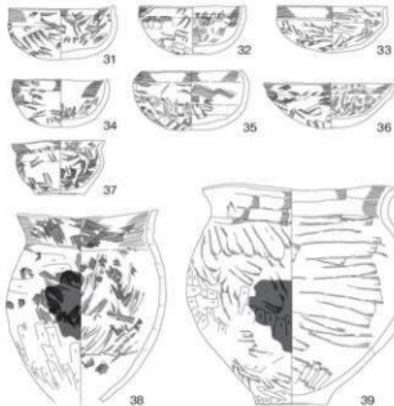


S T 102 壁穴住居



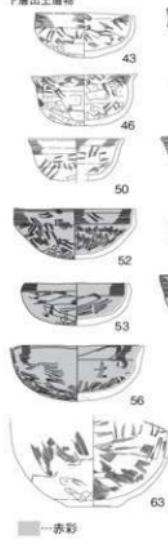
上層出土遺物

下層出土遺物



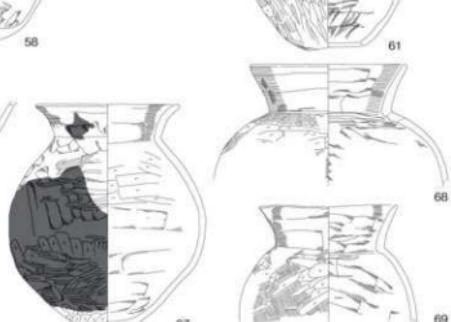
上層出土遺物

下層出土遺物

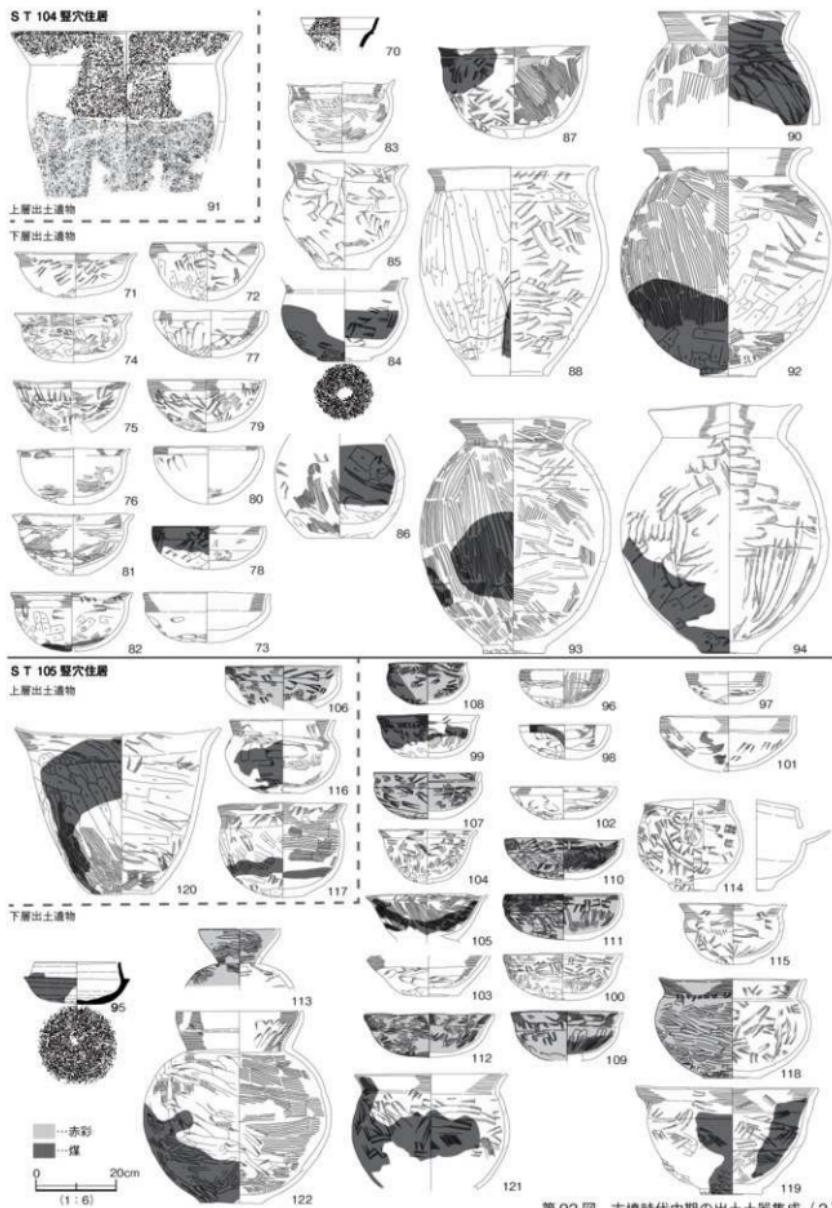
■赤彩
■保

0 20cm

(1:6)

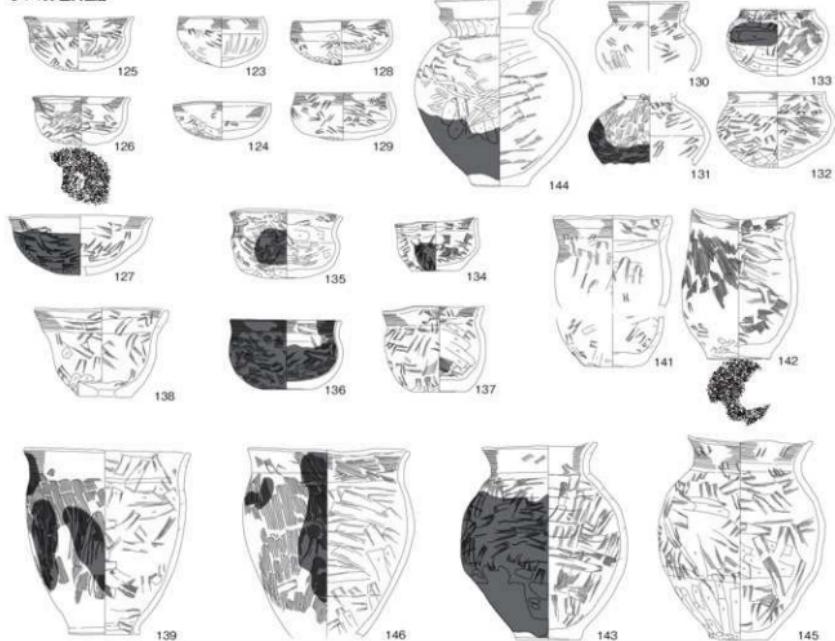


第91図 古墳時代中期の出土土器集成（1）



第92図 古墳時代中期の出土土器集成（2）

S T 106 壁穴住居



S T 118 壁穴住居



S K 133 土坑



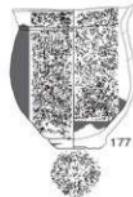
162

S K 158 土坑



163

S G 1 河川上層

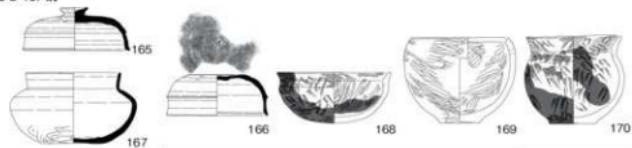


…赤彩
—煤

0 20cm
(1 : 6)

177

SD 167 潟



SD 172 潟

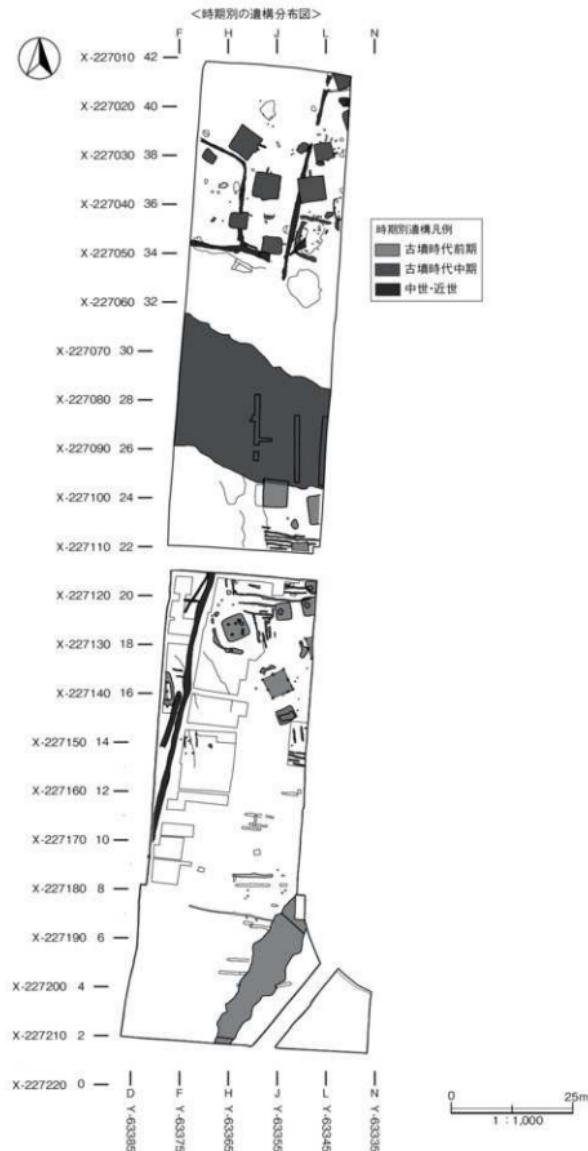


171

SD 173 潟

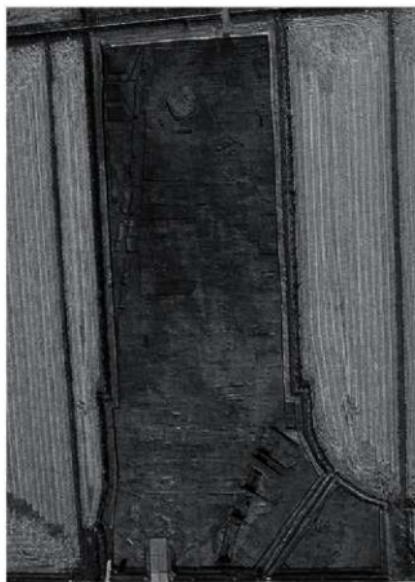


第93図 古墳時代中期の出土土器集成（3）



第94図 時期別遺構配図

写真図版



1区調査区全景（上が北）



2区調査区全景（上が北）



1区基本層序北壁（南から）



1区基本層序西壁（北東から）



1区基本層序東壁（西から）



2区調査区東壁土層断面（北西から）



S T 20 遺物出土状況（西から）



S T 20 R P 22 出土状況（北から）



S T 20 床面検出状況（西から）



S T 20 R P 24・25 出土状況（北西から）



S T 20 完掘状況（東から）



ST 21 土層断面（東から）



ST 21 遺物出土状況（西から）



ST 21 完掘状況（西から）



ST 21 RP 30 出土状況（北から）



ST 21 完掘状況（東から）



S T 22 遺物出土状況（北から）



S T 22 土層断面（南から）



S T 22 RW 60 炭化材出土状況（北から）



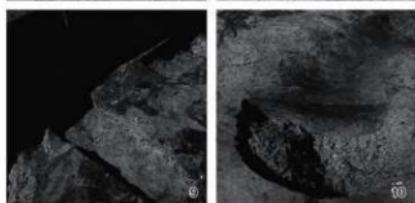
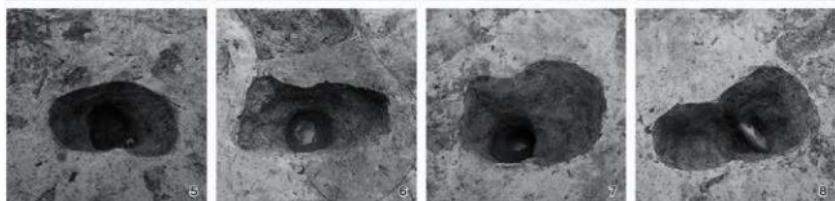
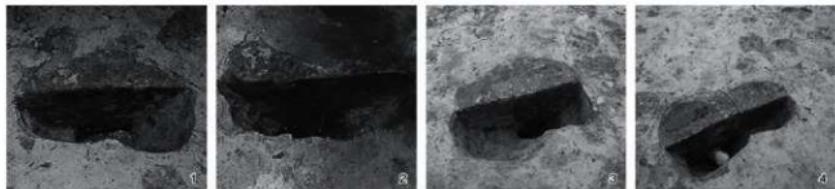
S T 22 RP 55 ~ 58 出土状況（西から）



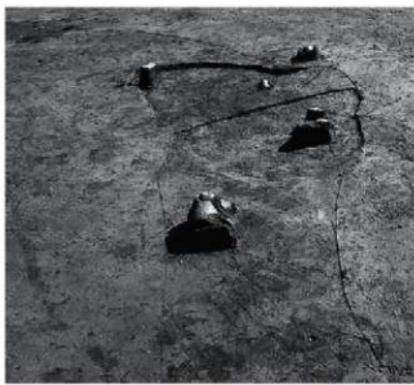
S T 22 RP 61 · 62 出土状況（南から）



S T 22 完掘状況（北から）



1 E P 44 土層断面（北から） 2 E P 45 土層断面（北から）
3 E P 46 土層断面（南から） 4 E P 47 土層断面（南から）
5 E P 44 完掘状況（北から） 6 E P 45 完掘状況（北から）
7 E P 46 完掘状況（北から） 8 E P 47 完掘状況（南から）
9 E D 51 土層断面（南から） 10 E K 52 土層断面（北から）



SD 34 遺物出土状況（北から）



SD 35 炭化物集中域状況（西から）



SD 34 土層断面（南から）



SD 35 土層断面（東から）



SD 34 完掘状況（北から）



SD 35 完掘状況（東から）



S T 100 床面検出（西から）



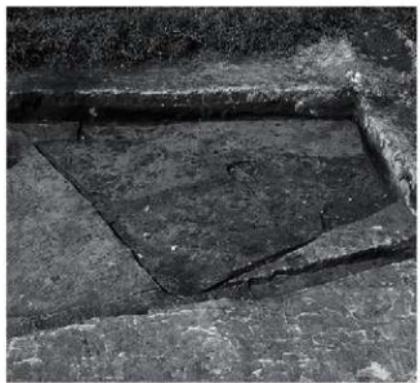
S T 101 土層断面（北西から）



S T 100 遺物出土（北から）



S T 101 RP 205 出土状況（北から）



S T 100 完掘状況（南から）



S T 101 完掘状況（北から）



S T 102 遺物出土状況（西から）



S T 102 土層断面（西から）



S K 128 土層断面（西から）



S T 102 R P 241 出土状況（西から）



S T 102 R P 242 出土状況（東から）



S T 102 RW 313 ~ 315 出土状況（南から）



S T 102 RP 243 ~ 245 出土状況（南東から）



S T 102 EL 140 土層断面（南西から）



S T 102 EK 139 土層断面（西から）



S T 102 EL 140 完掘状況（北西から）



S T 102 EK 139 遺物出土状況（西から）



S T 102 完掘状況（西から）



S T 102 R P 210・炭化材出土状況（南から）



S T 102 E P 203 土層断面（南から）



S T 102 R P 348・RW 349～351 出土状況（北から）



S T 102 E P 204 土層断面（南から）



S T 103 残物出土状況（北から）



S T 103 南北土層断面（南西から）



S T 103 RW 361 出土状況（南東から）



S T 103 RP 235・236 出土状況（南から）



S T 103 RP 246・247・228 出土状況（北から）



S T 103 E L 187 土層断面（南から）



S T 103 R P 229 ~ 231 出土状況（南から）



S T 103 E L 187 東側遺物出土状況（南から）



S T 103 E L 187 完掘状況（南から）



S T 103 R P 233 出土状況（北から）



S T 103 完掘状況（北から）



S T 103 EP 207 土層断面（南から）



S T 103 EK 156 土層断面（東から）



S T 103 EP 208 土層断面（南から）



S T 103 EK 156 遺物出土状況（南から）



S T 104 遺物出土状況（西から）



S T 104 南北軸土層断面（西から）



S T 104 R P 313 出土状況（東から）



S T 104 R P 306 出土状況（南から）



S T 104 R Q 319 ~ 321 出土状況（西から）



S T 104 E L 142 土層断面（南西から）



S T 104 RP 298・299 出土状況（北から）



S T 104 E L 142 床面検出（西から）



S T 104 E L 142 遺物出土状況（北から）



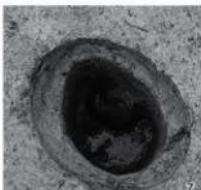
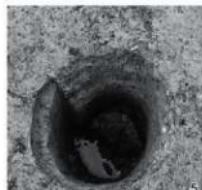
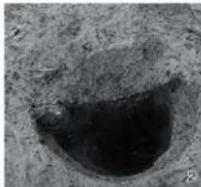
S T 104 E K 154 土層断面（南から）



S T 104 南東隅棒状砾出土状況（東から）



S T 104 完掘状況（東から）



- 1 EP 168 土層断面（東から） 2 EP 169 土層断面（東から）
3 EP 170 土層断面（東から） 4 EP 171 土層断面（西から）
5 EP 168 完掘状況（東から） 6 EP 169 完掘状況（東から）
7 EP 170 完掘状況（南から） 8 EP 171 完掘状況（南から）
9 ED 155 土層断面（南から） 10 EK 165 土層断面（西から）



S T 105 遺物出土状況（南から）



S T 105 南東隅遺物出土状況（南東から）



S T 105 E L 137 炭化材出土状況（南から）



S T 105 R P 262・263 出土状況（西から）



S T 105 E L 137 遺物出土状況（北から）



S T 105 E K 157 遺物出土（南東から）



S T 105 E L 137 実掘状況（南西から）



S T 105 E K 157 実掘状況（東から）



S T 105 E P 183 土層断面（南から）



S T 105 R Q 375 紗錘車出土状況（南東から）



S T 105 E P 184 土層断面（南から）



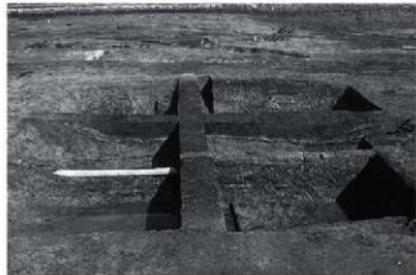
S T 105 E K 166 土層断面（西から）



S T 105 完振状況（北から）



S T 106 遺物出土状況（東から）



S T 106 土層断面（西から）



S T 106 RP 345・346 出土状況（北から）



S T 106 RP 339 出土状況（北から）



S T 106 RP 340・341 出土状況（北から）



S T 106 完掘状況（西から）



S T 106 E L 188 土層断面（南西から）



S T 106 E L 188 R P 369 出土状況（西から）



S T 106 E L 188 完掘状況（西から）



S T 106 E K 193 遺物出土状況（西から）



S T 107 遺物出土状況（西から）



S T 107 土層断面（西から）



S T 107 E K 192 土層断面（南から）



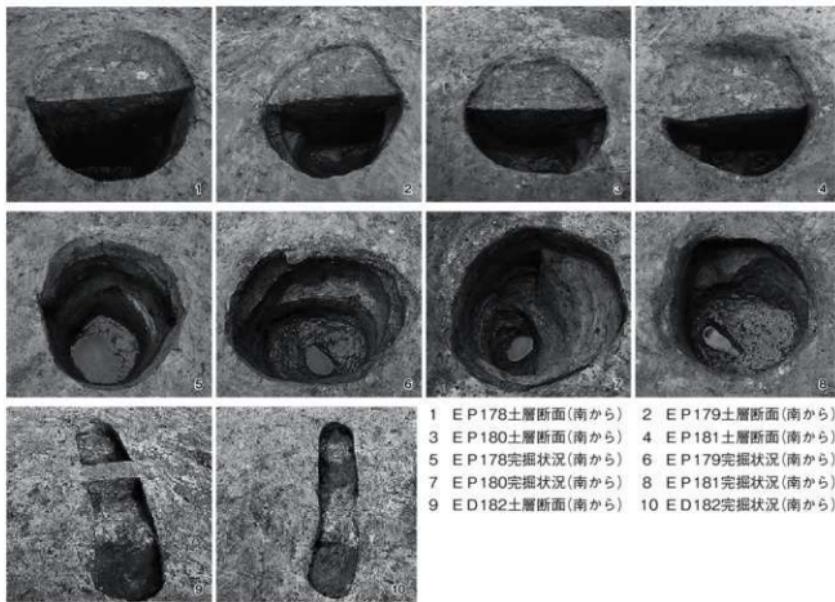
S T 107 R P 335・336 出土状況（東から）



S T 107 E K 192 完掘状況（南から）

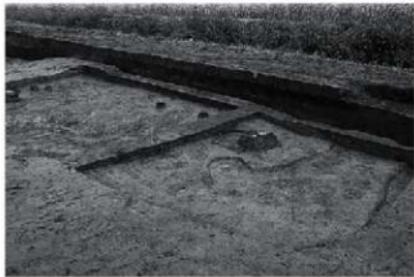


S T 107 完掘状況（西から）





S T 108 完掘状況（西から）



S T 108 土層断面（南西から）



S T 108 E P 175 完掘状況（西から）



S T 108 R P 329 出土状況（西から）



S T 108 E P 176 土層断面（南から）



S T 118 遺物出土状況（北から）



S T 118 土層断面（南東から）



S T 118 RP 304 出土状況（北から）



S T 118 EK 189 出土状況（東から）



S T 118 完振状況（東から）



S T 120 検出状況（西から）



S T 125 遺物出土状況（北から）



S T 120 土層断面（北西から）



S T 125 土層断面（西から）



S T 120 EP 144 土層断面（西から）



S T 125 RP 350 出土状況（北から）



S T 120 完掘状況（西から）



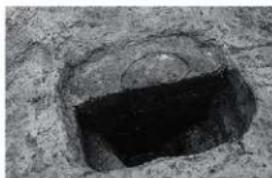
S T 125 完掘状況（北から）



S B 2 振立柱建物跡完振状況（北から）



E B 3 完振状況（西から）



E B 4 土層断面（北から）



E B 5 完振状況（東から）



E B 6 土層断面（東から）



E B 7 完振状況（東から）



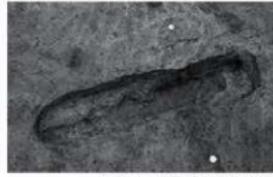
E B 8 土層断面（南から）



E B 9 完振状況（北東から）



E B 10 土層断面（北西から）



E D 11 完振状況（南から）



SD 14 遺物出土状況（西から）



SD 14 RP 18 出土状況（北西から）



SD 14 土層断面（西から）



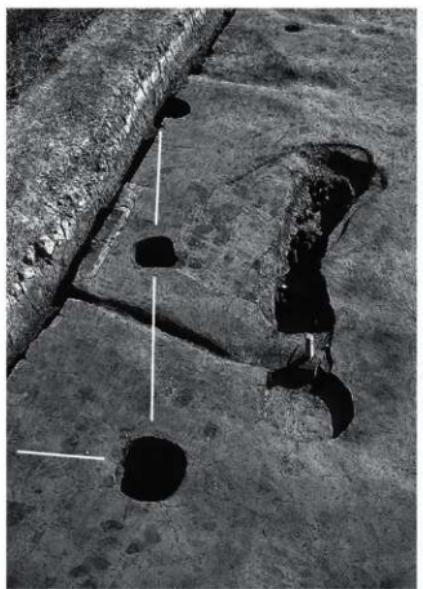
SD 14 RP 19 出土状況（北から）



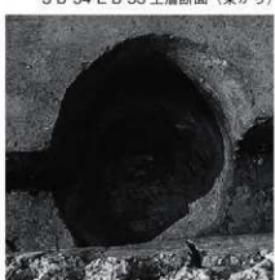
SD 14 完掘状況（東から）



SD 14 RP 21 出土状況（東から）



SB 54 完掘状況（北から）





SB 79 完掘状況（東から）



ED 64 - EB 77 土層断面（東から）



EB 77 上面遺物出土状況（西から）



SB 79 EB 69 土層断面（北から）



SB 79 EB 77 土層断面（東から）



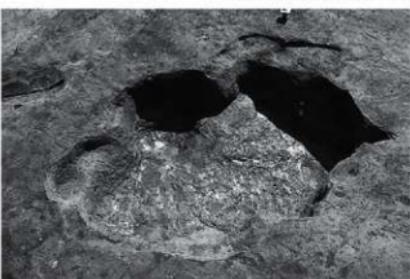
SK 111 土層断面（東から）



SK 133 土層断面（西から）



SK 111 遺物出土状況（西から）



SK 133 完掘状況（北から）



SK 133 遺物出土状況（北から）



SK 41 完掘状況（西から）



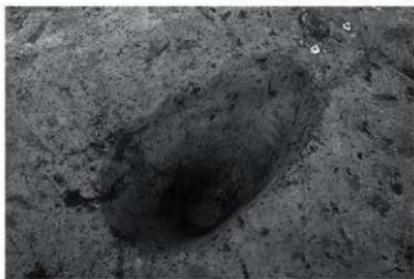
SK 135 完掘状況（南から）



SK 148 完掘状況（北から）



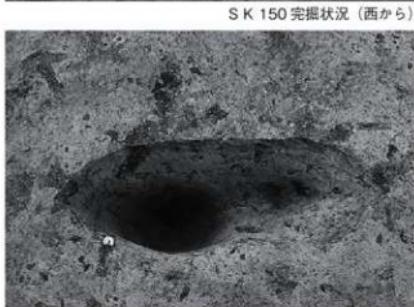
SK 149 完掘状況（南東から）



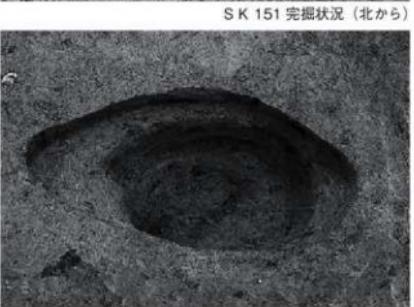
SK 150 完掘状況（西から）



SK 151 完掘状況（北から）



SK 152 完掘状況（西から）



SK 153 完掘状況（西から）



SK 158 土層断面（西から）



SK 158 R P 202 出土状況（南西から）



SK 159 土層断面（東から）



SK 159 遺物出土状況（北から）



SK 164 土層断面（南西から）



SK 177 土層断面（南から）



SP 134 土層断面（南西から）



SP 138 土層断面（北西から）



S D160・167・172・173 遺物出土状況（北西から）



S D167 土層断面（東から）



S D167 遺物出土状況（東から）



S D172 土層断面（南から）



S D173 土層断面（西から）



S D160・167・172・173 完掘状況（北西から）



S D167 R P 323・324 出土状況（南から）



S D167 完掘状況（南西から）



S D172 R P 330 出土状況（南から）



S D173 R P 331 出土状況（西から）



遺物包含層出土状況（西から）



遺物包含層土層断面（南から）



遺物包含層 R P 286 出土状況（西から）



遺物包含層 RW 200 砥石出土状況（西から）



遺物包含層 R Q 283 砥石出土状況（北から）



遺物包含層 R Q 328 砥石出土状況（東から）



遺物包含層 R Q 352 石製模造品出土（南から）



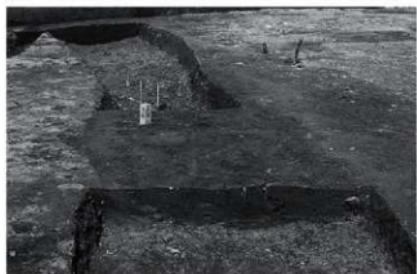
遺物包含層 R Q 351 管玉出土（北から）



S D13 完掘状況（北から）



S D12・13 土層断面（南から）



S D13 土層断面（南から）



S D13・16 土層断面（南から）



S D16 唐津皿出土状況（南から）



S D112～117 敷跡完掘状況（西から）



S D23～26 敷跡完掘状況（西から）



S D55～62 敷跡完掘状況（北から）



SG 1 精査状況（上が北）



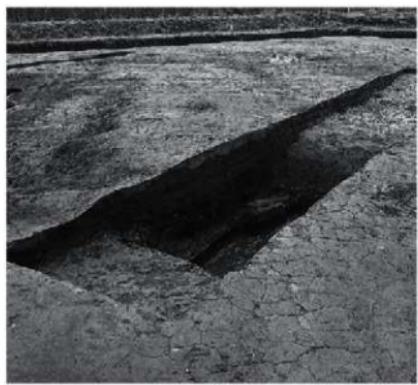
SG 1 R P 67 出土状況（北から）



SG 1 R P 76 出土状況（北から）



SG 1 精査状況（北から）



SG 1 北トレンチ土層断面 (南から)



SG 1 RW 68 出土状況 (南から)



SG 1 中央トレンチ土層断面 (南西から)



SG 1 RW 69 出土状況 (南東から)



SG 1 南トレンチ土層断面 (南から)



SG 1 RW 75 出土状況 (東から)



S G130 河川跡検出状況（南から）



S G130 河川跡東壁面土層断面（南西から）



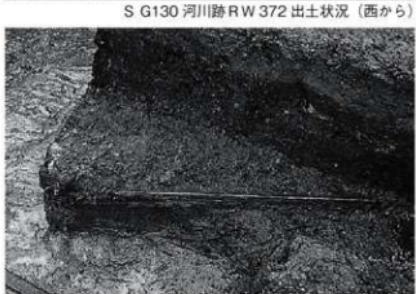
S G130 河川跡精査状況（西から）



S G130 河川跡 RW 372 出土状況（西から）



S G130 河川跡中央トレンチ土層断面(西から)



S G130 河川跡 RW 384 出土状況（西から）



S G130 河川跡 RW 371 出土状況（西から）



S X 19 遺物出土（北から）



S X 19 E D 30 遺物出土（南から）



S X 19 E K 31 土層断面（南から）



S X 19 完掘状況（東から）



S X 19 E K 31 R P 37 出土状況（西から）



S X 63 遺物出土状況（北から）



S X 161 土層断面（南西から）



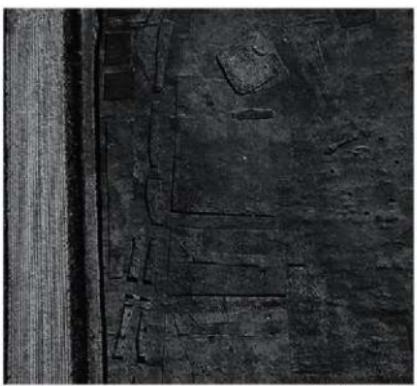
S X 119 土層断面（東から）



S X 119 R Q 204 石製品出土状況（東から）



S X 119 完掘状況（東から）



S X 50 捨場（上が北）



S X 50 捨場全景（北から）



S X 50 捨場土層断面（南西から）



S X 50 捨場中央部遺物出土状況（南から）



S X 49 集石棒状礫出土状況（南東から）



S X 50 捨場南側（南から）



S X 50 捜場 R P 105・106 出土状況（東から）



S X 50 捜場 R P 118 器台出土状況（南から）



S X 50 捜場 R P 122 出土状況（南西から）



S X 50 捜場 R P 130 出土状況（南から）



S X 50 捜場 R P 134 出土状況（西から）



S X 50 捜場 R Q 132 管玉出土状況（西から）



1区北東域遺物包含層出土状況（南から）



1区北東域遺物包含層 R P 1 出土状況（南から）



S T 102 壹穴住居跡出土遺物



S T 103 壹穴住居跡出土遺物



S T 104 壹穴住居跡出土遺物



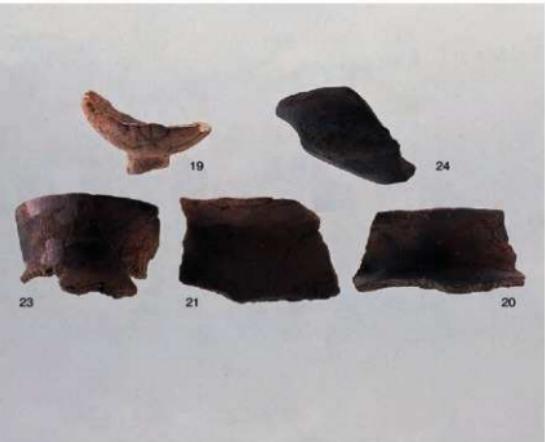
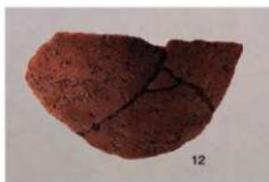
S T 105 穹穴住居跡出土遺物



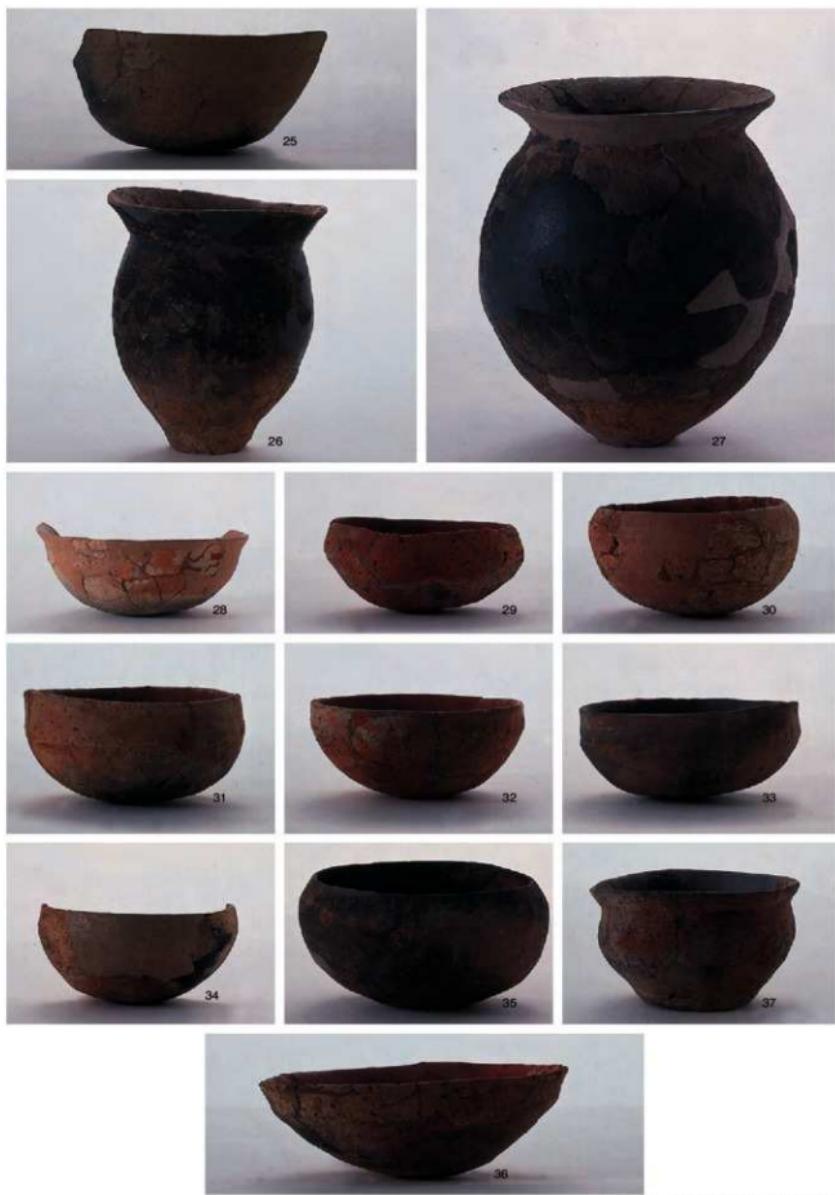
S T 106 穹穴住居跡出土遺物



S T 20・21 壺穴住居跡出土遺物



S T 22 竪穴住居跡・SD 34・35 溝跡出土遺物



S T 101 · 102 穫穴住居跡出土遺物



S T 102 · 103 穹穴住居跡出土遺物



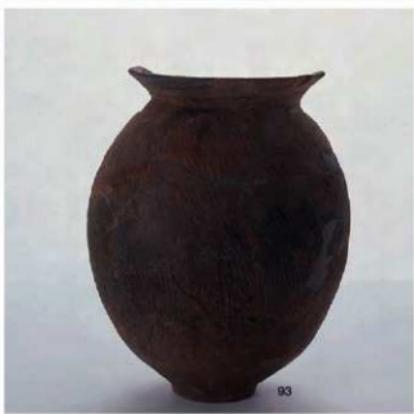
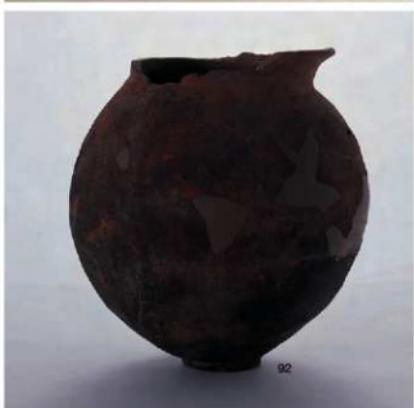
S T 103 壁穴住居跡出土遺物



S T 103 · 104 竪穴住居跡出土遺物



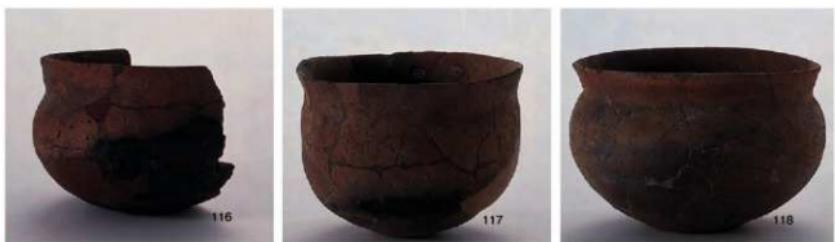
S T 104 壁穴住居跡出土遺物



S T 104 竪穴住居跡出土遺物



S T 105 穩穴住居跡出土遺物



S T 105 穹穴住居跡出土遺物



S T 106 壁穴住居跡出土遺物（1）



S T 106 穩穴住居跡出土遺物（2）



147



148



149



150



153



151



154



152

S T 107 · 108 · 118 · 125 穩穴住居跡出土遺物



155



156



157



159



158



160



161

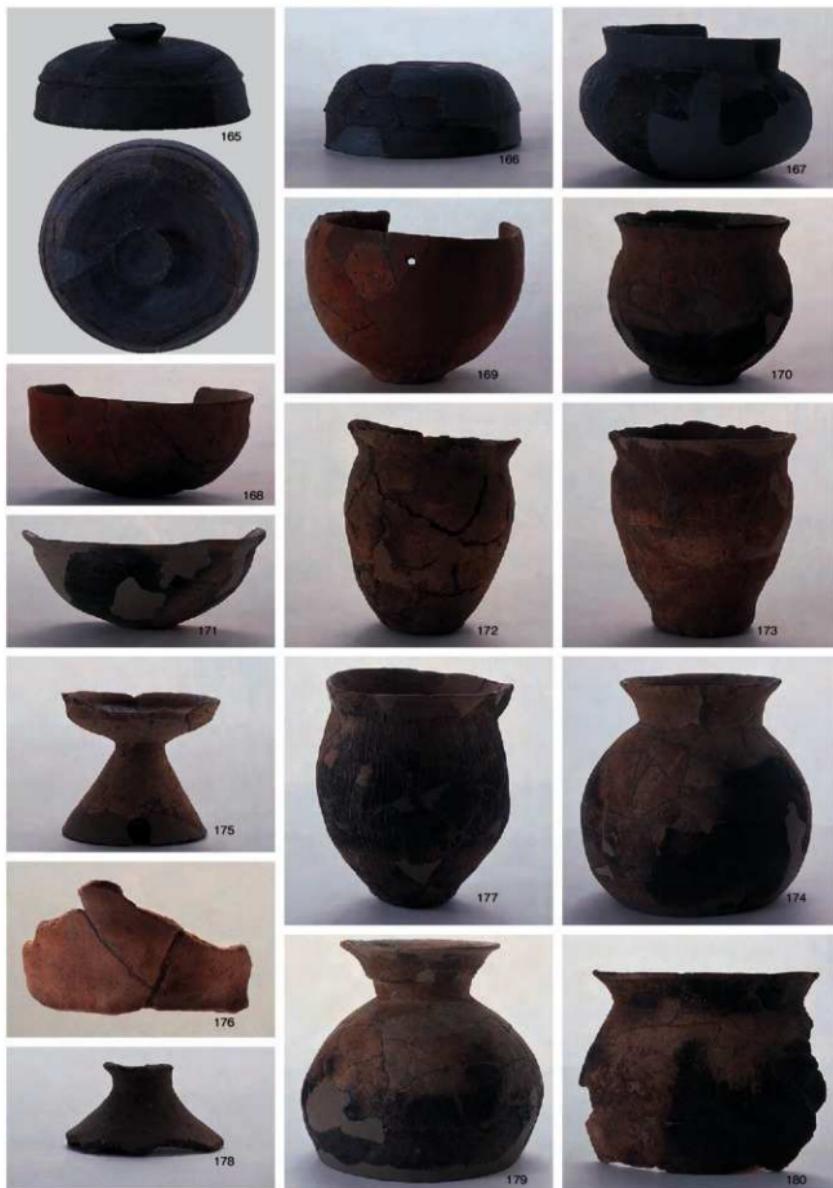


162

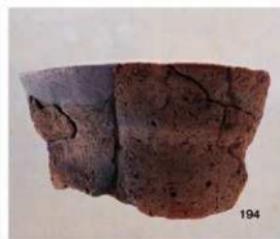


163

S D 14 · 27 · 40 满路 · S B 79 挖立柱建物跡 · S K 133 · 158 土坑出土遺物



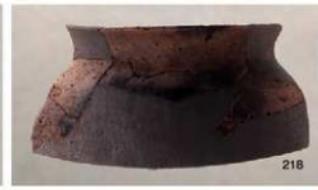
S D 167・172・173 满跡・S G 1 河川跡・S X 19 性格不明遺構出土遺物



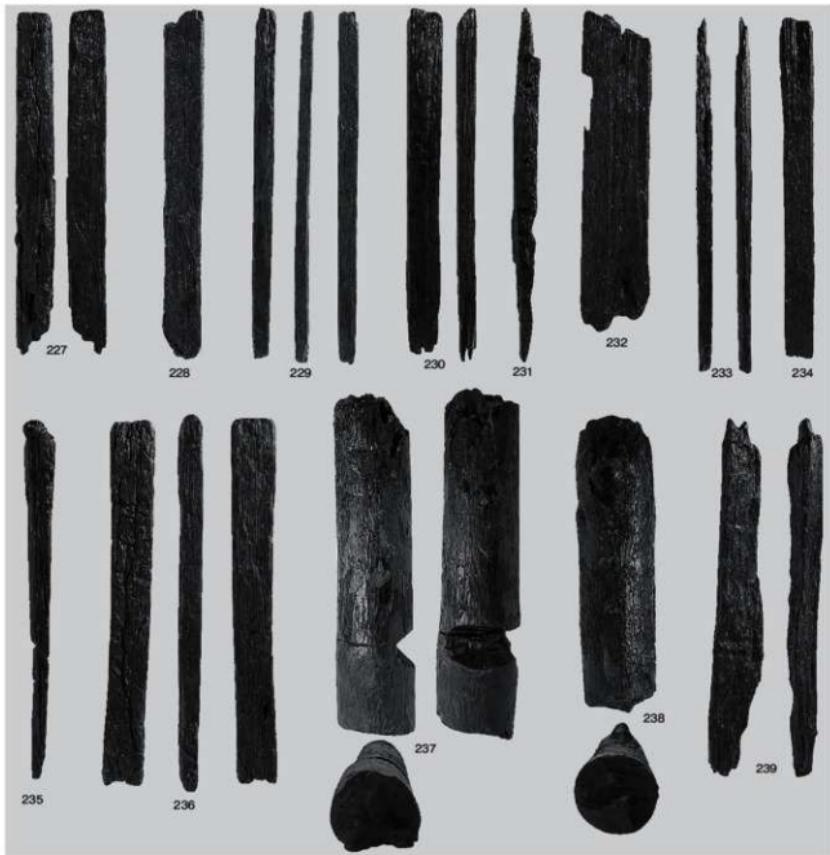
S X 50 捨場出土遺物 (1)



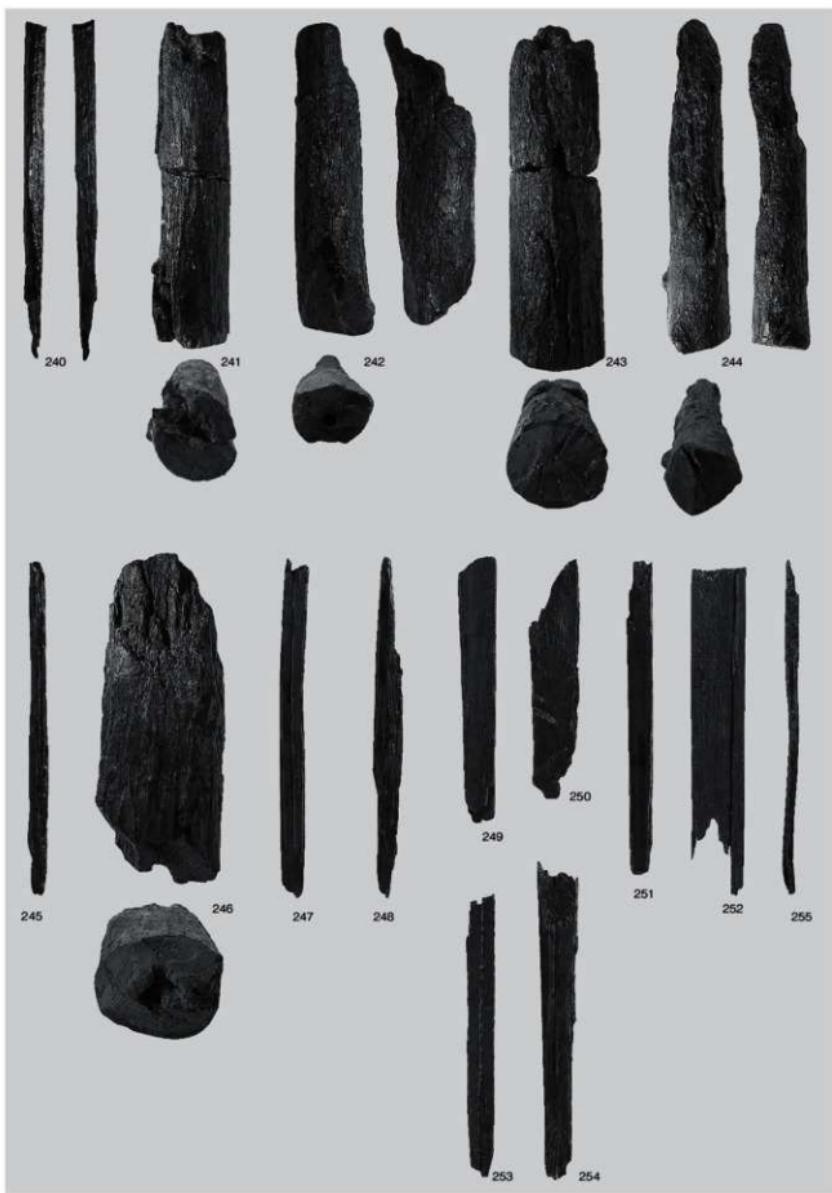
S X 50 捨場出土遺物 (2)



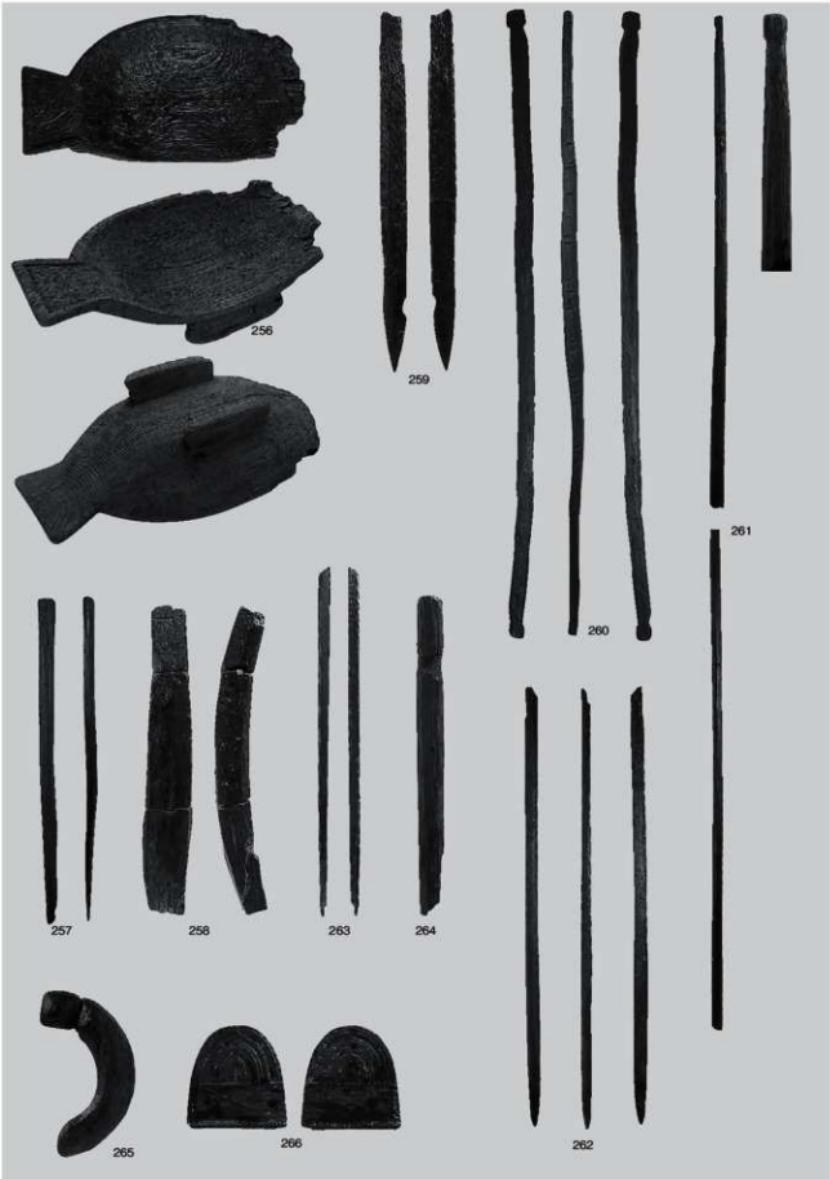
S X 50 捨場出土遺物 (3)



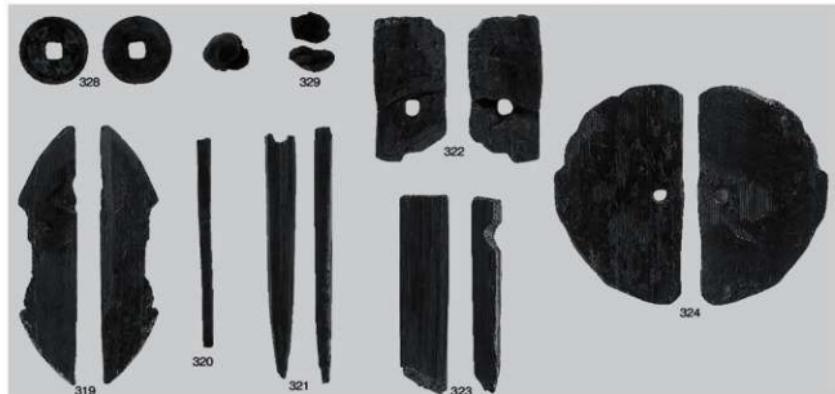
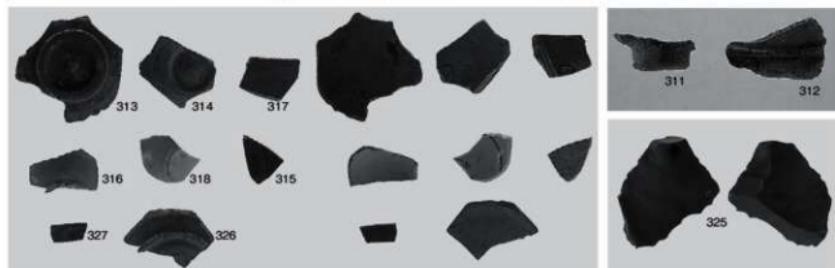
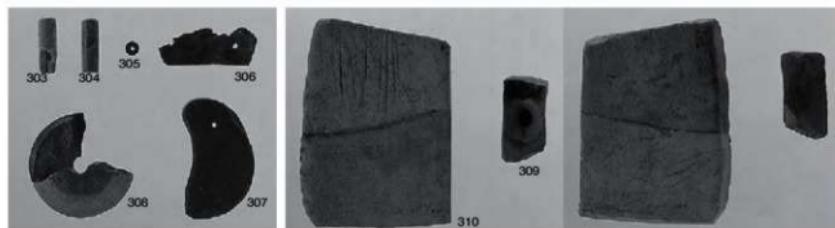
S X 50 捨場出土遺物 (4)・木製品 (1)



木製品 (2)



木製品（3）



石製品・石器・SD13・16溝跡出土遺物

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第201集
鎌倉上遺跡第1・2次発掘調査報告書

2012年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 中央印刷株式会社
〒990-0051 山形県山形市銅町一丁目1-5
電話 023-631-5533

